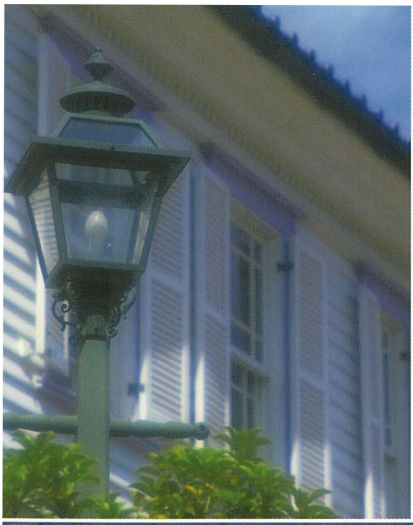
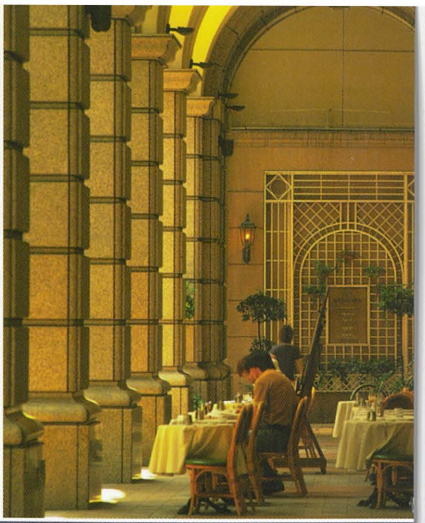
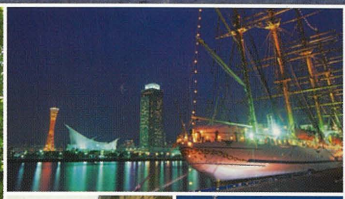


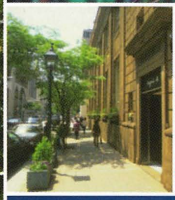


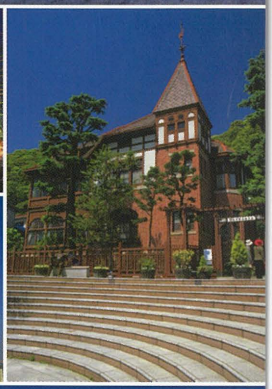
KOBE Central Area

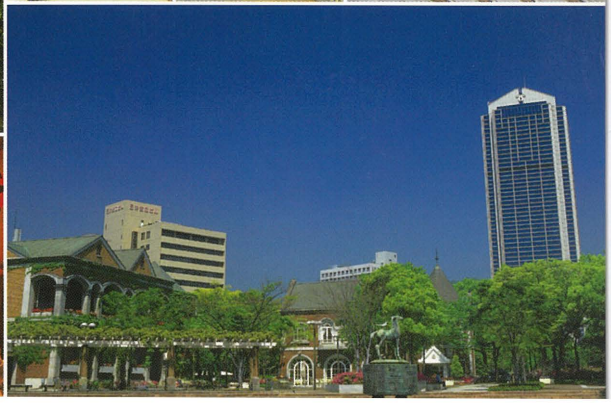
神戸歴史トリップ

新・中央区歴史物語（改訂版）







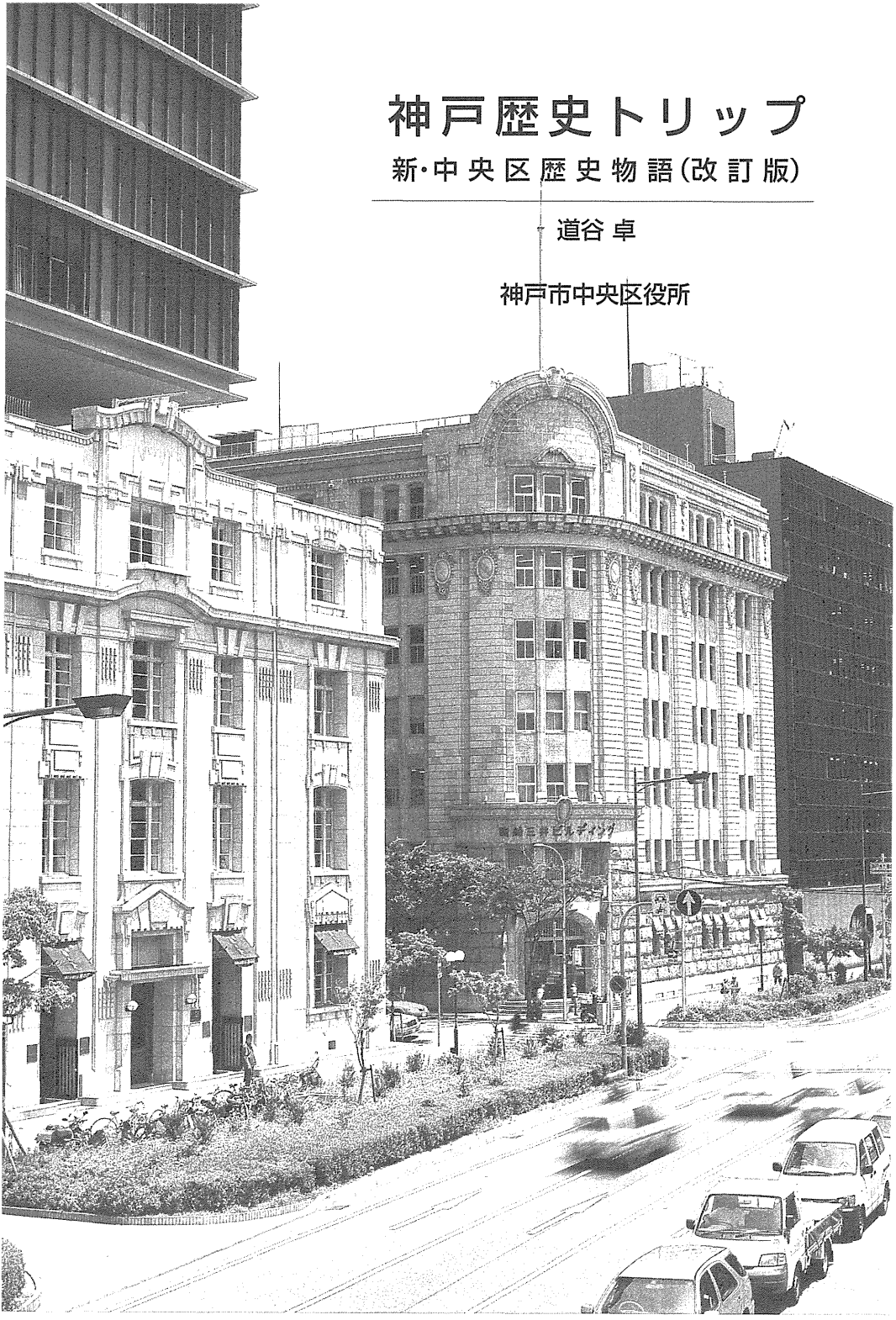


神戸歴史トリップ

新・中央区歴史物語（改訂版）

道谷 卓

神戸市中央区役所



刊行にあたって

昭和55年に葺合区と生田区が合併して誕生した中央区は、文字通り神戸市の中央部に位置し、幕末期の神戸開港を契機に市街地が形成され、神戸の業務・商業・文化活動の中心地として発展してきました。区内にはメリケンパークやハーバーランド、南京町など観光地も多く、またポートアイランドやHAT神戸といった新たな空間が整備され、神戸を先導するエリアとしての魅力を醸し出しています。

同時に、先史時代の遺跡や布引の滝、旧居留地や北野といった歴史的資源も多く点在しており、古来よりの長い歴史を感じることが出来ます。

中央区では平成2年に『中央区歴史物語』を発行し、先史時代から今日にいたる中央区の歴史をたどってきました。さらに平成8年には『新・中央区歴史物語』として、新たな史跡の紹介や町名の由来の加筆等を含めた改訂版を発行しました。また震災直後の区内の史跡を写真で紹介することで、震災記録としての意味ももたせました。

そしてこのたび、現行本の作成から8年以上が経過し、史跡の状況の変化やHAT神戸など震災後の新たな動きを紹介するため、郷土史家の道谷卓氏に改訂をおこなっていただき、『神戸歴史トリップ　新・中央区歴史物語(改訂版)』として刊行することとなりました。

平成17年は中央区誕生25周年、震災10年という大きな節目の年となります。国内外において大規模な自然災害による

被害が発生しており、未曾有の被害をもたらした阪神・淡路大震災から着実に復興の道を歩んだ神戸の知恵と経験を世界に発信することが求められています。中央区では「市民生活の豊かさ(クオリティーオブライフ)」の実現にむけて、地域のみなさんとともに、安全・安心で美しいまちづくりを進めてまいります。その過程で、区の歴史をたどり、先人の知恵や行動を今後のまちづくりに生かすことに本書が一助となり、中央区の一層の発展につながれば幸いです。

最後になりましたが、本書を執筆・改訂いただきました道谷卓氏をはじめ、貴重な文化財等の資料提供・写真掲載に御協力いただいた多くの方々に対し、厚く御礼申し上げます。

中央区長/南野誠二

kobe central area

contents

2 | 刊行にあたって

4 | はじめに

中央区の歴史「通史編」

6 | ◉先史時代

12 | ◉古代

18 | ◉中世

24 | ◉近世

32 | ◉近・現代

50 | 年表で見る中央区と日本の歴史

中央区の歴史「史跡・町名編」PART-1

60 | ◉エリア●葺合山手周辺

72 | ◉エリア●葺合浜手・磯上・HAT神戸周辺

86 | ◉エリア●布引・生田川周辺

102 | ◉エリア●北野・トアロード周辺

116 | データで見る現在の中央区

120 | 探訪(文化財・博物館・施設の紹介)

中央区の歴史「史跡・町名編」PART-2

138 | ◉エリア●生田山手周辺

164 | ◉エリア●旧居留地・元町周辺

178 | ◉エリア●神戸港・ベイエリア周辺

190 | ◉エリア●神戸駅・大倉山周辺

209 | 震災関連データ

216 | 索引

224 | 参考文献

226 | 著者あとがき

はじめに

神戸市中央区は1980(昭和55)年12月1日に、旧葺合(ふきあい)区と旧生田(いくた)区が 合併して誕生した区である。

中央区は神戸市9区のなかで、まさに中央部分に位置する区であり、古来、摂津国(せっつのくに)に属していた。六甲山地と大阪湾に挟まれた傾斜地に東西約5km、南北約12kmを擁した区域を有し、北は六甲の山々を隔てて北区と、東は灘区と、西は兵庫区と接している。世界有数の国際港・神戸港の大部分はこの中央区に属しており、その中には神戸初の人工島・ポートアイランドが堂々と浮かんでいる。

大都市に共通してみられるドーナツ化現象により、中央区でも人口の減少が見られたが、近年は僅かながら増加傾向にある。定住人口は約11万5千人と神戸市9区の中では7番目だが、昼間人口ともなれば約28万人に膨れあがり、行政、経済の中枢を担う街として機能している。

このような中央区も元は葺合区と生田区という二つの区が合併して出来た区であり、両者は旧生田川(現フラワーロード)を境に分かれていた。古代より、両者は摂津国の一部であったものの、旧生田川を境界に葺合は摂津国菟原郡(うはらぐん)に、生田は摂津国八部郡(やたべぐん)というように異なった行政区域に属していたのである。中央区の発足というのは裏返せば、こうした歴史的に由緒ある葺合、生田という二つの区名が消滅したということでもある。しかしながら、区名としては消えてしまった葺合、生田という名も現在、区民センター、警察署、学校などの名称に残されている。こうした葺合、生田時代の残照を残しつつも、中央区は統合された一つの区としてさらなる飛躍をとげようとしていた。

しかし、そうしたさらなる飛躍という地域住民の願いを一瞬のうちに砕くような出来事が起こってしまったのである。1995(平成7)年1月17日午前5時46分、突如として大都市・神戸を襲った阪神・淡路大震災であった。震度7の激震地を区内に持つ中央区は多くの被害を出した。神戸で地震は起こらないという神話がいつの頃からかひとり歩きし、我々市民もそれを信じてきたように思える。しかし過去の事実は正直なもので、この辺りは約400年前に慶長の大地震というものを経験しており、我々はそのことを完全に忘れていたのである。

震災から10年が経過した今、中央区は震災での体験を生かしつつ、安全で住みやすい都心をめざして、未来の中央区を築いていこうとしている。歴史は言うまでもなく、我々人間の営みの連鎖であり、時の経過によって明らかにされた事実と評価がその中に含まれている。そこで、阪神・淡路大震災から10年、中央区誕生から25年という節目の年に、我々の街の歴史を振り返り、中央区の現実を把握し、今後の中央区のまちづくりの一つの指針として過去を見つめ直すことが必要になってくるのである。

中央区の歴史

通史編

INDEX

kobe central area

先史時代 6

古代 12

中世 18

近世 24

近・現代 32

History of kobe Central Area

中央区の歴史
通史編

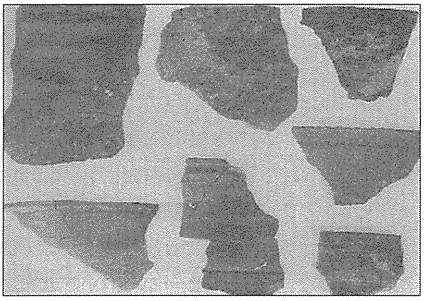
先史時代

埋蔵遺物からたどる先史時代の中央区

先土器時代

日本列島がアジア大陸と分断し、現在のような形を成したのは今から1万年前だといわれている。その1万年前より以前を地質年代では更新世と呼んでおり、この時代、既に人類が日本列島で生活を営んでいたことが確認されている(まだ土器を伴わないことから、この時代の文化を先土器文化という)。

中央区では今のところ、こうした更新世、つまり先土器時代の人間の営みを示す遺跡は発見されていないが、明石市の西八木海岸からは更新世人類と思われる人骨が発見されたり(明石人)、兵庫区の会下山から先土器時代の遺跡が確認されるなど、中央区周辺ではいくつかの先土器時代の跡が見つかっている。先土器時代の中央区については、地形的にみて、当時も北は山、南は海というような今と根本は変らない地形をしていたであろうし、南向きの斜面で飲料水も豊富で生活に適したであろうが、これまでに発見された遺跡がないため、確実なことは言えない。



宇治川南遺跡出土縄文時代晩期土器片
(資料提供/神戸市教育委員会)

縄文時代

縄文時代(約1万年前～紀元前3・2世紀)になると、人々は土器を作り(縄文式土器)、竪穴住居に居住し、狩猟・漁撈の採集経済を営んでいた。

中央区でも**宇治川南遺跡**(橘通1～3丁目)から各時期にわたる多種の縄文式土器が多量に出土している。このうち最も古いものは縄文時代早期のものが含まれており、また、縄文晩期の土器とともに出土し

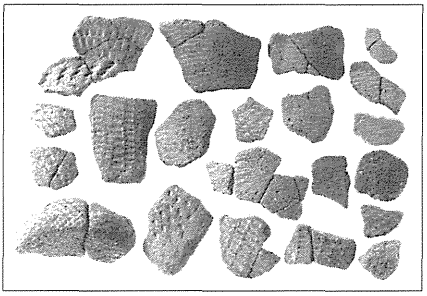
雲井遺跡出土縄文時代晩期土器棺
（資料提供/神戸市教育委員会）

た土偶や石棒はこの付近の縄文時代の祭祀にかかわる遺物とみられ貴重なものと言えよう。なお、これらの土器の中には関東・東北地方のものと思われるものも含まれており、また、大分県姫島産の黒曜石が晩期の土器に伴って出土するなど、この時代すでに関東から九州に及ぶ広い地域と交流があったことがうかがえる。さらに、**雲井遺跡**（雲井通6丁目、現在サンシティが建てられている場所）からは縄文時代前期の屋外炉が四基、縄文後期の集石遺構一基、縄文式土器などが見つかり、縄文時代の人類の生活痕を今の世に伝えてくれている。

なお、近年、**熊内（くもち）遺跡の第3次調査**（熊内橋通7丁目）から縄文時代早期の遺跡が見つかり、早期前半に属する竪穴住居が確認された。また、

熊内遺跡（第3次調査）
縄文時代早期竪穴住居跡
（資料提供/神戸市教育委員会）

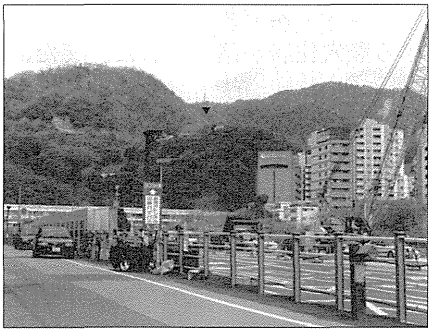
ここからは縄文時代早期の押型文土器や、晩期の摩滅の少ない土器片も出土している。



熊内遺跡（第3次調査）出土
縄文時代早期押型文土器（資料提供/神戸市教育委員会）

こうした遺跡から、縄文時代の中央区というものがかすかながら浮

先史時代



布引丸山遺跡遠景(資料提供/神戸市教育委員会)

かび上がってくるが、より詳しいことについては今後の遺跡・遺物の発見を待つより他はない。

弥生時代

今から約2000年前に大陸から農耕や金属器を伴う進んだ文化が伝えられ、日本に弥生文化の時代(紀元前3・2〜2・3世紀)が訪れたのであるが、近畿地方では明石川の流域の低湿地に最も早く水稲耕作が営まれたという。

宇治川南遺跡出土弥生時代前期土器
(資料提供/神戸市教育委員会)

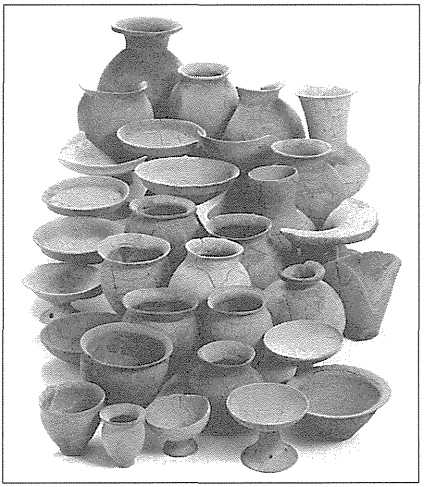
中央区でも布引の砂山(いさごやま)の麓、今では徳光院の墓地となっている付近から弥生時代中期のものと思われる土器が多数発見されたことがある。この遺跡は**布引丸山遺跡**(葺合町、史跡編P92参照)と呼ばれ、このような発見から紀元頃にはこの地に人が住み、稲作が行なわれていたことがわかっている。なお、この遺跡は標高140㍍の位置にあり、六甲山南麓の丘陵上に点々とする高地性集落の一つと考えられる。また、**雲井遺跡**(雲井通6丁目)からは弥生時代中期の方形周溝墓(ほうけいしゅうこうぼ)が6基も群集して発見され、周溝の中に供献された土器や埋葬された木棺などは当時の墓制や習慣を知るための貴重な資料と言えよう。さらに、**宇治川南遺跡**(橘通1〜3丁目)から

雲井遺跡、弥生時代中期周溝墓全景
(資料提供/神戸市教育委員会)

は弥生時代前期の弥生式土器が出土している。そして、**熊内遺跡の第2次調査**(熊内橋通6・7丁目)では弥生時代後期の竪穴式集落跡が見つかっている。この遺跡から見つかった集落跡は、直径10メートル、深さ40センチの円形竪穴住居である(なお、この住居跡のすぐ上の層から弥生時代末から古墳時代初期と思われる一辺7.4メートルの方形竪穴住居跡も見つかっている)。住居跡には弥生式土器が多く残っており、また、集落間の抗争に使用さ

熊内遺跡(第2次調査)竪穴住居跡
(資料提供/六甲山麓遺跡調査会)

れたと思われる武器の類(鏃・投弾・球形の石など)も見つかった。このうち、銅製の鏃は両側のとがった部分を二つずつ持つという珍しい形(抜けにくいように工夫したものと考えられる)をしており、注目された。その他、弥生時代の遺跡としては旧三ノ宮駅構内遺跡(北長狭通)などがあげられ、神戸大学附属病院内からは弥生時代の石鏃などが見つかっている。



熊内遺跡(第3次調査)出土
弥生時代後期土器(資料提供/神戸市教育委員会)

なお、近年、**熊内遺跡の第3次調査**(熊内橋通7丁目)から、弥生時代後期の弥生式土器が多数出土している。また、最近、神戸栄光教会再建現場(下山手通4丁目)から弥生時代の絵画土器(県内二例目)が発見された。これは、高坏形土器の脚の部分で、魚の絵が描かれていた。

古墳時代

縄文時代の末に始まった水稲耕作

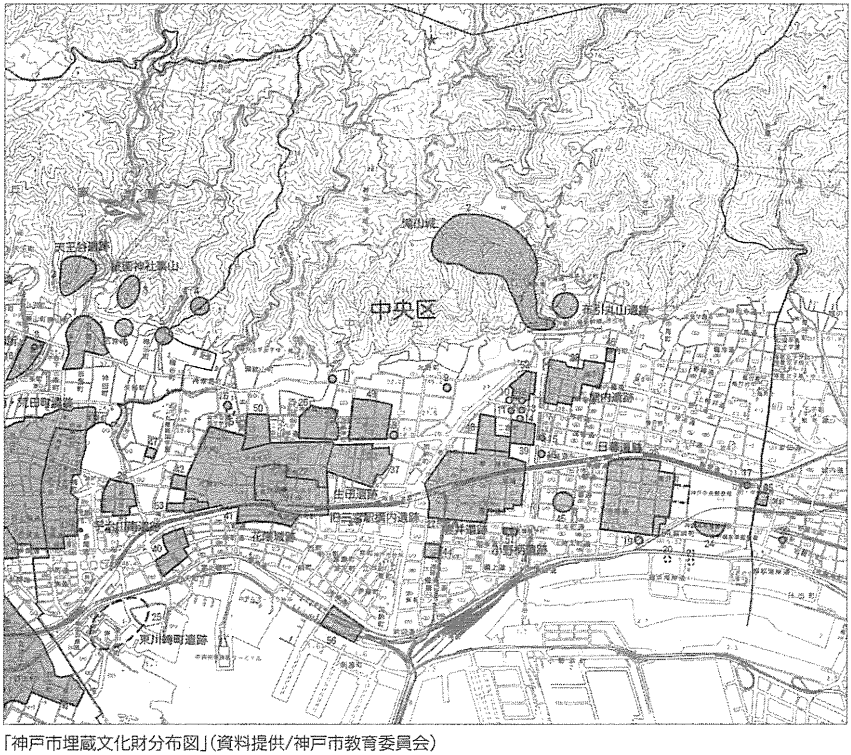
が弥生時代になると本格的に行われるようになり、その農耕生活が発展すると社会の中に貧富の差を生み出すことになった。こうした農耕の発展による貧富の差は支配する者と支配される者という社会構造の変化をもたらすことになる。このような社会構造の変化が小国家へと発展して行き、その中で成長した豪族は自らの権威を誇示せんがために古墳を築くのであった。

中央区内にもこうした古墳の存在が伝えられているが、早くから市街地化が進んだせいもあり、その大半は今日消滅してしまっている。

古墳時代前期の古墳はこれまで中央区では知られていない。

続く古墳時代中期であるが、この時期は伝仁徳天皇陵に代表されるよう、古墳が巨大化し、形状も前方後円墳が主流となる時期である。中央区では**脇浜乙女塚**(おとめづか)(脇浜町3丁目、史跡編P75参照)がこの中期の古墳にあたると言われている。脇浜乙女塚は昭和の初めまではまだ封土を残しており、前方部を東に向ける前方後円墳であったが、出土品などは不明なため、詳細は定かでない。

そして、古墳時代後期の古墳は区域至る所にあったことが確認されており、中央区にあった後期の古墳としては以下のようなものがある。**割塚古墳**(割塚通1丁目、史跡編P74参照)は横穴式石室を持つ大円墳であったし、**中宮古墳**(なかみや)(山本通5丁目、史跡編P153参照)は横穴式石室を持つ直径約30㍍の前方後円墳で刀・金環・玉・鉄製品などが出土した。また、北野町には南に開口する横穴式石室を持つ**三本松古墳**(北野町2丁目、史跡編P106参照)が存在していた。その他、旧葺合区域に畔塚(旧脇浜小内)・旗塚(旗塚通6･7丁目)・大塚、旧生田区域に城ケ口古墳(旧神戸移住センター東南)・**黄金塚**(山本通5丁目、史跡編P153参照)・氷雨塚(山本通5丁目)・馬塚(元町駅付近)・**差方塚**(さほうづか)(中町通、戦前までは民家に並河誠所の建てた「差方塚」の碑があったが、戦争で消失してしまった)・姫塚(裁判所付近)・化粧塚(神戸駅付近)などの後期古墳があったと言われているが、黄金塚(こがねづか)(善照寺西隣の市有地に封土が現存)以外はいずれの古墳も後世の削平を受け消滅しており、周辺の地形も著しく変化し、それらの姿をうかがうすべも無い。



「神戸市埋蔵文化財分布図」(資料提供/神戸市教育委員会)

History of kobe Central Area

中央区の歴史
通史編

古代

生田の森・布引の滝などの景勝地で知られる律令体制下の中央区

大和政権時代

弥生時代以来の農耕社会の発展が人々の間に貧富の差を生み出し、小国家の成立を導いたわけであるが、遅くとも4世紀の半ばには大和政権(やまとせいけん)がこうした小国家を支配していた豪族を従え、日本国内の統一を行なうことになる。大和政権はこのような各地の豪族を、氏姓制度をもとにその体制下に組み入れたのである。

こうした大和政権下に組み入れられた豪族はこの中央区にもみられ、『新撰姓氏録(しんせんしょうじろく)』(815年)という後世の書物には中央区を支配した豪族として**布敷首**(ぬのしきのおびと)や**生田首**(いくたくのおびと)といった名が見える。

布敷首は旧葺合区あたりを支配していたと思われ、葛城襲津彦命(かつらぎそつひこのみこと)の子孫だと言われる豪族である。なお、灘区との境、割塚通1丁目のJRと阪急の高架に挟まれた場所に割塚の碑(史跡編P74参照)があり「布敷首之霊地」なる文字が刻まれた石碑があり、地元では割塚がこの布敷首の塚ではないかと言われていたが、これは単なる憶測で何の根拠もない。

また、生田首は旧生田区あたりを支配していたと思われ、天児屋根命(あめのこやねのみこと)(藤原氏の祖と言われている)の子孫だと言われている豪族である。こうした豪族たちが当時この中央区を支配していたと思われるが、前述の古墳もそのような豪族の手によるものではないだろうか。

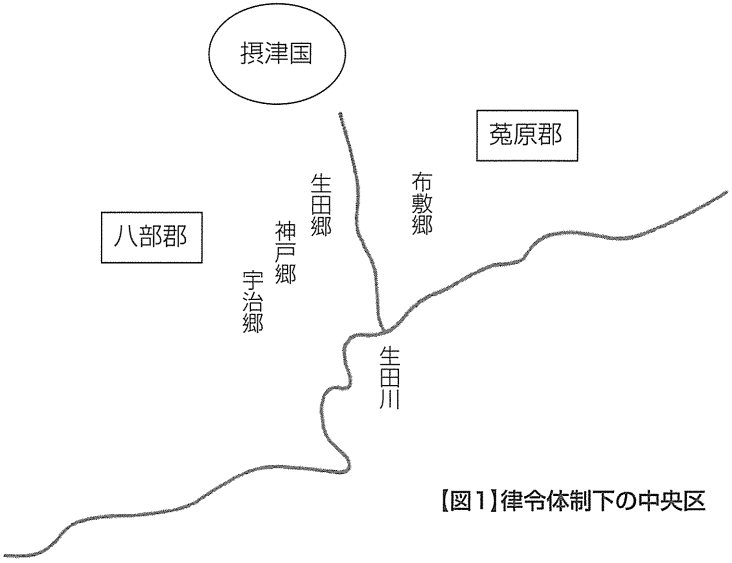
律令体制の下で

このような豪族を従えて全国を統一した大和政権は、その後645(大化1)年の大化改新や701(大宝1)年の大宝律令の制定などにより、中央集権的国家を築いて行くことになる。大宝律令に基づく律令体制により、国家は全国を60あまりの国に分け、その国をいくつかの郡に、そして郡

をいくつかの里(のち郷と称する)に分けるという地方制度(国－郡－里〈郷〉制)を打ちたてたのである。

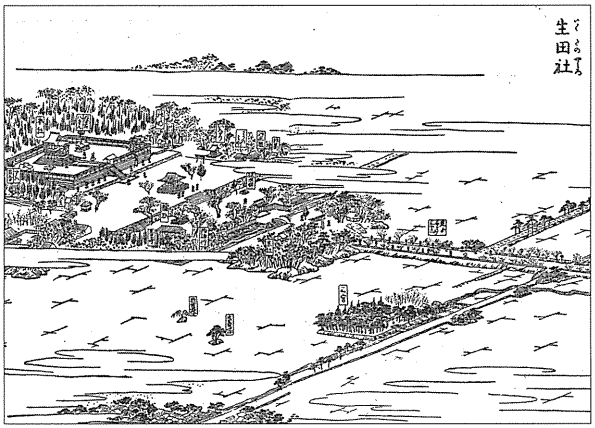
この中央区はこうした律令制の地方制度によれば、**摂津国菟原郡・八部郡**にあたる。この両郡は摂津国でも西端の方になり、菟原郡は六甲山の南、夙川から旧生田川までを、八部郡は旧生田川から須磨までをさしていた。後の平安時代、10世紀に記された『和名抄』によると、菟原郡の中の**布敷郷**(旧葺合区一帯)、八部郡の中の**生田郷**(のちの生田村・生田宮村あたり)、**神戸郷**(のちの神戸村から城ケ口あたり)、**宇治郷**(今の宇治川、宇治野山などに地名を残す旧生田区西部)という郷がこの中央区の区域に相当することがわかる。

ところで、菟原郡と八部郡の郡境は**旧生田川**(現在のフラワーロード、旧葺合区と旧生田区の境、史跡編P90・112参照)であるとされているが、その生田川の流路にも多少の変遷があったように思われる。というのは、『和名抄』では八部郡に属している生田村(当時の生田郷)が後世になると生田川の東にあって菟原郡に属しているからであり、これは『和名抄』が記された当時は生田川が生田村の東を流れていたから



【図1】律令体制下の中央区

古　代



「摂津名所図会」より、生田社

ではないかと考えられる。いずれにせよ、生田川を中心に生田の森や生田郷があり、かなり開けた地域であったのだろう。さて、生田郷というのは古の「活田長峡（いくたながお）」である。これは『日本書紀』にでてくる、神功皇后（じんぐうこうごう）が朝鮮出兵の帰途、稚日女尊（わかひるめのみこと）を祀った「活田長峡国」のことで、これが**生田神社**（史跡編P110参照）のはじまりと言われ、その時祀られた地は砂山（丸山）であったが、後に洪水で社が流され、現在の地に移ったと伝えられている。

律令制の施行により、それまでの豪族による土地と人民の私有は廃され、かわって土地と人民は国家のものであるという公地公民制が取り入れられた。そして、この公地公民制に基づき、班田収授法（はんでんしゅうじゅのほう）（国家が人民に口分田（くぶんでん）を与え、人民は国家に税を納める）を実施したが、この時の土地制度が碁盤目状に土地を区切った**条里制**である。このような条里制は当然この中央区でも行なわれており、旧葺合区の南半分の区画はこの条里制の遺構として顕著な例であると言われている。

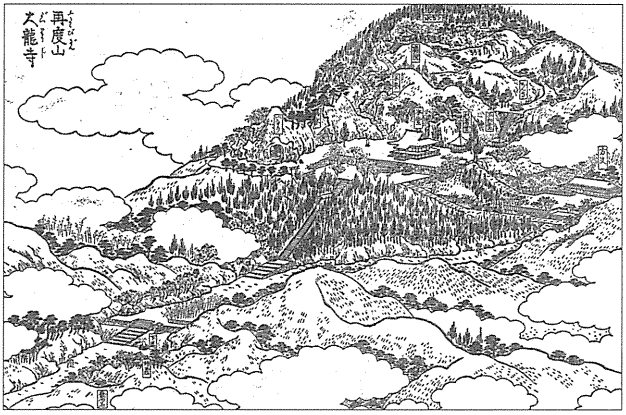
奈良時代・平安時代

奈良時代にはいると律令制も動揺しはじめ、公地公民制もゆらいでくる。その結果、貴族、寺社などの有力者の私有地、すなわち荘園が出現するのであった。そして、平安時代の末には区の西部に平家領の福原荘が形成されて行く。さてその

頃、このあたりにはどれくらいの人がいたのであろう。『摂津国大計帳』(1120〈保安1〉年)によれば、菟原郡には15,695人、八部郡には22,145人の人がおり、すなわち夙川から須磨にかけての両郡の区域には約3万8千人の人が住んでいたことになる。

なお、平安時代に律令の施行細則として制定された延喜式(927〈延長5〉年)に記載のある神社、すなわち式内社として生田神社が記載されている。前述の神功皇后にまつわる話はともかくとして、生田神社はその当時から今日に至るまで存在する古い神社であることが確認されよう。また、平安時代の初期、空海によって開かれた真言宗は、密教の性格から各地に山岳寺院を建立していったが、**再度山**にある**大龍寺**(史跡編P160参照)はこの地方を代表する山岳寺院である。

当時、京と九州の大宰府を結ぶ主要幹線道路であった**山陽道**はこの中央区の海岸近くを走っており、多くの貴族たちがこの山陽道で中央区付近を通り西国へ向かった。そして、**布引の滝**(葺合町、史跡編P94参照)や**生田の森**(下山手通1丁目、史跡編P111参照)、**若菜の里**(中尾町、史跡編P64参照)などは京都の貴族がしばしば訪れた名勝でもあり、多くの和歌が詠まれている。



「摂津名所図会」より、再度山大龍寺

Column コラム 日本の歴史を変えてきた街・神戸！

「神戸」は三度、時代の転換期に合戦の舞台になった

エキゾチックでおしゃれな街・神戸。そして、「神戸は江戸幕末に港が世界へと開かれてから発展した街だから、それほど歴史はないでしょう。」という言葉をよく耳にする。しかし、このような認識は大きな誤りであることを指摘しておかなければならない。

というのも、神戸ではこれまで、三度、時代の節目に、大きな合戦が繰り広げられ、それがもとになって、日本の歴史が大きく転換したという事実があるからだ。その三度の戦いとは、源平の争乱における「一ノ谷の戦い」、太平記で知られる「湊川の戦い」、そして「花熊城の戦い」である。

まず、1184(寿永3)年2月7日におこった「一ノ谷の戦い」は、神戸の福原京遷都を実行した平清盛亡き後、都落ちしながらも政権を守ろうとする平氏とそれを打破しようとする源氏が本格的にその雌雄を決しようとした合戦である。ここ中央区は大手の戦いである「生田の森の戦い」が繰り広げられた。この戦いで源氏方が勝利し、以後、屋島、壇ノ浦と戦は続くが、本拠地・神戸で平家が敗れたことが、その後の平家滅亡の最大の要因になったことは否定できない。つまり、この戦いで平家が負けたことで、時代が平安時代から鎌倉時代へ、すなわち古代から中世へと転換していったのである。

次に、1336(延元元)年5月25日に中央区を中心としておこった「湊川の戦い」は、後醍醐天皇に反旗を翻し九州から都へ上ろうとした足利尊氏軍を、天皇方の新田義貞・楠木正成軍が湊川で迎え撃つというものである。新田義貞の失策がもとで孤立した楠木正成がここ湊川で自刃し敗北、これを知った天皇

が吉野へ逃れたことで南北朝分裂へと展開する。結局この戦いは、神戸で楠木正成が敗れたことで、中世の中でも時代が鎌倉時代から室町時代へと移っていくことになったことを意味している。

そして、1578(天正6)年からの「花熊城の戦い」は、織田信長に反旗を翻した荒木村重が信長方の池田信輝・輝政親子と戦い、池田軍に敗れるというもので、この戦いをきっかけに、信長は西国の毛利攻めを本格化させるのであった。つまり、この戦いは戦国時代を抜け出し織豊政権時代の幕開け(中世から近世への過渡期)となるきっかけをつくったのである。

こうしてみてくると、日本の歴史が変わるとき、必ず神戸で大きな戦いが繰り広げられ、それによって日本の時代が転換していったということがわかるであろう。それでは、このことは、単なる偶然なのだろうか、いやそうではない。神戸は、古代の首都圏・畿内の摂津国の西端にあたり、山陽道・播磨国との境にあたる。つまり、神戸に入ればあとは都まで一直線ということになり、逆に神戸を守れば政権を維持できるという図式が成り立つのである。ただ、この三度の戦い、神戸で守った方が全て負けているという皮肉な結果もみられる。

これで、冒頭の「神戸は江戸幕末に港が世界へと開かれてから発展した街だから、それほど歴史はないでしょう。」という認識は明らかに間違いだということがわかるであろう。まさに、神戸は日本の歴史を変えてきた街なのである。

History of kobe Central Area

中央区の歴史 通史編

中世

『平家物語』生田の森の戦い、『太平記』湊川の戦いの舞台となった中央区

平氏政権

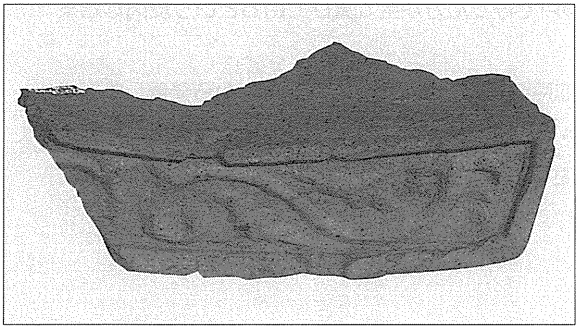
11世紀の藤原氏全盛時代の後、上皇が政治を執る院政が行なわれるようになった(1186〈応徳3〉年)。このような中、地方では源氏や平氏などの武士が中央進出の機会をうかがい、保元(ほうげん)の乱(1156〈保元1〉年)・平治(へいじ)の乱(1159〈平治1〉年)を経て、**平清盛**が強大な権力を手中に収め、平氏政権を開くことになる(1167〈仁安2〉年、平清盛が太政大臣となる)。すなわち、政治の担い手が貴族から武士へと変っていったのである。

平清盛は中央区の西部から兵庫区の平野にかけてあった自らの荘園、**福原荘**(ふくはらのしょう)を好み、その南にあった**大輪田ノ泊**(おおわだのとまり)を改修して中国の宋との貿易(日宋貿易)をはじめた。

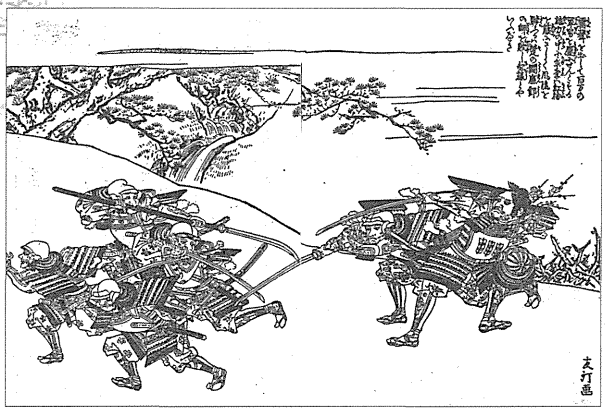
源平の争乱――ノ谷戦い・生田の森の戦い

しかしその間、栄華をほしいままにした平氏に対しては反感も強く、1180(治承4)年4月には以仁王(もちひとおう)が平氏追討の令旨(りょうじ)を出した。この以仁王による令旨が清盛に福原への遷都を決心させるのであった。同年6月2日、清盛は福原遷都を断行し、翌日安徳天皇が三種の神器とともにこの福原に到着した(**福原京遷都**)。これにより、再び都が京都にもどされるまでの約半年ではあるが、神戸が日本の首都になったのである。

なお、近年の発掘調査で、福原京の推



楠・荒田町遺跡出土軒平瓦



「摂津名所図会」より、生田の森の戦い・梶原景季えびら梅

くなり、木曽義仲が京へ進撃してきたため、平家は1183(寿永2)年に西国へと落ちていった(平家都落ち)。一方、京都に入った木曽義仲は貴族社会と対立し、後白河法皇が源頼朝にその追討を命じ、それに対し頼朝は弟の源範頼・義経に義仲追討を指示し京へと向かわせ、義仲を討たせた。

このような源氏内部の分裂を知った平家はこの機に都を奪回しようと屋島から兵庫に上陸し(1184〈寿永3〉年1月)、生田の森と須磨一ノ谷に陣を置き、源氏との決着を付けようと考えた。これに対し、義仲を討った源範頼・義経兄弟はその勢いで平家打倒を決意し、範頼は山陽道を西に下り生田の森を、義経は丹波を迂回し加古川筋にでて西から一ノ谷を攻めることにし、総攻撃の日を1184(寿永3)年2月7日とした。これが一ノ谷の戦いである。

中央区にある**生田の森**(史跡編P111参照)はこの**一ノ谷の戦い**の東の拠点となり激しい戦いが行なわ

定地とも重なる**楠・荒田町遺跡**(神戸大学医学部付属病院構内)から平安末期(12世紀)の唐草文様の軒平瓦と建物跡の柱穴が出土し、福原京関連の遺物ではないかと推測されている。さらに、最近の調査で、同遺跡から同時期の掘立柱跡(柱穴は2列で5つが残り、約1㍍の方形)が発見され、平氏一族の邸宅に備えられた櫓の跡ではないかと考えられ、福原京の建物の可能性もあるとして注目されている。

ところが、この遷都の直後、8月には伊豆で源頼朝が、また9月には木曽義仲がそれぞれ平家打倒を旗印に挙兵したため、清盛は同年11月に再び京都に都を戻すことにした。その翌春、志し半ばに平清盛が亡

れた。生田川を挟んで川の東には源氏の範頼軍が、西には平家の知盛軍が対峙した。この生田の森での攻防は源氏の大勝に終ったが、この時の様子は『平家物語』にも描かれている。なお、**小野八幡神社**(八幡通4丁目、史跡編P83参照)はこの生田の森で戦死した源氏方の**河原太郎・次郎**兄弟のために、源頼朝が建てた報恩寺であったと伝えるが定かではない。結局、一ノ谷の戦いで大敗した平家は続く屋島の戦いでも敗れ、1185(文治1)年、長門の壇ノ浦で滅亡したのである(壇ノ浦の戦い)。

鎌倉時代

平家滅亡の後、源頼朝は1192(建久3)年、征夷大将軍に任命され鎌倉幕府を開くことになった。これ以後、江戸時代の終わりまで約680年間の長きに渡る武家政権が日本を支配することになる。鎌倉時代に入った1207(承元1)年、承元の法難で讃岐に流罪となる法然が脇浜の庄屋宅に立ち寄り、それがきっかけで庄屋は仏門に入り**阿弥陀寺**(脇浜町2丁目、史跡編P76参照)を開いたといわれている。

ところで、中世になると中央区の地域には**福原荘**、**輪田荘**、**葺屋荘**といった荘園が形成されていた。福原荘はもともと平家の荘園であり、宇治川より西の奥平野にかけて立てられた荘園で、後に宇治川から生田川までに拡張され兵庫区から中央区の西半分をその領域とした。平家滅亡後、この福原荘は鎌倉幕府によって没収され(平家没官領)、宇治川の東だけにその名が残された。そして、宇治川より西の区域は**兵庫三箇荘**(上・中・下)の名が付けられたのである。この兵庫三箇荘のうち、兵庫上之荘が中央区の走水・坂本と兵庫区の荒田の三村から成っていた。

輪田荘はもと兵庫区の和田岬辺りに立てられた荘園であるが、12世紀の初頭にその辺りから宇治川に散在する田畠をその中に加えていった。

葺屋荘は旧葺合区一帯を荘域とする荘園で、鎌倉時代に立てられたものといわれているが定かではない。ただ、次の南北朝時代の1348(正平3)年に河内国(大阪府)の安養寺の荘園になったという記録が残っている。

ところで、この葺屋という名は一

「摂津名所図会」より、布引の滝

体どこからきたのであろうか。一説によれば、この地が葦屋と呼ばれる区域に入っていた時期があり、この「葦」がよく似た「葺」という字に誤写されたのではないかという。そして、葦屋は「吹き屋根」に通ずるというので**葺合**に改められたというが、葺合という名が史料に登場してくるのは早くとも近世に入ってからである。

鎌倉時代に入り、源平の争乱で中断した兵庫の港(大輪田ノ泊)の修築も東大寺の僧重源によって再開され、以後海上交通の要衝としての地位を不動にする。こうした兵庫の港に時宗の一遍や西大寺の叡尊が布教のために訪れている。

1274(文永11)年の文永の役、1281(弘安4)の弘安の役と、二度にわたる元寇(蒙古の襲来)で幕府は大きな打撃を受け、これをきっかけに鎌倉幕府は衰亡への道をたどって行くことになる。

南北朝の動乱

こうした中、朝廷では後醍醐天皇が即位し、幕府打倒を策するのであった。天皇は正中の変(1324〈正中1〉年)、元弘の変(1331〈元弘1〉年)と倒幕の行動を起こすが失敗し、隠岐に配流されてしまう。後醍醐天皇が隠岐へ流される途中この中央区を通っており、**布引の滝**(葺合町、史跡編P94参照)を見たという場面が『増鏡』の中に登場する。しかし、この変が契機となり、鎌倉幕府に反感を持つ武士たちが各地で挙兵した。そして、1333(元弘3)年1月には播磨の赤松則村(円心)が兵を挙げ摂津の摩耶山合戦で幕府軍を敗り、5月には足利尊氏が六波羅探題を落とし、その直後に新田義貞が鎌倉を攻め、ここに鎌倉幕府は滅亡するのであった。

1334(建武1)年から後醍醐天皇は

「摂津名所図会」より、湊川血戦

建武中興を行なうが、実情にそぐわず、不満を抱く武士たちは足利尊氏に率いられ後醍醐天皇に反旗を翻したのである。ここに南北朝の動乱が始まるのであった。

1336(延元1)年1月、新田義貞を討つため京に上った足利尊氏は、これに敗れ西へと逃れ、新田義貞・**楠木正成**軍と打出でも戦ったがこれにも負け、九州へと敗走した。九州で勢力を挽回した尊氏は再度の上京をはかり、水陸両軍で都へ出発した。こうした足利軍の動きに対し、後醍醐天皇側は、正成が湊川から会下山にかけて陣を張り足利の陸軍に備え、また、義貞が兵庫築島(つきしま)辺りに陣を構え足利水軍に備えた。しかし、正成・義貞両軍は奮闘もむなしく足利軍に大敗し、正成は部下を布引方面に逃した後、湊川の北の民家に入って小屋に火をかけ自刃した。これに殉ずるもの一族28人と言う(同年5月25日)。一方、義貞は敢闘の末、京都へと敗走するのであった。これが**湊川の戦い**(史跡編P197参照)であり、この名称は湊川が戦いの中心であったことを物語り、その様子は『太平記』に描かれている。そして、この中央区の西部は湊川の戦いの古戦場なのである。

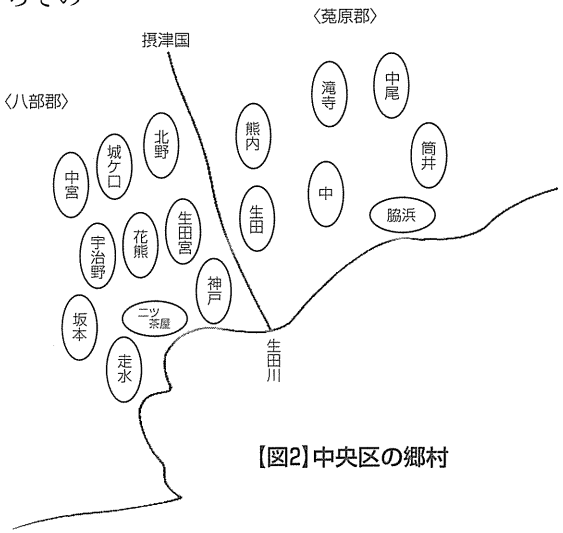
室町時代

こののち室町幕府が成立し(1338〈延元3〉年)、世は室町時代へと入って行く。この辺りは摂津守護となった赤松範資(のりすけ)が支配することになり(1337〈延元2〉年)、範資は再度山上に**多々部城**(たたべ)(史跡編P160参照)を築いた。こうした中、幕府を開いた足利氏は、尊氏と弟の直義(ただよし)との間で内紛が起こり(観応(かんのう)の擾乱(じょうらん))、両者は打出・御影浜で戦い、敗れた尊氏は須磨の松岡城へこもったが、和睦が成立した。3代将軍義満が明との

間で貿易を開始し(日明貿易)、この兵庫の港がその貿易の拠点となり、歴代の将軍は明船見たさに中央区を通り兵庫の港へと足を運んだのである。なお、室町の初期には赤松氏が支配していてた中央区一帯であるが、1378(天授4)年からは細川氏が摂津の守護となり、以後中央区は細川氏の領するところとなった。

室町幕府はもともと基盤が弱く、各地の守護大名が互いに勢力を争っていた。将軍家の後嗣問題に端を発した1467(応仁1)年からの応仁の乱を契機に、幕府は衰退の一途をたどり、世は戦国時代へと突入して行くことになる。この戦国時代に摂津国は下剋上の結果、細川氏からその家臣の三好長慶へと支配が移り(1544〈天文13〉年)、この三好長慶もその家臣の松永久秀に討たれ(1564〈永禄7〉年)、次々と権力交代がおこった。ところで、この松永久秀が守った城が布引の滝の西方にある**滝山城**(史跡編P99参照)である。滝山城は1556(弘治2)年に久秀が、主君三好長慶をこの城に迎えたということで突如として史上に登場する。しかし、おそらくは長慶がこの辺りを支配した時に築き、久秀に守らせたものと思われる。

こうした中、農民たちは自らの生活を守り、結束を固め、農民が地域的に結合して郷村が形成されるようになり、戦国時代の末には中央区にも次のような村々が出来上がるのであった。すなわち、山麓部には東から**中尾**、**滝寺**、**熊内**(くもち)、**北野**、**城ケ口**(じょうがぐち)、**中宮**(なかみや)、浜辺には東から**脇浜**、**神戸**(かんべ)、**二ツ茶屋**(ふたつちゃや)、**走水**(はしりど)、それらの中間には東から**筒井**、**中**、**生田**、**生田宮**、**花熊**、**宇治野**、**坂本**といった村々が出来上がっている。



【図2】中央区の郷村

History of kobe Central Area

中央区の歴史
通史編

近世

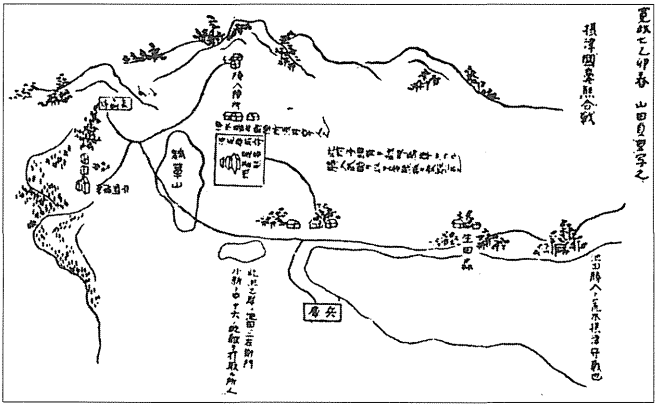
江戸時代・幕藩体制下での中央区の発展から、幕末・神戸開港と近代化のめばえ

織豊政権

応仁の乱後、世は戦国時代へと突入し、群雄割拠がなされる中、全国統一のさきがけをなしたのは織田信長である。信長は1560(永禄3)年、当時天下人に一番近い位置にいた駿河の今川義元を桶狭間の戦いに破り、天下統一の道を開いた。

この頃、下剋上で三好長慶に代りこの辺りを支配した滝山城の松永久秀は、1565(永禄8)年に将軍足利義輝を暗殺するという悪逆を行ない、彼の専横がひどくなるのにつれて三好三人衆はこれを押さえようとした。その後、滝山城は落城し三好三人衆の手に移るがこれも長くなく、最終的に城は織田信長の手中に入ったと言われている。

このような中、摂津は織田信長の手に入るところとなり、**荒木村重**(むらしげ)が伊丹城に本拠を置き摂津守として西摂一帯に勢力を張った。荒木村重は信長の命により、1574(天正2)年(一説では1568〈永禄11〉年)にこの



花隈合戦の図(「区誌生田いまむかし」P112より)

中央区に**花熊城**(花熊町一帯、史跡編P144・145参照)を一年で築いている。この花熊城に、村重は家老の荒木志摩守元清を置き中央区近辺を支配させていた。

ところが、村重は信長に重大な嫌疑をかけられるというアクシデントが発生する。これは村重の部下が、ひそかに当時信長と対立していた石山本願寺に物資を供給したというものであった。信長の性格上、いったん疑いをかけられればそれを解くことは困難であると考えた村重は、毛利氏に応援を頼み、1578(天正6)年10月、信長に反旗を叛したのである。信長は池田信輝、輝政親子に花熊城攻撃を命じ、1580(天正8)年2月に花熊城は陥落した(**花熊城の戦い**、花熊合戦)。陥落後、信輝は花熊城を解体し、かわって兵庫城を築き、兵庫一帯を支配することになり、従って中央区も池田信輝の支配するところとなった。

織田信長は1582(天正10)年、本能寺の変で明智光秀に討たれ、かわって豊臣秀吉が天下統一の事業をおこなって行くことになる。秀吉は戦乱を鎮め、天下を自らの手中におさめる過程において、この中央区の村々に対して検地を実施した(いわゆる太閤検地)。そして、1583(天正11)年、中央区のほぼ全域が豊臣領となり、このあたりは豊臣秀吉の支配を受けることになった。

ところで、中央区が豊臣秀吉の支配を受けていた慶長期、近畿地方を大地震が襲った。1596(慶長1)年閏7月の**慶長の大地震**で、その余震は数か月に及んだという。この地震で伏見城の天守閣が倒壊し、神戸でも兵庫津の町の家屋のほとんどが倒壊し、その後の火災で炎上、港町は壊滅的な被害を受けたと記録は伝えている。中央区内の被害についてはその記録をとどめる史料がないので詳らかではないが、隣の兵庫区の兵庫津が全滅であることからすると中央区内も相当な被害か出たものと推測されよう。

江戸時代・幕藩体制の下で

1598(慶長3)年、豊臣秀吉が62歳の生涯をおえた後、天下は徳川家康の勢力(東軍)と石田三成を中心とするそれに反対する勢力(西軍)とに分かれ、両者は1600(慶長5)年、関ケ原の戦いで決着をつけることになった。戦いは東軍の圧勝にお

わり、ここに家康の覇権が誕生することになる(なお、家康は1603〈慶長8〉年、征夷大将軍に任命され江戸幕府を開いている)。これにより、秀吉の子豊臣秀頼は摂津・河内国を支配する一大名(約65万石)に蹴落とされてしまった。

秀吉存命中は豊臣領であったこの中央区も、秀頼が摂津・河内の一大名になったため、形式上は秀頼の支配するところとなるが、実質的には秀頼の財政をみることになった摂津国茨木城主片桐且元(かたぎりかつもと)が支配することになる。そして、且元は部下を派遣し中央区一帯を管理させ、1604(慶長9)年以降は弟の片桐貞隆に管理させることにした。

1615(元和1)年、大坂夏の陣で大坂城が落城し、豊臣家が滅亡すると、豊臣の直轄地であった中央区は徳川幕府の天領とはならず、大部分の村々は尼崎藩の領地に組み込まれることになる。つまり、中央区の大部分は、1617(元和3)年、近江国膳所(ぜぜ)より尼崎藩5万石の藩主として入封した戸田氏鉄(うじかね)の所領となるのであった。ついで1635(寛永12)年には遠江(とおとうみ)国掛川から同じく5万石で青山幸成(よしなり)が尼崎藩主として入封し、計4代青山氏が領する。また、1711(正徳1)年には遠江国掛川より松平(桜井)忠喬(ただたか)が4万石で入封し尼崎藩主となり、計7代松平氏が支配し幕末をむかえる(中央区の村々の石高並びに支配関係については【表1】、【表2】を参照)。このように、中央区の大部分は戸田、青山、松平と言った譜代大名の領するところとなったのである。

なかでも、青山氏の2代**青山幸利**(よしとし)は善政をもって領民にこたえ、坂本村の安養寺(あんようじ)(楠町7丁目、史跡編P193参照)などにはその景仰碑が建てられている。また、坂本村の東、西国街道のわきに湊川の戦いで戦死した楠木正成の塚があったが、この塚にまず尼崎藩主青山幸利が五輪塔を建て、その後1692(元禄5)年には徳川光圀の命により佐々宗淳(ささむねきよ)がこの地に赴き楠公の墓碑(大楠公墓碑)を建立している。これが湊川神社(多聞通3丁目、史跡編P197参照)の境内の隅にある**「嗚呼忠臣楠子之墓(ああちゅうしんなんしのはか)」**(史跡編P197～199参照)である。

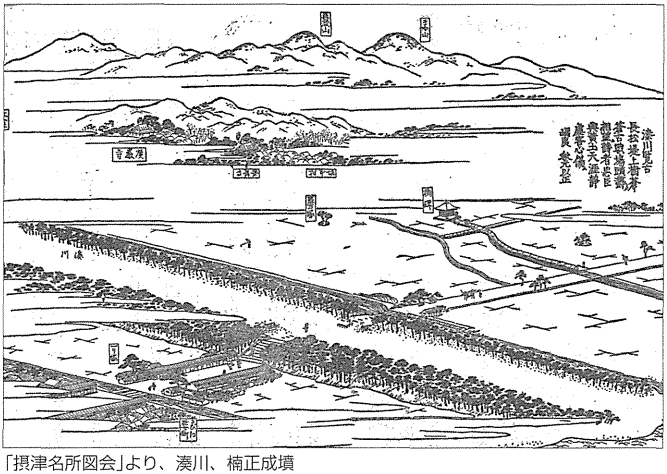
ところで、1769(明和6)年、幕府は突如として今津から兵庫に至る尼崎藩領などに対して幕府天

領に移すことを命じ(**明和六年の上ケ地令**)、これにより中央区の村々の大部分は天領として収公される。このため、尼崎藩の中央区における領地は、中・坂本・生田宮の三村を残すのみとなってしまった。尼崎藩主松平忠告の時である。これは、このころ苦しくなってきた幕府財政を建直すため、豊かで経済的に発展していた兵庫とその周辺に幕府が目を付けたからである。代替地を受けたとはいえ、藩の経済的主要部分を失った尼崎藩の経済は以後、悪化の道をたどることになる。なおこの時幕府に収公されたのは、小野新田・生田・中宮・走水・二ツ茶屋・神戸(以上尼崎藩)・筒井・脇浜(以上旗本領)・熊内(下総古河藩)・花熊(大和小泉藩)の村々である(【表1】、【表2】を参照)。そして、天領になった村々はそれ以後、大坂谷町代官所の支配のもとに置かれることになる。

江戸時代の産業・交通

この頃、中央区の村々の村民は山地や海辺に新田の開発を行ない、二ツ茶屋村の茶屋高浜伊左衛門の高浜新田や、開発者不明の**小野浜新田**はその代表的なものである。村人の大部分は米麦を中心とする農業を生業とし、その他、素麺・線香・油絞り・酒造などを行なっていた。さらに、江戸後期になると、生田川流域には多くの**水車小屋**が建ち並び、酒米の精米、油絞り、小麦粉の製造の用に供された。

また、海上交通で**兵庫津**が全国屈指の港として栄え



「摂津名所図会」より、湊川、楠正成墳

【表1】中央区・旧村の石高の変遷

		摂津一国高御改帳 元和3年(1716)	天保年間郡郷帳 (1830～1843)	旧高旧領取調帳 (幕末)	幕末時の支配関係
(旧葺合区)	筒井	367石余	423石余	423石余	天　領
	熊内	643石余	704石余	705石余	天　領
	小野新田	--------	30石余	30石余	天　領
	生田	370石余	370石・新田20石	380石余	天　領
	脇浜	516石余	565石余	568石余	天　領
	中尾	223石余	226石余	226石余	天　領
	滝寺	55石余	55石余	58石余	下総古河藩
	中	227石余	237石余	237石余	尼崎藩
(旧生田区)	坂本	291石余	291石余	291石余	尼崎藩
	生田宮	40石余	43石余	43石余	尼崎藩
	北野	180石余(天領のみ)	241石余	241石余	天　領
	宇治野	172石余	173石余	173石余	下総古河藩
	中宮	35石余	35石余	35石余	天　領
	花熊	288石余	294石余	294石余	天　領
	走水	33石余	33石余	33石余	天　領
	二ツ茶屋	67石余	91石余	93石余	天　領
	神戸(上部)	424石余	540石余	543石余	天　領

※中世末の城ヶ口村は神戸村の枝村となる。

たため、周辺の二ツ茶屋村や神戸村は漕運業が盛んに行なわれた。1676(延宝4)年には二ツ茶屋村に10、神戸村に5の廻船問屋があり、18世紀になるとこれらの問屋が二ツ茶屋に57隻、神戸に130隻の廻船を有するに至ったのである。そして、肥料用の下草取りやシバを刈るためこの辺りの農民は六甲山に入り、慶長期以来、六甲山北側の山田村と中一里山をめぐる境界争いがしばしば起こったりもした。

こうした、農村地帯の中央区を当時、東西に街道が走っていた。いわゆる、**西国街道**である。この道は古代・山陽道と呼ばれ、京と九州の大宰府を結ぶ主要幹線道路で、江戸時代になると西国(九州小倉)と畿内を結ぶ道としてにぎわった。この西国街道は京から高槻・箕面・伊丹といった内陸部を進み、西宮付近で海岸に接し、芦屋の打出で二本のルートに分かれた。

すなわち、打出からそのまま平地を結ぶ**本街道**(ここを大名行列が通った)と、海岸沿いに走る**浜街道**(庶民はこちらを利用した)である。この二本の道は中央区で合流し一本となり、西へと進んでいた。つまり、本街道は灘区の岩屋から筒井町と脇浜町の間の道を西に行き、日暮通と吾妻通の間を走り、雲井橋を

【表2】中央区・旧村、幕藩体制下の支配の変遷

筒井	1615(元和1)摂津麻田藩→1616(元和2)旗本領(麻田分家)→1769(明和6)天領→		旧葺合区
熊内	1617(元和3)尼崎藩→1711(宝永8)天領→1712(正徳2)下総古河藩→1769(明和6)天領→		旧葺合区
小野新田	1664(寛文4)頃、生田村より独立→尼崎藩→1769(明和6)天領→		旧葺合区
生田	1617(元和3)尼崎藩→1769(明和6)天領→		旧葺合区
脇浜	1600(慶長4)旗本領→1769(明和6)天領→		旧葺合区
中尾	1617(元和3)尼崎藩→1711(宝永8)天領→1712(正徳2)下総古河藩→1713(正徳3)天領→		旧葺合区
滝寺	1617(元和3)尼崎藩→1711(宝永8)天領→1712(正徳2)下総古河藩→		旧葺合区
中	1617(元和3)尼崎藩→		旧葺合区
坂本	1617(元和3)尼崎藩→		旧生田区
生田宮	1617(元和3)尼崎藩→		旧生田区
北野	1615(元和1)大和小泉藩→1627(寛文4)旗本領→1711(宝永8)天領→		旧生田区
	1617(元和3)尼崎藩→		旧生田区
宇治野	1617(元和3)尼崎藩→1711(宝永8)天領→1711(正徳1)下総古河藩→		旧生田区
中宮	1617(元和3)尼崎藩→1711(宝永8)天領→		旧生田区
花熊	1615(元和1)大和小泉藩→1769(明和6)天領→		旧生田区
走水	1617(元和3)尼崎藩→1769(明和6)天領→		旧生田区
二ツ茶屋	1617(元和3)尼崎藩→1769(明和6)天領→		旧生田区
神戸(上部)	1617(元和3)尼崎藩→1769(明和6)天領→		旧生田区

※「兵庫県大百科事典」「兵庫県地名大辞典」などによる

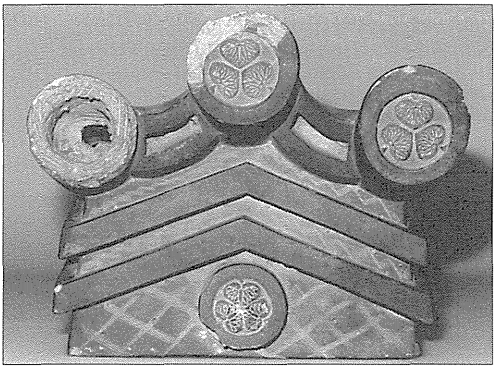
渡り、旭通と雲井通の間のあじさい通商店街を抜けて生田筋まで行き南に下がる。また、浜街道は生田川の小野柄橋を渡り、小野柄通と御幸通の間を進み、三宮センター街を西へと行き、生田筋で本街道と合流した。そして、合流した西国街道は三宮神社の南の筋を走り、元町通を西へと向かっていた。

なお、この元町通には中世末から近世にかけて家が建ち並びはじめたといい、二ツ茶屋村は戦国末期に神戸村の村人が街道に二軒の茶屋を出したことにはじまるという。また、脇浜には旅路の目印となる**一里塚**が置かれた。

江戸幕末

19世紀に入り、幕藩体制の動揺が次第に深まって行く中、外国、特に欧米の資本主義諸国から日本に対する開国の要求が出されるようになった。なかでもアメリカは強行に日本の開国をせまり、1853(嘉永6)年にはペリーが浦賀へ来航して日本に開国を要請した。結局、幕府は翌年の1854(安政1)年に日米和親条約を締結させられ、この中で下田・箱館の二港の開港を認めたため、ここに日本は約200年間続いた鎖国体制にピリオドを打つことになった。

その後、幕府は勅許を得ないまま、1858(安政5)年、日米修好通商

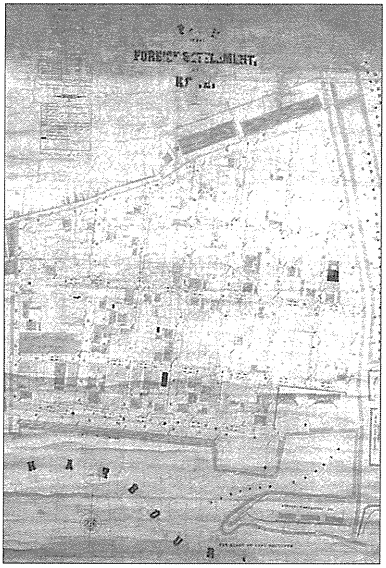

海軍操練所の鬼瓦（神戸市立博物館蔵）

条約を締結し、この中で日本は新たに新潟・神奈川・**兵庫**・長崎の四港を開港することを決めた。この条約は治外法権を認め、関税自主権を持たないという、日本にとって不平等な条約であった（これは明治時代に条約改正という大きな外交問題に発展する）。

こうした中、外国船来航に伴い摂海防備の声が高まり、その視察のため14代将軍徳川家茂（いえもち）が1863（文久3）年4月23日に小野浜に上陸した。この時、**勝海舟**がこれに従い、海舟はこの地に幕府の**海軍操練所**を設置するよう家茂に願い出た。海舟がここに海軍操練所（新港町、史跡編P180参照）を建設しようとしたのは、二ツ茶屋村の**網屋吉兵衛**（あみやきちべえ）（史跡編P182参照）が神戸村安永新田の浜に築いた（1855〈安政2〉年）**船たで場**の設備があったからである。同24日、勝海舟は神戸村海軍所造船所御取建御用並摂海防禦御用を命ぜられている。海軍操練所は1864（元治1）年5月29日に生徒募集を布告して活動を始めたものの、入所者に反幕府派の者がいたことから海舟がその年に解任され、操練所も翌1865（元治2）年3月には閉鎖されてしまった。

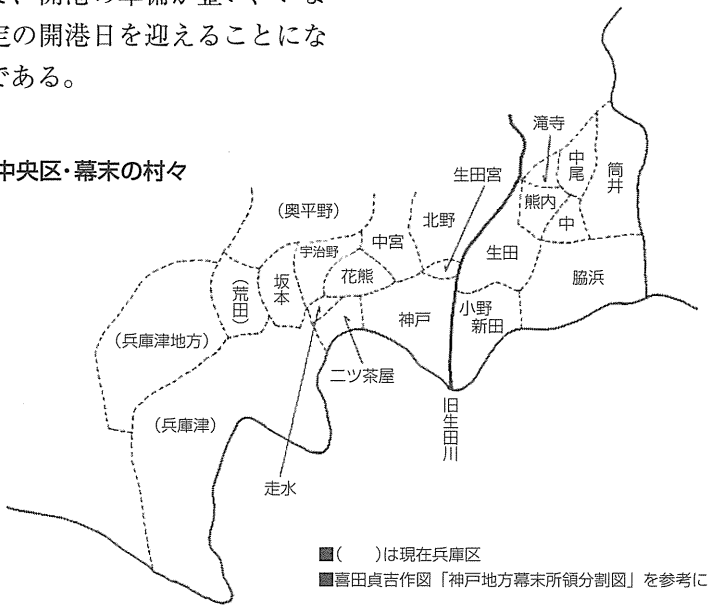
さて、先の修好通商条約の中には兵庫の開港が定められていた。もともと、アメリカはその交渉の中で堺を開港地にあげていたが、古都奈良に近いため、幕府はこの兵庫を開港地にしたのである。幕末のあわただしい動乱の中で、兵庫開港は一時延期されたが、1867（慶応3）年5月に**兵庫開港**の勅許がおり、同年12月7日の開港はさけられなくなった。しかし、兵庫の町の中心にある兵庫港を開港した場合、開港後の外国人とのトラブルが心配され、従って、神戸村小野浜の海軍操練所の地

を開港場とした(以後、「兵庫開港」という言葉は用いず、「**神戸開港**」という言葉を使うことにする)。それに伴い、**運上所**(税関)、**外国人居留地**(東遊園地の西の筋から鯉川筋まで、北は三宮神社の南の筋〈西国街道〉まで、史跡編170参照)の建設が急ピッチで行なわれた。また、居留地予定地のすぐ北を西国街道が走るため、幕府は大名行列と外国人との衝突をおそれ、西国街道の迂回路も建設した(いわゆる、「徳川道」。この道は東灘の石屋川から六甲山に入り、明石の大蔵谷に至る大迂回路であった)。こうして、開港の準備が整い、いよいよ予定の開港日を迎えることになったのである。



神戸外国人居留地設計図(神戸市立博物館蔵)

【図3】中央区・幕末の村々



■(　　)は現在兵庫区
■喜田貞吉作図「神戸地方幕末所領分割図」を参考に作製。

History of kobe Central Area

中央区の歴史 通史編

近・現代

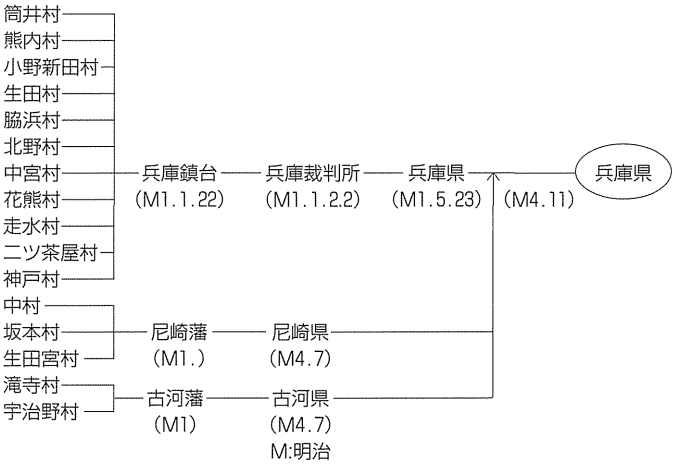
エキゾチックでおしゃれな町・神戸の誕生とそのあゆみ

明治時代・新政府の体制の下で

1867(慶応3)年10月14日、最後の将軍徳川慶喜は大政奉還を行なった。そして、同年12月7日、**ビードロの家**と呼ばれた運上所の建物(海軍操練所のあとに建てられる)を舞台に**神戸港の開港式**が盛大に行なわれた。停泊中の外国船は祝砲を打ち開港を祝い、神戸の港は世界の港としての第一歩を踏み出したのである。ところが、その2日後(12月9日)、王政復古の大号令が出され、幕府は否定され、開港準備に全力をあげてきた幕吏は逃亡してしまった。この王政復古の大号令で天皇を中心とする新政府を樹立することを決め、ここに260余年に及ぶ徳川幕府の支配は崩壊するのであった。

ところで、幕府滅亡後、明治新政府が樹立されてから、開港以前より懸念されていた外国人との衝突事件がこの中央区で起こってしまった。いわゆる**神戸事件**である。この事件は1868(明治1)年1月11日に起こり、三宮神社前の西国街道で居留地の外国人水夫(イギリス人ともフランス人とも言われている)が西宮に警備に向かう備前藩士と衝突したものである。これにより、神戸・兵庫の町は一時外国人の軍隊に占拠されるという事態になり、あわてた明治新政府は1月15日、勅使東久世通禧(ひがしくせみちとみ)を神戸に派遣した。この時、明治政府は王政復古を外国公使に布告する必要を感じており、東久世は事件の処理に入る前に、運上所に外国公使を集め、王政復古を宣言している。つまり、神戸が最初の外交交渉の舞台のなったわけであり、その後神戸事件の交渉に入った東久世は、備前藩の滝善三郎を切腹処分にすることでこの事件を解決するに至ったのである。今、三宮神社(三宮町2丁目、史跡編P166参照)の境内には「史蹟　神戸事件発生地」の碑が建てられている。

【表3】明治維新後の中央区の支配関係



さて、明治政府は外国人居留地の建設を急いだが、来日する外国人の数が多く、住宅不足が顕著となった。そこで、政府は居留地以外に、東は生田川から西は宇治川までの間の雑居を認めたのである。そこで、来日外国人は新たな住環境を求め山の手に住居を建てるようになった。これが今日北野町を中心に中央区の山手一帯に残る**異人館**(史跡編P104・105参照)である。なお、条約が締結されていない中国の人々は、はじめ居留地に住むことを許されず、その近辺に住んでいたが、これが**南京町**(史跡編P174参照)となるのであった。

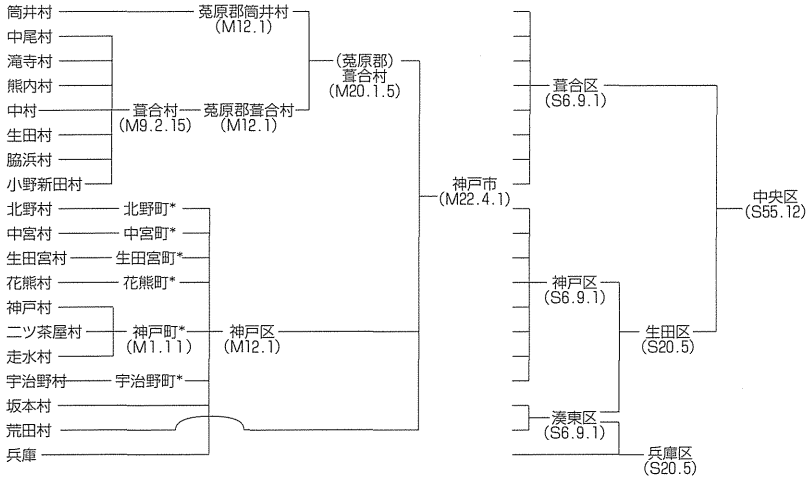
幕府が滅亡し、明治新政府になって中央区の行政はどうなったのであろう(【表3】参照)。中央区にある村々のうち、幕府直轄領である天領以外の村々はそのまま各藩の支配下にあった。すなわち、中、坂本、生田宮の村々は尼崎藩が、また、滝寺、宇治野の両村は下総古河藩が支配していたのである。それ以外のもともと天領であった村々は明治政府の支配下に移ることになる。つまり、筒井、熊内、小野新田、生田、脇浜、北野、中宮、花熊、走水、二ツ茶屋、神戸といった旧天領の村々

は、1868(明治1)年1月22日に明治政府が設置した兵庫鎮台の支配下に入った。なおこの時、鎮台は現在の兵庫区切戸町に置かれた。そして、兵庫鎮台は2月2日に兵庫裁判所と改称される。さらに、同年4月に官制がかわり府県藩の三治制にしたため、兵庫裁判所は廃され、代って**兵庫県**が5月23日に設置されることになった。この時、後に初代総理大臣となる**伊藤博文**が初代兵庫県知事に任命され、切戸町の事務所が**兵庫県庁**となった。なお、その年の9月、県庁は現在の神戸地方裁判所(橘通2丁目)の位置に移っている(県庁が現在地に移るのは1902〈明治35〉年5月25日のこと)。

その後、明治政府は欧米列強と肩を並べるためには中央集権制を樹立せねばならぬと思い、まず1869(明治2)年に版籍奉還を、続いて1871(明治4)年には廃藩置県を断行したのである。このため、これまで中央区のいくつかの村々を支配していた尼崎藩と古河藩は廃され、代って同年7月14日には、それぞれ尼崎県(中、坂本、生田宮の 三村)、古河県(滝寺、宇治野の両村)の一部となった。従って、すでに設置されていた兵庫県とともに、中央区は尼崎県、古河県と三県に分割して統治されることになる。しかし、こうした三県に分かれた体制もその年の終わりにはピリオドを打つ。すなわち、11月20日には尼崎、古河の両県は兵庫県に吸収されることになり、ここに中央区は兵庫県の一画として、県令神田孝平の支配の下に置かれることになったのである。

さて、明治維新後、中央区の村々は統合が進んで行く(【表4】参照)。まず、1868(明治1)年11月に神戸、二ツ茶屋、走水の三村が合併し**神戸町**となる。そして、北野、中宮、生田宮、花熊、宇治野の村々は、1872(明治5)年8月にそれぞれ村を町に改称している。さらに中尾、滝寺、熊内、中、生田、脇浜、小野新田の七村が合併し、1876(明治9)年2月15日に**葺合村**となる。こうした中、政府は1878(明治11)年7月、郡区町村編制法を制定する。この法律により(兵庫県はこの法律で1区33郡に区画される)、翌年の1月、神戸町と北野、中宮、生田宮、花熊、宇治野の各町(以上は1874年に**神戸区**と呼ばれるようになる)、坂本村、兵庫津を一つとし、神戸区が設置され、北長狭通4丁目

【表4】旧村から中央区誕生までの変遷



＊明治5年8月改称/M:明治、S:昭和
「兵庫県大百科事典」「兵庫県地名大辞典」「兵庫県市町村合併史」などによる

(旧県庁舎の南)に区役所が置かれた(後に区役所は相生町1丁目の職業安定所の位置に移る)。また、同時に葺合村と筒井村は菟原郡(芦屋の精道村から葺合村まで)に組み入れられることになる。なお、葺合村と筒井村は1887(明治20)年10月5日に合併し、菟原郡葺合村になった。

さらに政府は1888(明治21)年に市制町村制を公布し翌年施行させた。これによって、1889(明治22)年4月1日に神戸区と荒田村、葺合村が一つとなり、現在の中央区の前身とも言える**神戸市**がここに誕生することになる。この時の人口13万5000人であった。そして、初代市長に鳴滝幸恭を選び、相生町の神戸区役所を神戸市役所に改め(6月21日)、神戸市の事務が開始するに至ったのである(市役所はその後、1909〈明治42〉年に現在の神戸地方検察庁の場所に移転、史跡編P195参照)。

明治時代の産業・交通・教育

明治時代の初期、政府は富国強兵・殖産興業をスローガンに西欧

初代神戸市役所
(「区誌生田いまむかし」P124より)

2代目神戸市役所
(「区誌生田いまむかし」P124より)

列強と肩を並べる強国をつくるための政策を進めていた。鉄道敷設はその一つである。1874(明治7)年5月11日、全国二番目の鉄道が神戸・大阪間に開通した。中央区には起点の**神戸駅**(史跡編P83参照)と**三ノ宮駅**が置かれた。なお、東海道本線が全通し東京(新橋)・神戸間が鉄道で結ばれるのは1889(明治22)年のことである。

一方、私鉄では**山陽鉄道**(後の山陽本線)が1888(明治21)年に兵庫駅を起点に開業し、翌年神戸駅に接続されている。そして、1905(明治38)年には**阪神電気鉄道**が三宮・出入橋(大阪)間で開業、**市電**の前身である神戸電気鉄道(**街電**)が1910(明治43)年に吾妻通4丁目から浜崎4丁目までの間(12km)で開通、さらに阪神急行電鉄(**阪急**)が1909(大正9)年に上筒井・大阪間で開業している。

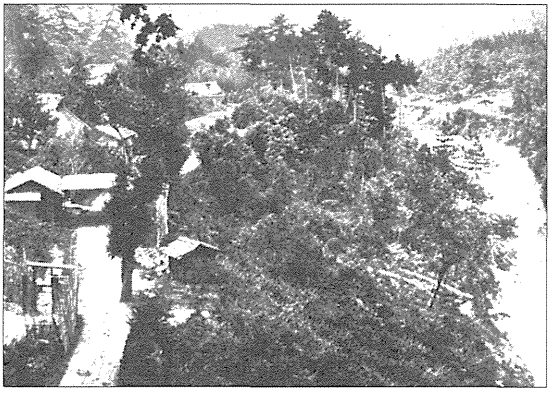
また、現在の中央区を中心に、明治期の神戸の産業が繁栄していった。例えば、**川崎正蔵**(史跡編P92・204参照)が**川崎造船所**を今の東川崎町につくったのが1886(明治19)年であり、神戸製鋼所の前身である**小林製鋼所**が設立されたのが1896(明

治29)年のことである。また、明治後期から大正にかけて、当時の三井、三菱の財閥と肩を並べた商事会社である**鈴木商店**(本店が現在の郵便貯金兵庫センターの場所にあった、史跡編P179参照)が設立されたのが1887(明治20)年である。

当時、中央区を流れていた二つの大きな川である**生田川**(史跡編P90参照)と**湊川**が明治時代に付け替えられることになる。生田川はもともと現在のフラワーロードを流れており、菟原郡と八部郡の境界であった。普段はほとんど水のないこの川も、いったん大雨が降るとたちまちあふれ、堤防が切れ水浸しになった。この被害を除くため、新神戸駅付近からまっすぐ南下し海岸へ流れる流路を付けることになり、加納宗七がこの工事を請け負った。1871(明治4)年のことである。なお、埋め立てられた川につくられた町が加納町で、この名は加納宗七にちなんでいる。

一方、東川崎町一帯の扇状地を形成してきた湊川は1896(明治29)年の大水害による湊川堤防大決壊をきっかけに改修工事が具体化し、同年から1901(明治34)年にかけて付替工事が行なわれた。結局湊川は長田の苅藻川に合流させることになったのである。

日清戦争(1894年)、日露戦争(1904年)を経て、日本経済は膨張し、神戸でも明治末のこの時期から大正にかけて市街地が東西に延びてい



加納町付近を流れる旧生田川(明治3年頃)
(「区誌生田いまむかし」P66より)

埋立工事中の湊川(東川崎町より上流を望む)
(「区誌生田いまむかし」P69より)

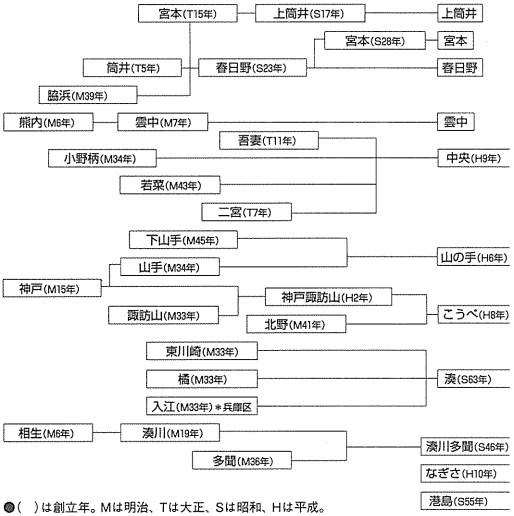
る。日露戦争の戦勝ムードの中、最初の**ブラジル移民**を乗せて笠戸丸が神戸港を出航したのが1908(明治41)年であった(史跡編P150・184参照)。また、**神戸築港**が1907(明治40)年に始まり、1921(大正10)年に終り、第一突堤から第四突堤までが完成している。

教育面に目を向ければ、明治政府は近代化政策の一環として国民教育を重視し、1872(明治5)年に学制を公布した。これにもとづき、全国に**小学校**が設立されることになったわけだが、中央区内ではこれを受け、1873(明治6)年、葺合地域に熊内小学校(現在の雲中小学校)、生田地域に相生小学校(のち、湊川小学校と改称〈のち、「みなとがわ」と読みを変更〉。現在の湊川多聞小学校の前身)が設立されることになった。

大正時代

明治から大正へと世の中が移り変わる頃、政府では桂太郎と西園寺公望が交互に首相につくという桂園時代が訪れた。しかし、軍部や藩閥などをうしろだてとした桂太郎は世間の非難をあび、1913(大正2)年の大正政変で打倒された。この大正政変の余波はこの中央区にも飛び火し、桂を支持した代議士小寺謙吉の邸宅(現**相楽**

■中央区の小学校の変遷　神戸市教育史より



●(　)は創立年。Mは明治、Tは大正、Sは昭和、Hは平成。

園、史跡編P149参照)に群集が押し掛けるという騒動事件が起こった。

こうした中、ヨーロッパでは1914(大正3)年から第一次世界大戦が勃発している。日本も日英同盟を切札にこの戦いに参戦したが、戦場が日本からはるか離れたヨーロッパであったため、日本本土にほとんど被害はなかった。逆に日本はヨーロッパへの物資供給のために史上空前の大戦景気に酔うことになる。この大戦景気で海運ブームが巻き起こり、神戸でも勝田銀次郎(勝田汽船)、山下亀三郎(山下汽船)、内田信也(内田汽船)などの**船成金**が出現、また、中央区に本店をもつ鈴木商店(史跡編P176参照)は、番頭金子直吉の手腕でこの時おおいに繁盛したのであった。

しかしこのような大戦景気の中で、米価は低迷を続け、減産などで米不足の様相を呈していた。このため成金達がこぞって米の買い占めを行ない、一般庶民に入る米が底をつくという有様であった。そして、とうとう1918(大正7)年、富山県で漁村の主婦が越中女一揆をおこし米騒動へと拡がっていった。中央区でも同年8月12日、民衆は買い占めを噂された鈴木商店の本店に焼打ちをかけ、警備の軍隊との衝突を起こしている。なお、この米騒動の経験から生活必需品を安く提供できる市営小売市場の設置を考え、同年11月には**東部公設市場**(のち生田川公設市場と改称、旭通1丁目地先)などを開いたのである。

さて、大戦後、戦中の大戦景気も下火となり、ついには不況の道へと進むことになる。そして、大戦中は一大ブームを築いた造船業も前途が危ぶまれるようになってきた。経営者は人員整理などで乗り切ろうとしたが、労働者側がこれに反発し、1921(大正10)年には中央区の川崎造船所や三菱造船所などの労働者約3万人が**労働大争議**を起こした。この大争議は45日間の長期に渡り、中央区を中心に全神戸をその渦中へと巻き込んだのである。

1923(大正13)年9月1日、関東大震災が起こり、日本の政治・経済に様々な混乱を巻き起こした。そのため、この震災で壊滅状態に陥った横浜港にかわり、神戸港が急浮上してくる。そして、神戸港は新たに生糸輸出港としての性格を持つようになり、国指定の重要港湾とな

ったのである。しかし、この大震災の被災地で震災手形が振出され、その処理問題をめぐって1927(昭和2)年に金融恐慌が起こってしまった。この時、台湾銀行の鈴木商店への不良貸付が発覚し、これが原因で一時は三井三菱を追い抜く勢いをみせた鈴木商店もあっけなく倒産してしまうという結果になる。

昭和時代・戦前

満州事変の勃発した年である1931(昭和6)年の9月1日、神戸市は**区制**を実施している。この時、神戸に八つの区(東から灘・葺合・神戸・湊東(そうとう)・湊・兵庫・林田・須磨)が誕生した。このうち現在の中央区に相当する部分は**葺合区・神戸区・湊東区**の一部である(【表4】参照)。まず葺合区は神戸市誕生以前の旧菟原郡葺合村がその区域にあたり、区役所を国香通3丁目に置いた。そして、神戸区は神戸市誕生以前の旧神戸区のうち北野町、中宮町、生田宮町、花熊町、神戸町、宇治野町がその区域にあたり、区役所を下山手通5丁目に置いた。また、湊東区は旧坂本村と旧荒田村がその区域にあたり、区役所を多聞通4丁目に置いた。こうして、神戸市は区制を実施し、それぞれの区で業務が開始されたのである。また、区制実施後の1933(昭和8)年11月に、神戸港の繁栄を願って、第一回**「みなとの祭」**が開催され、「こうべみなとは街から街へ」ではじまるこの時の主題歌『みなと音頭』はその後市民に歌い継がれていった。

この頃から日本は軍国主義化の波が激しくなり、この中央区においても軍国主義の影響は押し寄せていた。そうした中、1938(昭和13)年7月に**阪神大水害**がこのあたりを襲い、中央区でも生田川や宇治川などが氾濫し、多くの被害を出した。結局、この水害による被害は死者は616人、負傷者1011人、被害総額1億4399万円という大きなものであった。

阪神大水害の翌年(1939年)、ドイツがポーランドに侵攻したことから第二次世界大戦がはじまり、1941(昭和16)年12月8日には日本が真珠湾を奇襲攻撃したことによって太平洋戦争が勃発するに至った。中央区では阪神大水害の被害に加え、こうした戦争によって人々は苦しい生活を強いられることになった。

阪神大水害・昭和13年7月5日、多聞通、裁判所を望む
（資料提供/東灘区・道谷陽一氏）

そして、1945（昭和20）年に入るとこのあたりは激しい空襲にみまわれることになる。3月17日、米軍のB29による夜間**大空襲**は無差別爆撃であり、これによって中央区内では兵庫県庁、神戸地方裁判所、葺合、湊東の区役所などが焼失し、三菱神戸造船所、川崎重工の工場施設なども大きな被害を受けた。

このような中、神戸市は同年5月に区制を改正し6区（灘・葺合・生田・兵庫・長田・須磨）としている。現在の中央区では、神戸区と湊東区のうち旧坂本村の部分が合併し**生田区**となり、旧神戸区役所の庁舎を生田区役所とした（【表4】参照）。ここに、現在の中央区は**葺合区**・生田区という二区体制になったのである。

昭和20年3月17日の大空襲・旧生田区西部、諏訪山より見る
（「区誌生田いまむかし」P118より）

さて、その後も戦禍はより激しいものとなり、同年6月5日の大空襲は3月17日の空襲をはるかに上回るものであり、区役所はすべて焼かれ、

神戸市の中でも葺合区、生田区が最も被害を出し、死者の数も他を圧倒した。この時の神戸市の被害は、死者3184人、重軽傷者5824人で、焼けだされた人は47万人にもおよぶという。こうした戦争も同年8月15日、日本がポツダム宣言を受諾し、無条件降伏したため終焉をむかえたのである。

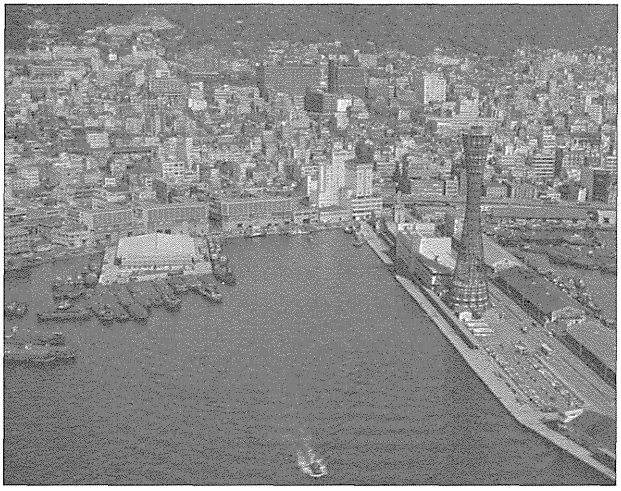
昭和時代・戦後

太平洋戦争で多くの被害を出した中央区は、町の復興で戦後の歴史がはじまった。復興が進むなか、葺合区は新庁舎を旗塚通4丁目(現葺合文化センター)に、生田区は新庁舎を中山手通6丁目(現県生田庁舎)に、それぞれ1949(昭和24)年に完成させ業務を開始した。

さて、明治末から大正にかけて神戸港の築港により、その中心が西から東へ移るにつれて、中央区の繁華街も西から東へと移っていった。戦前は兵庫区の新開地や神戸駅周辺から元町通が賑わっていたが、戦後は市役所の三宮移転(1957〈昭和32〉年に新市庁舎が現在の場所に完成)などで三宮センター街から三ノ宮駅周辺にかけての地域にその繁栄を奪われてしまった。これは旧国鉄の神戸駅と三ノ宮駅の乗降客数に顕著にあらわれており、戦前は神戸駅の方が乗降客数が多かったものの戦後それも逆転し、現在では特急・急行などの優等列車は大部分が神戸駅でなく三ノ宮駅に停車している。

また、戦後の復興とともに文化施設の整備もなされ、中央区では1949(昭和24)年に大倉山の市立図書館が再開され、1951(昭和26)年には南蛮美術館(熊内1丁目、現文書館)(史跡編P66参照)が開設されている。

戦後、現在の中央区域には大きなビルや建物が建ち並ぶようになり、まさに神戸の経済・産業の中心としての機能を担うようになる。1963(昭和38)年には神戸開港90周年を記念して中突堤に**ポートタワー**(史跡編P182参照)が完成した。東京オリンピックの翌年、1965(昭和40)年には神戸に初めての地下街、**さんちかタウン**(現・さんちか)がオープンし、当時一世を風靡した和田弘とマヒナスターズがそのテーマ曲「サンティカ・デ・ラマンテ」を唄うなど、初めての地下の街に市民の大きな期待が寄せられていたことがう



昭和40年代・中突堤とポートタワー(「区誌生田いまむかし」P14より)

かがえる。翌1966(昭和41)年、中央区の沖合に神戸初の人工島・**ポートアイランド**(史跡編P186参照)の工事が起工された。1968(昭和43)年には阪急・阪神・山陽・神戸の4私鉄を結ぶ**神戸高速鉄道**が開業している。翌1969(昭和44)年には当時として神戸で最も高いビル・**貿易センタービル**が完成している。1972(昭和47)年、布引に新幹線**新神戸駅**が開業し、神戸の町に新幹線がとまるようになった。1975(昭和50)年、神戸市政の窓口である**インフォメーションこうべ**がさんちかタウンにオープンしたが、市政窓口を地下の繁華街に設置するのは全国でも初めての試みであり注目された。1977(昭和52)年、テレビドラマの舞台となった北野町の異人館(史跡編P104参照)に観光客が押しよせ、異人館ブームがおこったのはこの年である。

さて、現在の中央区にあたる旧葺合区と旧生田区は戦後の復興とともに、人口も順調に増えてきたが、1960(昭和35)年の約17万8000人をピークに以後はその人口も減少の一途をたどっていった。昼間は経済・産業の中心であるこの街も夜間の定住人口が減り、典型的な都心部の過疎化現象が起こったのである。そこで、神戸市行政区再編成審議会は1971(昭和46)年に葺合・生田の両区

を一つの区に統合する方針を打ち出し、地元住民の協力をもとめた。1978(昭和53)年には両区内各地で合区に関する説明会が開かれ、さらに同年合区問題協議会を設置し具体的な合区作業へと入っていった。こうした結果、葺合区と生田区は1980(昭和55)年12月1日に一つの統合された区に生まれかわり、ここに神戸市**中央区**が誕生したのである(合区は区制を敷く政令指定都市の中で、戦後初めてのことだった)。区役所は雲井通5丁目の現在の場所に設置され、区の業務が開始されることになった。また、それまでの旧葺合区役所は葺合文化センターとして、旧生田区役所は県生田庁舎として利用されることが決まったのである。なお、区名である「中央」という名は全市公募の結果の第一位の名称であり、この公募結果をうけた合区問題協議会が、葺合・生田両区が市の玄関口であるとともに経済・交通などの面でも中核的存在であることから「中央」という名がふさわしいとしたため、決定した区名である。

こうして中央区が誕生したわけであるが、その翌年1981(昭和56)年には中央区沖合のポートアイランドが完成し、港島と三宮が新交通システム・**ポートライナー**によって結ばれた。また、ポートアイランドの完成を記念して**ポートピア'81**が開催され多くの人が会場に足を運んだ。1982(昭和57)年、南蛮美術館と考古館を統合する形で、旧居留地に**神戸市立博物館**(カラー頁P133・通史編P171参照)が開館した。1983(昭和58)年には大倉山・新長田間に**市営地下鉄**が開通し、現在では西区の

第111号 昭和54年11月 ふきあい 区だより
ポートピア'81
新区名は中央区に
市議会で区設置条例一部改正案を可決
新区誕生は55年12月
合区協が意見具申
区名公募結果
生田川以西の住居表示も同時実施

ふきあい区だより111号

新区名応募結果「昭和54年6月公募」

応募の多かった区名				備考
中央	神戸	布引	みなと	応募総数
港	南	生合	扇港	10,227通
生田	新港	摩耶	新生	
中	神港	葺合	港都	応募種類
三宮	湊	新神戸	緑	825種

西神中央から北区の谷上駅までが一本の線で結ばれている。1985(昭和60)年、国際青年年のこの年、大学生のオリンピックとして知られているユニバーシアード神戸大会が開かれ、中央区内でも多くの競技が行なわれた。中央区の花が**ペチュニア**に決まった1987(昭和62)年にメリケンパークがオープンし、神戸海洋博物館が開館した。

平成時代・震災前

昭和から平成へと時代が移ったちょうどその年、1989(平成1)年は神戸市制百年という節目の年になり、中央区でも市制百周年の記念行事が開催され、また、この年フェスピック神戸大会も開催されている。翌1990(平成2)年は中央区が発足してちょうど十年という節目の年となり、中央区にとっては二年続きで大きな節目の年を迎えたわけである。中央区誕生十周年記念式典を開催し、記念誌『**中央区歴史物語**』を刊行、同誌はその後、区民をはじめ多くの人々に親しまれることになった。1991(平成3)年には**布引ハーブ園**がオープンし、同時に**新神戸ロープウェー**(神戸夢風船)が運行を開始した。1985(昭和60)年に起工した**ハーバーランド**が1992(平成4)年に完成、街びらきを行なった。1993(平成5)年には、神戸市内の至る所が会場という新しい試みの**アーバンリゾートフェア神戸'93**が開かれ、中央区でも様々な催しに多くの人々が参加

KITANO(北野から見た景色)

©THOMAS McKNIGHT

した。1994(平成6)年になると、関西国際空港の開港にともない、神戸と空港の海上アクセス、神戸マリンルートが誕生し、ポートアイランド二期工事の区域にK-CAT(神戸シティエアーターミナル)がオープン、関西空港の神戸の玄関としての役割を果たすことになった。

このように中央区は行政・経済の中枢を担う街として発展し、また、中央区は三宮東再開発、ポートアイランドの第二期工事や神戸沖空港の計画、地下鉄新線の建設、神戸港の整備など大きなプロジェクトを推進し、未来へ向けてのまちづくりを進めていこうとしていた。しかし、そうした未来のまちづくりや区民の生活を瞬時に打ち砕く出来事が起きてしまった。1995(平成7)年1月17日午前5時46分、百五十万都市・神戸を襲った**阪神・淡路大震災**(兵庫県南部地震)である。戦後最大の惨事となったこの地震は、淡路島北部を震源とし、震源の深さ16km、マグニチュード7.3(推定)、最大震度7を記録する大都市直下型のものであった。わずか数十秒の揺れが多くの大切な生命を奪い、これまで築いてきたものを破壊し、近代都市を

「阪神・淡路大震災当日の中央区内」
5階部分が押しつぶされた交通センタービル

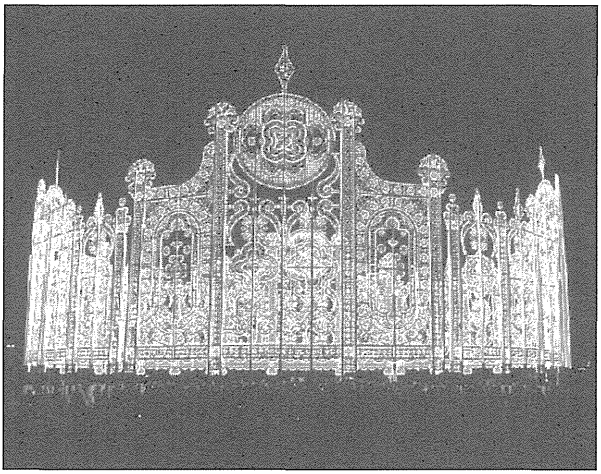
壊滅状態にまで追いやってしまった。三宮周辺から葺合南部のかけての震度7地域を含む中央区でも244人(神戸市全市では4571人)が亡くなり、建物も6409棟が全壊全焼(神戸市全市では74386棟が全壊全焼)、避難者数も最大で90ケ所・39090人(神戸市全市では599ケ所・236899人)を数えた。電気・ガス・水道といったライフラインはすべて切断され、また、中央区内の鉄道もすべて寸断され、被災した人々は、苦しい生活を強いられることになったのである。中央区では同年2月に区内で最初の仮設住宅が脇浜に設置された。そして、同年3月5日には神戸市合同慰霊祭が、神戸文化ホールで行なわ

れ、数多くの参列者が震災で犠牲となった多くの人々の冥福を祈った。大都市を突如として襲い、その機能を完全にマヒさせ、多くの犠牲者や被災者を出した阪神・淡路大震災、この1995(平成7)年1月17日午前5時46分に起こった出来事を、我々は決して忘れはしないし、また、風化させてはいけないのである。

平成時代・震災後

阪神・淡路大震災で壊滅的被害を受けた中央区も震災から時が経つにつれて、倒壊した建物の後に新たに建物が建ち始め、急ピッチで復旧・復興が進んでいった。

震災の年(1995年)の12月、震災で犠牲になった方々への鎮魂と復興の希望を込めて第一回**神戸ルミナリエ**が旧外国人居留地を会場に開催された。光の芸術とも言えるこのルミナリエは、訪れた多くの人々に感銘を与えた。そして、このルミナリエは、今日まで神戸の年末の風物詩として毎年開催されているのである。震災からちょうど1年たった1996(平成8)年1月17日、『中央区歴史物語』が震災の記録誌としての意味をも含めて改訂され、書名も新たに**『新・中央区歴史物語』**として刊行された。1997(平成9)年7月にはメリケンパークに、震災による港の被



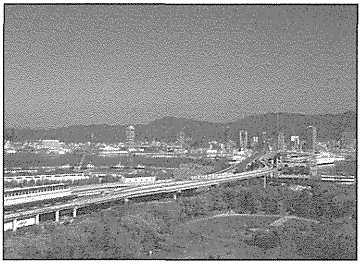
©Valerio Festi/I&F Inc./kobe Luminarie O.C.

HAT神戸全景

災状況をそのまま後世に伝える施設として「神戸港震災メモリアルパーク」(史跡編P183・213参照)が完成した。中央区と灘区にまたがる臨海エリアに、神戸市復興計画のシンボルプロジェクトとして整備されていた東部新都心・**HAT神戸**(史跡編P78参照)が1998(平成10)年3月に完成・街びらきを行い、同年7月には北野小学校の跡地を利用して**「北野工房のまち」**(史跡編P109参照)がオープンし北野地域のあらたな観光スポットの仲間入りをした。1999(平成11)年11月には、市街地の公園やポートアイランドに建設されていた区内の仮設住宅(ピーク時には3796戸建設)が完全に解消され、震災の爪痕の一つが消えることにな

った。震災から5年が経過した2000(平成12)年は中央区発足20周年という節目の年で記念式典が開催され、また、この年には葺合消防署と生田消防署が統合され小野柄小学校跡地に新たに中央消防署が設立された。翌2001(平成13)年7月には、三宮・花時計前駅と新長田駅の間でインナーシティー活性化のリーディングプロジェクト、**地下鉄海岸線・夢かもめ**が開業、震災で特に大きな

被害を受けた中央区から兵庫区・長田区の海岸部の沿線住民の活性化の促進が期待されている。さらに、ポートアイランド二期の沖合には2006(平成18)年2月16日開港をめざして、神戸空港の建設が急ピッチで進んでいる。



このように先史時代から現代まで中央区の歴史を振り返ってみたわけであるが、阪神・淡路大震災を経験した中央区は今、安全で住みやすい都心をめざして新たなまちづくりを進めていこうとしている。我々が歴史を振り返るのは単に過去を解明するという点だけにあるのではない。むしろ、解明された過去を未来にどう役立てるかが重要なのである。そういう意味においては、我々は昔神戸でも大きな地震が起こっていて大きな被害が出たという過去の事実を真摯に受けとめてこなかったし、また、いつの頃からか生じた神戸は地震が起こらないという神話を信じてきたということを大いに反省する必要があろう。こうした反省の上に今一度過去の歴史を振り返り、現状を把握し、こうして振り返った歴史を踏み台にして、我々はよりよい中央区の未来を創って行く努力をしていかなければならないのである。

地下鉄海岸線・夢かもめ

年表で見る中央区と日本の歴史

先史・古代	中央区の歴史	先史・古代	日本の歴史
更新世 (200万年前-1万年前)		約200万年前	●更新世の日本 (明石人・岩宿遺跡の発見)
		約1万年前	●日本列島の形成
縄文時代	●宇治川南遺跡・雲井遺跡		●縄文時代
(1万年前-B.C.3・2世紀)		B.C.3・2世紀	
弥生時代	●布引丸山遺跡・雲井遺跡・宇治川	0	●弥生時代
(B.C.3・2世紀-2・3世紀)	南遺跡・旧三ノ宮駅構内遺跡・熊	57	●倭の奴国王、後漢の光武帝より
	内遺跡		金印を授かる
		239	●卑弥呼が魏に遣使
古墳時代	●(前)今のところなし	4世紀中頃	●大和政権が国土を統一
(3世紀後半-7・8世紀世紀)	●(中)脇浜乙女塚	478	●倭王武(雄略天皇)の上表文
	●(後)割塚古墳・中宮古墳・三本	538	●仏教公伝
	松古墳・畔塚　・旗塚・大塚・	562	●任那の滅亡
	城ケ口古墳・黄金塚・氷雨	603	●冠位十二階
	塚・馬塚・姫　塚・化粧塚・差	604	●十七条憲法
	方塚	607	●小野妹子を隋に派遣(遣隋使)
大和政権の	●布敷首(旧葺合区一帯)・生田首・	645(大化1)	●大化改新
国土統一期	(旧生田区一帯)などの豪族が中	663	●白村江の戦い
	央区を支配	672	●壬申の乱
	●夙川から生田川までを摂津国菟	701(大宝1)年	●大宝律令
	原郡、生田川から須磨までを八	710(和銅3)年	●平城京遷都
	部郡と称する	794(延暦13)年	●平安京遷都
	●式内社として生田神社が記載	927(延長5)年	●延喜式(律令の施行細則)完成
		11世紀	●藤原氏全盛時代(道長・頼通)
1120(保安1)年	●『摂津国大計帳』に菟原郡437戸	1086(応徳3)年	●白河上皇、院政開始
	15,695人、八部郡597戸22,145人	1156(保元1)年	●保元の乱
	とある	1159(平治1)年	●平治の乱→平氏政権へ
中世		中世	
	●平清盛が福原荘(中央区西部か	1167(仁安2)年	●平清盛、太政大臣になる
	ら兵庫区平野にかけて)を好み、		
	大輪田ノ泊を改修		
		1180(治承4)年	●以仁王、平氏追討の令旨(源頼政挙兵)
			●福原京遷都(神戸が日本の首都に)
			●源頼朝、伊豆で挙兵
			●源義仲、木曽で挙兵
		1180(治承4)年	●平清盛没
		1183(寿永2)年	●平氏都落ち、源義仲入京
1184(寿永3)年	●2月7日源範頼と平知盛が生田の	1184(寿永3)年	●一ノ谷の戦い
	森で戦う		
		1185(文治1)年	●屋島の戦い
			●壇の浦の戦い→平氏滅亡
			●守護・地頭の設置

先史・古代	中央区の歴史	先史・古代	日本の歴史
鎌倉時代	●この頃、中央区に福原荘、輪田荘、葺屋荘が成立	1192(建久3)年	●源頼朝、征夷大将軍となり鎌倉幕府を開く
		1219(承久1)年	●源実朝暗殺→執権北条氏が実権を握る
		1221(承久3)年	●承久の変→公武二重支配の解消
		1232(貞永1)年	●御成敗式目制定
		1274(文永11)年	●文永の役 元寇
		1281(弘安4)年	●弘安の役
		1297(永仁5)年	●永仁の徳政令
		1324(正中1)年	●正中の変
		1331(元弘1)年	●元弘の変
			(後醍醐天皇、隠岐へ流される)
1332(元弘2)年	●『増鏡』に流される天皇が布引の滝を見る箇所がある		
		1333(元弘3)年	●鎌倉幕府滅亡
		1334(建武1)年	●建武中興
		1335(建武2)年	●中先代の乱
1336(延弘1)年	●打出合戦(尊氏敗北)	1336(延元1)年	●湊川の戦い(足利尊氏V.S.楠木正成)
	●湊川で楠木正成が一族28人とともに自刃		●建武式目
	●赤松範資が摂津国守護になり中央区を支配	1338(延元3)年	●足利尊氏、征夷大将軍となり室町幕府を開く
	●範資、再度山上に多々部城築く		
		1350(正平5)年	●観応の擾乱(尊氏V.S.直義)
		1351(正平6)年	●打出・御影浜の戦い
1378(天授4)年	●細川頼基が摂津国守護になり中央区を支配		
		1392(元中9)年	●南北朝合一
	●歴代の将軍が明船見たさに中央区を通り、兵庫津へ	1404(応永11)年	●日明貿易開始
		1441(嘉吉1)年	●嘉吉の乱(六代義教暗殺)
		1467(応仁1)年	●応仁の乱はじまる
		1485(文明11)年	●山城の国一揆
		1488(長享2)年	●加賀一向一揆
		1543(天文12)年	●鉄砲が種子島に伝来
			(ポルトガル船による)
1544(天文13)年	●三好長慶が細川氏を討ち摂津国を支配する		
		1549(天文18)年	●ザビエルが来日しキリスト教を伝える
1556(弘治2)年	●松永久秀が主君三好長慶を滝山城に招く		
1564(永禄7)年	●三好長慶から松永久秀に支配がかわる		

年表で見る中央区と日本の歴史

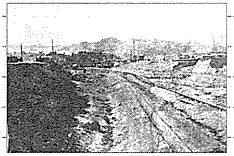
近世	中央区の歴史	近世	日本の歴史
16世紀後半	●荒木村重(伊丹城を本拠)が摂津守として中央区一帯を支配	1560(永禄3)年	●桶狭間の戦いで織田信長が今川義元をやぶる
		1573(天正1)年	●室町幕府滅亡(将軍義昭を追放)
1574(天正2)年	●荒木村重が花熊城を築く		
		1575(天正3)年	●長篠の戦い(信長が鉄砲を使用武田勝頼をやぶる)
1578(天正6)年	●荒木村重、信長に対して謀叛		
1580(天正8)年	●花熊城落城し、中央区一帯は池田信輝の支配となる		
		1582(天正10)年	●本能寺の変(信長自害)山崎の合戦で豊臣秀吉が明智光秀をやぶる
			●太閤検地はじまる
1583(天正11)年	●中央区ほぼ全域が豊臣領となる		
		1590(天正18)年	●秀吉、天下統一
1596(慶長1)年	●慶長の大地震		
	●関ケ原の戦い以後、片桐且元(茨木城主)が中央区を支配	1600(慶長5)年	●関ケ原の戦い(徳川家康が石田三成をやぶる)
		1603(慶長8)年	●徳川家康、征夷大将軍となり江戸幕府を開く
		1614(慶長19)年	●大坂冬の陣
		1615(元和1)年	●大坂夏の陣→豊臣氏滅亡
			●武家諸法度、禁中並公家諸法度制定
1617(元和3)年	●中央区は尼崎藩主戸田氏鉄の所領となる(5万石)		
1635(明正12)年	●青山幸成が尼崎藩主となり中央区支配(以下3代青山氏、5万石)	1635(明正12)年	●武家諸法度改正(参勤交代制確立)
		1637(寛永14)年	●島原の乱
		1639(寛永16)年	●鎖国の完成(ポルトガル船の来航禁止)
		1687(貞享4)年	●生類憐れみの令を出す(徳川綱吉)
1692(元禄5)年	●徳川光圀が楠木正成の墓碑を湊川に建てる		
		1709(宝永6)年	●正徳の治(～1715)
1711(正徳1)年	●松平忠喬が尼崎藩主となり中央区支配(以下6代松平氏、5万石)		
		1716(享保1)年	●享保の改革(徳川吉宗、～1745)
		1767(明和4)年	●田沼時代(田沼意次、～1786)
1769(明和6)年	●明和6年の上ヶ地令		
	大部分が尼崎藩領であった中央区はほぼ天領となる	1787(天明7)年	●寛政の改革(松平定信、～1793)
		1793(寛政5)年	●大御所時代(徳川家斉、～1841)
		1841(天保12)年	●天保の改革(水野忠邦、～1843)
		1854(安政1)年	●日米和親条約→鎖国の終わり

先史・古代	中央区の歴史	先史・古代	日本の歴史
1855(安政2)年	●網屋吉兵衛が神戸村に船たで場をつくる		
		1858(安政5)年	●日米修好通商条約→兵庫開港を決定
1863(文久3)年	●将軍徳川家茂が小野浜に上陸		
1864(元治1)年	●勝海舟が海軍操練所を開く(翌年閉鎖)		
		1866(慶応2)年	●薩長同盟
1867(慶応3)年	●兵庫開港→もと海軍操練所の地を開港場とし運上所を置く	1867(慶応3)年	●大政奉還(徳川慶喜) ●王政復古の大号令→江戸幕府滅亡
近・現代		近・現代	
1868(明治1)年	●旧天領の村々兵庫鎮台から兵庫裁判所、そして兵庫県となり初代知事に伊藤博文がなる ●その他の村々尼崎藩・古河藩がそのまま支配 ●神戸事件起こる ▸備前藩士滝善三郎切腹 ●居留地工事竣工 ●三村が合併し神戸町誕生	1868(明治1)年	●明治維新 「戊辰戦争(~1869)」 「五箇条の五誓文、五榜の掲示、政体書発布」 「東京遷都」
		1869(明治2)年	●版籍奉還
1870(明治3)年	●神戸・大阪間に電信が通じる		
1871(明治4)年	●廃藩置県により尼崎藩は尼崎県古河藩は古河県となり、11月に兵庫県に吸収される ●加納宗七が生田川を付替え	1871(明治4)年	●廃藩置県
1872(明治5)年	●湊川神社創建		
		1873(明治6)年	●徴兵令、地租改正
1874(明治7)年	●神戸～大阪間に鉄道が開通し、神戸駅・三ノ宮駅が開業 ●諏訪山で仏観測隊が金星を観測	1874(明治7)年	●民撰議院設立建白書
1876(明治9)年	●七村が合併し葺合村となる		
		1877(明治10)年	●西南戦争
		1878(明治11)年	●郡区町村編制法制定
1879(明治12)年	●中央区は兵庫県の一画として神戸区(もとの神戸区・兵庫区・坂本村)、菟原郡葺合村・筒井村となる		
		1881(明治14)年	●明治14年の政変→国会開設の勅諭
		1885(明治18)年	●内閣制度発足(第一次伊藤内閣)

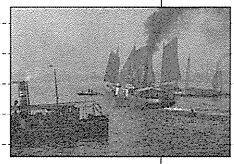
開港当時の居留地
(「区誌生田いまむかし」P56より)

年表で見る中央区と日本の歴史

近・現代	中央区の歴史	近・現代	日本の歴史
1886(明治19)年	●川崎正蔵が川崎造船所を設立		
1887(明治20)年	●筒井村が葺合村に合併		
	●鈴木商店本店設立		
1888(明治21)年	●山陽鉄道(現山陽本線)開業	1888(明治21)年	●市制・町村制公布
1889(明治22)年	●市制の施行により、神戸区・葺合村・荒田村が合併し、神戸市となる神戸市の誕生	1889(明治22)年	●大日本帝国憲法発布(黒田内閣)
			●東海道本線全通(東京～神戸)
	●神戸駅に山陽鉄道が接続		
		1890(明治23)年	●帝国議会開設
			●郡制公布
		1894(明治27)年	●条約改正(治外法権撤廃)
			●日清戦争勃発
		1895(明治28)年	●下関条約→三国干渉
1896(明治29)年	●湊川付替え工事はじまる		
		1902(明治35)年	●日英同盟成立
1896(明治29)年	●神戸製鋼所の前身小林製鋼所設立		
		1904(明治37)年	●日露戦争(～1905)
1905(明治38)年	●阪神電気軌道株式会社(阪神電車)	1905(明治38)年	●ポーツマス条約
1907(明治40)年	●神戸築港開始		
1910(明治43)年	●市電の前身、街電が開通		
		1911(明治44)年	●条約改正(関税自主権回復)
1913(大正2)年	●代議士小寺謙吉宅(相楽園)に群衆が押し掛ける	1913(大正2)年	●大正政変
	●大戦景気で鈴木商店大繁盛		
		1914(大正3)年	●シーメンス事件
			●第一次世界大戦勃発(～1918)
1918(大正7)年	●鈴木商店を民衆が焼打ち	1918(大正7)年	●米騒動
	●東部公設市場開設		
		1919(大正8)年	●パリ講和会議
1920(大正9)年	●阪神急行電鉄株式会社(阪急電車)		
1921(大正10)年	●川崎・三菱の労働者が大争議		
		1923(大正12)年	●関東大震災
1926(大正15)年	●三越神戸支店開業		
1927(昭和2)年	●鈴木商店倒産	1927(昭和2)年	●金融恐慌
	●大丸神戸支店三宮に新築移転		
	●阪神国道(2号線)、阪神国道電車が開通		

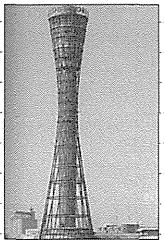


埋立工事中の湊川
(「区誌生田いまむかし」P69より)



築港のはじまり
(「こうべ市制100周年記念より」)

近・現代	中央区の歴史	近・現代	日本の歴史
1931(昭和6)年	●神戸市が区制実施し8区誕生、中央区は葺合・神戸・湊東区に相当	1931(昭和6)年	●満州事変勃発
		1932(昭和7)年	●五・一五事件
1933(昭和8)年	●そごう神戸支店開業	1933(昭和8)年	●国際連盟脱退
	●第1回みなとの祭		
		1936(昭和11)年	●二・二六事件
		1937(昭和12)年	●日中戦争(～1945)
1938(昭和13)年	●阪神大水害→生田川・宇治川が大氾濫		
	●この年神戸市人口100万人突破		
		1939(昭和14)年	●第二次世界大戦勃発
		1941(昭和16)年	●太平洋戦争勃発
1945(昭和20)年	●3/17 6/5の大空襲で中央区は焦土と化す	1945(昭和20)年	●8/6 広島に原爆投下
			●8/9 長崎に原爆投下
	●神戸市は8区を6区に整理、神戸区と湊東区の一部が生田区となる		●8/15ポツタム宣言受諾→日本無条件降伏
		1946(昭和21)年	●日本国憲法公布
1947(昭和22)年	●第1回市長公選		
1949(昭和24)年	●大倉山の市立図書館再開		
	●生田区役所・葺合区役所新築完成		
		1950(昭和25)年	●朝鮮戦争勃発
1951(昭和26)年	●市立南蛮美術館開館	1951(昭和26)年	●サンフランシスコ講和条約
	●神戸港の管理が国から市へ移管		
		1953(昭和28)年	●テレビ放送開始
		1954(昭和29)年	●自衛隊発足
1955(昭和30)年	●神戸市警が県警に吸収される		
1956(昭和31)年	●六甲山系が瀬戸内海国立公園に編入される	1956(昭和31)年	●日ソ共同宣言
			●国際連合加盟
			●日米安全保障条約
1957(昭和32)年	●市役所が現在地に移る		
1963(昭和38)年	●ポートタワー竣工		
		1964(昭和39)年	●新幹線営業開始
			●東京オリンピック
1965(昭和40)年	●市立中央体育館オープン	1965(昭和40)年	●日韓基本条約
	●さんちかタウン開業		

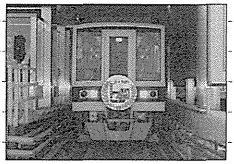


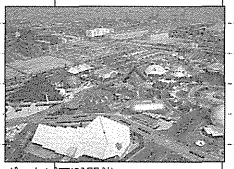
ポートタワー
(「区誌生田いまむかし」P11より)

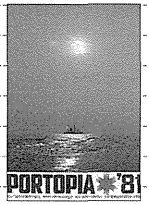
さんちかタウン
(「区誌生田いまむかし」P21より)

年表で見る中央区と日本の歴史

近・現代	中央区の歴史	近・現代	日本の歴史
1966(昭和41)年	●ポートアイランド造成工事着工		
1968(昭和43)年	●神戸高速鉄道開業	1968(昭和43)年	●小笠原諸島返還
1968(昭和44)年	●貿易センタービル完成		
		1970(昭和45)年	●日本万国博覧会開催
1971(昭和46)年	●第1回神戸まつり		
1972(昭和47)年	●新幹線新神戸駅開業	1972(昭和47)年	●札幌オリンピック
			●沖縄返還、日中国交回復
1973(昭和48)年	●市立文化ホール開館	1973(昭和48)年	●オイル・ショック
1974(昭和49)年	●さんこうべオープン		
1975(昭和50)	●インフォメーションこうべ開設	1975(昭和50)年	●沖縄海洋博開催
		1976(昭和51)年	●ロッキード事件
1977(昭和52)年	●北野町異人館ブーム		
1978(昭和53)年	●合区問題協議会設置	1978(昭和53)年	●日中平和友好条約
1980(昭和55)年	●中央区発足(葺合・生田区が合区)		
1981(昭和56)年	●ポートアイランド竣工	1981(昭和56)年	●漫才ブーム
	●中央市民病院移転新築完成		
	●ポートライナー開業		
	●ポートピア'81開催		
	●中央図書館増改築完成		
1982(昭和57)年	●葺合文化センター開館	1982(昭和57)年	●500円硬貨発行
	●市立博物館開館		
1983(昭和58)年	●生田文化会館開館		
1984(昭和59)年	●青少年科学館開館	1984(昭和59)年	●グリコ・森永事件
	●山麓バイパス開通		●新紙幣発行
1985(昭和60)年	●地下鉄(新神戸～学園都市)開通	1985(昭和60)年	●科学万博開催
	●ユニバーシアード神戸大会		
	●ハーバーランド起工式		
1987(昭和62)年	●区民の花に「ペチュニア」決定	1987(昭和62)年	●国鉄が分割民営化
	●神戸海洋博物館開館		
	●こべっこランド開館		
1988(昭和63)年	●北神急行開通	1988(昭和63)年	●リクルート事件
1989(昭和1)年	●神戸市制100周年	1989(平成1)年	●昭和から平成へ
	●フェスピック神戸大会		●消費税導入
	●神戸市新庁舎完成		

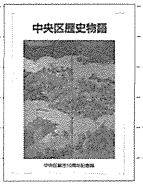

ポートライナー開業

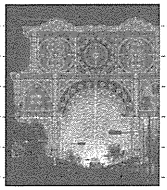

ポートピア'81開催



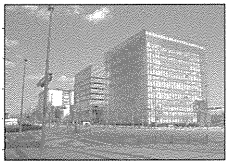
ポートピア'81のポスター

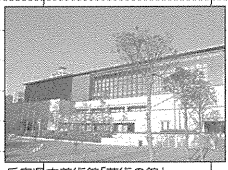
近・現代	中央区の歴史	近・現代	日本の歴史
1990(平成2)年	●総合教育センター開館	1990(平成2)年	●国際花と緑の博覧会開催
	●中央区誕生10周年記念式典		
	●『中央区歴史物語』刊行		
1991(平成3)年	●布引ハーブ園開園		
	●新神戸ロープウェー運行		
1992(平成4)年	●ハーバーランド街開き		
1993(平成5)年	●アーバンリゾートフェア神戸'93		
1994(平成6)年	●ハローステーションKOBE開設	1994(平成6)年	●関西国際空港開港
	●K－CATオープン		
	●神戸マリンルート運行		
1995(平成7)年	●阪神・淡路大震災	1995(平成7)年	●地下鉄サリン事件
	●神戸ルミナリエ第一回目開催		
1996(平成8)年	●「新・中央区歴史物語」刊行		
	●東部新都心・HAT神戸着工		
1997(平成9)年	●神戸港震災メモリアルパーク完成	1997(平成9)年	●神戸市須磨区・酒鬼薔薇事件
1998(平成10)年	●HAT神戸街開き	1998(平成10)年	●長野オリンピック
	●北野工房のまちオープン		●明石海峡大橋完成
1999(平成11)年	●神戸空港着工	1999(平成11)年	●茨城県東海村原発臨界事故
	●仮設住宅全面解消		
2000(平成12)年	●中央消防署設立	2000(平成12)年	●淡路花博開催
	●中央区誕生20周年		●三宅島大規模噴火
2001(平成13)年	●地下鉄湾岸線開通	2001(平成13)年	●アメリカ同時多発テロ
2002(平成14)年	●兵庫県立美術館開館	2002(平成14)年	●サッカーW杯日韓共同開催
	●人と防災未来センター開館		
2003(平成15)年		2003(平成15)年	●イラク戦争
2004(平成16)年	●神戸市立科学技術高等学校開校	2004(平成16)年	●新潟県中越地震
	神戸市立神戸工科高等学校開校		

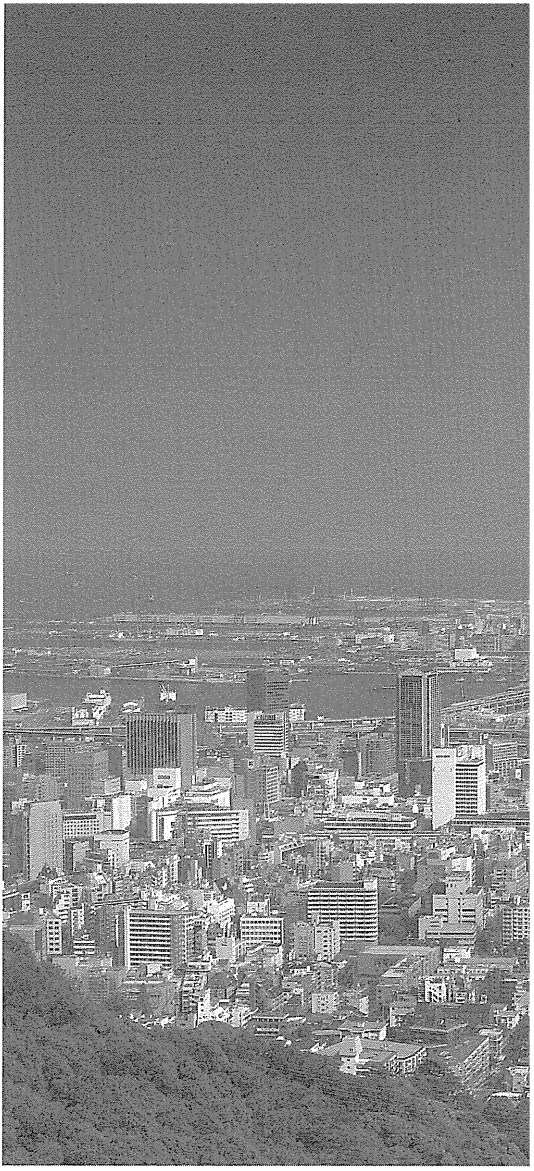



ルミナリエ
©Valerio Festi/ISF Inc./Kobe Luminarie O.C.

阪神・淡路大震災

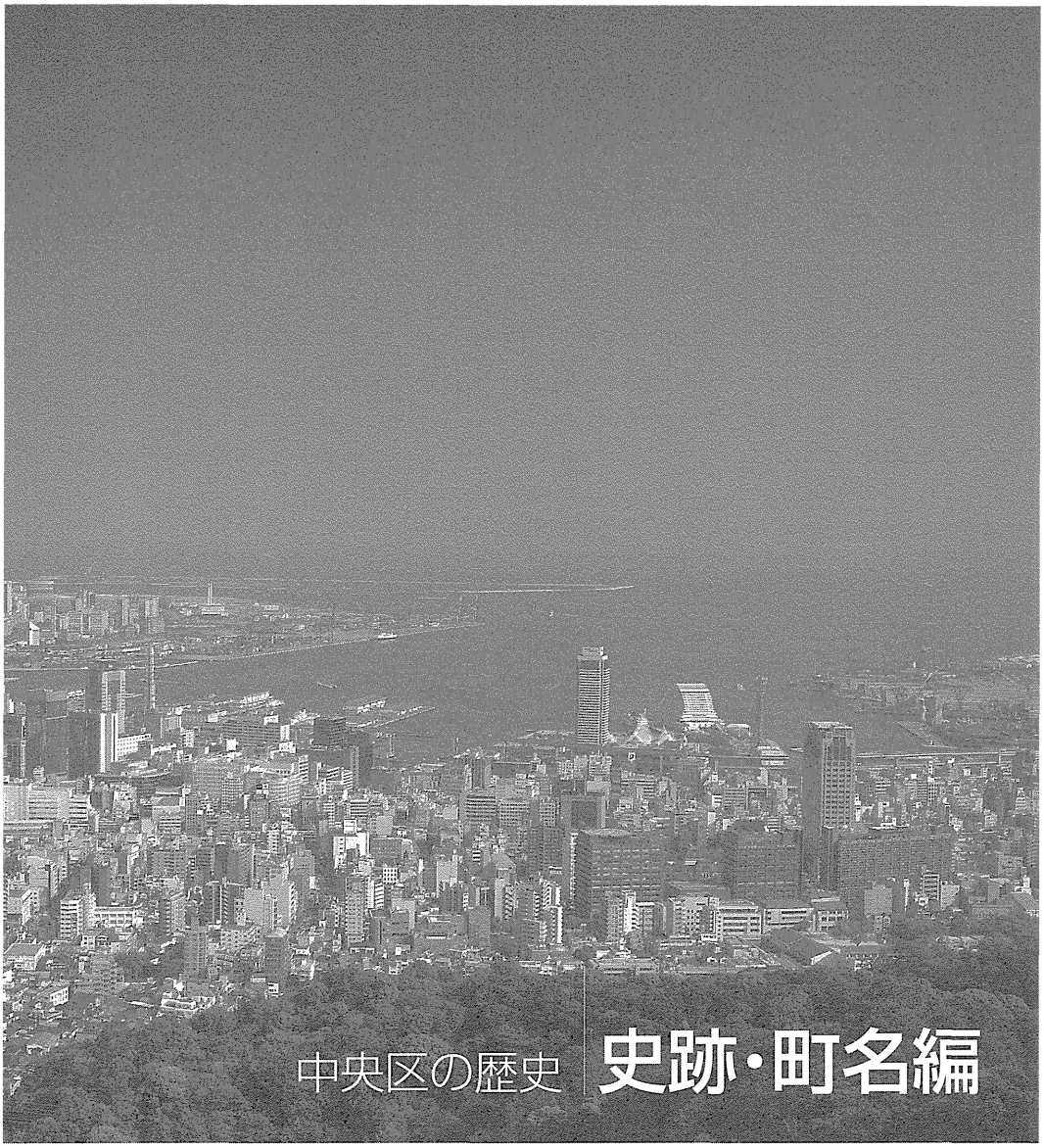

人と防災センター


兵庫県立美術館「芸術の館」



凡例

- 区内の史跡を8つのエリアに分け、エリアマップ・モデルコースをもとに、有機的に利用できるようエリア毎に通し番号を打った。
- モデルコースは平成3年から平成16年にかけて合計8回行われたウォークラリー「中央区歴史物語を歩く」のコースをもとにしている。
- ●は町名の由来を紹介しているが、史跡の文章の中で紹介するのが適当と思われる箇所については、項目として独立させず、その中で説明を加え、史跡のタイトルの右下に●（町名）を示した。
- なお、町名の由来は「新・神戸の町名」「兵庫県地名大辞典」などに紹介されているもののうち、著名な説を掲げることにして、著者の自説の展開は極力避けるようにした。



中央区の歴史 史跡・町名編

■ 葺合山手周辺――60
■ 葺合浜手・磯上・HAT 神戸周辺――72
■ 布引・生田川周辺――86
■ 北野・トアロード周辺――102
■ 生田山手周辺――138
■ 旧居留地・元町周辺――164
■ 神戸港・ベイエリア周辺――178
■ 神戸駅・大倉山周辺――190

史跡と町名

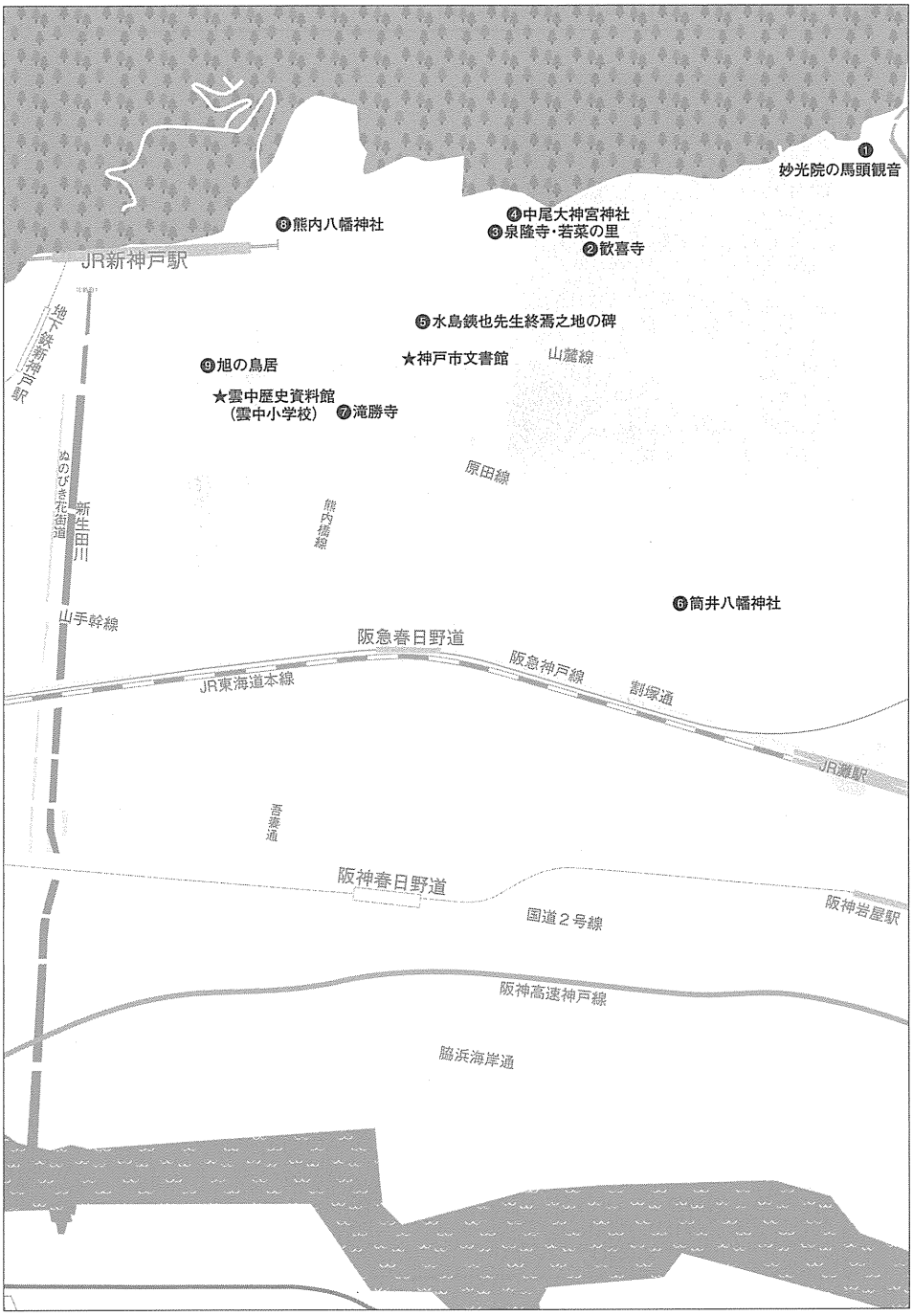
HUKIAIYAMATE

葺合山手周辺

❶ 妙光院の馬頭観音
❷ 歓喜寺
❸ 泉隆寺・若菜の里
❹ 中尾大神宮神社
❺ 水島銕也先生終焉之地の碑
❻ 筒井八幡神社
❼ 滝勝寺
❽ 熊内八幡神社
❾ 旭の鳥居

新神戸の東側位置に広がる
山麓エリアは、
海を見晴らす絶好の散策コース。
住宅街に溶け込むように点在する
史跡をめぐってみては？

エリアマップⒶ


❶妙光院の馬頭観音
❹中尾大神宮神社
❸泉隆寺・若菜の里
❷歓喜寺
❽熊内八幡神社
JR新神戸駅
地下鉄新神戸駅
❺水島鎮也先生終焉之地の碑
★神戸市文書館
山麓線
❾旭の鳥居
★雲中歴史資料館
（雲中小学校）
❼滝勝寺
原田線
熊内橋線
新生田川
のびきた花街道
❻筒井八幡神社
山手幹線
阪急春日野道
阪急神戸線
JR東海道本線
割塚通
JR灘駅
吾妻通
阪神春日野道
国道２号線
阪神岩屋駅
阪神高速神戸線
脇浜海岸通

❶妙光院の馬頭観音（ばとうかんのん）

通称青谷の高台に位置する妙光院は天台宗の寺院で、動物愛護の寺として知られている。境内にある馬頭観音菩薩像は高さ6㍍あり、日本最大の馬頭観音であると言われている。普通、観音菩薩像はやさしい顔をしているが、馬頭観音だけは例外で、仏法をそしる者や現世で悪事を行なう者を正しい道に教化するために憤怒の顔をした観音になったという。妙光院の馬頭観音は、1930（昭和5）年に当時の住職が重い荷をひいて坂道で困っている馬を見てまつることを発願し、1933（昭和8）年に建立したものである。動物守護の本尊で、火炎を背負い走る馬の背に足を上げる姿は動物に災難が及ぶ時に救いに行く姿をうつしたものだ。

観音像の背後にある愛馬供養塔にはかつて競馬ファンの血を燃えさせた名馬テンポイントをはじめとし、キシュウローレル、ハマノパレードなど多くの馬のタテガミが奉納されている。それらの命日には関東・中国などからもお参りに訪れ、りんごや千羽鶴を供えていくという。毎年1月18日に初馬頭観音祭が行なわれ、愛馬やペットの健康を祈る参拝客で賑わう。

●「神仙寺通」の由来

かつてこの地に滝勝寺（史跡編 P67参照）の末寺の神仙寺があり、寺が廃寺になったあとも地名として残ったと言われる。

❷ 歓喜寺

中島通5丁目

1897(明治30)年、若林鉄心によって建てられた曹洞宗の寺院で山号を秋葉山という。本尊の十一面観音像(頭上に十一の顔をいだいているところからこの名が付く、カラー頁・P121参照)は1914(大正3)年に重要文化財に指定された藤原時代・一木造の秀作で、像高が88.4cmある。この観音像は元周防国岩国の領主・吉川監物の念持仏であったと伝えられている。

この寺は第二次世界大戦で本堂や庫裏などが焼失したが、その際、本尊の十一面観音は多田神社に逃れていたため無事であった。終戦後、しばらく東福寺を間借りして寺の活動を続けていたが、一年後に元の場所に戻り、仮本堂を設置した。現在の本堂は1967(昭和42)年に復興されたものである。なお、本尊の十一面観音は一般には公開されていない。

また、阪神・淡路大震災の犠牲者を慰霊するため、境内に、震災三回忌にあたる平成9年1月15日に「慕心」と刻まれた遠藤泰弘作の慰霊碑が建立された。

●「中島通(なかじまどおり)」の由来

もともとこの地に「中島」という字名があり、それが町名になったといわれるが、一説にはこのあたりの耕地整備を請負ったのが中嶋組でそれにちなんだともいわれており、定説はない。

●「篭池通(かごいけどおり)」の由来

水漏れの多い池のことを一般に「かご池」といい、農村時代に旧筒井村の灌漑用の池がこのあたりにあったが、その池の水漏れがひどかったことから名付けられたという。

●「野崎通(のざきどおり)」の由来

旧筒井村の上筒井に東野という高台があり、その先端を「野さき」と呼んでいたのが地名になったという。

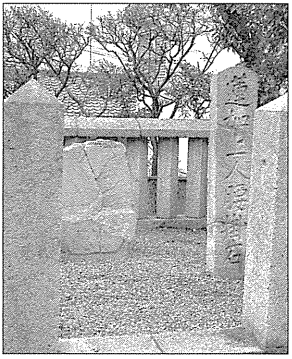
●「坂口通(さかぐちどおり)」の由来

このあたりが摩耶山への登り口であり、また上筒井の高台の東野への上がり口でもあったことから、「坂口」と呼ぶようになったといわれている。

③泉隆寺・若菜の里

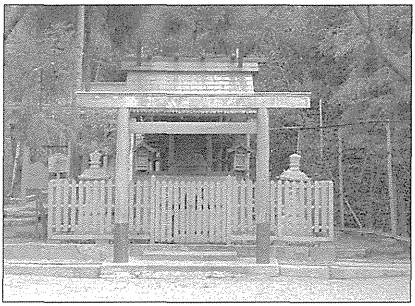
若菜の里

山号を超音山といい、真宗本願寺派の末寺で、俗に若菜寺として知られている。寺の縁起によれば、1262(弘長2)年に僧西順が建立したといわれ、当初は真言宗の寺院であった。それが、1471(文明3)年にたまたまこの地を訪ねた蓮如上人に時の住職が帰依し、以後浄土真宗の寺となる。さて、醍醐天皇の910(延喜10)年に、この地で採れる若菜(春の七草のひとつ、すずしろ＝大根の葉、後に言う熊内大根の葉のこと)を宮中に献上し、以後これが習わしとなった。これは、正月の七日に食べる餅に若菜を添えると胃にもたれないといい、各地の若菜を吟味した結果、当地の若菜が一番よいということになったからである。源平の争乱でこの風習も一時とだえたが、蓮如上人がこれを復活。以後、この寺から西本願寺を通じて宮中にこの地の若菜が献上され、幕末まで続いた。こうしたことから俗称の若菜寺の名が付いた。今、境内には蓮如上人腰掛石があり、その脇に上人作と伝える「旅人のみちさまたげは津の国の　生田の浦の若菜なりけり」(この歌は藤原師輔の改作という)という歌碑が建っている。


蓮如上人腰掛石

今でも毎年1月7日には、境内の一角の畑で採れた「すずしろ」を入れた「七草粥法要」が行われ、参拝する人々にふるまっている。

葺合山手周辺 ④ 中尾大神宮神社 中尾町



旧中尾村の氏神。祭神は天照皇大神。この神社がいつ創建されたかは不詳である。1888(明治21)年に二宮神社に合祀されたが、1923(大正12)年に合祀を取り消し元に戻った。

●「中尾町」の由来

記紀に出てくる「活田長峡国」が転化したと言われる。なお、この地の豪族布敷首が滝勝寺の勢力から逃れるためにこの地に隠れてもとの長峡を中尾に書き改めたとも言われるが定かではない。さらに、布引の滝の東側には多くの山の尾が出ており、その真ん中の尾からきているという地形から名前が付いたとする説もある。

葺合山手周辺 ⑤ 水島銕也先生終焉之地の碑 熊内町5丁目

水島銕也は神戸高等商業学校(現・神戸大学)の設立に尽力をつくした人物である。神戸高等商業学校は1903(明治36)年に、東京に次ぐ第二の官立高商として開校(現在の市立葺合高校の場所)。その初代校長が水島であり、彼は設立当初から27年在職し、「水島の学校」とまで言われた。この碑は、65歳で没した熊内の地に、1957(昭和32)年、門下生鈴木寛一らによって建てられたものである。

⑥筒井八幡神社

宮本通3丁目

●「筒井町・上筒井通・宮本通」の由来

祭神は応神天皇で、旧筒井村の氏神。この神社の創建については不明であるが、宝物の金幣に「明徳元年(1390)」の文字があるので、創立はそれ以前と思われる。なお、春日野道の名の起こりになった春日神社は春日野墓地近くにあったが、今はこの筒井八幡に合祀されている。さて、この辺りが開ける前は、田園の中に一つ際立つ森として、この神社は街道を往来する人々の目印になった。その付近には清水が古くから湧いている井戸があり、井筒が設けられ、それが村の名になったといい、境内には「筒の井」という井戸が残っている。また、神社のある宮本通の町名は筒井八幡神社の本地であるところから名付けられた。

阪神・淡路大震災で倒壊した正面の大鳥居も2000(平成12年)年10月に再建され、その脚部裏側に「復興阪神・淡路大震災」の文字が刻まれている。

つつの井

●「大日通」の由来

かつて、滝勝寺の末寺であった大日寺があり、廃寺となったあとも、地名として残った。

豆知識 神戸市文書館と南蛮美術コレクション

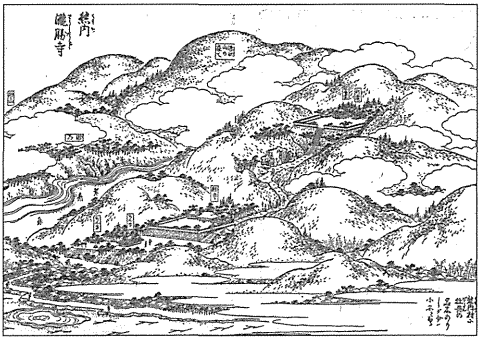
熊内町1丁目にある神戸市文書館の建物は、もとは1938(昭和13)年に南蛮美術のコレクターとして有名な池永孟氏が私設美術館として建てたものである。池永氏は1951(昭和26)年、建物と収蔵品を神戸市に寄贈し、市立神戸美術館となった。1965(昭和40)年からは市立南蛮美術館と名前を変え、数少ない南蛮美術のセンターとして親しまれてきたが、1982(昭和57)年、建物が手狭になったため、京町にある市立博物館に収蔵品を移して閉館した。その後、1989(平成元)年に神戸市文書館としてオープンし、市民の歴史研究や郷土学習、また市史の編纂作業の拠点となっている。

建物は、外壁にモザイク状のタイルを用い、正面そで壁には南蛮船をシンボライズしたレリーフを設けるなど、1925年頃ヨーロッパで流行したアール・デコの影響がみられる。

⑦ 滝勝寺（りゅうしょうじ）

熊内町2丁目

俗に滝寺といわれ、山号を布引山と号し、真言宗の寺院である。この寺は熊内八幡神社の北裏にあったが、1920（大正9）年に現在地に移った。移転以前のこの寺は熊内八幡の北の字東山（観音山）を中心に、西は徳光院から布引雄滝あたり、南は神若通あたりまでを勢力範囲として、末寺や支坊が多くあり隆盛をきわめていた。そして、今でも残る口円光坊、奥円光坊、寺ケ谷、教ノ尾、滝寺山といった字名は、むかしこの一帯に寺の堂塔伽藍があったことの名残であろう。なお、江戸時代に書かれた『摂津名所図会』からその頃の様子がうかがえる。さて、寺の縁起によれば、この寺は文武天皇の時代（697～706年）、役行者（えんのぎょうしゃ）が布引滝に入り修行中、馬頭観音があらわれ、その霊感を得て創建されたものであるという。また、平清盛が福原遷都をした時、葺屋庄内300戸を寺領として賜わり、後、花熊城の戦いにおける荒木村重の乱で寺は焼け、その後復興したという。

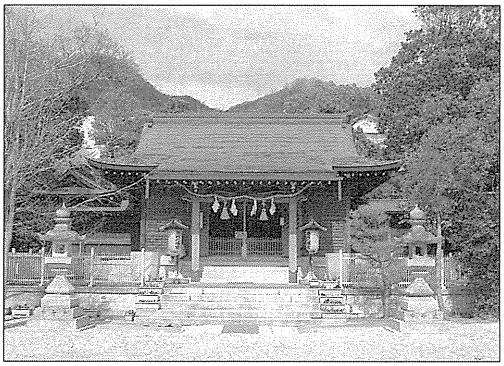


『摂津名所図会』より熊内・滝勝寺

⑧熊内八幡神社

熊内町9丁目

●「熊内町・熊内橋通」の由来



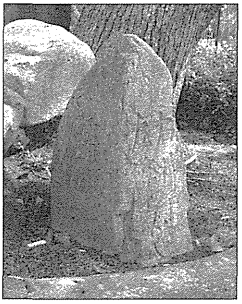
旧熊内村の氏神で、応神天皇と彦火々出見尊（ひこほほでみのみこと）を祭神とする。この神社の創建についてはいくつかの説がある。文武天皇の時代、滝勝寺建立の時、寺の鎮守として創祀し、その時に祭神の一つ彦火々出見尊を祀ったたという説や、後鳥羽上皇の時だという説もある。また、永禄年間にこの地の名族中西家の祖、加賀美（かがみ）二郎が創建したともいう。なお、荒木村重が織田信長に反旗を翻し乱を起こしたとき（1579〈天正7〉年）、滝勝寺とこの神社が焼かれ、その後復興した。しかし、1889（明治22）年火災にあい、一時二宮神社に合祀されたが、1902（明治35）年に氏子の手で元の場所に再建された。

境内には、湊川の戦いで敗れた新田義貞が京へ逃げ帰る途中この地で鎧を脱いで休んだと伝えられる「新田義貞鎧かけの松」（現在は二代目の松になっている）や「悲秋碑」と言われる俳人・窓雨の「秋はけさ来にけり松のうしろより」の句碑、1957（昭和32）年に建てられた中西家の末裔・中西為子の歌碑「砂子山よぎりのはれてちぬの海の　なみよりいつる月をみるかな」、そして、「左　住吉道　右　瀧」の道標がある。

また、境内にはかつて中西家にあった茶亭の一つ「香字庵」を偲んで建てられた六角堂があった。江戸幕末の中西家の当主は誉左衛門重之（前述の為子はこの重之の長女）といい、勤皇の志を抱いていたため、九州大村藩士の松林飯山や天誅組副総裁の松本奎堂などが彼の屋敷に出入りしていた。前記の「香字庵」は松林飯山の命名である。前述の「悲秋碑」は、一説によれば、1863（文久3）年の天誅組の変で自刃した松本奎堂を嘆き

悲秋碑

中西為子の歌碑


道標

悲しみ、中西重之が読んだ句で、俳人窓雨は世をはばかった彼の変名だとする説もあるが定かではない。

阪神大震災で倒壊した正面の鳥居は2000(平成12)年4月に再建された。また、境内本殿西側には同月29日に建立された「震災の碑」があり、震災で倒壊した玉垣に刻まれていた氏子などの誌名が記されている。

ところで、「熊内」という地名の由来であるが、昔、神を「クマ」と読み、熊内とは神内という意味で、生田神社が砂山の上にあったときの神域からつけられたものと言われている。また、布引橋を戦前に熊内橋と呼んでいたため「熊内橋通」の町名がつけられた。

豆知識 葺合山手、かつての鉄道の拠点 - 上筒井 -

中央区の鉄道の拠点と言えば、誰もが「三宮」を思い浮かべるであろう。JR・阪神・阪急・地下鉄・ポートライナーとあらゆる鉄道が結節している。ところが、明治・大正期に敷設された前三つの鉄道の内、実は阪急だけが設立当初三宮まで路線を敷いていなかったのである。

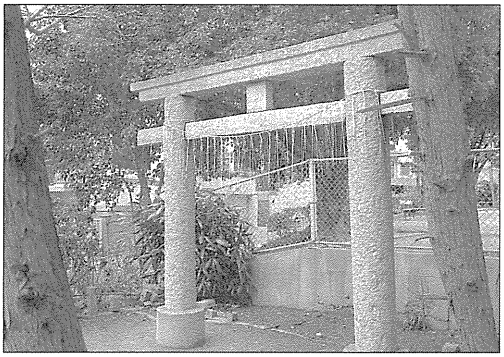
阪急電車は、1920(大正9)年に大阪と上筒井の間で開業した。開業当時は、王子公園駅のあたりから今の原田線にそって線路が伸び、「上筒井駅」が終点だったのである。そして、大阪方面からの乗客はここから、市電に乗り換え、三宮方面の市街地へ向かったのであった。いわば、この上筒井駅は阪急と市電との乗換駅として、阪神間の重要なターミナルの地位を占めていたのである。

さて、この上筒井駅がどこにあったのかというと、坂口通2丁目の県福祉センター付近だったという。今では市バスの停留所があるだけで、かつて、ここが神戸の一大ターミナルだったということは想像も出来ないであろう。

その後1936(昭和11)年に王子公園駅(当時は西灘駅)から三宮まで今のルートで阪急が三宮に乗り入れたため、1940(昭和15)年に上筒井駅は廃止されてしまったのである。

⑨旭の鳥居

熊内町4丁目



旭の鳥居

雲中小学校内の道標

雲中小学校北西隅、雲中公園との間の道にある、高さ約3メートルの鳥居。言い伝えでは砂山に生田神社があった頃の一の鳥居だといい、元日の朝には影がささないということからこの名が付いたという。しかし、それほど古い鳥居とは考えられず、北にある熊内八幡神社と関係があるのかもしれない。

なお、雲中小学校校庭の南東隅に「左　瀧道　是より三丁」の道標があるが、これは熊内八幡神社裏の登り口にあったものを保存のため現在地に移したものである。

豆知識　雲中歴史資料館（雲中小学校内）

雲中小学校は1873（明治6）年に熊内小学校として開校し、前身を「香字庵」（これも江戸時代に熊内村の庄屋が設立した「童蒙教訓舎」が前身）という。神戸市内でも最も古い歴史を持つ小学校に数えられる。

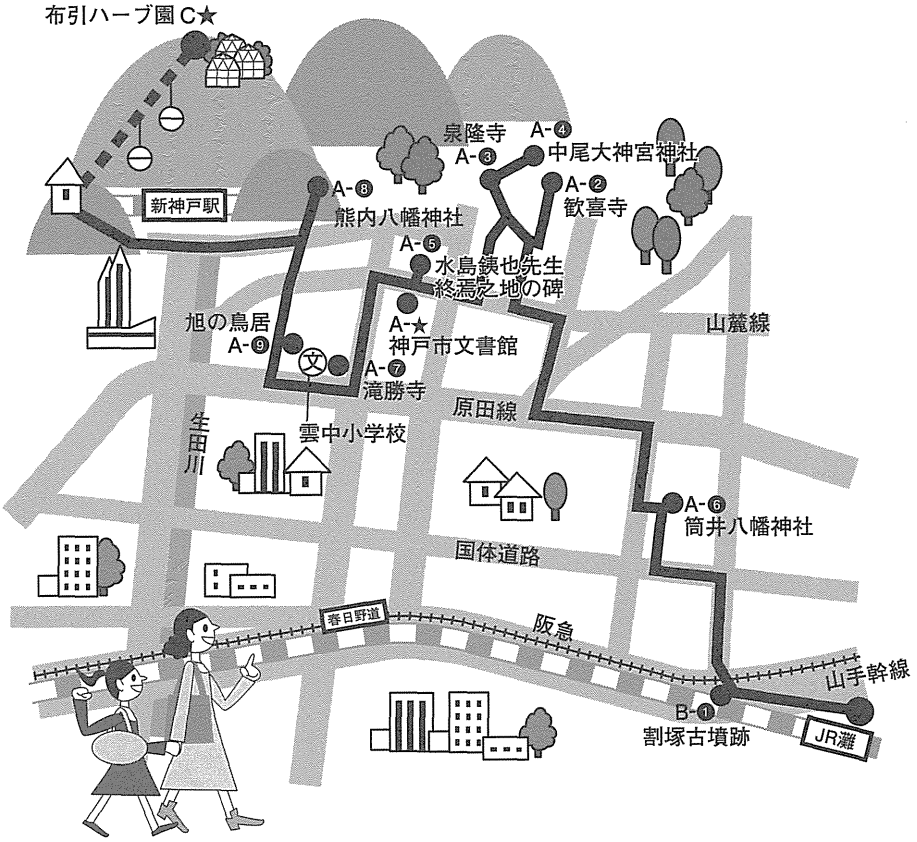
こうした歴史のある小学校の資料を保存・展示しようと開設されたのが、「雲中小学校歴史資料館」である。この資料館は1993（平成5）年、創立120周年を記念して設置されたもので、明治時代から現在までの教育資料や生活道具など多くの資料が展示・公開されている。

雲中小学校内・雲中歴史資料館

モデルコース

葺合山手の史跡と布引公園を訪ねて

葺合区の山手一帯には、由緒ある神社・仏閣や史跡が数多く残されいます。
見晴らしのよい高台にある熊内八幡神社、割塚古墳の跡など、
葺合山手に残る歴史の足跡をたどりながら楽しんでみませんか。



灘駅➡割塚古墳跡➡筒井八幡神社➡歓喜寺➡泉隆寺（若葉の里）➡中尾大神宮神社➡水島鐵也先生終焉之地の碑➡神戸市文書館➡滝勝寺➡旭の鳥居➡熊内八幡神社➡〈新神戸ロープウェー〉➡布引ハーブ園

所要時間 約130分 ※所要時間は1km10分、各史跡滞在5分で計算しています。
※個人差により所要時間は変動いたします。

史跡と町名

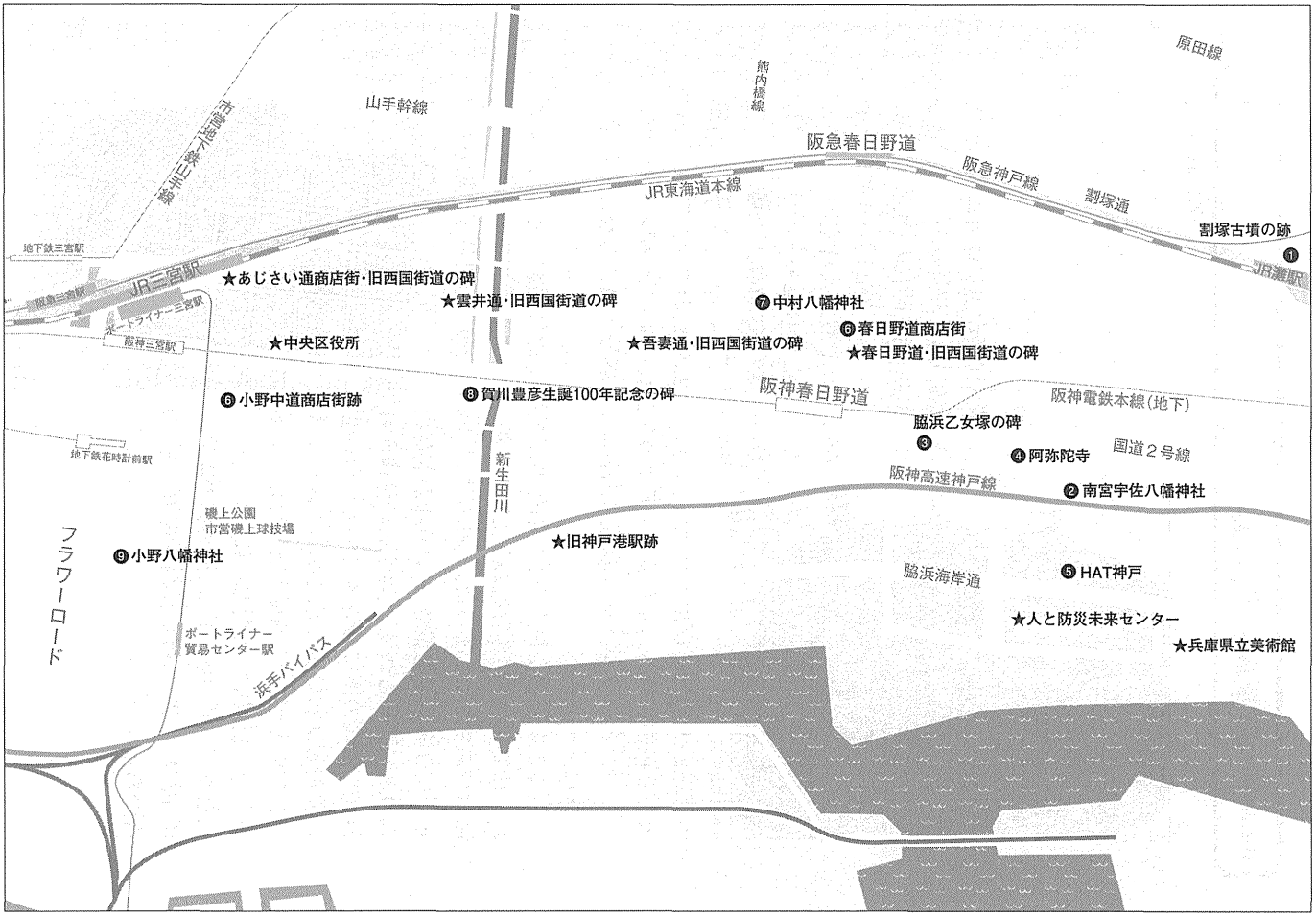
HUKIAIHAMATE・ISOGAMI・HATKOBE

葺合浜手・磯上・HAT神戸周辺

❶ 割塚古墳の跡
❷ 南宮宇佐八幡神社
❸ 脇浜乙女塚の碑
❹ 阿弥陀寺
❺ HAT神戸
❻ 春日野道商店街・小野中道商店街跡
❼ 中村八幡神社
❽ 賀川豊彦生誕100年記念の碑
❾ 小野八幡神社

江戸時代には参勤交代の
大名行列が行き交った「旧西国街道」と、
神戸の東部新都心として開発が進む
「HAT神戸」。新旧の魅力が
体感できるエリアです。

エリアマップ B


原田線
熊内橋線
山手幹線
阪急春日野道
阪急神戸線
JR東海道本線
割塚通
割塚古墳の跡
❶
JR灘駅
地下鉄三宮駅
阪急三宮駅
JR三宮駅
ポートライナー三宮駅
阪神三宮駅
★あじさい通商店街・旧西国街道の碑
★雲井通・旧西国街道の碑
❼中村八幡神社
❻春日野道商店街
★中央区役所
★吾妻通・旧西国街道の碑
★春日野道・旧西国街道の碑
阪神春日野道
阪神電鉄本線(地下)
❻小野中道商店街跡
❽賀川豊彦生誕100年記念の碑
脇浜乙女塚の碑
❸
❹阿弥陀寺
国道２号線
地下鉄花時計前駅
新生田川
阪神高速神戸線
❷南宮宇佐八幡神社
磯上公園
市営磯上球技場
★旧神戸港駅跡
フラワーロード
❾小野八幡神社
脇浜海岸通
❺HAT神戸
★人と防災未来センター
ポートライナー
貿易センター駅
浜手バイパス
★兵庫県立美術館

❶割塚（わりづか）古墳の跡

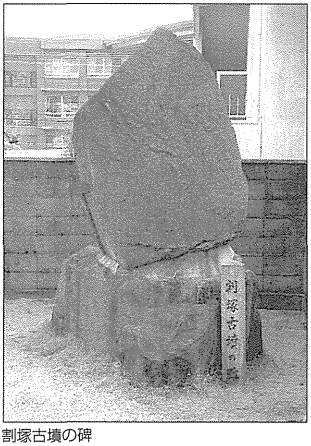
●「割塚通」の由来

布敷首霊地の碑

割塚は『摂津志』（並河誠所、1734〈享保19〉年）に和理塚として紹介されており、明治時代の『西摂大観』にもみられる。この古墳は古墳時代後期のもので横穴式石室の大円墳であった。この付近の言い伝えでは、豊臣秀吉の大坂城築城の際、大きな石材が必要なためこの古墳の石室の巨石が大部分運び出され、封土はその時壊され、わずかに二個づつの大石と内部に落ち込んだ蓋石を残すのみとなり、これが割塚の名の由来になったという。現在の割塚通の地名はこの割塚古墳にちなんで名付けられた。

いつの頃からか封土の上に稲荷の社を祀り、割塚稲荷と称されていたが、1935（昭和10）年に行われた阪急電鉄三宮乗り入れ工事の時にこの遺跡はつぶされてしまった。なお、それより前、1926（大正15）年に墳石を利用して、「布敷首（ぬのしきのおびと）之霊地」という碑が稲荷の祠の前に建てられ（現在はもとの位置から西南に20㍍の所に移されている）、碑の裏に和理塚は布敷首の墓であると説明がなされているが、この割塚が布敷首の墓であるという根拠は今の所どこにもない。

なお、この「布敷首之霊地」の碑の裏側に昭和37年に建立された「割塚古墳の跡」の碑がある。

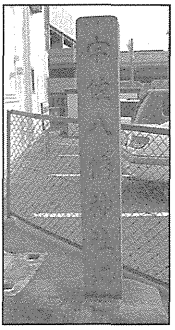


割塚古墳の碑

葺合浜手周辺 ❷南宮宇佐八幡神社 脇浜町2丁目

南宮宇佐八幡神社

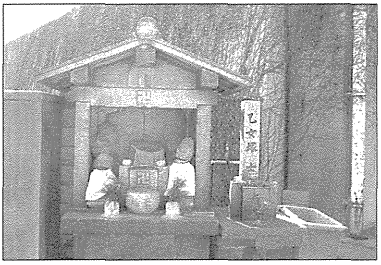
旧脇浜村の氏神で、祭神は応神天皇。もともと脇浜村には東に堂ノ川八幡、その100㍍西に南宮八幡の二つの八幡神社があったが、1932(昭和7)年に堂ノ川を南宮に合祀して、それ以後南宮宇佐八幡と称するようになった。現在の社殿はその時建てられたもの。なお、堂ノ川八幡のあった場所(脇浜町二丁目交差点南東角)には1937(昭和12)年12月に建てられた「宇佐八幡神社跡」の碑がある。


「宇佐八幡神社跡」の碑

古老の言い伝えでは、楠木正成が足利尊氏追討のため湊川に向かう途中、この地に馬を留め、宇佐八幡宮を拝んだことから、後に村人が八幡社をここに勧進し、南宮は楠の木へんを後世落としてしまったものであるといわれている。

なお、阪神大震災で全壊した鳥居も、2000(平成12)年1月17日に再建された。

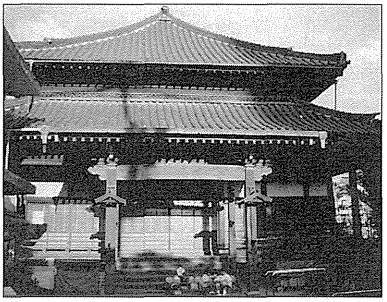
葺合浜手周辺 ❸脇浜乙女塚の碑 脇浜町3丁目



前方部を東に向ける前方後円墳であったらしく、昭和のはじめ頃まではまだ封土を残していた。その位置から約100㍍北、臨港線と国道が交差する東南部分に、1933(昭和8)年に建てられた「乙女塚古墳」の碑がある。この古墳を乙女塚というのは、東灘・灘の処女塚伝説にからんで呼ばれる三つの古墳になぞらえたものか、それともその伝説が新たに生田川に移ってから出てきたものかは不明である(通史編P93豆知識参照)。

④ 阿弥陀寺（あみだじ）

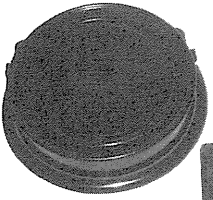
現在の本堂



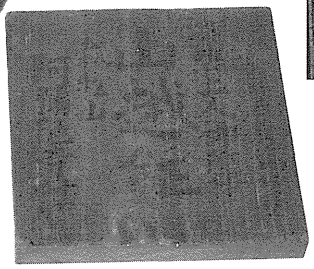
震災前の本堂

阿弥陀寺は浄土宗智恩院の末寺で山号を栽松山という。本尊は阿弥陀如来・勢至菩薩・観音菩薩の三身一体の仏像。この寺の縁起書によれば、南都北嶺の旧仏教側の迫害に遭い、念仏停止令による1207（承元1）年の承元の法難で讃岐に流罪となる法然上人が、流される途中この地に立ち寄り、脇浜の庄屋であった富松右衛門の所に滞在した。同年12月、赦免となり讃岐からの帰途再びこの地を訪れた法然に松右衛門は深く帰依し、遂には仏門に入り法入という名を授かり、翌1208（承元2）年10月頃に自宅を寺として阿弥陀寺と称し開基したという。この時、法入は脇浜の海から霊像を一体引き上げた。その像の姿が、顔の形は阿弥陀如来、身体は勢至・観音の両菩薩という珍しいものであり、法然の勧めでこの仏像をこの寺の本尊にしたというが、それが現在本堂に安置されている阿弥陀如来・勢至菩薩・観音菩薩の三身一体の本尊だと伝える。

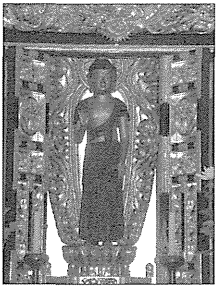
かつて、寺の西200㍍の浜に「法然松」といわれる三本の枝に分かれる老松があった。法然が讃岐配流の途中に立ち寄った時、松右衛門の懇願で上人自ら青松三株を一束にして浜の砂上に栽えたと伝える。山号の栽松山はここから来ているという。その後、この松が大きく育ち、一本の根から三方に枝がのびまるで臥竜のように見えたと言われる。この松はその後数百年の間に二枝は枯木となり、一枝だけが茂っていたという。安永年間（1772～80）にその枯れ木を用いて法然上人の尊像を彫刻し、それが今本堂に安置されている法然像（圓光大師像）だと言われている。「摂津名所図会」（1796年）によれば、結局松は枯れてしまい、株が三丈だけ残



山越えの鉦



四代目法然松と法然松の碑

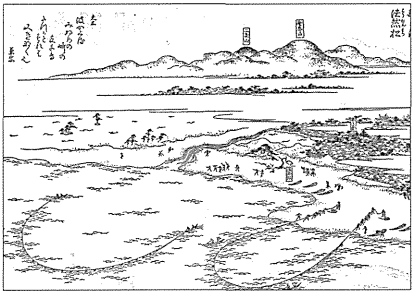


三身一体の本尊

り、そばに植え継ぎの松があるといい、同書に描かれている法然松は、その二代目の松である。二代目も大正時代に枯れ、三代目の松が植えられたがそれも1980(昭和55)年頃枯れ、現在では四代目の松が「法然松」の碑とともに境内にある。

ところで、この寺には「松風」と呼ばれる秘蔵の鉦がある。法然上人が法入に授けた鉦として伝えらており、法入終焉の時、この鉦をたたいて念仏を唱えていると、六甲山の北側・山田村の村人がその鉦の音を聞き、その音をたよりに山越えをして阿弥陀寺にやってきたと言われている。そのため、この鉦を「山越えの鉦」とも呼ぶようになったという。

なお、この寺のもとの本堂は、近松門左衛門の「心中天の網島」の舞台となった大阪の大長寺を明治の頃に移築したらしいといわれているが、移築のはっきりした年代はわからなくなってしまったという。第二次大戦の戦火を免れたこのもとの本堂は、残念ながら阪神・淡路大震災で全壊してしまった。震災で倒壊した本堂も、2004(平成16)年5月に新しい本堂が完成、落慶法要が行われた。



『摂津名所図会』より法然松

⑤HAT神戸

「HAT神戸」とは東部新都心の愛称で、「HAT」は「Happy Active Town」の頭文字を組み合わせたもの。摩耶山の南、ウォーターフロントに開けるこの地域が、ハッと変貌し、誰もが幸福で、活気あふれる街となるように願いを込めて命名された。このHAT神戸は、神戸市中央区東部から灘区西部にかけての臨海部における大規模工場の遊休化などに伴う土地利用転換を図る総合的な整備を目的としたもので、1995(平成7)年度から建設が始まった。

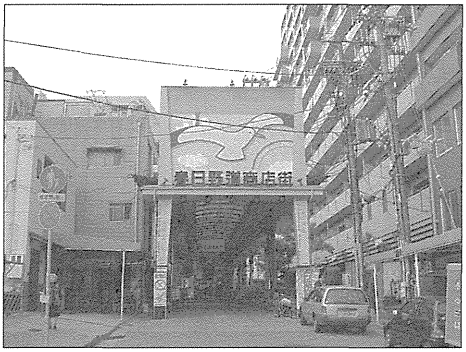
地区面積・約120ha 、居住人口・約 30,000人(全体約10,000戸) 、就業人口・約40,000人 、利用人口・約150,000人を予定している。HAT神戸全体(120ha)のうち、阪神高速道路以南の臨海部地区(約75ha)については、土地区画整理事業により、緊急かつ大量の住宅供給や「WHO神戸センター」をはじめとする都市機能の導入を図る道路等の基盤整備が進められ2004(平成16)年3月に完了した。

また、地域内には「阪神・淡路大震災記念　人と防災未来センター」や「兵庫県立美術館」(カラー頁P132参照)なども設置されている。

●「脇浜町(わきのはまちょう)・脇浜海岸通(わきのはまかいがんどおり)」の由来

今でも脇浜の東側の高台に敏馬(みぬめ)神社(灘区岩屋中町4)があるが、この神社のある高台を敏馬の崎といった。大輪田ノ泊が栄える前、奈良時代前期にはここ敏馬の浦が港として栄えていた。この敏馬の崎の脇にある浜というところから「脇浜」と名付けられた。

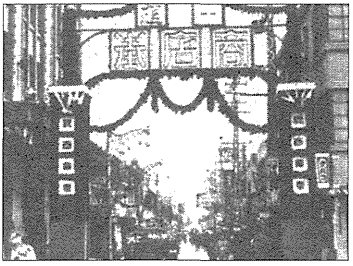
⑥ 春日野道商店街・小野中道商店街跡



春日野道商店街

戦前、旧葺合区域には春日野道商店街と小野中道商店街という二つの大きな商店街があった。今でも残る春日野道商店街は、その昔「西の新開地に、東の春日野道」とはやされたよき時代があったが、この商店街ができたのは大正年間である。一方、今はなき小野中道商店街は生田川の西、小野柄通と御幸通の間の道(今は大小のビルが林立する)にあった神戸市屈指の商店街で、明治の末頃に出来た。阪神と市電にはさまれるという好条件も重なって、正午から夜の10時頃まで人通りが絶えなかったという。しかし、こうした小野中道商店街も1945(昭和20)年の空襲ですべてが焼かれ、戦後は復活の機会を失い、幻の商店街となってしまった。

小野中道商店街跡


かつての小野中道商店街

●「真砂通(まさごどおり)」の由来

真砂とは細かい砂のことで、かつてこのあたりは美しい細かな砂が広がっていた海岸であったところから名付けられたというが、定かではない。

●「北本町通(きたほんまちどおり)・南本町通(みなみほんまちどおり)」の由来

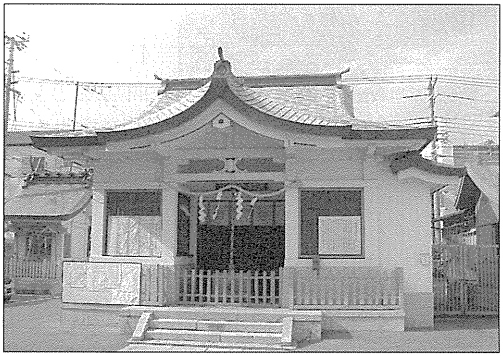
両町の境を東西に走る道がかつての西国街道の浜街道で、その街道の北を北本町通、南を南本町通と名付けた。

●「吾妻通(あづまどおり)」の由来

周辺の旭、雲井、東雲、八雲、日暮といった地名と照応させ、こうした地域の東部というところから付けられたという。一説にはこの地区の道路整備を吾妻組が担当したことから付けられたともいうが定かではない。

⑦中村八幡神社

日暮通2丁目



旧中村の氏神で、祭神は応神天皇。縁起は定かではないが、言い伝えによれば、昔、筒井村と脇浜村の住人が対立していたとき、生田の里から両村の中間に移り住んだ長老が石清水八幡宮より勧請し、中の八幡宮と呼んだのが始まりと伝える。明治の中頃、一時二宮神社に合祀されたが、1932(昭和7)年に再び氏子の手でもとの地に戻している。戦後の社殿建立工事の時、地下1.8㍍のところから、礎石らしいものがみつかり祭器のかけらが出てきたという。

●「日暮通(ひぐれどおり)」の由来

鎌倉中期の天台座主・澄覚法親王が布引の滝を訪れて詠んだ「布引の滝見て今日の日は暮れぬ　一夜宿かせ峯の笹竹」の歌にちなんで付けられたという。また、旧生田村の字名に「ひぐら」があり、それに漢字をあてたとも言われている。

●「八雲通(やくもどおり)」の由来

日暮通にある中村八幡の「八」と北の東雲通の「雲」をあわせて付けられた町名といわれるが、はっきりしたことはわからない。

●「東雲通(しののめどおり)」の由来

一説には、平安時代の貴族・藤原家隆の「みつか夜のまだ臥し慣れぬ芦の屋の　つまもあらはに明る東雲」からとったといわれるが、定かではない。

●「旭通(あさひどおり)」の由来

鎌倉中期の貴族。西園寺実氏の「呉竹の夜の間の雨に洗ひ　ほして朝日に晒す布引の滝」からとったものだと言ったり、東隣の日暮通に対応して付けたものだと言ったりする。

●「雲井通(くもいどおり)」の由来

平安時代の藤原隆家の詠んだ「雲井よりつらぬき懸る白玉を　誰れ布引の滝といひけむ」の歌や、『栄華物語』滝の巻の皇太后宮太夫祐家の「めづらしや雲井遥に見ゆるかな　よに流れたる布引の滝」と詠んだ歌にちなんで付けられたという。

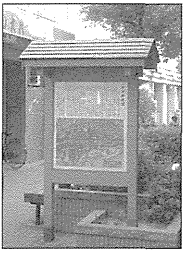
豆知識 西国街道と中央区・葺合浜手

西国街道は、古代に山陽道と呼ばれ、京の都と九州の大宰府を結ぶ主要幹線道路として発展し、近世には西国街道と呼ばれて西国と近畿地方を結ぶ道としてにぎわいを見せていた。中央区でもこの山陽道・西国街道が区内の真ん中を東西に走り、こうした道の発展とともに中央区の歴史が築かれてきたと言っても過言ではない。

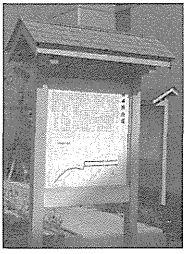
それでは、この西国街道が中央区内のどこを走っていたのであろうか。そもそも、京都を出発した西国街道は、現在の国道171号線のルートを平行・重複して走り、西宮の札場筋で現在の国道2号線と合流し、西へ向かった。この道は西宮市川西町と芦屋市打出町の境で分岐し、そのまま内陸部を走る本街道と、海岸沿いの村々をつないで走る浜街道とに分かれたのである。この二つの道は中央区の三宮で合流し、一本の道となりさらに西へと進んでいったのである。葺合浜手地区はまさにこの西国街道の本街道と浜街道の二本の道が地域の東西を横断しているのである。

さて、葺合浜手地区でこの二本の街道が通っていたところを再現してみよう。まず、本街道は灘区の岩屋(阪神岩屋駅付近)から筒井町と脇浜町の間の道を西に行き、日暮通と吾妻通の間を走り、生田川の雲井橋を渡り、旭通と雲井通の間のあじさい通りを抜けてJR三ノ宮駅構内を横切って、生田筋まで行き南に下がる。ただ、JR三ノ宮駅のあたりは駅構内の建設によって、街道がどこを走っていたかはよくわからない。なお、脇ノ浜の一里塚が吾妻通1丁目と日暮通1丁目あたりにあったのではないかと思われる。次に浜街道は生田川の小野柄橋を渡り、小野柄通と御幸通の間を進み、三宮センター街を西へと進み、生田筋に当たることになる。さらに、西国街道の二つの街道、本街道と浜街道は生田筋で合流し、そして、再び一本になった西国街道は三宮神社の南の筋を走り、大丸前の交差点から元町通へと入り西へと向かっていた。

震災後、葺合浜手地区のまちづくりを行っていく上で、この西国街道を一つの社会資源として地域の活性化に活用しており、この地区の本街道沿いにはこれまでに4カ所(春日野道・吾妻通・雲井通・あじさい通商店街入口)、地域の人々が中心になって、「旧西国街道」(笹山幸俊前神戸市長筆)の道標と高札場を模した案内板を設置している。

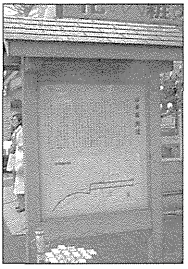


春日野道・旧西国街道の碑



吾妻通・旧西国街道の碑

雲井通・旧西国街道の碑



あじさい通商店街入口・旧西国街道の碑

⑧ 賀川豊彦生誕100年記念の碑

小野柄通1丁目、生田川公園内

生協活動の父として知られる賀川豊彦の生誕100年を記念して、1989(平成元年)年4月22日に建てられたモニュメントである。なお、この碑には賀川直筆の「死線を越えて　我は行く　豊彦」の銘がある。

賀川は1888(明治21)年に現在の兵庫区島上町で生まれ、貧しい幼年期を過ごした。1910(明治43)年の暮れ、彼は葺合の新生田川地区に引っ越し、キリスト教を熱心に信仰し、貧しい人々への献身的な奉仕を続けたのであった。1920(大正9)年、彼の自伝小説『死線を越えて』が刊行され、ベストセラーとなった。そして、彼の指導で1921(大正10)年、神戸購買組合が誕生するが、これが現在では全国一の規模を誇る生協・コープこうべの前身である。また、同じ年、友愛会関西労働同盟会の理事長として、川崎・三菱での労働大争議の指導を行ない、警察に検挙されたこともある。関東大震災後は活動の場を東京に移し、1960(昭和35)年に71歳の生涯を終えている。

なお、こうした賀川の業績をたたえ、彼の慈善事業を継承拡大するため、碑の建つ所から北東の位置、吾妻通5丁目に1963(昭和38)年、賀川記念館が建てられた。

●「小野柄通(おのえどおり)・小野浜町(おのはまちょう)」の由来

かつて、このあたりは生田神社の近くに広がる野で「生田の小野」として知られていた。近世、生田の小野の海岸付近に新田が開かれ「小野新田」と呼ばれ、その浜を「小野浜」と呼ぶようになった。また、江戸幕末の歌人・賀茂季鷹の詠んだ「分け入りし生田の小野の柄もここに　くちやはてむ布引の滝」歌にちなんで「小野柄」の名が付いたという。

●「御幸通(ごこうどおり)」の由来

生田神社が生田村から生田宮村へと社地を代えたので、生田村から生田宮村へ行く道を御幸通というようになったという。また、生田神社神官の後神(ごこう)氏が住んでいたからともいわれる。

⑨ 小野八幡神社

八幡通4丁目

●「八幡通(はちまんどおり)」の由来

祭神は応神天皇で、旧小野新田村の氏神。言い伝えでは、源平合戦の一ノ谷の戦いの時、生田の森で戦死した源氏の河原太郎・次郎兄弟のために源頼朝が報恩寺を建て、その鎮守として建てられたのが小野八幡であるという。報恩寺はもと大丸の北にあったというが、その鎮守の宮がなぜこの地にあるのかはわからず、こうした言い伝えはどこまで真実かはわからない。なお、報恩寺があったとされているあたり、三宮神社(三宮町2丁目)の境内には、震災前、「従是河原兄弟塚」の碑や「河原霊社」が建っている。

神社の入り口両脇に、二本の折れた鳥居があるが、これは震災前にしめ縄をかけ渡す「しめ鳥居」の一部だったもので、震災で倒壊したため、1996(平成8)年秋に「甦れ神戸　復興祈願」の文字を刻んで震災の記念碑としたものである。

なお、この地域を八幡通というのは、小野八幡神社があることにちなむ。

●「磯上通(いそがみどおり)・磯辺通(いそべどおり)・浜辺通(はまべどおり)」の由来

浜に近いところから、磯や浜の字が付けられた。もとは小野新田村の区域であった。海に近いところを「浜辺」、山手を「磯上」、中間を「磯辺」と名付けたという。

豆知識　八幡神社と中央区

八幡神社は全国で稲荷神社の次に多いといわれ、その本源は大分県の宇佐八幡宮である。大分では銅を産出していたことから、鍛冶職集団の氏神とされ、奈良時代に大仏建立の際中央に進出し、平安時代に祭神が応神天皇と結び付けられた。中世には源氏が氏神としたため、以後武家の守り神として栄えることになる。

中央区のうち旧葺合区(小野の他、旧葺合区域では筒井、熊内、中村、南宮宇佐の八幡社がある)と灘・東灘区にかけては八幡神社が多く祀られているが、これは祭神が応神天皇であり、神戸の伝説にしばしば登場する神功皇后がその母であることと何か関係があるのだろうか。

豆知識 神戸港の貨物拠点だった旧・神戸港駅

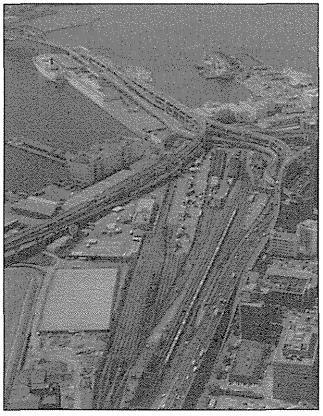
中央区にはかつて、国際港・神戸港の陸上貨物輸送を支えてきた大きな貨物駅が二つあった。一つはJR神戸駅の浜側にひろがるハーバーランドにあった湊川駅。そして、もう一つは2003(平成15)年11月末まで稼働していた神戸港駅である。

前者の湊川駅は、1934(昭和9)年に神戸駅が高架化したことで駅機能を旅客と貨物に分離したため設置された貨物駅で、港の中心部が現在の三宮南部よりずっと西側にあった時代に貨物の輸送を支えた駅だった。神戸港駅から線路がさらに西へと延び、この湊川駅まで貨物専用の軌道が走っていた。しかし、港の中心が西から東へ移るにつれ、貨物駅の利用度も減少し、神戸駅周辺の再開発とも連動して、最終的には1985(昭和60)年にハーバーランド(史跡編□参照)の着工に伴い、その役目を終えたのである。

もう一つの、神戸港駅は1907(明治40)年に開業した貨物駅で、神戸港第四突堤の付け根近くにあり、約9万5千㎡の広さを有する。この駅は、東海道本線の東灘信号場駅(灘区)から分かれた通称・神戸臨港線の終点に位置しているが、1980年代までは神戸港のすべての突堤と神戸駅浜側の湊川駅まで線路が延びていた。

戦前は綿花輸送で賑わい、ヨーロッパからの客船が着くと観光用にこの駅発、京都行の特別列車が運転されたこともあった。終戦直後は一時、米軍に接収されたこともあったが、1960年代には鉄鋼、小麦などの貨物が増え、年間120万ﾄﾝ位の取扱いがあり、駅員も200人を越えていた。しかし、70年代以降、船荷コンテナをトラックで輸送することが普及して行くに従い、鉄道貨物の需要が減少していった。それにより、駅の規模も少しづつ縮小され、駅廃止直前には、約20本のホームに全国各地から毎日10便の列車が到着、駅員も廃業時には作業のハイテク化を伴うとはいえ22人まで減り、取扱量も約38万ﾄﾝ(2002年)まで減少した。

神戸臨港線が神戸市の土地区画整理対象区域にかかることもあって、JR貨物は神戸港駅の廃止を決め、貨物駅機能は2003(平成15)年12月から須磨区の神戸貨物ターミナル駅に移ったのである。なお、神戸港の鉄道貨物拠点だった神戸港駅の跡地は、「神戸震災復興記念公園」として整備される予定である。



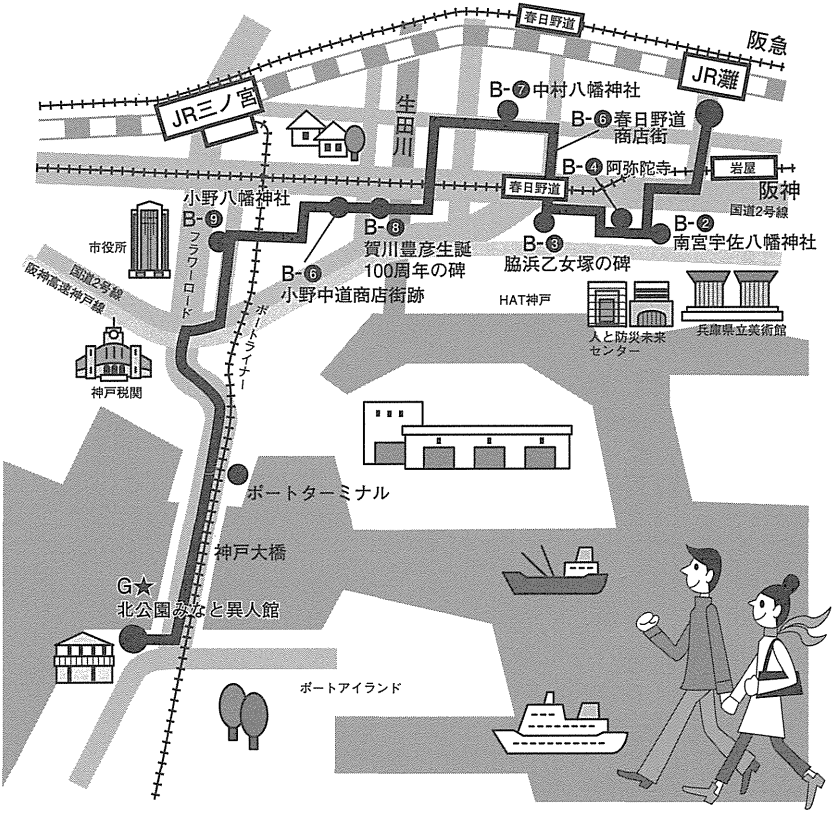
旧神戸港駅

ハーバーランド内・旧湊川駅の碑

モデルコース

葺合浜手の史跡と ポートアイランドを訪ねて

葺合区の浜手一帯は、かつては西国街道の本街道と
浜街道が平行して走り、多くの旅人が行き交いました。昔の旅人たちも
訪れたであろう神社・仏閣・史跡がこの辺りには点在しています。
葺合浜手に残る歴史の足跡をたどり楽しいひとときを感じましょう。



灘駅➡岩屋駅➡南宮宇佐八幡神社➡阿弥陀寺➡脇浜乙女塚の碑➡春日野道商店街➡中村八幡神社➡賀川豊彦生誕100年の碑➡小野中道商店街跡➡小野八幡神社➡ポートターミナル➡神戸大橋➡北公園（みなと異人館）

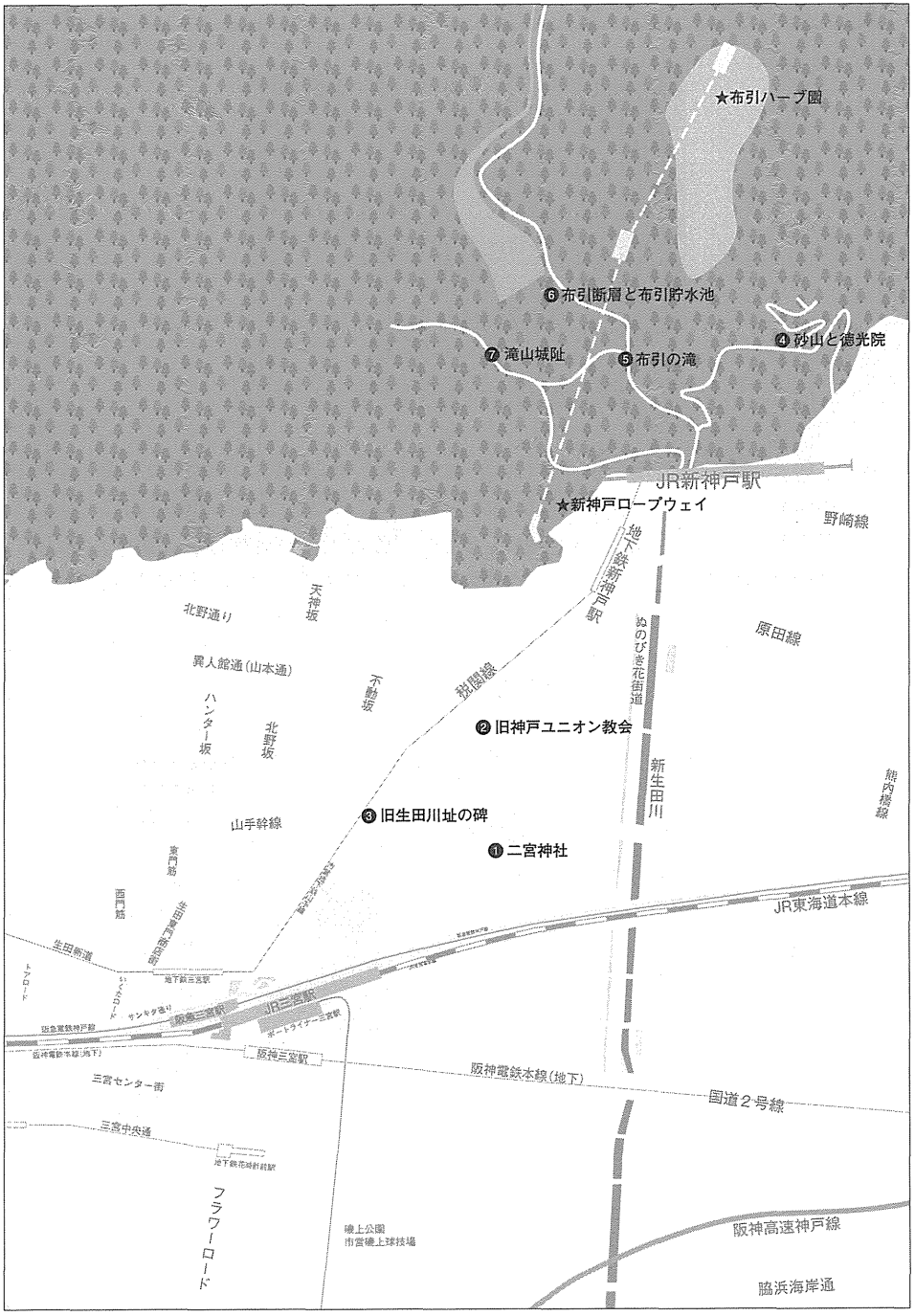
所要時間 約120分 ※所要時間は1km10分、各史跡滞在5分で計算しています。
※個人差により所要時間は変動いたします。

布引・生田川周辺

1. 二宮神社
2. 旧神戸ユニオン教会
3. 旧生田川址の碑
4. 砂山と徳光院
5. 布引の滝
6. 布引断層と布引貯水池
7. 滝山城阯

平安時代から景勝の地として知られ
和歌にも詠まれている
「布引の滝」をはじめ、春になると
約300本の桜が見事に咲き誇る
「生田川」など、水辺スポットの
散策が楽しめます。

エリアマップⓒ


★布引ハーブ園
❻布引断層と布引貯水池
❹砂山と徳光院
❼滝山城趾
❺布引の滝
JR新神戸駅
★新神戸ロープウェイ
野崎線
地下鉄新神戸駅
北野通り
天神坂
原田線
異人館通(山本通)
不動坂
幽閉線
ぬのびき花街道
ハンター坂
北野坂
❷旧神戸ユニオン教会
新生田川
熊内橋線
山手幹線
❸旧生田川址の碑
❶二宮神社
専門筋
西門筋
JR東海道本線
生田断道
地下鉄三宮駅
JR三宮駅
阪急三宮駅
阪急電鉄神戸線
ポートライナー三宮駅
阪神三宮駅
阪神電鉄本線(地下)
国道2号線
三宮センター街
三宮中央通
地下鉄花時計前駅
フラワーロード
磯上公園
市営磯上球技場
阪神高速神戸線
脇浜海岸通

❶ 二宮神社

二宮町3丁目

●「二宮町」の由来

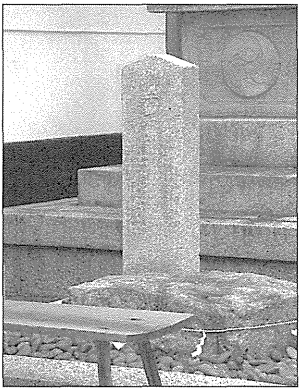
二宮神社

祭神は天穂忍耳尊（あめのおしほみみのみこと）を主神とし、宇迦之御魂（うかのみたま）、徳島明神、氷室明神、金山彦命（いさごやま）、応神天皇、少童明神を合祀。社伝によれば、生田神社が砂山に祀られていた時、大水で流され、神主の刀弥七太夫（とねしちだゆう）が御神体を背負い、この地に難を避けた。そのため後に生田の裔神（えいしん）八社の一つをここに祀ったのが起源という。明治時代の中頃、筒井、熊内、中尾、生田、中村、脇浜、小野新田の七ケ村の神社を合祀し総氏神としたが、後にもとに復した。ただ、生田村の八幡社だけは今日でも合祀されている。

また、境内には「御幸石（みゆきいし）」がある。これは刀弥七太夫が生田神社の御神体を背負って難を避けた際に、自分の家の庭石の上に一端安置したことから、この石を御幸石と名付け、後にこの神社の境内に置いたと伝えられるものである。

阪神大震災で落ちた正面の鳥居の石の島木と笠木の部分（鳥居の上部）は、従来より軽くするため鉄骨にスチールを巻いて石の吹き付け塗装を行って復興した。

なお、二宮町はこの神社があることにちなむ。

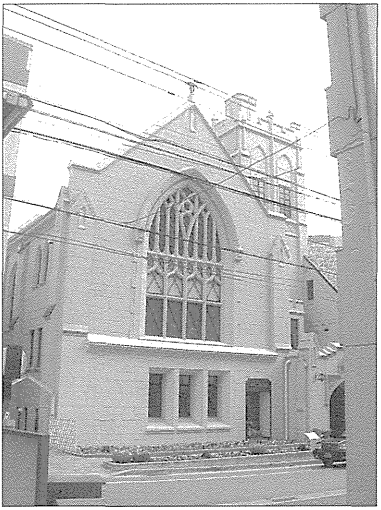

御幸石

●「琴ノ緒町」の由来

紀貫之が布引の滝を訪れた時に詠んだ歌「松の音を琴に調ぶる山風は　滝の糸をやすけて弾くらむ」と、旧生田村の字名「ことのお」を結びつけて町名にしたという。

❷ 旧神戸ユニオン教会

生田町4丁目



1872(明治5)年、居留地の48番(現、明石町・東京三菱銀行神戸支店)に建てられたユニオン・チャーチが前身で、1903(明治36)年に神戸ユニオン教会と改称し、1929(昭和4)年にこの地に移った。設立者はD.C.グリーンで、設立当初から神戸の外国人のために建てられたもの。アメリカの宣教師グリーンは1869(明治2)年に布教のため来日し、翌年神戸にやって来る。グリーンは東京から日本語の教師として市川栄之助夫妻を連れてくるが、当時まだキリスト教を禁じていた明治政府は市川夫妻をキリシタンとして捕え、夫は獄死した。その獄死数日前に建てられたのがユニオン・チャーチである。

ユニオン教会は1989(平成元)年に灘区長峰台に新会堂を建てたため移転してしまった。移転後ももとの建物(1928年築のゴシック風、鉄筋コンクリート3階建てで、W.M.ヴォーリスの設計による)は解体されずに残り、阪神淡路大震災でも建物本体の被害はそれほどなく、元通りしっかりと建っていた。なお、1999(平成11)年9月には国の登録文化財に認定されている。

1999(平成11)年11月からは、外観をそのままに内部を改修して神戸の老舗製パン店の本店として使用されている。集会室だった1階はパンや洋菓子の売り場として、また、天井の高さ10㍍の礼拝堂だった2階はカフェに生まれ変わり、多くの客で賑わっている。

③ 旧生田川址の碑

加納町3丁目

●「加納町」の由来

旧生田川は布引から税関線を通り、加納町3丁目、市役所の前のフラワーロードを通り税関前のあたりで海に流れていた。むかし、この旧生田川は旧菟原(うはら)郡と八部(やたべ)郡の境界でもあり、古くから有名であった。

ところが、この川はしばしば水害を引き起こし、付近の人々を苦しめた。明治に入り、下流にある居留地が水害で被害にあったため、1871(明治4)年から4年がかりで現在の新生田川へと付け替えたのである。旧川敷は加納宗七に払い下げられ、彼はその土地約10万坪を市街地として、彼の名にちなみ加納町と名付けたのである。今、旧生田川の流れていたあと、加納町3丁目の交差点脇に「史蹟　旧生田川址」の石碑が建てられている。

付け替えられた現在の生田川は、かつて一時、暗渠(あんきょ)にしその上を公園にしていた時期があったが、1938(昭和13)年の阪神大水害で大きな被害を出したため、暗渠をやめ今のような形にした。今では、川沿いの生田川公園には多くの桜の木が植えられ、「ぬのびき花街道」の愛称で親しまれ、花見のシーズンには多くの市民でにぎわう。

豆知識 生田川

中央区を流れる全長1790メートルの生田川(二級河川)は、中央区民はもとより、神戸市民のいこいの川である。また、神戸には立ち寄らない新幹線に乗る乗客が唯一両側をトンネルで挟まれた新神戸駅から望む神戸の景色もこの生田川の眺めに他ならない。また、川の上流には日本三大神滝の一つ、布引の滝があり、新神戸駅の裏からの道を通って滝に上るコースは市民のハイキングコースとしてにぎわいを見せている。

現在の生田川は、明治の初期に付け替えがなされ新神戸駅からまっすぐ南に流れているが、付け替え前(旧生田川)は布引から税関線を通り、加納町3丁目、市役所の前のフラワーロードを通り税関前のあたりで海に流れていたが、下流にある外国人居留地が水害の被害にあったため、1875(明治8)年に現在の新生田川へと付け替えた。

さて、旧生田川から現在の生田神社のあたりにかけては、古来の景勝地・生田の森のあった所で、現在でも生田神社の本殿奥にその名残の森がある。また、川の上流の布引の滝も古代から有数の景勝地であり、平安時代には生田の森や布引の滝を見に、多くの貴族や著名人がこの地を訪れている。さらに、生田川周辺、なかでも生田の森一帯は、源平合戦の一ノ谷の戦いの戦場となったのはもとより、南北朝動乱期の湊川の戦いの戦場でもあり、また、花熊合戦の戦場ともなったように、日本の歴史を変え、時代の転換点となった三つの戦いの舞台となったのである。これも、生田川の背後が森林であったため、戦略上利用しやすいと考えられたからであろう思われる。

こうして、生田川をはじめ、生田の森、布引の滝は古くからわが国を代表する景勝地として名を全国へと轟かせ、これまで全国的に有名な多くの古典文学作品の題材に使われてきている。

なお、生田川周辺には、この川の水力を利用した「水車」が江戸時代後半から大正時代頃まで回っていた。今では水車のことをしのぶものは皆無であるが、古い地図には、生田川周辺に水車があったことを示す水車のマークが描かれている。水車産業は江戸時代に六甲南麓の川で盛んに行われており、油絞り、酒造の米の精米、小麦ひきなどがなされていた。東灘区の住吉川の水車が全盛であったが、ここ生田川でも多くの水車が見られたのである。

●「生田町(いくたちょう)」の由来

昔、生田神社が砂山にあったところからそのふもとを生田村というようになり、明治時代になり生田町となった(「生田」の由来については生田神社の項目を参照)。

●「若菜通(わかなどおり)」の由来

泉隆寺でふれた若菜がこの地でとれたことによる。かつてこのあたりは生田の若菜の里と呼ばれ、「若菜御料畑」があった。

●「国香通(くにかどおり)」の由来

鎌倉中期の天台座主・澄覚法親王の詠んだ「布引の滝津瀬かけて難波津や　梅か香おくる春の浦風」の「梅か香」を採り町名にしたという。

●「神若通(かみわかどおり)」の由来

かつてこの地に滝勝寺の末寺の神若寺(しんじゃくじ)があったことから、寺が廃された後も地名として残った。ただし、読み方が後世、「しんじゃく」から「かみわか」にかわった。

●「旗塚通(はたつかどおり)」の由来

明治の頃まで6丁目から7丁目にかけて旗塚という古墳があったことから、それがそのまま町名となった。

④ 砂山（いさごやま）と徳光院

徳光院山門

砂山は別名丸山ともいわれ、この付近から弥生時代中期のものと思われる土器が多数発見された。いわゆる布引丸山遺跡である。大正年間より何度か遺物が出土し、それら出土した弥生式土器を故小林行雄博士は弥生時代中期のものと鑑定し、それ以来神戸を代表する遺跡の一つとなっているが、正式な発掘調査が行なわれておらず詳細は不明である（なお、この時出土した土器は現在神戸市教育委員会が保管している）。また、この砂山は生田神社が最初に祀られた場所だといい、古い時代に大水で流され、今の位置に移ったと伝えられている。

この砂山の北側の麓に川崎造船所の創業者、川崎正蔵の墓所と川崎家建立の徳光院がある。徳光院は1905（明治38）年に川崎正蔵が建立したもので臨済宗天龍寺派の寺院である。本尊は鎌倉時代作と伝えられる十一面観世音菩薩。この地はもと滝勝寺の境内地であった。なお、境内にある多宝塔（カラー頁 P122参照）は1971（昭和46）年に国の重要文化財に指定されている。この多宝塔は、もと明王寺（垂水区名谷町）の境内にあったのを正蔵が1900（明治33）年に譲渡され、自邸内の山に置かれていたものであるが、1938（昭和13）年にこの寺へ移築した。そして、この塔の木組の一部に「文明5年」（1473）の銘がある。また、多宝塔内に安置されている持国天・増長天の二像（いずれも平安時代作、カラー頁 P122参照）は県の重要文化財に指定されており、その他塔内には薬師如来像（1476〈文明8〉年作）もある。

広大な境内にはその他、朱塗の山門（1907〈明治40〉年に播州より移築）、鐘楼（1631〈寛永8〉年に伽耶院〈三木市〉に建立されたものを1907年に移築）、弁天堂など多くの建造物や石造品がある。

川崎正蔵墓所

豆知識　大和物語』の「菟原処女悲恋伝説」と生田川

東灘区御影塚町の静かな住宅街の中に、古墳時代前期に築かれた南向きの全長70㍍の前方後方墳が現存する。処女塚(おとめづか)というこの古墳を中心に、東西約2㎞の同じ距離の所に東求女塚(住吉)と西求女塚(西灘)という古墳があり、これら三基の古墳には古い言い伝えが今日まで時代を超えて伝わっている。

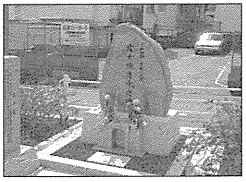
この伝説は、ひとりの女性をめぐる悲恋物語で、その昔万葉の歌人たちが歌にまで詠んだ話でもある。中でも高橋虫麿の歌にその内容があらわれており、それによれば、むかし、このあたりに絶世の美女が住んでおり、名を菟原処女(うないおとめ)といった。その美貌は遠方にまで知れ渡り、多くの男性から結婚の申し込みが絶えなかったという。そうした申し込みを悉く断ってきた菟原処女であったが、その中の二人の男性だけは断られても断られても求婚を繰り返したのである。その二人とは、地元の菟原壮士(うないおとこ)と和泉国の血沼壮士(ちぬおとこ)(小竹田壮士(しのだおとこ))であった。二人の求婚レースはとどまるところを知らず、挙げ句の果てには太刀を握り弓をとり争うまでに至ったのである。それを見た処女は、私のようなもののために立派な若者を争わせたのではこの世で誰とも結婚できないと考え、あの世で待っていますと母親に告げて自ら生命をたったのであった。その夜、血沼壮士の見た夢の中に処女があらわれたことから、実は自分のことを愛していたのだと思った血沼壮士は処女あとを追って生命を絶ってしまった。血沼壮士後追い自殺の知らせを聞いた菟原壮士はくやしがり、彼もすぐに後を追って死んでしまった。そのため縁者が集まって、菟原処女の墓を中心にして、東西等間隔の場所に処女の墓へと向き合う形で、東に血沼壮士(東求女塚)、西に菟原壮士(西求女塚)の墓を造ったと、虫麿は歌っているのである。また、万葉の歌人、大伴家持や田辺福麿などもこの話を素材に、歌を詠んでおり、中でも田辺福麿の「古への小竹田壮士の妻問ひし　菟会処女の奥津城ぞこれ」の歌碑が現在、処女塚の西のわきに置かれている。

ところで、この悲恋伝説は多くの人々の心をうち、後世にまで受け継がれて行き、文学作品の素材にまでなったのである。平安時代には、『大和物語』のなかにこの話が入り、舞台も生田川に移し、話が膨らんでいった。争った二人の男性は決着をつけるために、生田川に浮かぶ水鳥を射抜いた方と結婚を許すという処女の親の出した案を受け入れ、両者が同時に弓を射たところ、両方の矢がこれまた一羽の水鳥を同時に射抜いてしまったのである。結局決着はつかず、三人の若者は生田川に身を投げて死んだという話へと広がっていってしまった。なぜ大和物語で、舞台を東灘からこの生田川に移したのかは詳らかではないが、物語の中で菟原処女が詠んだ「すみわびぬわが身投げてむ津の国の生田の川は名のみなりけり」の歌にあるよう、この段の物語の落ちを「死んでいくのに生田とはつれないことだ」というように締めくくるため、「生田川」に舞台をもとめたのではなかろうか。

さらに、室町時代には謡曲『求塚』、明治時代に入ると森鴎外が戯曲『生田川』、大正時代には菊池寛が『慈悲心鳥』という具合に、多くの作品の素材として使われていくことになるのである。

しかし、処女塚を中心に東西二つの求女塚のこれら三基の古墳は考古学的にみて、異なった時代に造られており、これら一連の菟原処女にまつわる悲恋話は真実であるとは言い難い。おそらくは、これら三基の古墳も古墳時代にこれらの地域を支配した豪族の墓と考えられている。古墳が造られてから数百年経って、だれが埋葬されているかもわからなくなった奈良時代の人々が、ロマンを求めて伝えていた説話であろうと考えられる。ただ、この悲恋伝説は史実ではないが、万葉の昔から今日まで語り伝えられてきたという事実はいずれにせよ大事にしなければならず、こうした伝説を次の世代へと語り継いでいくことが我々に課せられた責務ではないだろうか。

なお、生田川周辺の地元住民が近年、大和物語によって伝説の舞台が生田川に移ったことを示そうと「大和物語　生田川之段　処女塚伝承之地」を神若橋西側に建立した。



処女塚伝承之地の碑

●「葺合町(ふきあいちょう)」の由来

中世、この地域に「葺屋荘」という荘園があった。一説ではこの地が葦屋と呼ばれる区域に入っていた時期があり、この「葦」がよく似た「葺」という字に誤写されたのではないかといわれている。そして、葺屋は「吹き屋根」に通ずるというので「葺合」に改められたというが定かではない。

⑤ 布引の滝

●「布引町」の由来

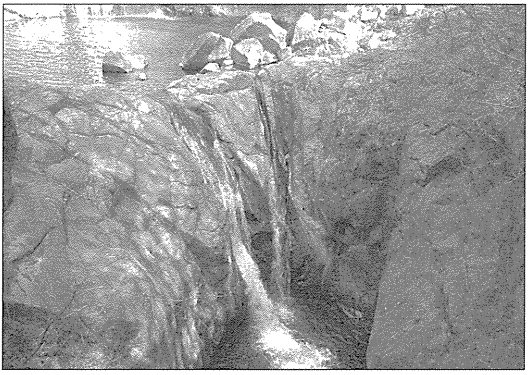
布引の滝・雄滝

布引の滝は古来から名勝の地として知られ、現在でも神戸の名所のなかでは全国的に知られたものの一つである。滝は新神戸駅の北約100㍍の所に雌滝が、その200㍍上に雄滝が、その間に下から鼓ケ滝、夫婦滝があり、この四つを総称して「布引の滝」と呼んでいる。

「布引」の名前は、滝を落ちる水がまるで布を垂れているように見えたため付けられたものと言われている。生田川が現在の流れに付け替えられた時、旧生田川が埋立てられ道と町になったが、道を「滝道」、町を「布引町」というようになった。ただ、大和政権時代にこのあたりを支配した豪族に「布敷首（ぬのしきのおびと）」の名が見られ、律令時代にはこのあたりを「布敷郷」と呼び、この布敷がなまって布引になったとする説があり、この考えからは地名の「布引」と滝の名前の「布引の滝」の由来は別個のものだととらえているようである。

滝の水源は生田川の上流、摩耶山の奥で六甲山系の獺（かわうそ）池から出ており、滝の下流は生田川となって海に流れている。雄滝は高さ43㍍、雌滝は高さ19㍍ある。こうした滝には、昔から、そこに竜宮城の乙姫さまが住んでいたという言い伝えがある。雄滝の上に五つの水のえぐった横孔があき、水はこの孔に入っては出て、白い水玉を飛ばしながら雄滝を落下して行く。この孔は上から滝姫宮、白竜宮、白鬚宮、白滝宮、五滝宮と言われ、乙姫はこの竜宮城に住み、竜神となり海へ出かけ多くの船や船人を守ったという。布引の滝が白く見えるのは、この乙姫が着ている白い布がさらされているからだという言い伝えがある。

日光華厳の滝、紀州那智の滝とともに三大神滝と呼ばれ、古くから神秘的な伝説がつくられたりした。また、平安時代の昔から数多くの貴族や歌人がこの地を訪れ、古典文学作品などにもしばしば登場する。『伊勢


夫婦滝

鼓ヶ滝

雌滝

物語』には、在原業平と兄の行平と目される公卿が滝見物をした様子が描かれ、『平治物語』には平清盛の滝見物の際に清盛に連れられて滝に来た家来の難波経房が悪源太源義平の雷に殺されるという話が載っており、さらに、『源平盛衰記』には清盛の長子重盛が滝見に来たとき、家来の難波経俊が滝壷に入り竜宮城を見て外に出たところを雷に打たれたという話が書かれてある。

●「雲居にさらす布引は、我朝第二の滝とかや。業平の中将のかの滝に、星か川辺の螢かと、浦路遥かに詠めけん、いづくなるらんおぼつかな。」(『源平盛衰記』)

●(後醍醐天皇は)「布引の滝など御覧じやらるる…」(『増鏡』)

◆布引の歌碑

明治のはじめ頃(明治5年か)、花園社という市民団体ができ、滝の周辺を布引遊園地として、平安時代から江戸時代にかけて詠まれた布引の滝の名歌の碑36を建てた。これらはその後散逸してしまい、1934(昭和9)年に当時の神戸市観光課が18基を復興し、これらのうち17基(1基は阪神淡路大震災で喪失)は現在でも新神戸駅からみはらし展望台に至るハイキング道沿いに点在している。近年、中央区役所が未復興のうち14基を復興した。以下に、現存する歌碑及び未復興の歌碑の歌を掲げておく。

●布引の滝のしらいとなつくれは
絶えすそ人の山ちたつぬる(藤原定家、歌番1)

●あしのやの砂子の山のみなかみを
のほりて見れは布ひきのたき(藤原基家、歌番2)

●布引の滝の白糸わくらはに
訪ひ来る人も幾代経ぬらむ(藤原行能、歌番3)

●津の国の生田の川の水上は
今こそ見つれ布引の滝(藤原基隆、歌番4)

●水の色たた白雪と見ゆるかな
たれ晒しけむ布引のたき(源顕房、歌番5)

●音にのみ聞きしはことの数ならて
名よりも高き布引の滝(藤原良清、歌番6)

●さらしけむ甲斐もあるかな山姫の
たつねて来つる布引の滝(藤原師実、歌番7)

●山人の衣なるらし白妙の
月に晒せる布引の滝(藤原良経、歌番8)

●山姫の嶺の梢にひきかけて
晒せる布や滝の白波(源俊頼、歌番9)

●幾世とも知られぬものは白雲の
上より落つる布引の滝(藤原家隆、歌番10)

●いかなれや雲間も見えぬ五月雨に
さらし添らむ布引の滝(藤原俊成、歌番11)

●岩はしるおとは氷にとさされて
松風おつる布引のたき(寂蓮、歌番12)

●白雲とよそに見つれと足曳きの
山もととろに落つる滝津瀬(源経信、歌番13)

●水上の空に見ゆれは白雲の
立つにまかへる布引の滝(藤原師通、歌番14、生田川公園内に復興)

●呉竹の夜の間に雨の洗ひほして
朝日に晒す布引の滝(西園寺実氏、歌番15、生田川公園内に復興)

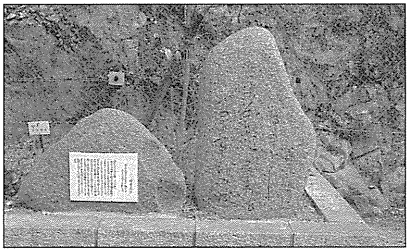
●うちはへて晒す日もなし布引の
滝の白糸さみたれの頃(藤原為忠、歌番16、生田川公園内に復興)

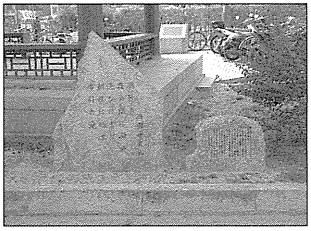
●水上は霧たちこめて見えねとも
音そ空なる布引のたき(高階為家、歌番17、生田川公園内に復興)

●水上はいつこなるらむ白雲の
中より落つる布引の滝(藤原輔親、歌番18、未復興)

●岩間より落ち来る滝の白糸は
むすはて見るも涼しかりけり(藤原盛方、歌番19、未復興)

2番藤原基家


6番藤原良清


15番西園寺実氏

●松の音琴に調ふる山風は
滝の糸をやすけて弾くらむ(紀貫之、歌番20)

●たち縫はぬ紅葉の衣そめ出てて
何山姫のぬの引の滝(順徳院、歌番21)

●ぬきみたる人こそあるらし白たまの
まなくもちるかそての狭きに(在原業平、歌番22)

●我世をは今日か明日かと待つ甲斐の
涙の滝といつれ高けむ(在原行平、歌番23)

●こきちらすたきのしら玉拾ひおきて
世のうきときのなみたにそかる(在原行平、歌番23別碑)

●雲井よりつらぬきかくる白玉をたれ
布引のたきといひけむ(藤原隆季、歌番24、未復興)

●久かたの天津乙女の夏衣
雲井にさらす布引のたき(藤原有家、歌番25)

●ぬのひきのたき見てけふの日は暮れぬ
一夜やとかせみねのささ竹(澄覚法親王、歌番26ー震災で喪失ー)

●布引のたきつせかけて難波津や
梅か香おくる春の浦風(澄覚法親王、歌番26同碑ー同上ー)

●たち縫はぬ衣着し人もなきものを
なに山姫の布晒すらむ(伊勢、歌番27)

●ぬしなくて晒せる布を棚はたに
我こころとやけふはかさまし(橘長盛、歌番28)

●雲かすみたてぬきにして山姫の
織りて晒せる布引のたき(加藤枝直、歌番29、未復興)

●主なしと誰かいひけむおりたちて
きて見る人の布引のたき(小沢蘆庵、歌番30、未復興)

●くりかへし見てこそ行かめ山姫の
とる手ひまなき滝の白糸(鈴木重嶺、歌番31、未復興)

●布引の滝のたきつ瀬音にきく
山のいはほを今日見つるかも(賀茂真淵、歌番32、未復興)

●たち縫ぬ絹にしあれと旅人の
まつきて見や布曳の滝(賀茂季鷹、歌番33)

●分入し生田の小野の柄もここに
くちしやはてむ布曳の滝(賀茂季鷹、歌番33別碑)

●布引のたきのしらいとうちはへて
たれ山かせにかけてほすらむ(後鳥羽院、歌番34)

●螢とふあしやの浦のあまのたく
一夜もはれぬ五月雨のそら(後鳥羽院、歌番34同碑)

●世と共にこや山姫の晒すなる
白玉われぬ布引のたき(藤原公実、歌番35、未復興)

●たちかへり生田の森の幾度も
見るとも飽かし布引の滝(源雅実、歌番36、未復興)

●千代かけて雄たき女瀧の結ほれし
つきぬ流を布引の川(作者不詳、番外1)

●みそ六つのひに響きけり山姫の
織る妙なる布引のたき(太田錦里、番外2)

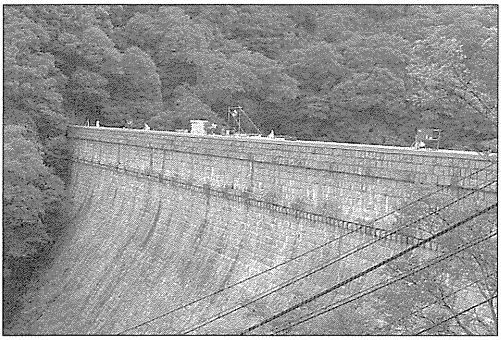
●涼しさや嶋へかたふく夕日かけ(布引坊、句碑)

21番順徳院

23番在原行平

生田川公園内・歌碑のみち

⑥ 布引断層と布引貯水池



布引貯水池、五本松堰堤

1995(平成7)年の阪神・淡路大震災を引き起こした地震は断層の活動であったわけだが、中央区には新神戸駅の真上を走る諏訪山断層とそれに平行する副断層の布引断層が著名なものとしてあげられる。このうち、布引断層については布引貯水池でその断層を見ることができる。貯水池から見える崖には岩石がたてに深く掘り込まれている様子を確認できるが、これが断層で、この布引断層は水平方向に動いた右横ズレ断層(断層の向こう側の土地が右へずれる)であると言われている。

また、この布引断層の真上に造られたのが布引貯水池である。神戸市は1900(明治33)年に全国で七番目の近代式水道を始めたが、この時に給水された水がこの貯水池の水である。このときに布引貯水池のダムも完成した。ダムは正式には「五本松堰堤」といい、重力式コンクリートハイダム(コンクリートの重量で貯水池の水をささえる)の形式をとる。高さが約33㍍で、水道専用のこの形式のダムとしては国内でも最も古いものの一つに数えられている。なお、このダムは国の登録文化財になっている。

布引断層

豆知識 新神戸ロープウェー(神戸夢風船)と布引ハーブ園

新神戸ロープウェー(神戸夢風船)は、布引公園とその中に誕生した布引ハーブ園(カラー頁 P130参照)への交通手段として、1991(平成3)年に開業。ふもとの「北野町1丁目」駅から「風の丘」駅を経て、終点の「布引ハーブ園」駅までの全長約1.5kmを、6人乗りのゴンドラ69台が、約10分間で結んでいる。

布引ハーブ園は、神戸市制100周年記念行事の一環として、布引公園の中に建設、1991(平成3)年にオープン。園内では約150種、7万5千株のハーブが満喫できる。

⑦ 滝山城阯

滝山城は新神戸駅の北、生田川西の標高323㍍、通称城山にあった中世の山城である。現在、山の頂上には「史蹟　滝山城阯」の大きな石碑が建っている。築城年代、築城者とも不明であるが、『正慶乱離志』の1333(元弘3)年の記述のなかに、赤松則村が護良(もりなが)親王の令旨(りょうじ)を受け挙兵した時のことが書かれており、そこには「赤松はもとの布引の城に篭る」とあり、その年には滝山城がすでに存在していたものと思われる。しかし、その後は滝山城も一時歴史の舞台から姿を消し、再び登場するのは1556(弘治2)年のことである。すなわち、当時は、摂津を支配していた細川氏を下剋上で倒した三好長慶の家臣、松永久秀がこの城におり、その年に久秀が長慶を城に招いたことが『応仁広記』に出てくるからである。そして、その時久秀は観世大夫の猿楽を催し、千句の連歌を詠んでいることがそこには記述されている。その後、久秀は三好三人衆と不和となり、三人衆が1566(永禄9)年2月にこの城を攻めたが落ちず、なかなか堅固な城であったことがうかがえる。しかし、同年6月には足利義昭の命により篠原長房に城を攻め落とされてしまう。その長房も1568(永禄11)年に織田信長の攻略にあい滝山城を捨てて逃げた。そのため城は信長の手中に入り、摂津守護の荒木村重の支配するところとなるのであった。その村重も信長に謀叛をおこし、1579(天正7)年とうとう落城してしまうことになり、約250年間の長い歴史を閉じたのである。

豆知識 美しい川を未来へ　～布引・市ヶ原を美しくする会の活動～

布引・市ヶ原エリアは、市民の憩いの場である生田川や、日本三大神滝の１つである「布引の滝」など古典文学作品にもしばしば登場する古くからの景勝地であり、都心から近いこともあって、多くの人々が訪れ、観光やハイキングを楽しんでいる。

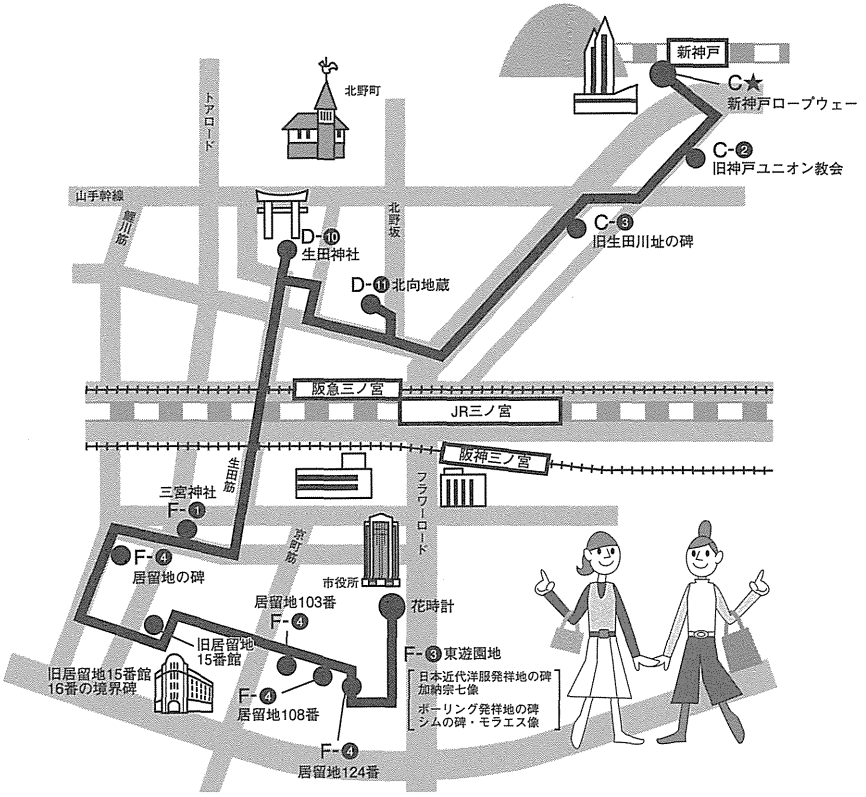
この美しい自然を守り育てるとともに、その自然とのふれあいの中で青少年の健全育成を図ることを目的として、1979(昭和54)年5月に登山会・子ども会・婦人会・PTA などが中心となって「布引・市ヶ原を美しくする会」が設立され、豊かな自然を活動拠点として、各種イベントやクリーンウォークなど様々な活動を行っている。

生田川では新神戸トンネルの延伸とともに、生田川がよりいっそう身近に親しめるように、地域住民の意見を採り入れながら公園の再整備が進められており、地元住民が主体となって、訪れる人の気持ちが癒される豊かな空間を守り育てるための取り組みが行われている。

モデルコース

六甲開山の父、A.H.グルームと異国情緒を訪ねて

1895(明治28)年、A.H.グルームが六甲山に別荘を建て、自費で開発を始めてから2005(平成17)年で110年目。グルームは居留地101番で商館を構えたことから「百一のダンナ」とも言われました。グルームが活躍した旧居留地内や異国情緒ただよう史跡、そして、神戸の英字新聞「ジャパン・クロニクル」紙の50周年特別号にも詳細に紹介されている生田神社などをめぐり、新神戸ロープウェー・北野1丁目駅まで散策しましょう。



神戸市役所北花時計➡東遊園地(日本近代洋服発祥地の碑・加納宗七像・ボーリング発祥地の碑・シムの碑・モラエス像など)➡居留地124➡居留地108番➡居留地103番➡旧居留地15番館と16番の境界碑➡居留地の碑➡三宮神社➡生田神社➡北向地蔵➡旧生田川址の碑➡旧神戸ユニオン教会➡新神戸ロープウェー

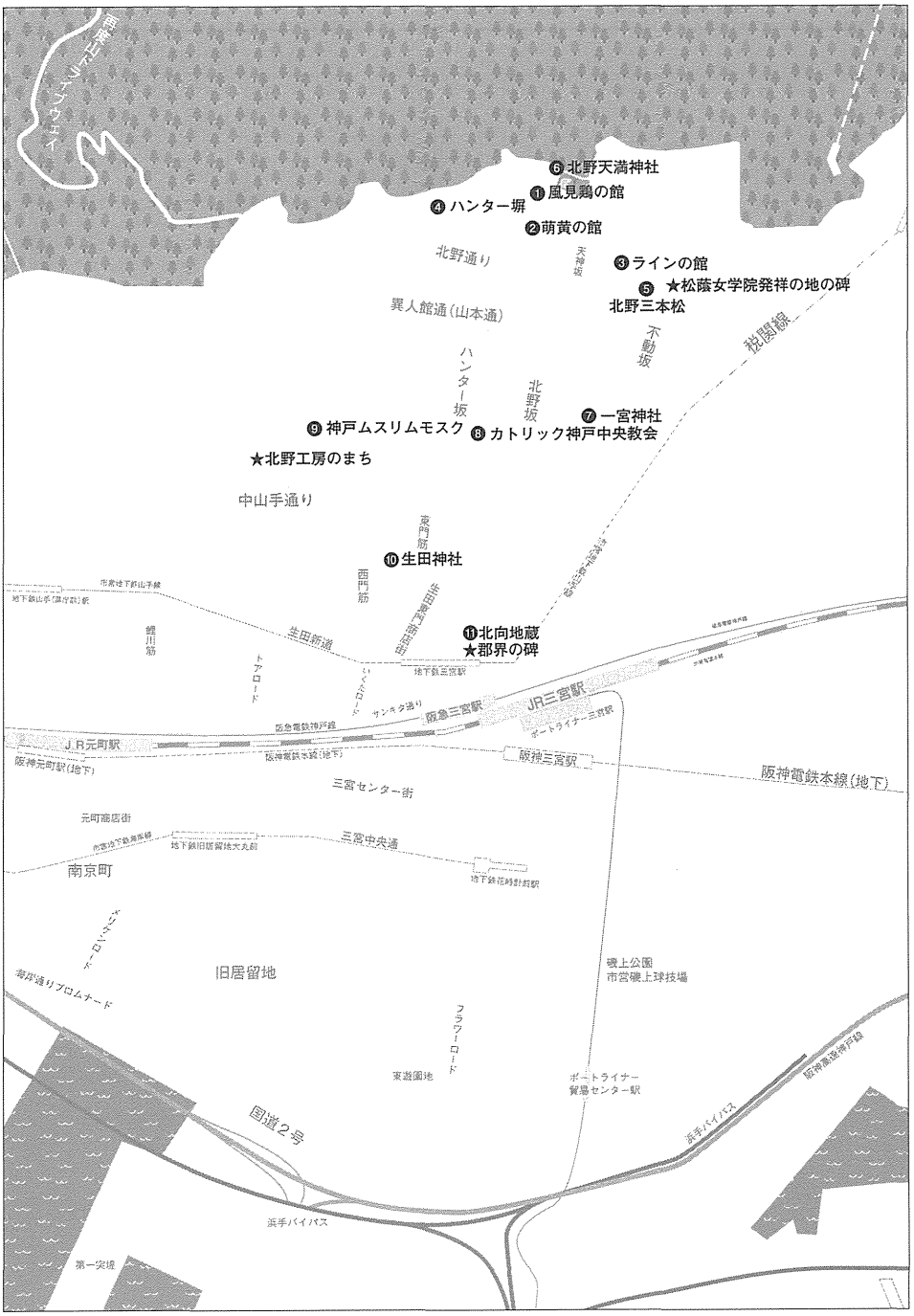
所要時間 約145分 ※所要時間は1km10分、各史跡滞在5分で計算しています。
※個人差により所要時間は変動いたします。

北野・トアロード周辺

❶ 風見鶏の館
❷ 萌黄の館
❸ ラインの館
❹ ハンター塀
❺ 北野三本松
❻ 北野天満神社
❼ 一宮神社
❽ カトリック神戸中央教会
❾ 神戸ムスリムモスク
❿ 生田神社
⓫ 北向地蔵

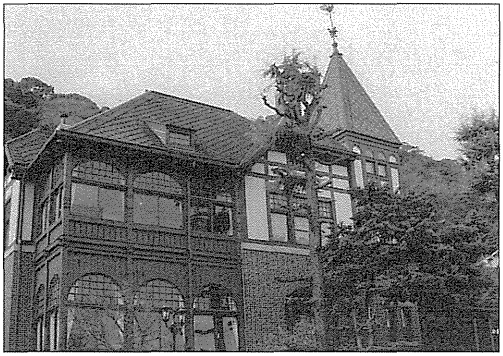
異人館で知られる神戸の代表的観光地。
今も多くの外国人が住むこの地に
足を運び、異国情緒を楽しんでみては
いかがでしょう。

エリアマップ❽


ウェイ
❻北野天満神社
❶風見鶏の館
❹ハンター堺
❷萌黄の館
北野通り
天神坂
❸ラインの館
❺★松蔭女学院発祥の地の碑
北野三本松
異人館通(山本通)
不動坂
ハンター坂
北野坂
❼一宮神社
❾神戸ムスリムモスク
❽カトリック神戸中央教会
★北野工房のまち
中山手通り
東門筋
❿生田神社
西門筋
生田新道
⓫北向地蔵
★郡界の碑
鯉川筋
トアロード
地下鉄三宮駅
阪急三宮駅
JR三宮駅
ポートライナー三宮駅
JR元町駅
阪神元町駅(地下)
阪神三宮駅
阪神電鉄本線(地下)
三宮センター街
元町商店街
三宮中央通
南京町
地下鉄花隈駅
旧居留地
磯上公園
市営磯上球技場
フラワーロード
東遊園地
ポートライナー
貿易センター駅
国道2号
浜手バイパス
第一突堤

❶ 風見鶏の館（旧トーマス邸）

北野町3丁目



北野町の異人館の中では唯一の煉瓦（れんが）造りの異人館である。ドイツ人貿易商G.トーマスが自邸として1909（明治42）年に建てたもので、ドイツ人ゲオルグ・デ・ラランデの設計による。半地下のある2階建てで、地階の厨房から1階の食堂まで食事運搬用リフトが設置されており、当時の最先端の設備を備えていたことがうかがえる。また、尖塔の「風見鶏」は雄鶏が警戒心の強いことから魔除けになると信じられていることから付けられたものである。

国の重要文化財に指定されている（カラー頁 P128参照）。

豆知識 異人館が北野町にできたわけ

北野町から山本通にかけては「異人館」と呼ばれる洋風住宅と和風住宅のミックスした、神戸ならではの異国情緒あふれる住宅が30数棟残っている。この界隈の主要部分は、国・市によって伝統的建造物群保存地区に指定され、この景観を保存しようと努めている。

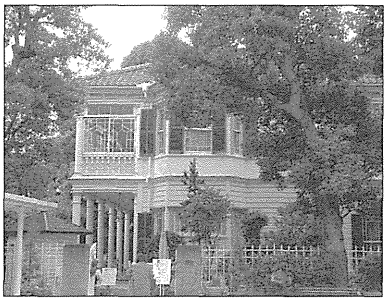
1867（慶応3）年12月7日の神戸開港後、外国人居留地が市役所の西側一帯に設置されたが、来日する外国人の数が多く住宅不足という問題が生じたため、政府は居留地以外に生田川から宇治川までの間の雑居を認めた。そこで居留地に住めない来日外国人は新たな住環境を求め、山の手に住居を建てることにした。さらに、居留地内に住んでいた外国人たちも商売が安定していったことから、仕事場と住居を分けることを考えはじめ、こうした人達も山の手へ住宅を求めていったのである。南向きの斜面に、神戸港を一望できる恵まれた環境にある、この北野町界隈に異人館が建ち並ぶようになったのは明治20年代（1887～1896）頃のことであった。外国人建築家のもと、日本人大工・左官・石工が腕をふるった力作である。これら異人館の特徴は、木造2階建て、ベランダ、張出窓があり、外壁はペンキで塗られ、屋根の上にはれんが積みの煙突がのっている、というものである。なお、北野の異人館が脚光を浴びるようになったのは1977（昭和52）年からはじまったNHKのドラマ「風見鶏」の舞台になってからで、それ以降、神戸を代表する観光ポイントとなり多くの観光客が訪れるようになった。

なお、今でも外国人が多く住むこの北野町界隈には、カトリック神戸中央教会、神戸ムスリムモスク（イスラム教寺院）、関西ユダヤ教団、ジャイナ教寺院など、様々な国の宗教施設が点在している。

北野・トアロード周辺

❷ 萌黄の館（旧シャープ邸、もと白い異人館）

北野町3丁目



寄棟造の木造2階建て、1903（明治36）年に建てられたもので、長く「白い異人館」として親しまれてきた。1988（昭和63）年からの解体修理で、建築当初は外壁が鶯色であることがわかり、現在の色合で修復された。国の重要文化財に指定されている（カラー頁 P128参照）。

北野・トアロード周辺

❸ ラインの館（旧ドレウェル邸）

北野町2丁目

1915（大正4）年に建てられた、寄棟造２階建ての異人館。「ライン」の名は外壁の下見板のライン（横線）がきれいなことから名付けられた（カラー頁 P129参照）。

北野・トアロード周辺

❹ ハンター塀

北野町4丁目

ハンター坂を登り切った高台にかつてハンター邸があった。ハンター邸は1963（昭和38）年に灘区の王子公園へ移築・保存されたが、その名残りが、今でもハンター塀として残されている。かつてのハンター邸へ行く手前の坂道に古い塀が続いているが、この塀にハンターの頭文字の「H」が埋め込まれているのである。

⑤ 北野三本松

北野町２丁目

北野三本松

この地は昔、すぐ北の東西に走る道の峠にあたり、三本の松が遠くからの目印となり、旅人や付近の人の憩いの場となっていた。明治の頃、三本そろっていた松の老木も、大正時代の初め頃、この地が外国人の宅地の中に入ってしまい、じゃまになるとして一本の松が切られてしまった。その後、1932(昭和7)年に台風で二本目が倒れ、最後の一本も倒れる危険があったため、1938(昭和13)年に伐採されてしまった。現在では松の切り株が残されており、今なお、その地を北野三本松と呼び、その場に石の不動明王像が安置されている。なお、二本目の松が倒れた時、この小さな丘が南に開口した横穴式石室をもつ古墳であることが、偶然にもわかったのである。この古墳は三本松古墳と呼ばれている。

◆「松蔭(しょういん)女子学院発祥の地」の碑(北野町２丁目)

灘区にある神戸松蔭女子学院大学の発祥の場所、北野三本松入口付近に「松蔭女子学院発祥の地」碑がある。1892(明治25)年に、英国聖公会の宣教師達によって設立された松蔭女子学院は、当初、この三本松のすぐ近くにまなびやを持っていた。校舎が三本松の蔭に隠れることから「松蔭」の名を付けたと言われている。

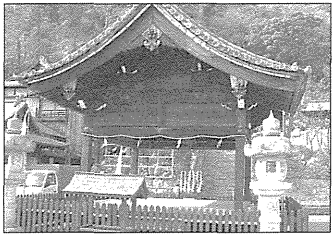
北野・トアロード周辺

⑥ 北野天満神社

北野町3丁目

●北野町の由来

北野天満神社

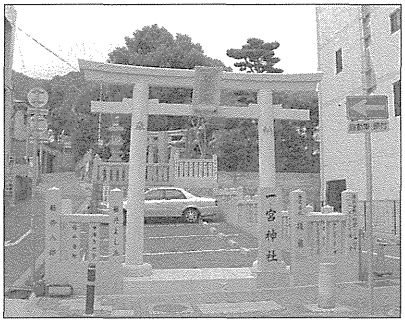

拝殿

異人館街の中、風見鶏の館の東隣にある鳥居をくぐり60段の石段を登ると北野天満神社の境内にでる。祭神は菅原道真で、旧北野村の氏神。この神社は、平清盛が神戸の福原に遷都したとき(1180〈治承4〉年)、京都の北野天満宮になぞらえて建立し、僧信海を別当においたと言われている。本殿下の拝殿は1742(寛保2)年の建立といわれている。なお、このあたり一帯を北野村(後の北野町)と呼んだのは、この北野天満神社があったからだと言う。

北野・トアロード周辺

⑦ 一宮(いちのみや)神社

山本通1丁目



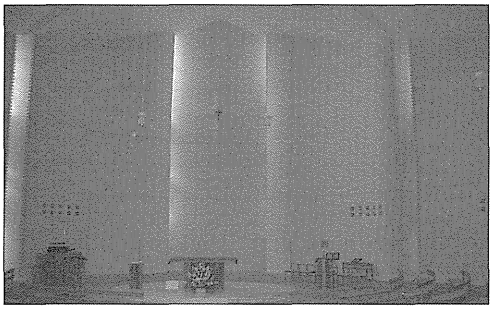
祭神は田所姫命(たどころひめのみこと)で、生田裔神(いくたえいしん)八社のうちの一宮といわれている。旧北野村の氏神。1690(元禄3)年の調書に「市の宮」とあり、この神社を中心に定期的に市が立っていたのではないかといわれているが定かではない。現在の春日造の社殿は第二次大戦の戦災後、新築されたものである。

阪神・淡路大震災で倒壊した鳥居は、2002(平成14)年12月、元の場所から少し南側に新たに建立した。

●「山本通(やまもとどおり)」の由来

山手の街づくりの完成から、山の方という意味で、「山本」と名付けられたという。

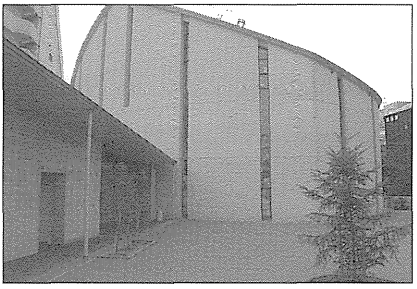
⑧ カトリック神戸中央教会（旧中山手カトリック教会）　中山手通1丁目


現教会内部

コミュニティ道路とハンター坂の交差する東南角にあるこの教会は神戸最初のキリスト教会の流れをくんでいる。中山手カトリック教会時代の建物は戦災に遭って焼失したため、1958（昭和33）年に建てられたものであるが、大きなステンドグラスは非常に美しい。1868（明治1）年、神戸にやってきたはじめての宣教師はフランス人ムニクウで、彼は神戸で最初のミサをフランス軍艦デュプレ号で行なったといわれている。また、当時まだキリスト教は禁制の時代で、その中を彼は元町通で毎日曜にミサを行なっていたという。1870（明治3）年に彼は居留地の37番（現大丸）にカトリック教会を建てたが、その翌年彼はこの世を去っている。1923（大正12）年、カトリック教会は現在の位置に移された。

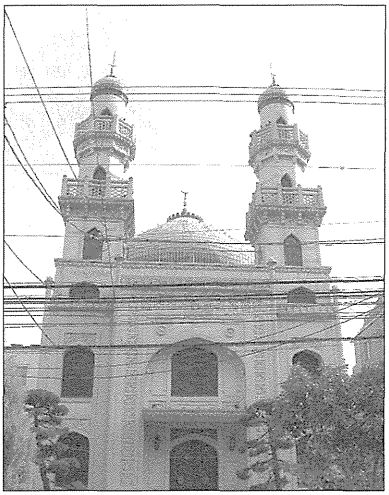
阪神・淡路大震災で建物が半壊し、被災後しばらくは応急処置でこの建物を使用していたが、2000（平成12）年に元の建物を取り壊し、新たな建物を建設することを決定した。区内では同じ系列の下山手カトリック教会（市内最古の教会建築）が震災で全壊したため、今回の再建は、中山手、下山手両教会を統合する形で行われることになった。さらに、両教会に灘区の灘教会も統合、新たに生まれ変わる教会の聖堂はもとの中山手カトリック教会の雰囲気とは一新し、箱船をイメージしたもので「カトリック神戸中央教会」と名付けられ、2004（平成16）年秋に完成した。

旧中山手
カトリック教会


現教会外観

⑨ 神戸ムスリムモスク

中山手通3丁目



1935(昭和10)年、日本ではじめて建てられたイスラム教寺院で、神戸ムスリムモスク(通称、神戸回教寺院)と呼ばれている。スンニ派に属するイスラム教寺院で、神戸に住むイスラム教徒の信仰の中心となっている。周辺の建物は第二次大戦でほとんど焼失してしまったが、この寺院だけは奇跡的に難を逃れた。インドのイスラム様式といわれる建築で、中央のドームの上には三日月型の装飾があり、大小四基の尖塔が空にむかってそびえている。

●「中山手通(なかやまてどおり)」・「下山手通(しもやまてどおり)」の由来

明治のはじめ、山手新道が完成したときに、山手の町ということで名付けられ、北から上山手通、中山手通、下山手通となった。このうち、上山手通はのちに中山手通と山本通に編入されてしまったため消えてしまった。

豆知識 北野工房のまち(旧北野小学校)

北野地域の新たな観光スポット・北野工房のまちは、この地域にあった旧北野小学校の校舎をそのまま再利用してできた施設である。

1908(明治41)年に開校された旧北野小学校は1996(平成8)年、児童数の減少と阪神・淡路大震災の被害により、隣接する二小学校との統合が決定され閉校となった。閉校時に90年近い歴史を持つ小学校だったため、多くの卒業生をはじめ地元の人々が、思い出の詰まった校舎をなんとか保存できないかという声が巻き起こった。一方、小学校の東を南北に走るトアロードは、異人館街から居留地への神戸在住の外国人たちの通勤路として利用され、神戸のハイカラ文化を培ってきたところでもあり、トアロードの復権を願う地元商店会の人々はその拠点にここを利用したいという要望が持ち上がっていた。

こうした様々な意見を組み入れる形で、神戸市が旧北野小学校の校舎を保存し、そこに神戸ブランドに出会う体験型工房を設置、校庭を北野地区観光の観光バス駐車場として活用するという構想をまとめ、1998(平成10)年11月に、「北野工房のまち」はオープンした。

統廃合された学校の多くは、その校舎も取り壊されていくという運命をたどる中、小学校時代の雰囲気をそのまま残し、別の施設に転用されるというモデルケースになったのではないだろうか。

⑩ 生田神社

下山手通1丁目

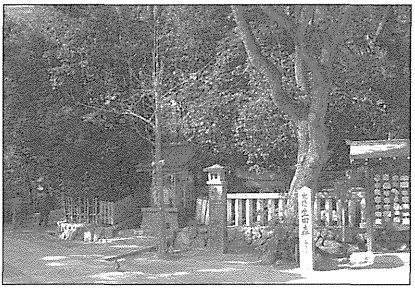
生田神社

正月の杉飾り

祭神は稚日女尊。旧生田区の村々の総鎮守。『日本書紀』によれば、神功皇后が朝鮮出兵からの帰途、武庫の水門で船が急に進まなくなり、その原因を占ったところ、「活田長狭」に稚日女尊を祀ればよいという記述が見られる。それがこの生田神社だといわれている。言い伝えでは、もともとは砂山にあったが、洪水で流されてしまい、刀弥七太夫に背負われて現在の地に移されたという。また、生田神社は昔から松をきらうことで知られていた。これももともと砂山にあったという言い伝えから来るもので、生田の神は砂山に祀られていた時、山一面に松の木を茂らせていたのだが、洪水で流されそうになったとき、茂らせた松が全く役に立たなかったので、それ以来松を嫌うようになったというのである。そのことから、今でも生田神社は正月には「門松」を立てず、「杉飾り」を立てている。そして、今、境内の生田の森には松が一本も生えていないというのである。

こうした伝説はともかく、生田神社は延喜式(927〈延長5〉年)という法律に記載のある神社、すなわち「式内社」で、その当時からすでに存在していた神社ということになる。なお、大和政権時代このあたりを支配していた豪族、生田首と何らかの関係があるのかもしれないが、詳しいことはわからない。また、生田神社は古くから朝廷の信仰が厚く、風雨や災害の時には勅使を奉じて祈願することたびたびであった。朝鮮半島からの使者が来た時は、この神社で醸した酒を、敏馬の浦でもてなしたという。

生田の森



ところで、806(大同1)年、生田神社に44戸の神戸(かんべ)が与えられたというが、この神戸とは神社に租税を納める集落のことをいう。生田神社に接した神戸が神戸村となり、その村の海岸が幕末に神戸港として開港されたため、歴史的に古い名の「兵庫」をおさえて、「神戸」が市名となったのである。なお、「生田」の名は川沿いにあって稲の生育のよいことからつけられた田の美称だといわれている。

現在、本殿の奥に繁った森が、神社の神秘性を増しているが、もともとはこの神社から旧生田川のほとりまで森が及んでおり、「生田の森」と称された。この生田の森は古来から有名で、『枕草子』のなかにも「杜は生田…」と記されている。

境内には源平合戦の際、梶原景季が梅の枝を箙(矢を入れる道具)にさして奮戦したという「えびらの梅」や、平敦盛の遺児が父の墓所を訪れる途中で休息したという「子敦盛の萩」などもある。こうして、生田の森は、源平合戦の一ノ谷の戦いの戦場となったのはもとより、南北朝動乱期の湊川の戦いの戦場でもあり、また、花熊合戦の戦場ともなったのである。これも、生田川の背後が森林であったため、戦略上利用しやすいと考えられたからであろう。

阪神・淡路大震災では本殿前の拝殿が押しつぶされ屋根が地面にたたきつけられた様子が映像を通じて全国へ流れ、地震による被害の大きさを多くの人々に伝えるに至った。生田神社では、2000(平成12)年1月、本殿西側に「生田神社震災復興記念碑」を建立したが、震災の教訓から、単なる記念碑ではなく、碑の後方に池の水を利用できる防水ポンプを備え付けた。

えびらの梅

⑪ 北向地蔵

北長狭通1丁目

夜のネオンがまぶしい三宮・北野坂の一角にあるビルの北壁にお地蔵さんが祀ってある。線香の絶えないこのお地蔵さんは「北向地蔵」と呼ばれており、次のような言い伝えがある。むかし、生田川がまだフラワーロードを流れていた頃、何日も降り続いた雨で生田川の水があふれてしまった。村人は必死で土嚢を積んだが、その土嚢も底をつき、疲れ果てた人々は小屋に帰ってしまった。その時、流木が土手にひっかかり、堤が切れそうになったが、誰も立ち上がれず、小屋のろうそくも消えてしまった。すると、堤の方で何かを引きずっては水に沈める音が聞こえてきた。翌朝、村人が起きてみると、流木がひっかかって堤が切れそうになっているところに、大きな石が投げ込まれ土手が直されていた。そして、土手の上に見たこともないお地蔵さんがやさしい顔でちょこんとすわっていたのである。村人はこのお地蔵さんが堤を直してくれたと思い、川の西にお堂を建て、切れそうだった堤の方を向けて祀った。これが北向地蔵のはじまりだと言われている。

◆郡界の碑(北長狭通1丁目、北向地蔵隣)

北向地蔵のそばに古い石柱が立っている。その石柱には「八部　菟原　両郡界生田川」という文字が刻まれている。昔、旧生田川を境に菟原郡と八部郡が分かれていた頃の名残である。もともとは旧生田川の堤防にあったが、いつの頃か北野川沿いに移され、その後、現在の位置に移ったのである。

郡界の碑

●「北長狭通」の由来

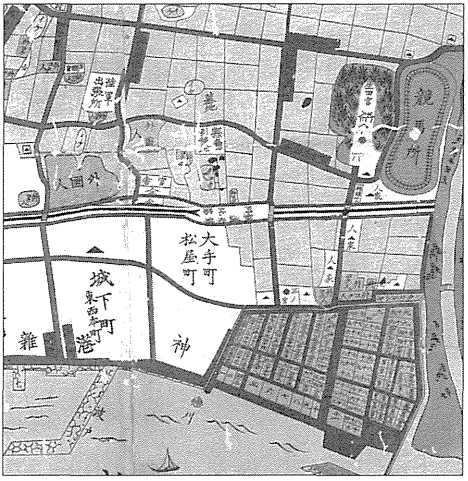
「活田長峡国」からとって「長峡通」となるところ、何かの手違いからか、「峡」がよく似た「狭」になってしまい「長狭通」になったという。そして、JR線の北にあるので「北長狭通」としたという。

豆知識 神戸一の歓楽街「東門街」は競馬場だった！

「東門街」といえば、神戸を代表する歓楽街で多くの飲食店が林立する。生田神社の東門に面した通りを「生田東門筋」と言い、この筋を中心に生田神社の東側一帯で「東門街」は構成されている。そもそも、この区域が今のようになったのは、明治時代の後期に生田神社周辺に色々な店が出されるうようになり、神戸の中心が三宮へと移るにつれて、最大の繁華街に発展していったことによる。

さて、この東門街のあたりに、明治時代のはじめ、外国人の競馬場があったことはあまりしられていない。神戸の居留地に住む外国人たちの多くは小馬（ポニー）を飼っており、競馬クラブを作っていた。そうしたこともあって、1868（明治元）年のクリスマスの日に、居留地の北東部の砂道で、神戸ではじめての競馬が催され、12レースが行なわれた。まもなく、競馬クラブは神戸に競馬場を設置することを決め、生田神社の東側に、広さ六千坪の土地を入手し、1200ヤード（約1092メートル）のコースを造ったのである。まさに、神戸が我が国における競馬場発祥の地とも言えよう。

しかし、1874（明治7）年に神戸・大阪間に鉄道が開通すると、人力車が走るようになり、外国人は馬を飼う必要が無くなり、数年足らずで競馬クラブも解散され、神戸の競馬場での競馬も行なわれることがなくなってしまった。つまり、この競馬場の跡地が今の東門街にあたるのである。



摂州神戸山手取開図（部分）
明治5年、神戸市立博物館所蔵
地図中央やや右に生田神社が見え、
そのすぐ右側に「競馬所」の字が見られる。

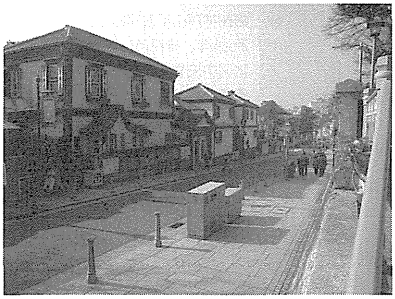
写真の上真ん中よりやや左に競馬場が、
また、その右に生田の森が見える。
『区誌生田いまむかし』P80より

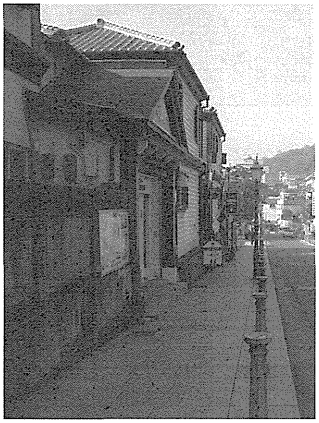
豆知識 「神戸らしい」景観をいつまでも ～北野町山本通伝統的建造物群保存地区～

北野町・山本通のある山手地区周辺は、緩やかな南斜面の見晴らしのよい住宅地として早くから外国人たちに注目され、明治20年代から本格的な外国人住宅地として発展してきた。現在もキリスト教、イスラム教、ジャイナ教などの寺院が建ち並び、多宗教・多文化が融合した国際的なエリアとして多くの人を魅了している。

異人館と呼ばれる洋風建築と和風建築が混在し、エキゾチックという言葉で代表されるこの個性的な景観を保全・育成するために、神戸市は、都市景観条例の制定1978(昭和53)年に伴い、1979(昭和54)年にこの地区を、都市景観形成地域・伝統的建造物群保存地区に指定。その後、1980(昭和55)年4月10日には国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された。

現在、33棟の洋風建築、7棟の和風建築が「伝統的建造物」として指定されており、地域のまちづくり団体が、まちの記憶を掘り起こし、北野の歴史を学ぶきっかけにと銘板を取り付けたり、異人館や住宅を火災からまもり、またごみのないまちを実現するために地区全体を「ノースモーキング　ゾーン」に指定したりと、美しい景観をまもるために様々な取り組みが行われている。

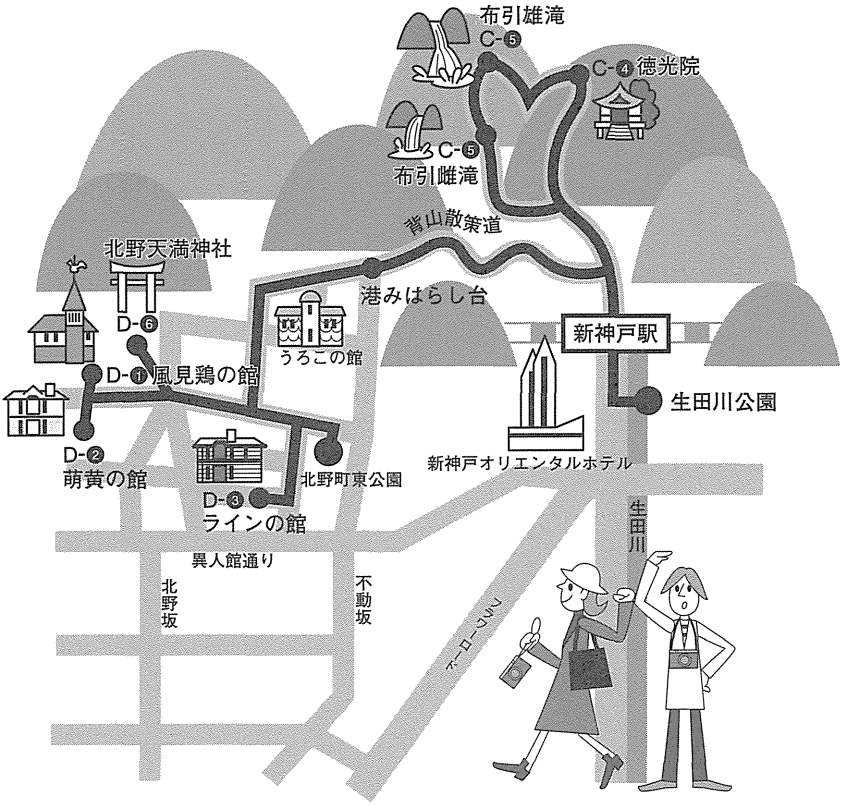




モデルコース

異人館の街・北野と王朝文化の舞台・布引を訪ねて

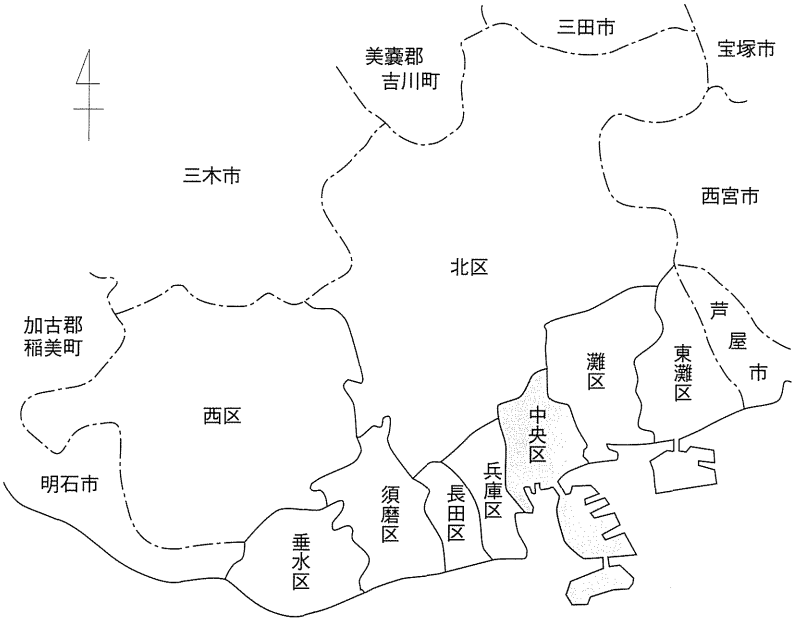
異国情緒あふれ、観光客で賑わう異人館の街・北野と多くの貴族が訪れ、
いくつもの古典文学作品にその名を刻ませた布引の滝。
こうして隣合わせにある中央区のエキゾチックな一面とヒストリックな一面を
一度に訪ねることにしましょう。

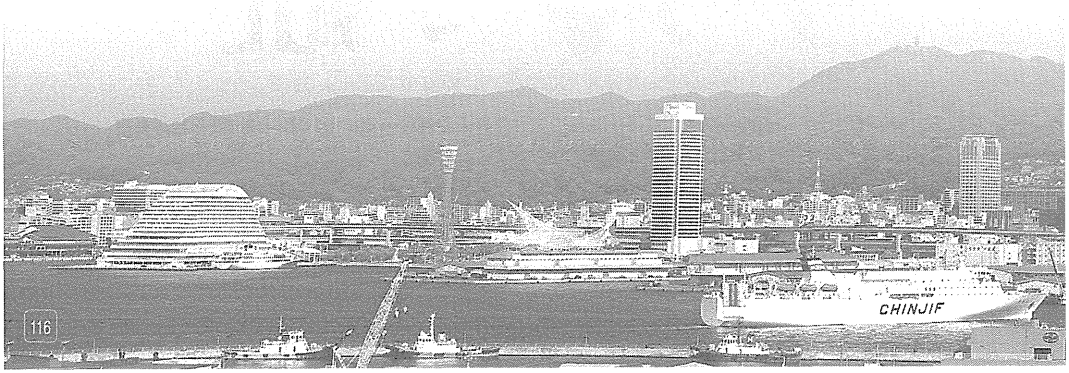


北野町東公園➡ラインの館➡萌黄の館➡風見鶏の館➡北野天満神社➡背山散策道(北野道)を経て➡布引の滝(雌滝・雄滝・布引の歌碑)➡徳光院➡生田川公園

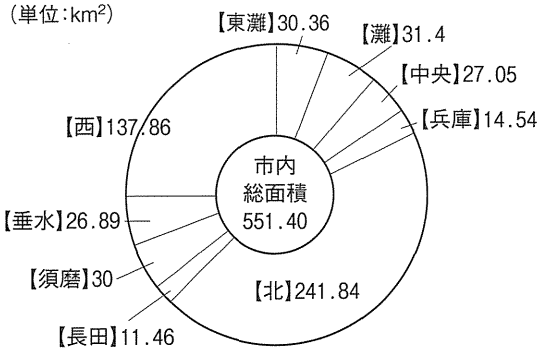
所要時間 約145分 ※所要時間は1km10分、各史跡滞在5分で計算しています。
※個人差により所要時間は変動いたします。

中央区の位置


三田市
宝塚市
美嚢郡
吉川町
三木市
西宮市
北区
加古郡
稲美町
芦
屋
市
灘
区
東灘
区
西区
中央
区
明石市
須磨
区
長田
区
兵庫
区
垂水
区


CHINJIF

市内面積



平成16年12月1日現在

区	面積
東灘	30.36
灘	31.40
中央	27.05
兵庫	14.54
北	241.84
長田	11.46
須磨	30.00
垂水	26.89
西	137.86
市内総面積	551.40

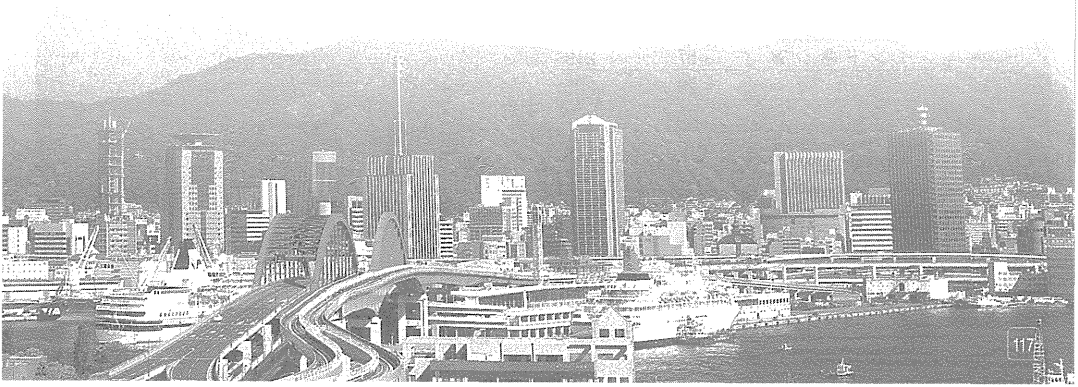
神戸市企画調整局「データこうべ」より

地勢

平成17年2月

区　名	方 位	地　　名	方 位	地　　名
中央区	東 端 西 端	港島9丁目 楠町7丁目	南 端 北 端	神戸空港 葺合町字地蔵谷
全　市	東 端 西 端	東灘区深江浜町 西区岩岡町古郷	南 端 北 端	垂水区平磯3丁目 北区長尾町上津

神戸市企画調整局調べ



世帯数と人口

各年10月1日現在(人口増は年間)

年次	中央区 面積	中央区 世帯数	中央区 人口	中央区 人口増 自然増	中央区 人口増 社会増	全市 面積	全市 世帯数	全市 人口
	(km²)	(世帯)	(人)	(人)	(人)	(km²)	(世帯)	(人)
昭和55年	22.36	46,635	115,329			542.35	462,281	1,367,390
平成元年	21.73	50,022	117,468			543.98	519,800	1,465,149
平成6年	23.61	52,271	111,536	△130	△1,154	547.40	578,634	1,518,982
平成7年	23.61	48,651	103,711	△534	△5,495	547.40	536,508	1,423,792
平成10年	25.24	52,179	107,937	△321	1,147	549.59	563,811	1,475,342
平成11年	26.58	54,202	108,419	△312	2,301	549.59	584,761	1,483,655
平成12年	25.59	55,571	107,982	△156	1,746	549.93	606,162	1,493,398
平成13年	25.63	57,269	109,771	△281	2,024	549.98	618,243	1,503,384
平成14年	25.93	58,918	111,436	△215	1,873	550.28	628,280	1,510,468
平成15年	26.35	60,509	113,115	△232	1,910	550.70	637,006	1,515,864
平成16年	27.05	61,830	114,634	△203	2,120	551.40	644,374	1,519,878

神戸市「統計白書」より

外国人数

国名	中央区 (単位:人)	全市 (単位:人)
韓国又は朝鮮	3,379	23,755
中国	5,722	12,203
米国	242	1,245
ヴィェトナム	78	1,109
インド	661	1,067
フィリピン	188	766
ブラジル	40	624
英国	154	463
オーストラリア	68	256
カナダ	78	245
タイ	109	226
インドネシア	57	219
ペルー	29	205
ドイツ	30	187
その他	610	1,879
総数	11,445	44,449

平成16年10月末日現在
神戸市市民参画推進局調べ

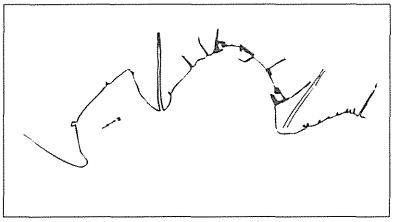
中央区外国人登録国籍:
87カ国(無国籍を除く)

平成17年2月現在

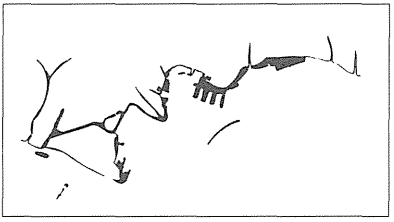
神戸港の変遷

資料：神戸市みなと総局
神戸港大観—平成15年港湾統計—

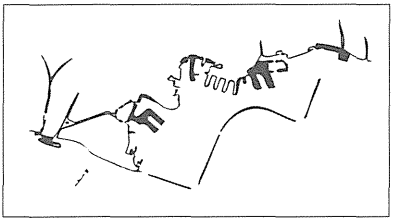
慶応3年の開港以来、
神戸港は輸送革新に応じた港湾の近代化がはかられています。



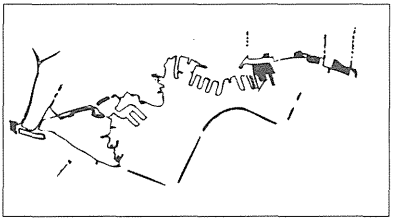
■明治5年（1872年）



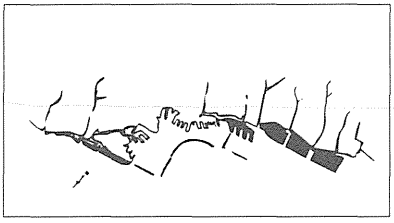
■大正12年（1923年）



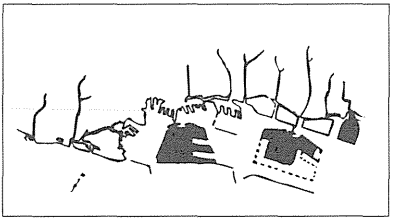
■昭和15年（1940年）



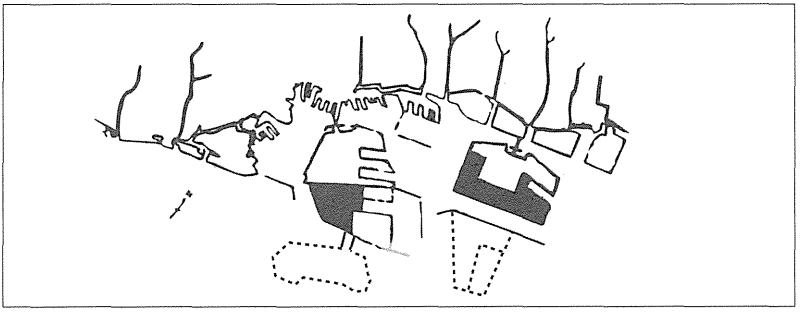
■昭和34年（1959年）



■昭和42年（1967年）



■昭和58年（1983年）



■平成15年（2003年）

探訪

文化財 / 博物館 / 施設

- 歓喜寺(木造十一面観音立像)
- 徳光院(多宝塔)
- 徳照寺(梵鐘)
- 大龍寺(木造菩薩立像)
- 相楽園(旧ハッサム邸・船屋形・旧小寺家厩舎)
- 風見鶏の館
- 萌黄の館
- ラインの館
- 旧神戸居留地十五番館
- みなと異人館
- 東遊園地
- ヴィーナスブリッジ
- 布引ハーブ園
- 神戸海洋博物館
- 兵庫県公館
- 兵庫県立美術館
- 神戸市立博物館
- 神戸市立青少年科学館
- 湊川神社宝物殿
- 神戸らんぷミュージアム
- 竹中大工道具館
- UCC コーヒー博物館
- 神戸華僑歴史博物館

Spot
Chuo-ku Kobe

歓喜寺
木造十一面観音立像(国重文)
(P63参照)

徳光院
多宝塔（国重文）
（P92参照）

持国天像（県重文）

増長天像（県重文）

徳照寺
梵鐘(国重文)
(P192参照)

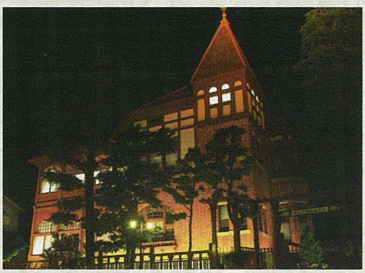
大龍寺
木造菩薩立像(国重文)
(P160参照)

旧ハッサム邸(国重文)(P149参照)

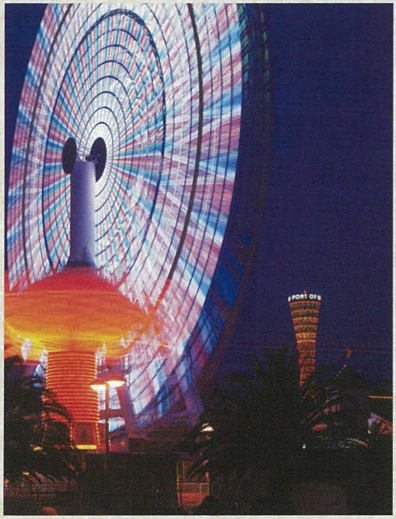
船屋形(国重文)(P149参照)

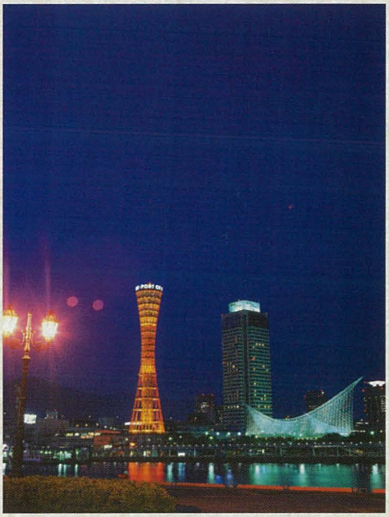
旧小寺家廐舎(国重文)(P149参照)

六甲山から望む夜の市街地は
「1000万ドルの夜景」と称賛され
今も昔も、神戸を訪れる人の心を魅了してきた。
そして街に足を向ければ、さまざまなイルミネーションが
レトロモダンな神戸の街を彩っている。



Spot
Chuo-ku Kobe





風見鶏の館(国重文)(P104参照)

■ 風見鶏の館

ドイツの貿易商 G.トーマス氏の旧邸。北野異人館のシンボル的存在で、レンガの外壁の建物としては唯一のもの。風見鶏には魔除けの意味もあり、部屋にはアールヌーボーの意匠が凝らされている。国指定重要文化財。

【所】中央区北野町3-13-3
【交】JR三ノ宮駅から徒歩15分
【時】9時～18時(12～3月は9時30分～17時)
【休】第4火曜日(祝日の場合は翌日休)
【¥】300円
【☎】078-242-3223

■ 萌黄の館

米国総領事 H.シャープ氏の邸宅として建設。木造2階建て、下見板張りの異人館で、左右異なるベイウィンドーやアラベスク風模様が施された階段など、贅沢な意匠が随所に見られる。国指定重要文化財。

【所】中央区北野町3-10-11
【交】JR三ノ宮駅から徒歩15分
【時】9時～18時(12～3月は9時30分～17時)
【休】第2水曜日(祝日の場合は翌日休)
【¥】300円
【☎】078-222-3310

■ ラインの館

1915(大正4)年築の旧ドレウェル邸。明治期の異人館様式を受け継いだ造りになっている。唯一の無料開放の公開異人館で、2階は異人館に関する資料が展示されている。

【所】中央区北野町2-10-24
【交】JR三ノ宮駅から徒歩15分
【時】9時～18時(12～3月は9時30分～17時)
【休】第4木曜日(祝日の場合は翌日休)
【¥】無料(イベント時は有料の場合あり)
【☎】078-222-3403

萌黄の館(国重文)(P105参照)

■ 旧神戸居留地十五番館

居留地時代の唯一現存する建物だったが、震災により全壊。1998(平成10)年に完全復元された国指定重要文化財。2階の南面にベランダをもつコロニアスタイルで、柱頭飾りのある柱列が印象的。現在は、カフェレストランが入っている。

【所】中央区浪花町15
【交】JR元町駅から徒歩7分

■ みなと異人館

大正時代にアメリカ人貿易商 S.E.ヘイガー邸宅として北野に建てられた異人館を移築したもの。港、市街地、山が一望できるロケーションで、現在はブライダルパーティー会場として開放されている。

【所】中央区港島2-2北公園内
【交】ポートライナー　ポートターミナル駅から徒歩10分
【☎】078-306-5588

旧神戸居留地15番館(国重文)(P172参照)

旧神戸居留地15番館下水道公開施設
(P172参照)

みなと異人館(P187参照)

ラインの館(国重文)(P105参照)

Spot
Chuo-ku Kobe

ヴィーナスブリッジ(P155参照)

布引ハーブ園(P98参照)

ヴィーナステラス「愛のモニュメント」
(P155参照)

MARINA像(東遊園地内)
作者:新谷琇紀

花時計

■ 東遊園地(P168参照)
1875(明治8)年、外国人専用の運動公園として開放されたのが始まり。現在でもグラウンドが整備されているほか、園内には噴水やモダンな彫刻、1.17希望の灯りなどがある。

【所】中央区加納町6-4
【交】JR三ノ宮駅から徒歩8分
【¥】入園自由
【☎】078-322-5420(神戸市公園砂防部管理課)

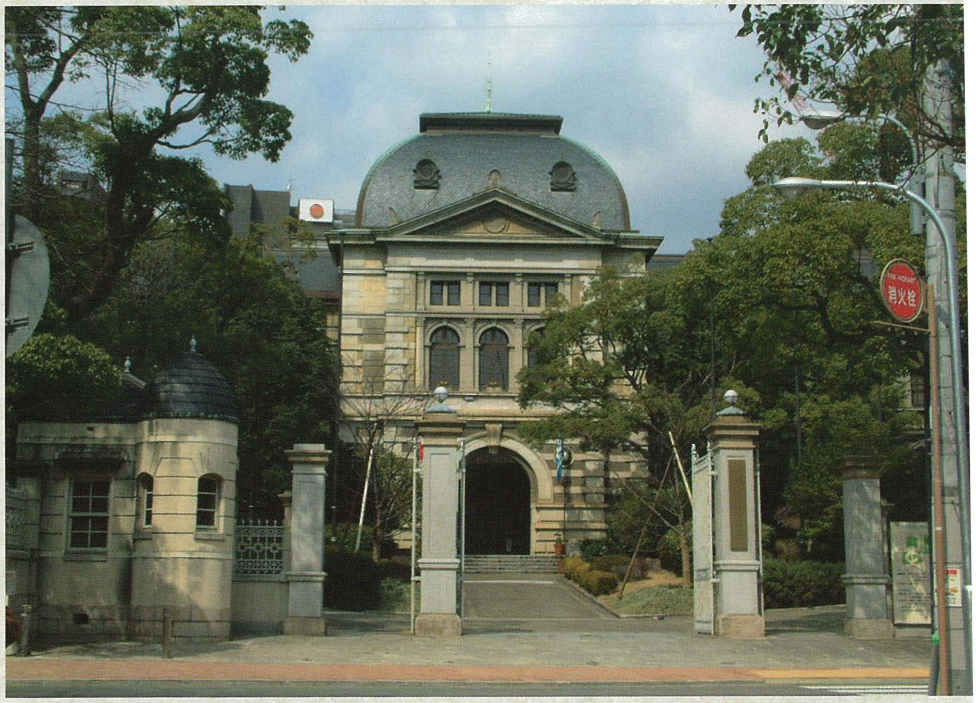
■ ヴィーナスブリッジ
市街地の光が眼下に一望できる螺旋橋。愛の女神「ヴィーナス」にちなみ恋愛成就伝説があり、2004(平成16)年、カップルたちが願いを書き込んだ「誓いの鍵」を取り付ける「愛のモニュメント」が設置された。

【所】中央区諏訪山展望公園内
【交】JR三ノ宮駅から市バスで10分、諏訪山公園下
下車、徒歩15分

■ 布引ハーブ園(P98参照)
六甲山系の中腹に位置する公園。園内には、数々の種類のハーブや四季を彩る花々が植えられており、ハーブのグラスハウスや、展望レストハウスなどもある。夜になるとライトアップされ、昼と違った雰囲気が味わえる。

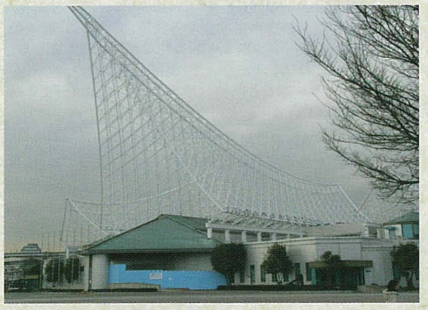
【所】中央区葺合町
【交】JR新神戸駅から新神戸ロープウェーで10分、布引ハーブ園下車
【時】平日10時～17時
土・日・祝と7月20日～8月31日は、10時～20時30分
12月1日～3月19日は、10時～17時
【休】無休(臨時休園日有り)
【¥】大人200円／小・中学生100円
(ロープウェーは往復大人1,000円／小人500円)
【☎】078-271-1131

■ 花時計
神戸市役所北側にある花時計(直径6m、高さ2.25m、傾斜角度15度)は、日本で初めて作られた花時計で、季節ごとに描かれる風物詩は延べ376回(平成17年3月現在)を数える。



兵庫県公館(P140参照)

Spot
Chuo-ku Kobe



神戸海洋博物館(P182参照)

兵庫県立美術館(P78参照)

■ 神戸海洋博物館(P182参照)
神戸港開港120年を記念してつくられた海・港・船をテーマにした博物館。波と帆船をシンボライズした外観が印象的。展示室は現在改装中。平成17年4月21日午後よりリニューアルオープン。平成17年4月21日から平成17年8月31日までは、震災10年神戸からの発信事業の拠点としての機能が併設される。上記期間中は無休。

【所】中央区波止場町2-2
【交】JR元町駅から徒歩15分
【時】10時～17時(入館は～16時30分)
【休】月曜日(祝日の場合は翌日休)
【☎】078-327-8983

■ 兵庫県公館(P140参照)
1902(明治35)年に建設。重厚な外観と壮麗な内装で、明治の面影を色濃く残す。現在は、迎賓館や県政資料館として使用されており、日没からは外観のライトアップもされている。

【所】中央区下山手通4-4-1
【交】JR元町駅から徒歩5分
【時】迎賓館／土曜日10時～16時
県政資料館／平日9時～17時　土曜日10時～16時
【休】迎賓館／土曜日と春秋の一般公開を除く毎日
県政資料館／日曜日
【￥】無料
【☎】078-341-7711

■ 兵庫県立美術館(P78参照)
西日本最大級の大型美術館。展示棟、ギャラリー棟の2棟に別れており、展示棟では常設展、企画展などが催されている。和・洋、古典・近現代を問わず、美術作品を収蔵。

【所】中央区脇浜海岸通1-1-1
【交】阪神岩屋駅から徒歩8分
【時】10時～18時(入館は～17時30分)
【休】月曜日(祝日の場合は翌日休)
【￥】大人500円／大・高校生400円／小・中学生250円
(特別展は別途)
【☎】078-262-0901

神戸市立博物館(P171参照)

■ 神戸市立博物館(P171参照)
1935(昭和10)年に建てられた横浜正金銀行を転用した建物で、古代～近現代に至る神戸の東西交流史を展示する。

【所】中央区京町24
【交】JR三ノ宮駅から徒歩10分
【時】10時～17時(入館は～16時30分)
【休】月曜日(祝日の場合は翌日休)
【￥】大人200円／大・高校生150円／小・中学生100円
(特別展は別途)
【☎】078-391-0035

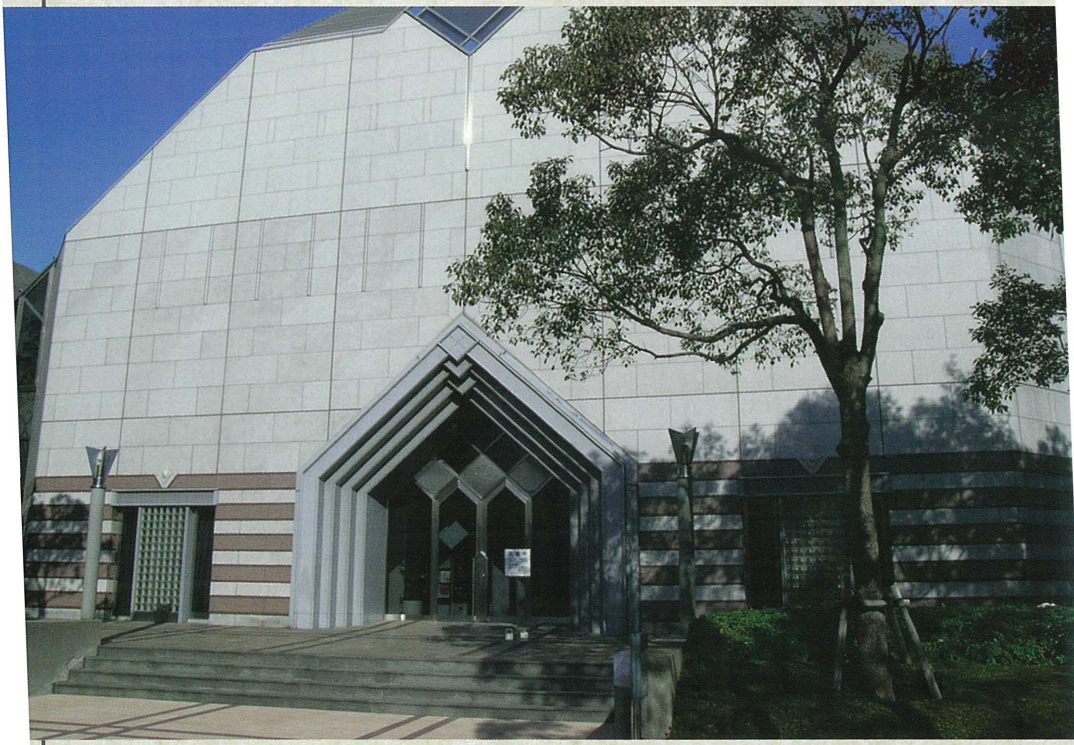
■ 神戸市立青少年科学館
さまざまな科学現象を実際に体験しながら学ぶことができるテーマパーク型の科学館。無重力状態の月面ジャンプやハングライダーの模擬体験、リニアモーターカーの試乗などがある。プラネタリウムも人気。

【所】中央区港島中町7-7-6
【交】ポートライナー　南公園駅から徒歩3分
【時】9時30分～16時30分
(土日祝、春夏秋休み期間は10時～17時)
【休】水曜日(祝日の場合は翌日休)
【￥】大人600円／小人300円
(プラネタリウム　大人400円／小人200円)
【☎】078-302-5177

神戸市立青少年科学館

神戸華僑歴史博物館

竹中大工道具館



UCCコーヒー博物館

神戸らんぷミュージアム

湊川神社宝物殿

Spot
Chuo-ku Kobe

■ 湊川神社宝物殿
1872(明治5)年の創建。南北朝時代の武将・楠木正成を祭神とし、「楠公さん」の愛称で親しまれている湊川神社の境内にある宝物殿。書画や武器など、正成ゆかりの品々が展示されている。

【所】中央区多聞通3-1-1
【交】JR神戸駅から徒歩5分
【時】日の出～日没(宝物殿は9時30分～16時30分)
【休】宝物殿は木曜日
【¥】境内無料(宝物殿 大人300円／高・大学生200円／小・中学生100円)
【☎】078-371-0001

■ 神戸らんぷミュージアム
照明文化の貴重なコレクションを通じて灯火器の変遷を楽しみながら学べるあかりの博物館。館内には、松明などの原始的なあかりから、石油ランプ、ガス灯、電灯に至るまでの灯火器を歴史系統的に展示。

【所】中央区京町80 クリエイト神戸2・3F
【交】JR三宮駅から徒歩10分
【時】10時～17時(入館は～16時30分)
【休】月曜日(祝日の場合は翌日休)
【¥】400円
【☎】078-333-5310

■ 竹中大工道具館
慶長年間創業といわれる竹中工務店が設立した博物館。日本の伝統的な木造建築に使われる大工道具を収蔵。日本の伝統的な大工具道具を中心に、関連の文献資料、映像などを収集、展示。

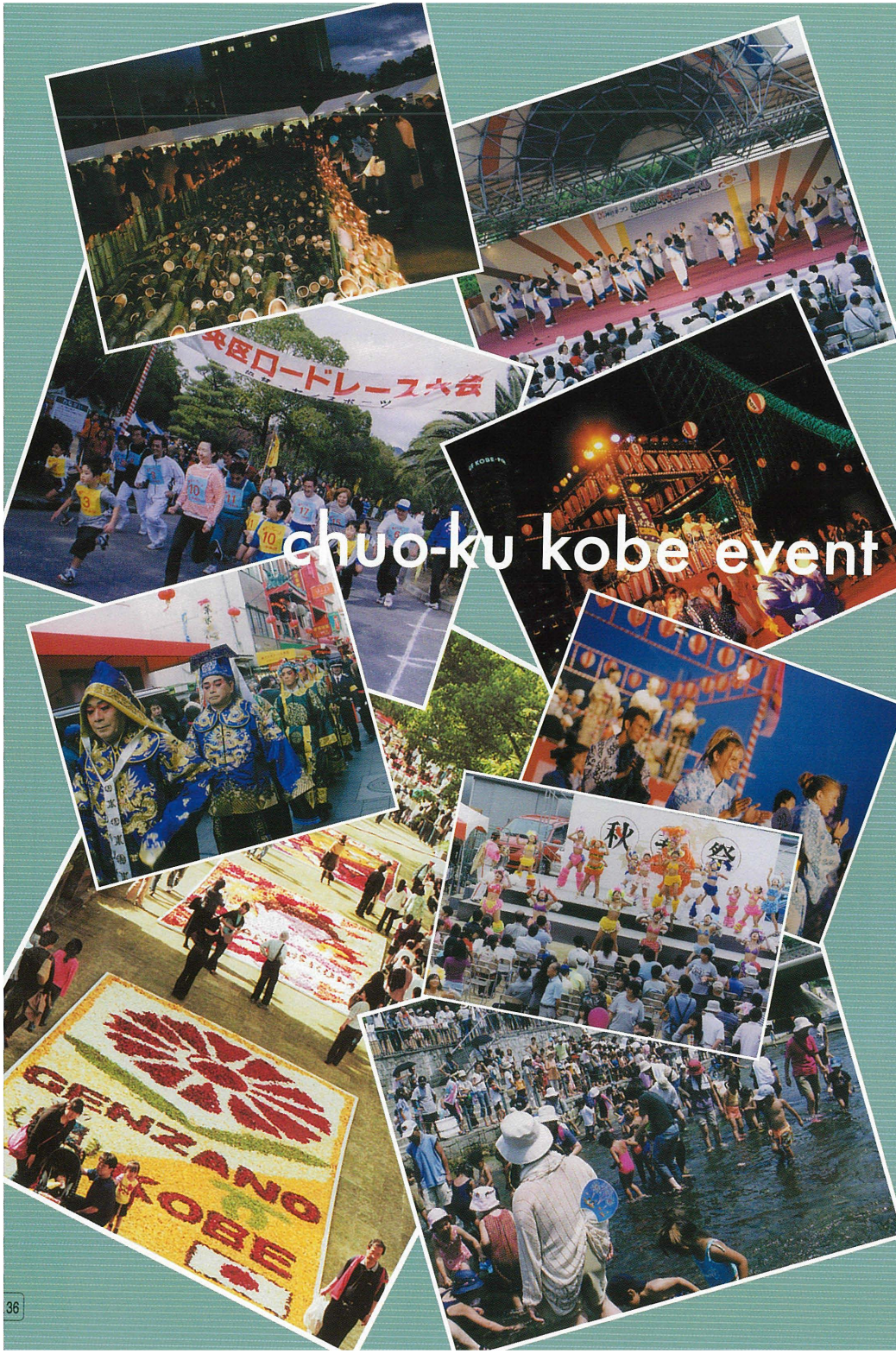
【所】中央区山手通4-18-25
【交】JR元町駅から徒歩10分
【時】9時30分～16時30分(入館は～16時)
【休】月曜日(祝日の場合は翌日休)
【¥】大人300円／大・高校生200円／小・中学生100円
【☎】078-242-0216

■ UCCコーヒー博物館
UCC上島珈琲がつくったコーヒーを専門とする日本で唯一のコーヒーに関する博物館。コーヒーの起源や栽培方法、流通、コーヒーの味わい方、珍しいカップなどを展示。

【所】中央区港島中町6-6-2
【交】ポートライナー 南公園駅からすぐ
【時】10時～17時(入館は～16時30分)
【休】月曜日(祝日の場合は翌日休)、祝日の翌日
【¥】大人210円／小・中生100円
【☎】078-302-8880

■ 神戸華僑歴史博物館
南京町を切り開いてきた神戸在住の華僑の歴史を紹介する資料館。美術品を中心に、神戸港開港以来の記録写真や文献、書画などの貴重な展示物も多い。

【所】中央区海岸通3-1-1　KCCビル2F
【交】JR元町駅から徒歩7分
【時】10時～16時
【休】水曜日(祝日の場合は翌日休)
【¥】大人300円／学生200円／小学生以下無料
【☎】078-331-3855



chuo-ku kobe event

神戸市の中央に位置する、
海と山の自然に恵まれた美しい都心「中央区」では
四季折々に楽しいイベントが開催されている。

calendar

1・2月

●阪神淡路大震災1.17のつどい
震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、震災から生まれた「支えあうこころ」「いのちの大切さ」を後世に伝え、ひろげるため、1月17日に東遊園地において、ご遺族・市民・ボランティアが連携して「阪神淡路大震災1.17のつどい」を開催している。

●南京町春節祭
中国の旧正月を祝う盛大な祭り。勇壮な獅子舞や龍舞が披露され、楊貴妃ら中国の歴史上の人物や、「京劇」風の化粧で三国志の英雄らに扮した人々のパレードが祭りを盛り上げる。

3・4月

●インフィオラータこうべ
「花をしきつめる」という意味をもつインフィオラータは、イタリア発祥の祭りである。道や広場に花びらを敷き詰めて美しい花絵を描き出し、区内では三宮東・元町穴門・西元町・北野坂の4つの会場で個性的な花絵が楽しめる。

5月

●ふれあい中央カーニバル
こうべまつりの前後に開催される中央区のステージイベント。何でも1番コンテストや伝統芸能など、多彩なイベントが楽しめる。

6・7月

●水辺まつり
子どもたちに川や水辺の生き物、自然の大切さについて学んでもらおうと、地元の河川愛護団体が中心となって開催するイベント。毎年7月下旬に生田川周辺において開催される。

8月

●海の盆踊り
海辺の広場「メリケンパーク広場」を会場に、日本の風物詩「盆踊り」を神戸風にアレンジし、多くの外国人も参加する国際的な盆踊り大会。民謡生演奏に、世界の味が味わえる国際屋台も多く出店する、国際都市・神戸らしい夏のイベント。

9月

●南京町中秋節
中国には季節ごとに4つの節句があり、そのうち、中秋が秋節である。中秋節は春節に次ぐ大節句に位置づけられ、陰暦の8月15日、十五夜に月を祀り、秋の収穫を祝い、地の神様を祀る日とされている。

10・11月

●秋華祭
コミスタ神戸(旧吾妻小学校)を会場に、ブラスバンド演奏などのステージイベント、地元住民による模擬店など、多くの催しが賑やかに開催される。またお祭り行列では、創作民話のキャラクターや太鼓、踊りなどの行列がにぎやかにまちを練り歩き、お祭りを盛り上げる。

●個性とハートの祭典
障害のある人一人ひとりが主人公となって、自らがつくる文化祭。手作り製品の販売や作品の展示、コンサートなど障害者支援の活動を紹介する。

●神戸ジャズストリート
北野町・トアロード界隈一帯がジャズのライブ会場になる、日本のジャズ発祥の地神戸を代表するイベント。当日はジャズパレードが行われるほか、多くの施設・店舗でジャズが演奏され、1日中ジャズの魅力を満喫できる。

●元町ミュージックウィーク
1998年に神戸元町商店街の有志が始めた音楽イベント。誰もが気軽に参加でき、ミュージックシティ・神戸を全国へ発信する音楽イベントであり、神戸の秋の風物詩として定着している。

12月

●中央区ロードレース大会
小学生から大人まで、気軽に参加できる、多彩なコースが充実した、区民のためのロードレース大会。緑豊かな大倉山公園周辺は絶好のランニングコースであり、毎年多くの人が参加している。

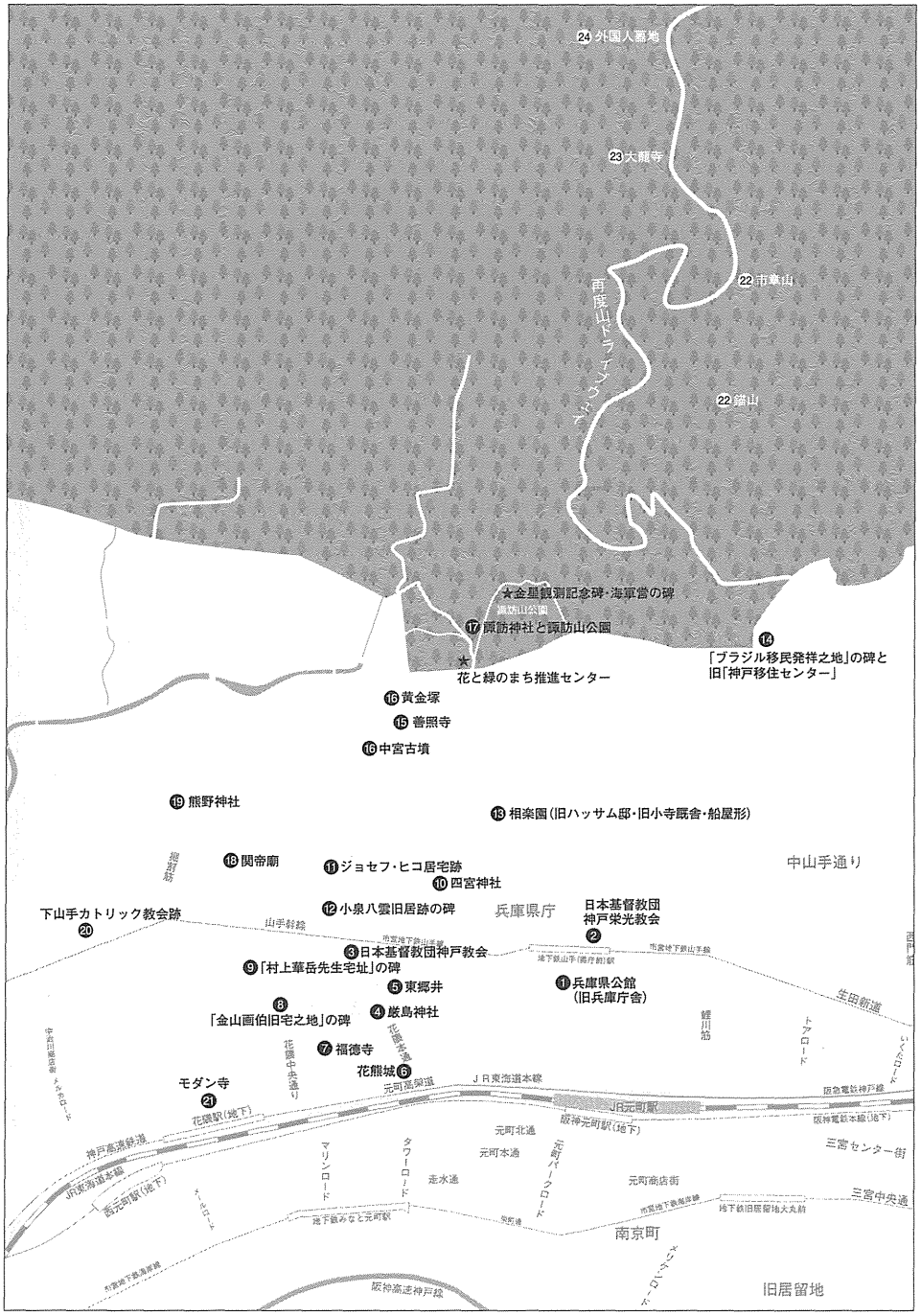
●神戸ルミナリエ
阪神・淡路大震災の犠牲者への鎮魂と神戸の復興の意を込めて、震災の起こった年の12月に第1回目が開催され、被災した市民に大きな力と感動を与えた。その後も継続を求める声が強く、毎年12月に旧居留地から東遊園地にかけて開催されている。

生田山手周辺

1. 兵庫県公館(旧兵庫庁舎)
2. 日本基督教団神戸栄光教会
3. 日本基督教団神戸教会
4. 厳島神社
5. 東郷井
6. 花熊城
7. 福徳寺
8. 「金山画伯旧宅之地」の碑
9. 「村上華岳先生宅址」の碑
10. 四宮神社
11. ジョセフ・ヒコ居宅跡
12. 小泉八雲旧居跡の碑
13. 相楽園
14. 「ブラジル移民発祥之地」の碑と旧「神戸移住センター」
15. 善照寺
16. 中宮古墳と黄金塚
17. 諏訪神社と諏訪山公園
18. 関帝廟
19. 熊野神社
20. 下山手カトリック教会跡
21. モダン寺
22. 錨山と市章山
23. 大龍寺
24. 外国人墓地

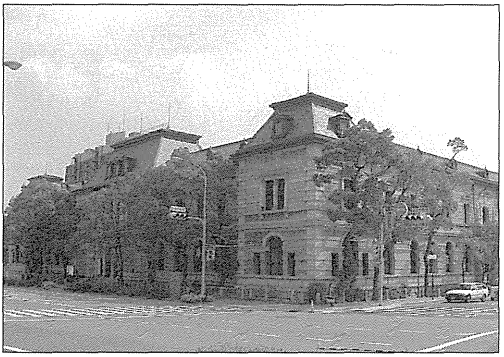
落ち着いた町並みと
すぐそばにせまる山並みのある、
神戸らしいエリアの一つ。
諏訪山周辺は、地元の人々の
憩いの場として親しまれています。

エリアマップⓔ


㉔外国人墓地
㉓大龍寺
㉒市章山
再度山ドライブウェイ
㉒錨山
★金星観測記念碑・海軍営の碑
諏訪山公園
⑰諏訪神社と諏訪山公園
⑭「ブラジル移民発祥之地」の碑と旧「神戸移住センター」
★花と緑のまち推進センター
⑯黄金塚
⑮善照寺
⑯中宮古墳
⑲熊野神社
⑬相楽園(旧ハッサム邸・旧小寺既舎・船屋形)
⑱関帝廟
⑪ジョセフ・ヒコ居宅跡
⑩四宮神社
中山手通り
下山手カトリック教会跡
⑳
⑫小泉八雲旧居跡の碑
兵庫県庁
日本基督教団神戸栄光教会
②
山手幹線
③日本基督教団神戸教会
⑨「村上華岳先生宅址」の碑
⑤東郷井
㉛兵庫県公館(旧兵庫庁舎)
⑧「金山画伯旧宅之地」の碑
④厳島神社
生田新道
⑦福徳寺
花熊城⑥
モダン寺
㉑
JR元町駅
JR東海道本線
元町高架道
阪急電鉄神戸線
阪神電鉄本線(地下)
元町北通
元町本通
三宮センター街
走水通
元町商店街
三宮中央通
南京町
旧居留地
阪神高速神戸線

❶ 兵庫県公館（旧兵庫県庁舎）

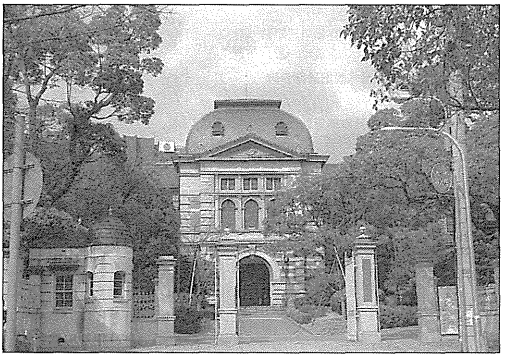
下山手通4丁目



兵庫県公館（北側より）

現在の兵庫県公館（カラー頁 P132参照）は、もともとは兵庫県庁舎の本館であった。この庁舎は1902（明治35）年5月、最初の県庁舎として建築されたものである。この建物は近世フランス式ルネサンスの様式を取り入れたものであるが、1945（昭和20）年3月17日の空襲で戦災にあい、壁体を残すだけの状態となってしまった。

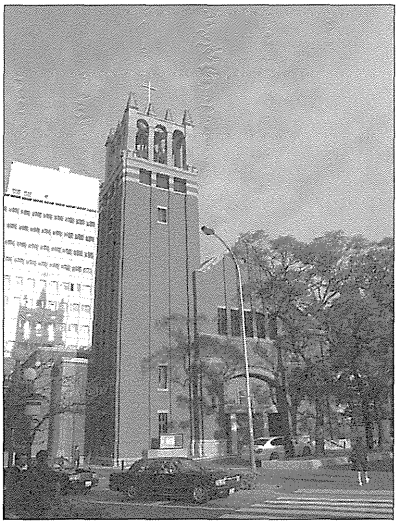
戦後、取り壊しもささやかれたが、結局、修復することが決まり、現在の姿となったのである。今は迎賓館などに利用されており、一部は県政資料館として一般公開している。国の登録文化財に認定されている。



南側から見た兵庫県公館

❷ 日本基督教団神戸栄光教会

下山手通4丁目

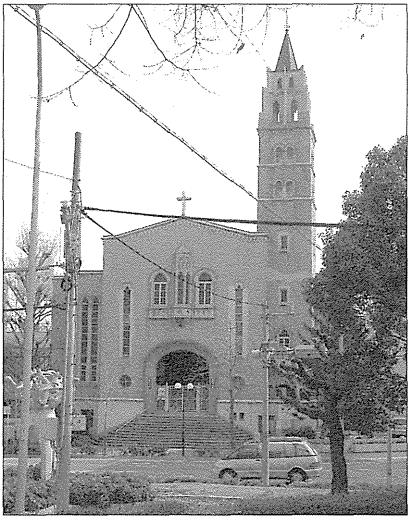


プロテスタント系の教会。神戸栄光教会は、1886(明治19)年に神戸にやって来たアメリカ南メソジスト教会の宣教師J.W.ランバスが、居留地の47番地に教会を建てたことに始まる。その子W.R.ランバス(若ランバス)も神戸にやって来て、現在の灘区に土地を購入し、1889(明治22)年に校舎を建てて、授業を開始した。これが現在の関西学院大学の前身である。その他、若ランバスは現在のパルモア学院を開設し、その夫人も現在の聖和女子大学を設立するなど、教育に残した功績は大きい。

さて、教会は1888(明治21)年に下山手通5丁目に新しい会堂を建て、その後、1922(大正11)年に現在地の下山手4丁目に十字架を頂上に据えた高さ約40㍍の四角い塔を擁する赤煉瓦造の会堂を新築した。この会堂は第二次世界大戦の戦禍をのがれ、震災前までは兵庫県庁周辺のこの地域のランドマーク的な建造物の一つであった。

ところが、阪神・淡路大震災でこの赤煉瓦造の会堂は全壊、その後、ドーム型の仮設の会堂が建てられていた。そして、2004(平成16)年9月、もとの赤煉瓦造の外観を再現する形で、新しい会堂が再建されるに至ったのである。

❸ 日本基督教団神戸教会

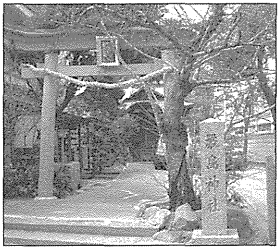


神戸栄光教会同様、プロテスタント系の教会である。神戸におけるプロテスタントの布教は、カトリックより少し遅れ、1870(明治3)年に始まる。この時、アメリカン・ボード・ミッションの宣教師グリーンが神戸にやって来て布教を開始した。彼は二年後、居留地の48番地にユニオン・チャーチを設立する(神戸ユニオン教会の項参照)。1873(明治6)年に明治政府がキリスト教禁令を解禁すると、グリーンは元町通5丁目にキリスト教関係の書物を扱う書店を開き、そこで布教のための講義を行なった。なおその講義に、旧三田藩主九鬼隆義が夫人と子供を連れて出席していたのは、一般の人々の目を引いた。翌年、この講義所は摂津第一基督教会となり、その後、1878(明治11)年に北長狭通に移り、1888(明治21)年12月、現在地に移転した。今の会堂は1932(昭和7)年に建てられたもので、戦時中はここに神戸防衛司令部が置かれた。

生田山手周辺

❹ 厳島神社（いつくしまじんじゃ）

花隈町



祭神は市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）（俗に弁財天と呼ばれている）。平清盛は、承安年間（1171～1175年）に経ケ島（きょうがしま）を築造する際に、人々の安泰を祈願して、厳島明神を宮島の七浦にちなみ七ヶ所に祀り、兵庫七弁天と呼んだ。その内の一つが花隈弁天で、通称浜の弁天とも呼ばれた。最初は花熊村にあったが、花熊城が築かれた際に生田神社の境内に移され、天明年間（1781-1789）には、宇治川の河口である現在の「弁天町」に移された。この弁天町という町名も、弁財天を祀る厳島神社がその地にあったから付けられたものである。明治時代に海岸工事が行なわれた際、弁天町から今の場所に移された。

生田山手周辺

❺ 東郷井（とうごうせい）

花隈町

川崎重工保健組合会館の敷地は、日本で最初に映画を上映した場所として知られる神港倶楽部（しんこうくらぶ）のあった所である。この神港倶楽部時代、その前庭に清水の湧き出た古井泉があり、それを俗に「東郷井」と呼んでいた。今では、区画整理による道路拡張でその古井泉も埋められ、「東郷井」の石碑だけが会館の前に残されている。

「東郷井」の名称は、日露戦争の日本海海戦でロシアのバルチック艦隊を撃破させた事で知られる海軍の東郷平八郎元帥にちなむ。東郷は、海軍中佐時代の1885（明治18）年7月に、小野浜で建造中だった軍艦「大和」の監督官として神戸にやってきた。来神した彼は、ここ神港倶楽部の敷地内にあった和洋折衷の家に一年間ほど住み、毎日、そこに湧く古井泉と親しんでいたという。東郷は1928（昭和3）年、この井のために「清水流芳」の額をこの倶楽部に贈っており、それが掲げられていた。

1930（昭和5）年、倶楽部の有志が、この古井泉を記念するため、「東郷井」の石碑を建て、同年5月19日に除幕した。なお、「東郷井」は財部彪海軍中将（当時、後大将）の命名で、文字は小笠原長生海軍中将の筆である。

⑥ 花熊城跡

●「花隈町」の由来

花隈公園のなかに「花隈城趾」という碑が建っている。この碑はもともと1928(昭和3)年に建てられたものだが、阪神・淡路大震災で倒壊したため、元の碑を忠実に模造し復旧したものである。碑の文字は岡山池田家当主の侯爵池田宣政によるものだ。この公園を中心にこのあたり一帯は神戸を代表する近世城郭、花熊(隈)城があった場所である。花熊城の築城については、1568(永禄11)年に摂津国守護となった和田惟政が築いた説、1574(天正2)年に織田信長の命によって荒木摂津守村重(あらきせっつのかみむらしげ)が毛利氏と石山本願寺の海上交通を遮断するために築いたという説があるが、後者の方が有力である。花熊(隈)の名は、神戸の海に面して突き出た台地、つまり「ハナクマ」からきている。

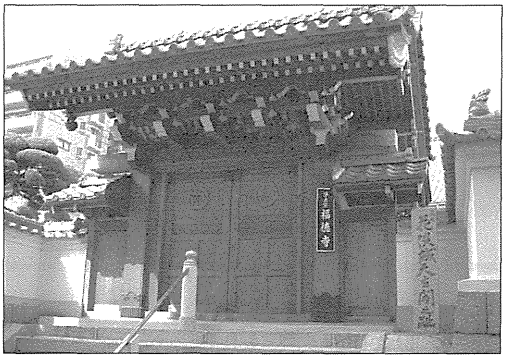
さて、この城の規模はと言えば、岡山大学所蔵の池田文庫「摂津花熊之城図」によれば、城を三つのブロックに分け、中央に本丸・二ノ丸・三ノ丸が、東部に侍屋敷と足軽町が、西部に町家が描かれている。そして、中央部の本丸には天守が備わっており、本丸と二ノ丸・三ノ丸をあわせた周囲には堀がめぐらされており、近世城郭の様相を呈していたのである。こうした城の構えを現在の地形にあてはめてみると、この花熊城は東は神戸生田中学の東の南北の道路、西は花隈町と下山手通8丁目の境の南北の道路、南はJRの高架線、北は兵庫県庁南の東西の筋で囲まれた範囲にあたると思われる。

ところで、この城の運命もそれほど長くはなかった。花熊城は荒木村重支配の下、家老の荒木志摩守元清が管理していたが、村重が織田

生田山手周辺

⑦ 福徳寺（花隈城天主閣之趾）

花隈町



1205（元久2）年に、時の関白・九条兼実が建立した浄土宗の寺院。この寺の地が、花熊城の天守閣のあった場所と伝えられており、現在、「花隈城天主閣跡」の碑が門前に建てられている。この碑は1969（昭和44）年に、花熊城の戦いで敗れた荒木志摩守の20代目にあたる子孫が、戦いでの物故者の四百回忌法要記念として建てたものである。

信長に重大な嫌疑をかけられてしまうというハプニングがおこってしまったのである。これは村重の部下が、ひそかに当時信長と対立していた石山本願寺に物資を供給しているという疑いであった。いったん疑われると、信長の性格上それを覆すのは困難と考えた村重は、毛利氏に援軍を頼み、1578（天正6）年10月に信長に対してとうとう反旗を叛すに至ったのである。その時の様子が『信長公記』に記されており、天正6年霜月（11月）の末、信長が「滝川左近、惟住五郎左衛門両人差遣され、……御敵荒木志摩守鼻熊に楯篭り候」とある。信長は最終的に池田信輝、輝政親子に花熊城攻撃を命じ、1580（天正8）年2月に城は陥落するのであった。落城後、信輝はこの城の材料の一部を使って兵庫城を築き、一部の石は大坂城を築くときに運ばれたという。

生田山手周辺

⑧「金山画伯旧宅之地」の碑

花隈町

日本芸術院会員の金山平三(1883〜1964)は、近代日本の代表的風景画家である。東北(大石田、十和田、日本海岸)の風景を好んで描き、長崎や故郷神戸の風景も描いた。この金山画伯の旧宅が花隈にあり、現在、その場所に「金山画伯旧宅之地」の碑が建てられている。

生田山手周辺

⑨「村上華岳先生宅址」の碑

花隈町

日本画家の村上華岳(1888〜1939)は、大阪市に生まれ、1895(明治28)年にここ花隈に移り、幼少期を神戸小学校(現・こうべ小学校)で学んだ。京都市立美術工芸学校に進み、日本画家として世に出、「観世音菩薩半立像」など仏画で知られる。

現在、村上画伯の旧宅の場所に、1966(昭和41)年3月に建てられた金井元彦兵庫県知事(当時)筆の「村上華岳先生宅址」の碑がある。

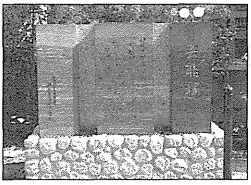
生田山手周辺

⑩四宮(よのみや)神社

中山手通5丁目

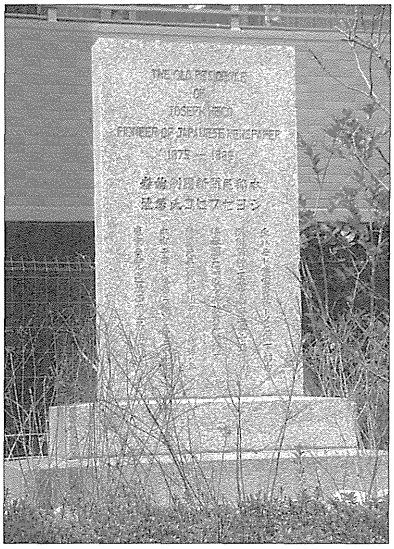
四宮神社

旧花熊村の氏神で、祭神は市杵島姫命(いちきしまひめのみこと)。生田裔神(えいしん)八社のうちの一つである。祭神の市杵島姫命は俗に弁財天といわれており、弁財天は音楽・芸能の神として知られている。そこで、神戸開港後、政財界御用達の花街として栄えた花隈の芸者たちは、自らの芸の上達を祈願するため、一度はこの神社に参拝し、鑑札を受けたといわれている。現在、境内には「芸能塚」の碑が建てられている。



芸能塚の碑

⑪ ジョセフ・ヒコ居宅跡



ジョセフ・ヒコは元の名を浜田彦蔵といい、1836(天保7)年に県下の加古郡で生まれた。1850(嘉永3)年、彼が15歳の時、江戸から兵庫へ船で帰る途中、遠州灘で暴風にあい漂流していたところをアメリカ船に救われて、サンフランシスコへ着いてしまった。一年後、彼は便船で送還されたが、香港に滞留中に志し新たに再びサンフランシスコに引き返したのであった。その後、苦労を重ねながら、ミッションスクールに通い、カトリック教徒となり、日本人としてはじめてアメリカに帰化したのである。そして、1859(安政6)年に日本が開港する際、米国官吏として日本へ帰った。漂流以来10年目のことである。1862(文久2)から横浜に住み、その間わが国最初の新聞である「海外新聞」を発行した。1875(明治8)年に神戸にやって来て製茶貿易などを行ない、中山手通6丁目に家を建てた。1888(明治21)年、彼が東京に移るまで、この地に住んでいた。

現在、神戸掖済会病院が移転したあとに建てられたマンションの入口東側の公開空地に、1935(昭和10)年6月に神戸市が建てた「本邦民間新聞創始者ジョセフ・ヒコ氏居宅」の碑がある。なお、碑文には「氏ハモト濱田彦蔵トイヒ縣下加古郡阿閇村ニ生ル嘉永三年十五歳ノ時米国ニ漂流シ安政六年帰朝ス慶応元年海外新聞ヲ創刊シ明治八年本市ニ来リ貿易ニ従事ス同二十一年東京ニ去ル迄此西隣ニ居住セリ」とある。

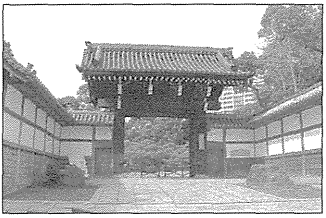
⑫ 小泉八雲旧居跡の碑

下山手通6丁目

県中央労働センター玄関にある「小泉八雲旧居跡」の碑は、このセンター敷地内にあった明治の作家・小泉八雲(ラフカディオ・ハーン、1850-1904)の 旧居にちなんで、1994(平成6)年3月29日に除幕された。1994年は八雲が 神戸に移り住んでちょうど百年という年で、それを記念してこの碑は建てられたのである。碑は高さ170㌢、幅150㌢の御影石製で、正面に貝原俊民兵庫県知事(当時)の題字による「小泉八雲旧居跡」の文字と八雲が神戸に住んでいた45歳頃の横顔のレリーフがついている。

ところで、ギリシャでイギリス人の軍医を父として生まれ小泉八雲は、のちイギリスとフランスで教育を受け、その後、渡米して新聞記者などをする傍ら、翻訳や文筆活動を続け、名を上げていった。そして、1890(明治23)年4月、後に兵庫県知事となる服部一三(当時文部省普通学務局長)のつてで来日し、松江中学校や熊本の五高で英語を教えた。はじめ、彼は日本には一時滞在のつもりでいたが、日本のよさにほれ込み、日本研究をすべく、長期滞在を決心した。島根時代に小泉節子と結婚し、1894(明治27)年11月には神戸に居を移し、英字新聞「神戸クロニクル」の記者となったのである。この時住んだ場所がこの碑のある敷地であった。記者の傍ら、作家活動も続け、ここ神戸で「心」「佛の畑の落穂」などを執筆し、また、長男の誕生を機に帰化して小泉八雲と改名したのも神戸であった。八雲は1896(明治29)年8月に東京に移るまで、約1年9ヵ月、神戸に在住したことになる。

⑬相楽園（そうらくえん）



相楽園は元神戸市長の小寺謙吉の邸宅であった。小寺は明治の末から衆議院議員として活躍し、第二次大戦後は選挙による最初の神戸市長となった。謙吉の父、旧三田藩士小寺泰次郎が1886(明治19)年頃からこの地に邸宅と庭園をつくり、謙吉が大正のはじめに完成させた。その頃は邸宅の他に、名石や石灯篭、池、滝などがあり、茶室の備わる豪華な日本庭園となっていた。1913(大正2)年の大正政変で、当時代議士であった謙吉が、時の首相桂太郎を支持したことから、桂に反対する群衆がこの小寺邸(相楽園)に押し掛けたことは有名である。1941(昭和16)年、謙吉から神戸市に移譲、「相楽園」と名付け、市民に有料で開放された。しかし、1945(昭和20)年6月5日の空襲で主要建造物は焼失してしまった。戦後、園内を整備して、再び開放し市民の憩いの場となっている。なお、正門にある大きなクスノキは花熊城築城の時、鬼門(北東)に植えたという言い伝えが残っている。また、園内には「旧ハッサム邸」と「船屋形」そして、開設当時からある数少ない建物の一つ「旧小寺家厩舎(きゅうしゃ)」があり、これら三つの建造物は国の重要文化財に指定されている。

◆旧ハッサム邸(相楽園内)(カラー頁 P125参照)

1902(明治35)年に建てられた、インド系イギリス人 K.ハッサムの住居。もともと、北野町2丁目にあった建物で、木造2階建、屋根には化粧煉瓦積みの煙突があり、南向き二層のベランダで、外壁はオイルペイントで塗られているという、典型的な異人館である。前庭にあるガス灯は1874(明治7)年頃に旧居留地に設置されたものを移設したもので、日本の街灯用ガス灯としては最も早い時期のものである。1961(昭和36)年に国の重要文化財に指定された。また、阪神・淡路大震災で屋根から2階の床を突き抜け1階まで落下した煉瓦造の煙突が、地震の激しさを後世に伝えるため、建物正面の前庭に設置されている。

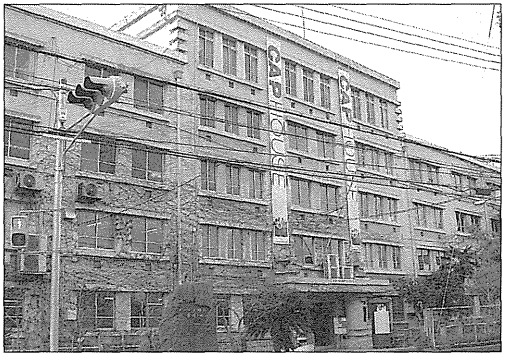
◆旧小寺家厩舎(相楽園内)(カラー頁 P125参照)

ハッサム邸の東隣にある旧小寺家厩舎は「正門」とともに、創建当時からある数少ない建物の一つである。赤煉瓦造、L字型の構造で、一階が馬車をいれる車庫と、馬の馬房、二階に厩務員のための宿舎があった。明治の末、神戸地方裁判所の設計で知られる河合浩蔵の設計で建てられた。1970(昭和45)年に国の重要文化財に指定されている。

◆船屋形(相楽園内)(カラー頁 P125参照)

南側の池のそばにある。この船屋形は、姫路藩主の遊覧用に使われていた「川御座船」の居室部分である。漆塗りの木部や金箔をほどこした飾り金具はとても豪華なものである。建造時期は1682(天和2)年から1704(宝永1)年の間と考えられる。2層の内部はいずれも三室から構成されており、2階中央の「上段の間」は藩主の御座となったところである。1939(昭和14)年に牛尾氏の所有となり、その翌年頃に垂水区の同氏邸に移された。1977(昭和52)年に神戸市に寄贈され、1980(昭和55)年に相楽園に移築されている。1953(昭和28)年に国の重要文化財に指定される。

⑭「ブラジル移民発祥之地」の碑と旧「神戸移住センター」 山本通3丁目


旧神戸移住センター全景

ブラジル移民発祥地の碑

「ブラジル移民発祥之地」の石碑が立つ正面の建物が、旧「海外移住事業団神戸移住センター(通称、神戸移住センター)」の建物で、つい三十数年前までは、まさに日本のブラジル移民の基地だった所なのである。

1908(明治41)年4月28日、「笠戸丸」が781人のブラジル移民を乗せて神戸港を出航したのが、ブラジル移住の最初であり、その時以来、神戸港はブラジル移民の出発港となった(P184・神戸港移民船乗船記念碑の項参照)。アメリカへの移住が明治30年頃に門戸を閉ざしたため、その代替地として急浮上したのがブラジル。日露戦争後の戦勝ムードの中でブラジル移民は始まったものの、その後の第一次世界大戦後の大不況により、政府は人口問題解消策と失業者救済のためにブラジル移民を奨励していった。

1928(昭和3)年3月、ブラジル移民の保護と教養を目的として、「内務省神戸移民収容所」を設置、六百床で食堂、医務室、講堂を備えた、外観を外航船の造りにまねた一部五階建ての建物を開設した。今でも、居室の一つの壁に移民の一人が書いた故郷日本との別れを告げる「別離の言」というタイトルの文章が残されている。なお、この収容所を舞台にその様子を克明に描いた小説が、石川達三の「蒼氓(そうぼう)」で、彼はこの作品で第一回芥川賞を受賞している。

「内務省神戸移民収容所」はその後何度か改称され、最終的には1963(昭和38)年、「海外移住事業団神戸移住センター」となった。この移住センターは、1971(昭和46)年5月末、最後の南米移住船「ぶらじる丸」が出港

したのにともない、その歴史に幕を閉じたのである。

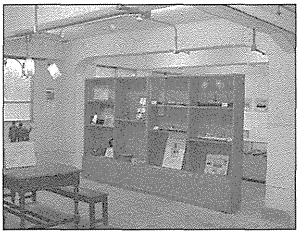
戦前戦後を通じ、640隻の移民船が神戸・ブラジル間を往復し、約25万人の人々がブラジルへと移住していった。「ブラジル移民発祥之地」の碑は、1979(昭和54)年に建てられたもので、碑の石材はブラジル在住の兵庫県人会有志から贈られたものである。

外航船の内部をまねたらせん状の階段

旧移住センターの建物は閉鎖の翌年から1994(平成6)年3月まで神戸市医師会の准看護婦学校として使用されていたが、学校移転で空きビルになった状態で、阪神・淡路大震災を経験することになった。

震災後は、近くで被災した神戸海洋気象台がこの建物を1995(平成7)年7月から1999(平成11)年9月まで利用し、同年11月からは芸術家の創作・交流活動の場(CAP HOUSE)として暫定利用されており、建物の一部に「神戸移住資料室」を設置して移住センター関係の資料を展示している。

建物内部


神戸移住資料室

建物内部

渡航直前の青年が壁に書いたと見られる文章

⑮ 善照寺（ぜんしょうじ）

山本通5丁目

善照寺はもともと元町通3丁目にあって、戦災後この地に移ってきた。山号を無碍光山といい、真宗本願寺派で、京都の仏照寺の末寺。1585(天正13)年に浄了が開山したといわれている。また、泉隆寺(若菜の里)の末寺であるとも言われている。廻船問屋として全国に知られていた俵屋はこの寺の檀家である。なお、1992(平成4)年に、鉄筋4階建ての近代的な本堂に様変わりした。

豆知識 神戸の'花と緑'の発信基地 ～花と緑のまち推進センター～

相楽園の北側、諏訪山公園の一角に季節の花に囲まれた憩いのスポットがある。四季の草花や緑の木々が訪れる人を優しく迎え、再度山へのハイキングコースの入り口としてハイカーに親しまれているこの場所が、「花と緑に囲まれたうるおいのあるまちづくり」の拠点、『花と緑のまち推進センター』である。神戸市のグリーンコウベ作戦のひとつとして、緑が好きな人、花を愛する人たちに気軽に利用してもらおうと、1979(昭和54)年6月に誕生した「緑の相談所」が、内容を充実させ1996(平成8)年4月に『花と緑のまち推進センター』となった。センターには花壇やコンテナがお洒落に飾られ、四季を通じて楽しめるように工夫されている。また書籍も豊富にそろっており、コンテナガーデンの作り方や花の育て方の講習を受けることもでき、園芸相談も受け付けている。この他にも市内の主要花壇の維持管理や花壇コンクールなどのイベント開催、情報誌の発行など、まさに神戸の花と緑の発信基地となっている。

⑯ 中宮古墳と黄金塚

中宮「古墳碑」

俗に中宮古墳と呼ばれる一大横穴式古墳がかつて山本通5丁目にあった(現在の5丁目10-7あたり)。また、付近には以前三つも古墳があり、中宮村は大塚村とも呼ばれたという。この古墳は崩壊のおそれがあったため、1916(大正5)年11月に発掘調査を行ない、縦6.6m、横2.3mの横穴式石室を有することが確認され、剣や馬具等が出土した。その後、この古墳は失われてしまったが、現在でもその付近にある「古墳碑」が往事の様子を偲ばせてくれている。この碑は1917(大正6)年8月に建てられたもので、古墳の様子などが刻まれている。なお、この古墳は仁徳天皇の皇后・八田皇女に関係したものだという言い伝えもあるが定かではない。

この中宮古墳の碑にほど近い善照寺の西隣に隣接する市有地の中に黄金塚の封土が残されている。黄金塚のある土地は、かつては善照寺の庭であったが、区画整理によって市の管理するところとなった。この塚の上に、1918(大正7)年3月に建てられた「黄金塚」の碑が今でも残されている。

黄金塚

黄金塚の碑

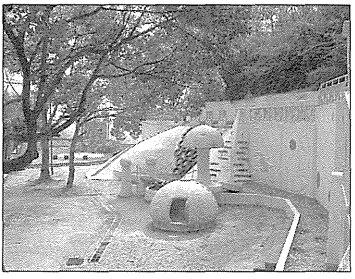
⑰諏訪神社と諏訪山公園

●「諏訪山町」の由来

諏訪神社

諏訪山は標高180mで、山に諏訪神社が祀られているところから名付けられた。諏訪神社は、諏訪明神(健御名方大神・比売神)を祭神とし、社伝によれば、16代天皇仁徳天皇の皇后・八田皇女の離宮鎮護の神として祀られたのが最初という。現在の社殿は1924(大正13)年に改築されたもの。このあたりはかつて、中宮村と称したが、これは諏訪神社が長田神社と生田神社の中間に位置したとか、近くにある四宮神社が八宮の中宮だということから付けられたなど、諸説あるが、確かなことはわからない。いずれにしても、諏訪神社は旧中宮村の氏神であった。なお、「明和五年戊午正月元旦」(明和5年＝1769年)の銘がある石の鳥居が、社殿正面階段下にある。また、俳人它谷の「紀の海の阿波へ流れる月夜かな」の句碑が社殿の横にあり、ここ諏訪山から南海の展望が素晴らしいことを伝えてくれている。

諏訪山遊園の碑



子供の園(動物園跡)

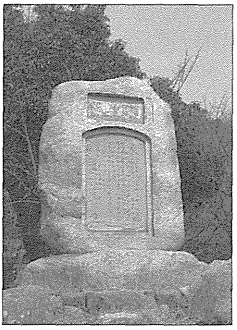
さて、諏訪山は江戸時代、中宮村はじめ四ケ村の共有地であったが、後に官地となった。1873(明治6)年には遊覧地となり、諏訪神社の境内3000坪を公園とした。公園の片隅に1903(明治36)年6月7日に建てられた「諏訪山遊園」の碑が、今でもそのことを偲ばせてくれている。また、山の麓にはイギリス人が発見した温泉(炭酸泉)が湧き、「諏訪山温泉」として親しまれ、「飲めば胃を治し、湯に浴すれば万病に効く」と伝えられた。さらに、1937(昭和12)年この地に市立動物園を開園し、現在それは王子動物園に受け継がれている。諏訪山の動物園の跡地は現在、諏訪山「子供の園」として、公園になっている。

◆金星観測記念碑、海軍営の碑(諏訪山町)

1874(明治7)年にこの地諏訪山で、ヤンセン率いるフランスの観測隊が金星の観測を行なったことを記念して建てられた石碑。この時、日本のマッチ工業の開発者清水誠がこの観測に従っているが、彼の名前はこの碑に刻まれている。諏訪山の展望台を金星台と呼ぶのはこの記念碑が建っているからである。すぐ北にある再度ドライブウェイの展望台にヴィーナスブリッジ(カラー頁 P130·131参照)の名が付けられているが、このヴィーナス(Venus)とは金星のことである。なお、この金星観測記念碑の山側に「海軍営」の碑がある。これは勝海舟が将軍家茂の神戸上陸を記念して建てたもので、もともと海軍操練所の地に建てられていたが、1915(大正4)年に現在の場所に移された。

金星観測記念碑

它谷の句碑



海軍営の碑

⑱ 関帝廟（かんていびょう）

関帝廟

神戸に住む華僑の人たちの信仰を集めているのがこの関帝廟という寺院である。現在、寺としてはどの宗派にも属していない。朱塗りの門を入ると、本堂の屋根には青色の二頭の竜が向い合い、空中で跳ねているように見え、中国らしさを感じさせる建物となっている。なお、関帝とは『三国志演義』で蜀（しょく）の劉備（りゅうび）を助け活躍する関羽（かんう）のことである。

この寺は1892（明治25）年、神戸の華僑呉錦堂（ごきんどう）らによって、長楽寺（今の大阪府東大阪市布施にあった、黄檗山万福寺の末寺）をこの地に移し中国人の寺としたのがはじまりである。1939（昭和14）年に関帝と天后像をこの寺に祀ったが、1945（昭和20）年の空襲で長楽寺もろとも焼失してしまった。1947（昭和22）年に焼失した長楽寺のあとに、中国人の有志が関帝廟を造営し、その後拡張を重ね、現在のような姿になったのである。なお、本堂前の銅製の大きな線香立て（大香炉）には、清朝時代の「光緒一八年」（1892年）の銘がある。また、旧暦7月13日から16日までの盂蘭盆会（うらぼんえ）には豪華な飾りがなされ、太鼓やカネなどを打ち鳴らしてにぎわう。

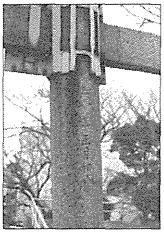
本堂前

生田山手周辺

⑲ 熊野神社

中山手通7丁目

熊野神社


「元禄三年」の銘のある
かつての鳥居

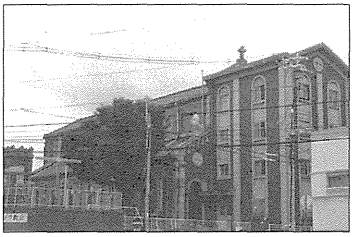
祭神は伊弉諾（いざなぎ）・伊弉冊尊（いざなみのみこと）。この神社は宇治野山にあるが、熊野神社の熊野権現（ごんげん）からとり、この山を権現山ともいった。

神社の鳥居に「元禄三年」(1690)の文字の刻まれたものがあった。しかし、阪神・淡路大震災でこの鳥居の上部が落ち、銘のある柱の部分は無事であったものの、2000(平成12)年6月に新しい鳥居を建立したことで、「元禄三年」の銘が残る鳥居の柱部分は撤去されてしまい境内には現存しない。また、社記には1675(延宝3)年の石灯篭があると記されているが、これも現存しない。

生田山手周辺

⑳ 下山手カトリック教会跡

下山手通9丁目

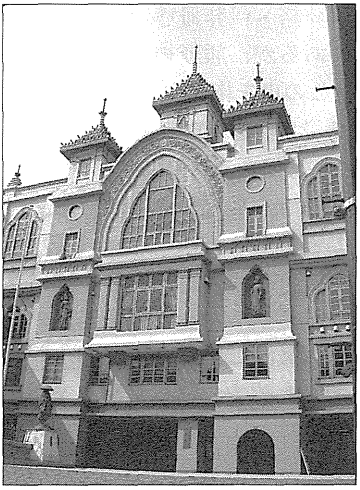

震災前の教会

下山手カトリック教会の前身は1870(明治3)年に居留地37番地に(現大丸)建てられたカトリック教会である(なお、カトリック教会の本体は後に中山手カトリック教会〈現、カトリック神戸中央教会〉となった)。カトリック教会は布教活動を進めて行くなか多聞通に伝導所を開設し、これをもとに1910(明治43)年に聖堂を完成させた。これが阪神・淡路大震災前の下山手カトリック教会の聖堂で、煉瓦造り平屋建てのロマネスク様式の建物だった。

神戸市建築百選にも選ばれた名建築であったが、震災で側壁の一部を残して崩壊してしまった。震災後、その年の8月下旬に解体撤去されたが、この教会は中山手カトリック教会などと統合され、現在ではカトリック神戸中央教会(もとの中山手カトリック教会の場所に新設)となったため、この地でもとの美しい聖堂の姿を見せることはもうない。

㉑ モダン寺

下山手通8丁目

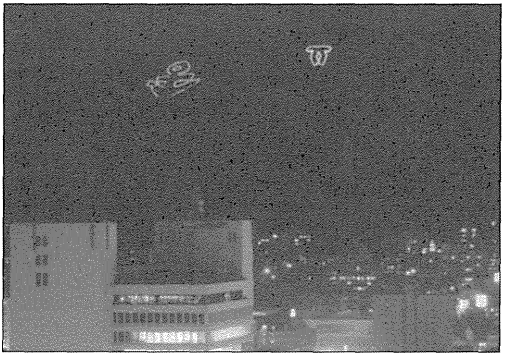


通称モダン寺というこの寺は正式には真宗本願寺派の本願寺神戸別院という。寺伝によれば桃山時代(16世紀末)、教祐和尚の開基であるという。もとは二ツ茶屋村の小さな庵であったのが、1639(寛永16)年に元町通6丁目あたりに道場を建て、その地名から一乗山と号し、良如上人が善福寺と名付けたのである。なお、1871(明治4)年、鉄道敷設の際に、その用地にあたるので現在地に移転した。1933(昭和8)年に、インドの尖塔を真似た、モダンな本堂が建てられ、それ以後、善福寺というよりモダン寺という名の方が有名になってしまったのである。なお、1960(昭和35)年には本山直属となり、本願寺神戸別院の名称となった。

しかし、このモダン寺の建物も老朽化と手狭なため、建て替えが決まり、1993(平成5)年秋から建替工事を着工し、1995(平成7)年9月中旬に完成した。新しくなったモダン寺は、元の建物のイメージをできるだけ残す形で建てられている。

建て替え前のモダン寺

㉒ 錨山（いかりやま）と市章山



錨山は1903(明治36)年の観艦式を記念したもの。明治36年に神戸港外で行なわれた観艦式で明治天皇は61隻の艦船を親閲された。当時は日露戦争の前年ともあって、国民の戦意が高揚しており、神戸市民もこの観艦式に大きな関心を寄せていた。そこで、市内の小学生の代表数百人が諏訪山の北東の山の南斜面に錨形にならび、日の丸を振って天皇をお迎えしたのである。その錨形に並んだ跡に1907(明治40)年に松を植樹して「錨山」と名付けられた。1981(昭和56)年からは風力・太陽光発電で電飾(2004〈平成16〉年に設備をリニューアル)を行なっている。

市章山は錨山の北隣にある山で、1907(明治40)年に築港起工式記念に市章をかたどって植樹したもの。なお、神戸市の市章「ⓦ」は「カウベ」の「カ」と扇港といわれる港形をにちなんで1907(明治40)年に制定された。

1989(平成元)年の市制百年を記念して同年の秋から市章山の東約800㍍の堂徳山に「KOBE100」「北前船正面」「北前船側面」の三種類が一ヶ所で20分おきに入れ代わるという電飾も加わることになった。これで、中央区の六甲山の南斜面には三ヶ所・五種類の電飾が灯っていることになる。また、錨山は神戸市民が喜びや悲しみを共にしたい日(祝祭日・ルミナリエ・神戸まつり・震災の日・外航客船入港日など)にマリンブルーに変わる。

夜になれば、錨と市章の電飾が山に灯り、港町神戸をいっそう引立ててくれる。とくにハーバーランドの高浜岸壁からメリケンパークのイルミネーションを前にして見る両灯りの眺めは格別である。

㉓ 大龍寺（だいりゅうじ）

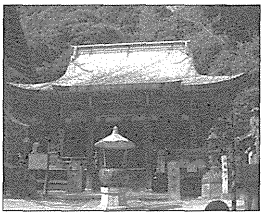
●「再度筋町」の由来

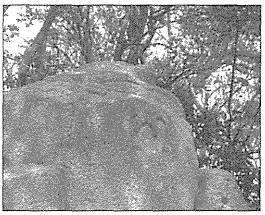
大龍寺は再度山（ふたたびさん）の中腹にある真言宗の寺院で、山号を再度山という。本尊の木造菩薩立像（伝如意輪（にょいりん）観音）は国指定の重要文化財で、奈良時代の作、高さが1.8㍍あり、神戸市内最古の仏像といわれている（カラー頁 P124参照）。寺伝 によれば、768年に和気清麻呂（わけのきよまろ）が創設し、当初は摩尼山といった。延暦 年間（782～805年）に、弘法大師（空海）が唐に渡る際、旅の安全をこの寺の本尊に祈願した。その甲斐あって無事帰国することが出来、大同年間（806～809年）にその報告をするため再び登山し、この寺にやって来たので再度山の名が起こったという。なお、再度谷のことを蛇谷ともいい、これは弘法大師が唐に渡る時、船を守った大蛇が、大師が帰国後再び山に登った際にもこの谷に現われたのでその名が付いたといい、大龍寺という名はそのために付けられたと伝えられている。また、この寺は密教の影響を受けた、この地方を代表する山岳寺院でもある。庫裏の前には、松永貞徳の句碑「秋風にあんまとらせて苔の石」があり、境内から奥の院を経て、さらに山道を入ったところに「弘法大師の梵字（ぼんじ）石」や「亀の石」がある。

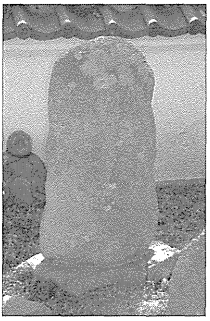
さて、再度山のこの寺のあるところ一帯は中世の山城、多々部城（たたべじょう）の跡である。建武年間（1334～1338年）に赤松則村が構築したというが詳細は定かでない。なお、諏訪山の南、今の山本通4丁目付近は旧城ケ口（じょうがぐち）村であり、「城ケ口」という名は、この多々部城の大手になっていたことからその名が付いた。

ところで、この大龍寺の北、修法ケ原を中心とする再度公園の中に「弘法大師修法之地」の碑がある。修法ケ原は、昔、大龍寺の僧侶が修法を行なったことからその名が付いたと言われている。

再度山のふもとに再度筋町という町名がつけられているが、ここから再度山へ向かう尾根づたいの道があったことから名付けられた。また、下山手通8丁目には「左　再山道」(ひだり　ふたたびやまみち)の道標が残っている。


本堂


亀の石


松永貞徳句碑

弘法大師修法地の碑(再度公園内)

●「神戸港地方」の由来

「地方」とは町の周辺部のことを意味し、神戸港の周辺部ということから名付けられた。

◆毎日登山発祥の地の碑

大龍寺の山門から仁王門に行く途中の、ハイキングコースと合流するあたりに、1978(昭和53)年10月に建てられた「毎日登山発祥の地　善助茶屋跡」の碑がある。この碑がある場所はかつて善助茶屋があった場所である。

1905(明治35)年頃、北野界隈に住む外国人達がハンター坂を登って、再度山に入ってここ善助茶屋にサイン帳を置いて署名する習慣をつけた。これを知った元町周辺の人々がこれにならって山登りするようになったのが、神戸市民の毎日登山の始まりといわれている。大正から昭和10年頃までが全盛期で、この善助茶屋に多くの登山会のサイン帳が置かれていた。第二次大戦中毎日登山は一時途絶えたが、戦後復活し、今日に至るまで多くの市民が毎日登山に汗を流している。ただ、善助茶屋は戦後、訪れる人の数が少なくなり、最終的には撤去されてしまった。

毎日登山発祥の地の碑

㉔外国人墓地

北区山田町下谷上

墓地内

再度公園の北側に神戸市立外国人墓地がある。現在は北区のこの位置に移されているが、もとは中央区の小野浜墓地、春日野墓地が外国人墓地として利用されていた。神戸開港後に居留地が設置された時、墓地も用意することが決められた。しかし、その取決もなかなか実行されず、死亡した居留地の外国人は、旧生田川(現フラワーロード)の川尻東の小野浜(現在の、東遊園地とフラワーロードを挟んで正面のあたり)に埋葬されていた。その後、1869(明治2)年に正式に小野浜墓地を設置したが、それも飽和状態となってしまったため、1899(明治32)年に春日野墓地(現在の篭池通4丁目のあたり)が設けられた。この墓もいっぱいとなったので、1952(昭和27)年に現在の位置に新たに墓地を造成したのである。この墓地には現在、約60か国、2650柱の外国人が、宗教別に埋葬されている。

この地に眠る著名な外国人には、A.C.シム、E.H.ハンター、R.W.ランバス、F.D.モロゾフなどがいる。

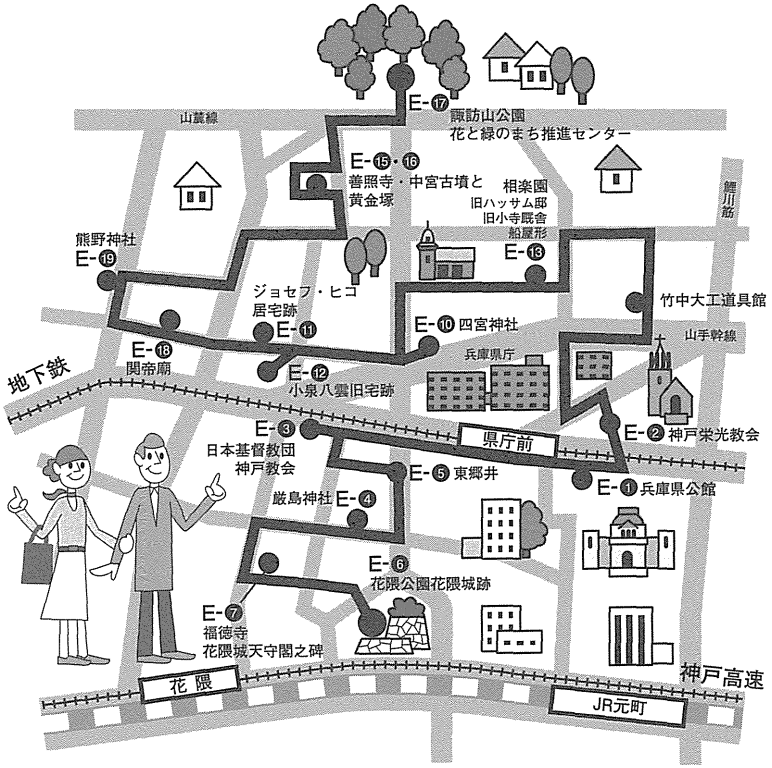
墓地内は一般公開されていないが、「外国人墓地の見える丘」から、墓地の全景を眺めることができる。

墓地内

モデルコース

花熊城趾周辺の史跡と中央区の異国文化を訪ねて

花隈公園を中心にこのあたり一帯は神戸を代表する近世城郭、花熊(隈)城があった場所です。そして、このエリアは旧ハッサム邸(相楽園内)や兵庫県公館など異国文化を感じることのできる史跡や建築物などがあります。見所たくさんの花隈界隈を散策しましょう。



花隈公園・花熊城跡➡福徳寺(花隈城天守閣之碑)➡厳島神社➡東郷井➡日本基督教団神戸教会➡兵庫県会館➡神戸栄光教会➡竹中大工道具館➡相楽園(旧ハッサム邸・旧小寺既舎・船屋形)➡四宮神社➡小泉八雲旧宅跡➡ジョセフ・ヒコ居宅跡➡関帝廟➡熊野神社➡善照寺➡中宮古墳と黄金塚➡諏訪山公園・花と緑のまち推進センター

所要時間 約135分 ※所要時間は1km10分、各史跡滞在5分で計算しています。
※個人差により所要時間は変動いたします。

史跡と町名

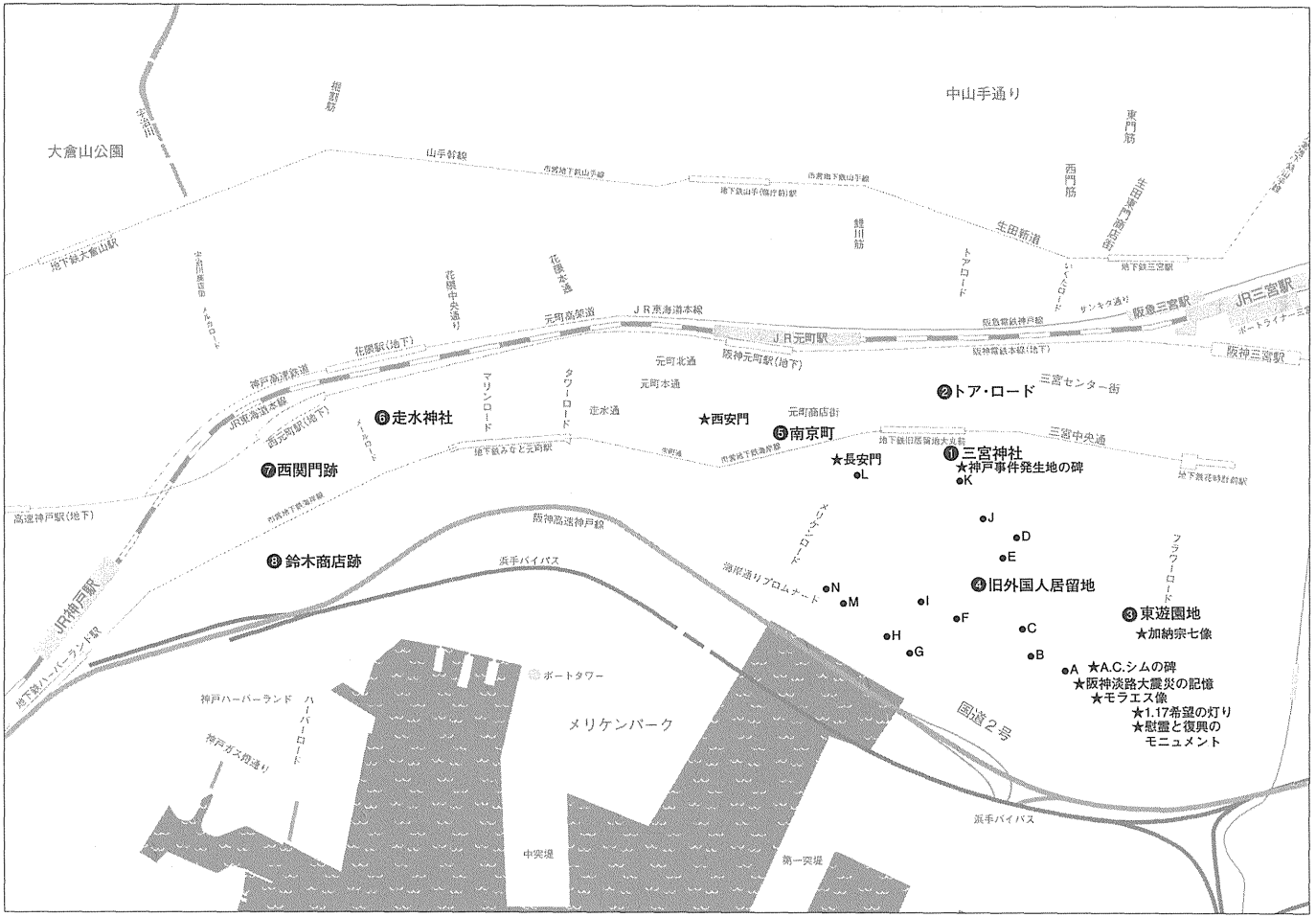
旧居留地・元町周辺

KYUKYORYUTI・MOTOMATI

1. 三宮神社
2. トア・ロード
3. 東遊園地
4. 旧外国人居留地
5. 南京町
6. 走水神社
7. 西関門跡
8. 鈴木商店跡

その昔、神戸開港の中心として、
外国人が暮らした旧居留地と
行政や商業機能が集積していた元町界隈。
北野エリアとは違った異国情緒が
楽しめます。

エリアマップ F


大倉山公園
中山手通り
東門筋
西門筋
生田新道
鯉川筋
トアロード
山手幹線
地下鉄大倉山駅
地下鉄山手(臨港鉄)駅
地下鉄三宮駅
阪急三宮駅
JR三宮駅
ポートライナー三宮
阪神三宮駅
JR元町駅
阪神元町駅(地下)
元町高架道
JR東海道本線
阪急電鉄神戸線
阪神電鉄本線(地下)
花隈駅(地下)
花隈中央通り
花隈本通
元町北通
元町本通
元町商店街
三宮センター街
三宮中央通
サンキタ通り
神戸高速鉄道
JR東海道本線
西元町駅(地下)
マリンロード
タワーロード
走水通
地下鉄みなと元町駅
市営地下鉄海岸線
地下鉄旧居留地大丸前
地下鉄花時計前駅
高速神戸駅(地下)
JR神戸駅
地下鉄ハーバーランド駅
阪神高速神戸線
浜手バイパス
海岸通りプロムナード
ハーバーロード
フラワーロード
神戸ハーバーランド
神戸ガス灯通り
ポートタワー
メリケンパーク
中突堤
第一突堤
国道2号
浜手バイパス
❷トア・ロード
❸東遊園地
★加納宗七像
❹旧外国人居留地
❺南京町
★長安門
★西安門
❻走水神社
❼西関門跡
❽鈴木商店跡
❶三宮神社
★神戸事件発生地の碑
★A.C.シムの碑
★阪神淡路大震災の記憶
★モラエス像
★1.17希望の灯り
★慰霊と復興のモニュメント
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N

❶ 三宮神社（さんのみや）

三宮町2丁目

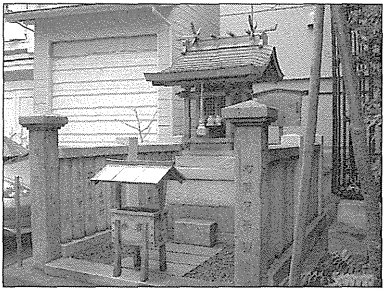
●「三宮町」の由来

三宮神社

旧神戸村の氏神で、祭神は湍津姫命（たきつひめのみこと）。生田裔神（えいしん）八社のうちの一つであるが、創建年代は不明である。

三宮という地名はこの神社があることに由来する。

神社のすぐ南の東西に走る道が西国街道で、かつては深い木々におおわれ旅人の憩いの地となっていた。また、神戸開港後は、境内から湧き出る清水を神戸に入港する船が汲んでいったという。なお、境内には源平合戦・一ノ谷の戦いの中、生田の森で戦死した源氏方の河原太郎・次郎兄弟を祀る「河原霊社」や「従是河原兄弟塚」の碑、神戸事件を伝える石碑が建っている。



河原霊社

◆神戸事件発生地の石碑（三宮神社境内隅）

三宮神社境内南西隅に「史蹟　神戸事件発生地」の碑が建っている。三宮神社のすぐ南を西国街道が走り、それを隔てて南側一帯は外国人居留地であった。こうしたなか、江戸幕府滅亡直後に事件は起こった。1868（明治1）年1月11日のことである。その日、西宮警備へ向うため備前藩の行列が西国街道を東へと行進していた。行列が三宮神社付近にさしかかった時、これを横切ろうとした外国人水平（イギリス人ともフランス人ともいわれる）が、備前藩士滝善三郎正信の手槍で傷つけられてしまった。そのため、知らせを聞いた停泊中の軍艦から外国兵が上陸し、交戦状態となり、外国兵は神戸を占領してしまった。世に言う「神戸事件」である。明治新政府は勅使東久世通禧（ひがしくせみちとみ）を派遣し、事件の解決にあたらせたが、結局、備前藩家老の日置帯刀が謹慎、滝善三郎が切腹処分となった。滝は2月9日、兵庫永福寺で外国人立ち会いのもと切腹し、事件は解決したのである。

神戸事件発生地の碑

❷ トア・ロード

トア・ロード

トア・ホテル(「区誌生田いまむかし」P.63より)

三宮神社の西側を南北に走る線を「トア・ロード(Tor Road)」と呼んでいる。この道は神戸開港以来、多くの外国人たちの仕事場である居留地と、住居エリアである北野を結んだ生活道路であり、洋服仕立て屋や洋菓子店、レストランなど外国人の生活の需要を満たす店舗で賑わい、洗練された通りとして現在に至っている。

「トア・ロード」という名前については、1907(明治40)年、北野町4丁目にドイツ人ホルスタインによって建てられた「トア・ホテル(Tor Hotel)」へ突き当たる道なので、この名がいつしか付けられた。なお、この「トア・ホテル」は、日本風の庭園に古典的なイギリス風の建物というスタイルで、89室ある客室は当時としては珍しい全室バス・トイレ付きであった。またこれらの客室は室内の色彩がすべて異なるという特徴をもっていた。第二次世界大戦後は進駐軍に接収されたが、1950(昭和25)年に失火で焼失してしまった。その後、跡地には神戸外国倶楽部が建ち、現在に至っている。

「トア・ロード」は戦時中は「東亜道路」とも言われた。トア(Tor)の意味については、英語の「丘」、あるいはドイツ語の「門」からとったとか、「鳥居(Torii)」の下を略したのだという説があるがはっきりしない。

豆知識 三宮はもともと今の元町あたりをさす地名だった！

本来、三宮という地名は、三宮神社のある周辺、つまり現在の元町駅南一帯をさす地名だった。従って、今のJR三ノ宮駅周辺は歴史的に見ると三宮とは呼べないのである。JR三ノ宮駅は、もともと1874(明治7)年の鉄道開業当初は今の元町駅付近に設置されていた。1934(昭和9)年、鉄道が高架化されることに伴い、三ノ宮駅を東の方へ移し、駅名をそのままにして現在の三ノ宮駅になったのである。この時点で歴史的な意味での「三宮」(三宮神社周辺の元町駅南一帯)と、鉄道の駅としての「三ノ宮」の位置がずれてしまうことになる。そして、かつての三ノ宮駅があった付近に新たに駅を設置しようとした際、駅名を「元町」としたのであった。

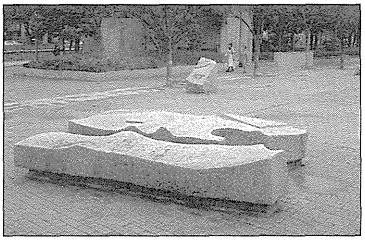
③ 東遊園地

加納町6丁目

フラワーロード沿い、市役所のすぐ南に広がる公園が東遊園地である。この場所はかつて、居留地と筋を隔てて東隣となっており、旧生田川の堤防敷になっていた。この堤防敷が1875(明治8)年に「内外人公園」として発足し、1922(大正11)年から「東遊園地」と呼ばれるようになった。この名は居留地内の西の公園に対する東の公園ということで付けられた。この公園で外国人が、ラグビー、ホッケー、サッカー、テニス、野球、クリケットなどのスポーツを行ない、やがて日本人にも普及していった。いわば、この地は日本の近代スポーツ発祥の地と言えよう。なお、公園内には「モラエス像」「加納宗七像」「シムの記念碑」「日本近代洋服発祥地の碑」「ボーリング発祥の地の碑」といった明治時代の神戸を物語る記念碑がいくつかある。

◆日本近代洋服発祥地の碑

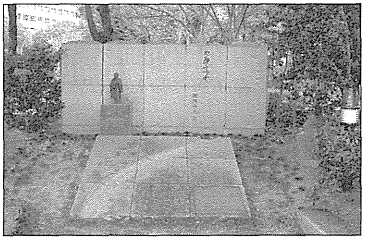
公園のやや北よりにある。洋服の型紙を石で立体的に表現したもの。神戸に近代洋服が紹介されたのは1869(明治2)年で、居留地の16番でイギリス人カペルが洋服店を開いたのがはじまりである。この碑は、1872(明治5)年の太政官発令「爾今礼装ハ洋服ヲ着用スル事」の布告百年を記念して1972(昭和47)年に建立が決まり、神戸洋服商工業協同組合により建てられた。



日本近代洋服発祥地の碑

◆加納宗七像

公園のフラワーロード側に旧生田川付替えに尽力をつくした加納宗七の像がある。背後にある大きな石を組み合わせた壁には、陸奥宗光(むつむねみつ)謹書の「加納宗七」の文字が彫られてある。

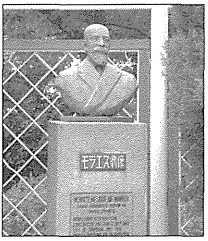


加納宗七像

◆モラエス像

公園北側区画の南西端に、モラエスの胸像がある。ウェンセスラウ・ジョセ・デ・モラエスはポルトガル人の文豪で、深く日本を愛し、明治後半に神

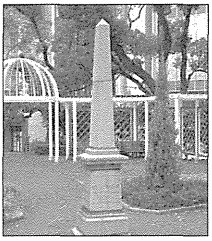
戸に住んだ。神戸・大阪総領事として活躍するかたわら、こよなく愛した日本の風物を筆で西洋に紹介した。彼が日本のことを書いた書物のうち『茶の湯』という題の本だけが神戸で刊行されている。なお、この像は二科会会員長谷川雅司の作で1964(昭和39)年10月に建てられた。



モラエス像

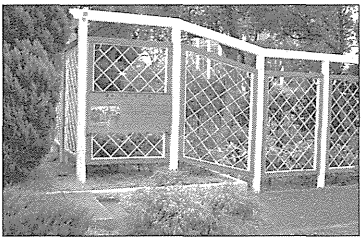
◆ A.C. シムの記念碑

モラエス像の近くにアレキサンダー・キャメロン・シムの記念碑が建っている。イギリス人のシムは居留地消防隊の功労者で、今も続く外国人スポーツクラブKR & AC(コーベ・レガッタ・アンド・アスレチック・クラブ)の創業者でもある。また、1885(明治18)年に彼の店・シム商会があった居留地18番で販売した日本最初のラムネ(レモネードからきているという)は爆発的なヒット商品となり、それ以後、「18番」がラムネの代名詞となった。阪神大震災で、この碑の建っている地面が陥没したため、碑そのものが傾いてしまった。


A.C. シムの記念碑

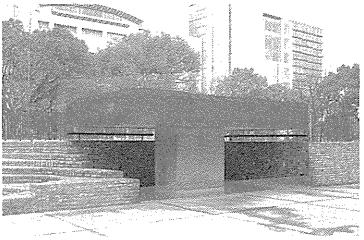
◆阪神・淡路大震災の記憶

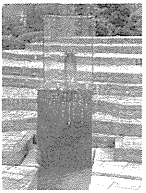
シムの記念碑がある一角に「阪神・淡路大震災の記憶」と題した説明版が掲げられている。阪神・淡路大震災で震度7の激震に見舞われた東遊園地周辺も大きく地盤が動いた。そのため、この説明版がかけられている格子のフェンスも地盤に生じた約60cmの段差によって高さにずれが生じてしまった。普及の際、地震の激しさを後世に伝えるため、高さの違いをそのままにして残したものである。


阪神・淡路大震災の記憶

◆阪神・淡路大震災慰霊と復興のモニュメント
1.17希望の灯り

東遊園地内の南に「阪神・淡路大震災　慰霊と復興のモニュメント」がある。2000(平成12)年1月17日に除幕されたこの碑は、1995(平成7)年1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災の記憶と復興の歩みを後世に伝えようと多くの人々の寄付で造られた。「慰霊　復興　連帯」をテーマに、地下には「慰霊と瞑想の空間」を設け、その壁には震災の犠牲者4743人(平成17年3月現在)の名前が刻まれている。また、「1.17希望の灯り」は大龍寺に保管されていた灯と、全国から集められた灯りを一つにして、鎮魂と希望を託しこの地で永遠に灯されている。

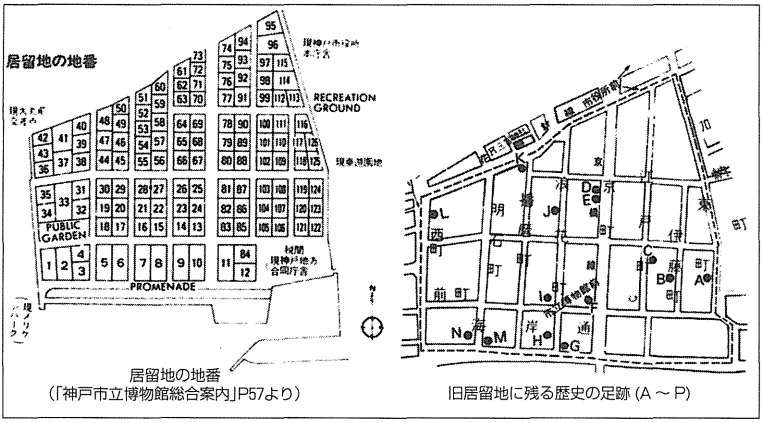

阪神・淡路大震災
慰霊と復興のモニュメント


1.17希望の灯り

④ 旧外国人居留地

脇浜町３丁目

●「東町・伊藤町・江戸町・京町・浪花町・播磨町・明石町・西町・前町・海岸通」の由来



居留地の地番
（「神戸市立博物館総合案内」P57より）

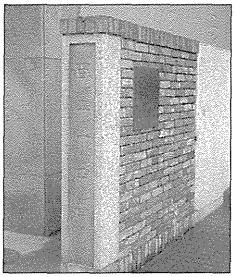
旧居留地に残る歴史の足跡（A～P）

市役所・東遊園地の西の筋から鯉川筋まで、三宮神社の南の筋（旧西国街道）より南側で囲まれた区域は、1867（慶応3）年から1899（明治32）年までの間、日本の統治支配が及ばない、外国人自治の行なわれていた外国人居留地であった。居留地は1858（安政5）年の日米修好通商条約の規定によって設置されることになり、神戸の居留地は神戸開港の半年前から幕府によって設営が開始された。幕府滅亡後は新政府が引き続きその設営を行ない、完工するに至ったのである。居留地は126に区画され、初代兵庫県知事 伊藤博文のもとイギリス人技師ハートが諸施設の設計にあたった。

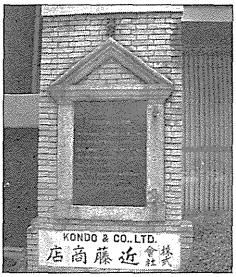
今の東町、伊藤町、江戸町、京町、浪花町、播磨町、明石町、西町、前町、海岸通がかつての居留地にあたり、これらの町名は明治の初年に命名された。「伊藤」は県知事伊藤博文の名を、他の「江戸」「京」「浪花」「播磨」「明石」は日本の有名な地名や近隣の地名を町名に付け、「東」「西」「前」「海岸通」はそれぞれの位置から付けたものである。

現在の居留地はビルが建ち並び、ビジネス街と化してしまったが、旧居留地15番館（国重要文化財）は唯一残る居留地時代の建物である。なお、大丸前にある「神戸外国人居留地の碑」が当時の様子を偲ばせてくれる。

◆旧居留地に残る歴史の足跡

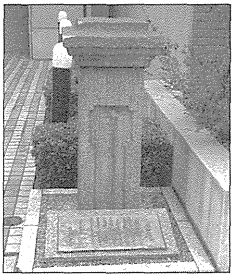


●居留地124番の標石(A)
モーリャン・ハイマン商会の倉庫があった。標石の埋め込まれてあるレンガ塀は1919(大正8)年に修築したもの。



●居留地108番の銘板(B)
モーリャン・ハイマン商会の倉庫があった。明治初年に建てられたレンガ造りの建物の当時の「窓まわり」に銘板をはめこんである。

●居留地103番の標石(C)
ビルとビルの間にひっそりとたつ当時の標石。イギリスの商社・ジョン・スワイヤ・アンド・サンズ・リミテッドの神戸支店があった。



●外国商館跡の門柱(D)
居留地69番にあった外国商館の門柱。

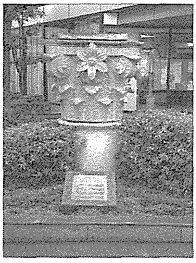
●居留地68番の標石(E)
居留地68番に建っていた商館の門柱に使われた古い標石。

●神戸市立博物館(F)(カラー頁 P133)
1935(昭和10)年に建てられた旧横浜正金銀行神戸支店の建物をもとに新たに建物を増築して、博物館に転用。博物館は市立考古館と市立南蛮美術館を統合する形で1982(昭和57)年にオープンした。建物は国の登録文化財になっている。

●チャータードビル(G)
居留地9番に建つ。1938(昭和13)年築。この地は英・西・墺の領事館があったところ。

●神港ビル(H)
居留地8番に建つ。1939(昭和14)年築。居留地時代はドイツの商社・シュルツライズ商会があった。

●旧居留地15番館(I)(カラー頁 P129参照)
1989(平成元)年に国の重要文化財に指定。神戸の居留地に残る当時の唯一の建物。コロニアルスタイル。1881(明治14)年頃に建てられたものと思われる。当時はアメリカ領事館があった。1990(平成2)年～1993(平成5)年にかけて行われた修理工事で建設当初の面影を取り戻していたが、1995(平成7)年の阪神・淡路大震災で全壊した。震災後、崩れた建物の部材を回収し復旧工事が行われ、1999(平成11)年に元の姿を取り戻すことが出来るに至った。また、15番館と西隣の16番の敷地との間にある煉瓦塀も居留地時代のもので壁の端の柱の下には15番地と16番地の境界を示す線が引かれてある。15番館前の「旧居留地下水道公開施設」は、1872(明治5)年頃に敷設された煉瓦造の下水渠で、居留地の設計を手がけたハートによって設計・施工された。

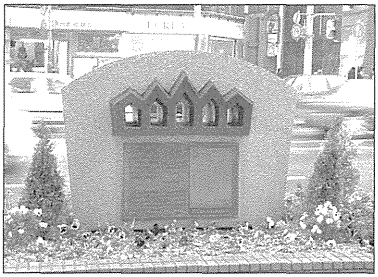


柱頭

●宮城道雄生誕地の碑(J)
三井住友銀行神戸営業部の東側に、「春の海」で知られる箏曲家・宮城道雄生誕の地の碑がある。この碑のある場所は居留地58番(茶倉)にあたり、彼は1894(明治27)年4月7日にこの地で生まれた。幼少の頃失明するが、その後神戸の二代目中島検校に生田流箏曲を学び、上京後は新日本音楽の名で創作演奏をして活躍する。東京音楽学校教授となり、邦楽界の第一人者とまで言われるようになった。1956(昭和31)年演奏旅行中に列車から転落して死亡。なお、午前9時～午後5時までの三十分おきに、代表作「春の海」の演奏がこの碑から流れる。

ブロンズ扉

●旧三菱銀行三宮支店時代の柱頭(K)
1929(昭和4)年に建てられた三菱銀行三宮支店(現・東京三菱銀行神戸支店)の建物の当時の柱頭。なお、神戸支店のある神戸ダイヤモンドビルのエントランスホールの壁に埋め込まれている獅子のブロンズ扉は旧三宮支店正面玄関の扉である。



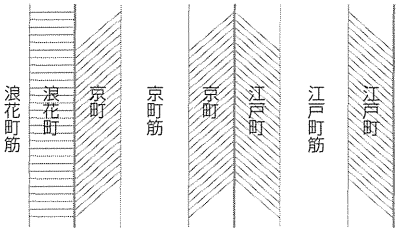
●居留地の碑(L)
大丸前にある居留地の碑。

●海岸ビル(N)
居留地3番に建つ。1918(大正7)年築で河合浩蔵の設計。このビルの西隣2番地に香港上海銀行のレンガ造りの建物が建てられていたが、これが第二次大戦中海軍武官府として使用されていたため、ここをグラマンが機銃掃射して、その名残が海岸ビルにも残されている。阪神・淡路大震災での被害が大きかったため、このビルは建て替えられることになったが、機銃掃射の跡が残る外壁部分はそのまま残して、その内側に近代的なビルを建てる(1998〈平成10〉年竣工)ことで、かつての海岸ビルの名残を残そうとしている。

●商船三井ビル(M)
居留地5番に建つ。1922(大正11)年築。居留地時代は独・露・スイスの領事館があった。

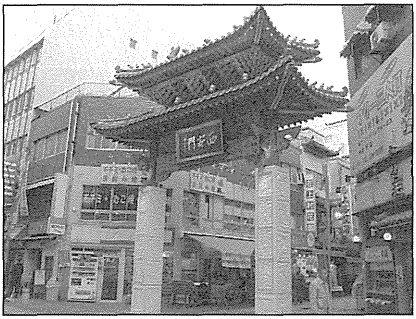
豆知識 ストリートが今でも残る居留地の区画

日本の町と町の境界は普通、道路をその境にしている。しかし、この居留地内の町の境は例外である。町の大きな筋(道路)を中心にして対面する家々は同じ町名なのである。これは欧米のストリートという感覚がそのまま入ったもので、まさに外国人が住んでいた居留地ゆえのものといえよう。居留地の区画は現在でも残され、今でもストリート(筋)を中心にして町名が同じであるという光景はかわらずに残っているし、一番から一二六番までの区画も現行の地番として健在である。これもここがかつて居留地であったことを証明してくれる名残の一つであろう。



⑤ 南京町（なんきんまち）

元町通１丁目、栄町通１丁目一帯



神戸の中華街・南京町の歴史は、そもそも外国人居留地に住むことが認められていなかった中国人達によって築かれてきたのである。神戸開港当時、修好通商条約を日本と締結していなかった当時の清国の人々は、居留地の中に居住することを許されなかった。そこで、中国の人達は、居留地の近辺に居住する場所を求め、それが現在の南京町へと発展していったのである。今では中華料理店をはじめ約50軒の店舗が軒をつらね、神戸の観光スポットの一つになった。毎年旧正月には、龍踊りで有名な春節祭が行なわれ、中国のお正月を味わうことができる。

●「元町通（もとまちどおり）・元町高架通（もとまちこうかどおり）」の由来

旧神戸村、二ツ茶屋村、走水（はしうど）村をあわせた旧神戸町の西国街道沿いの中心部で、元々の土地だということから名付けられたという。

●「栄町通（さかえまちどおり）」の由来

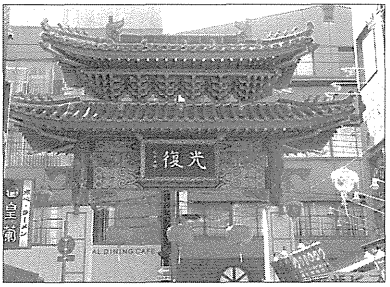
明治のはじめ、西国街道の南に広い道路をつけたが、それが完成したときによく栄える町にということで「栄町」と名付けた。

豆知識 長安門と西安門

南京町のシンボルである長安門（楼門）は日中両国の平和と友好を願って、中国政府が海外に輸出することを許可した第一号の"漢白玉楼門"である。「漢白玉」とは北京の南に位置する河北省右家荘に産出する大理石のことを指している。

楼門の柱型には、無数の龍と雲の彫刻が施されており、約100名の工程師が約1年半かけて制作し1985（昭和60）年に完成したものである。いつも記念写真を撮る観光客でにぎわっている、まさに南京町の玄関にふさわしい門といえる。

また、2005（平成17）年1月、南京町の西の入口に、震災からの復興のシンボルとして「西安門」が完成した。旧来からの老朽化した「西楼門」を撤去し、震災10年を機に、地元商店街が建て替えを行ったものである。新しい門は、商業が栄えた中国の北宋時代の門をモデルに、中国語で「失ったものを取り戻す」という意味の「光復」の文字が掲げられている。夜になると明るく浮かび上がり、幻想的な雰囲気が味わえる。それはまるで、震災の暗闇から光を取り戻したまちを象徴しているかのようである。



旧居留地・元町周辺

⑥ 走水神社（はしうど）

元町通5丁目

旧走水村の氏神で、祭神は天照大神、応神天皇、菅原道真の三座。走水神社は元町通5丁目の南側の裏通りにあり、天満宮とも呼ばれており、もとは元町通5丁目北側にあった天神社と八幡神社を合祀してこの走水神社としたのであった。1875(明治8)年のことである。

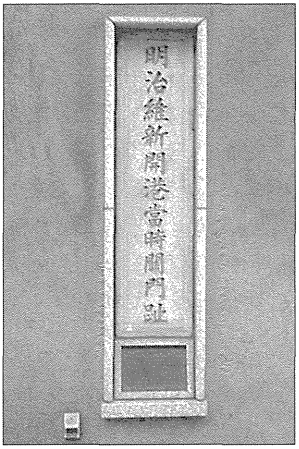
ところで、「走水(はしうど)」の名はどこからきたのであろうか。昔、再度(ふたたび)谷に大水が出るとこの村めがけて水が流れ水害を受けたため、走水という名がついたという。また、近世以前から間人(はしうど)家がここに住んでいたが、走水に住んだので間人を名乗ったという。しかし、間人は古代氏族の一つであり、逆に間人が住んでいたから、そのあたりを「はしうど」というようになり、それに前述の水害の話が付け加わり「走水」の字が当てられたとするのが妥当であろう。

阪神・淡路大震災で損壊した鳥居は1995(平成7)年11月に再建された。

旧居留地・元町周辺

⑦ 西関門跡（にしかんもん）

元町通6丁目



旧ホテルシェレナの元町通に面した壁面に「明治維新開港当時関門跡」の碑が埋め込まれている。この関門は、幕府が外国人居留地を設置した1867(慶応3)年に密貿易を防ぐために置いた14の関門のうちの一つで、「西関門」と呼ばれた。なお、これらの関門は1871(明治4)年に廃止され、自由に通行できるようになった。

⑧ 鈴木商店跡

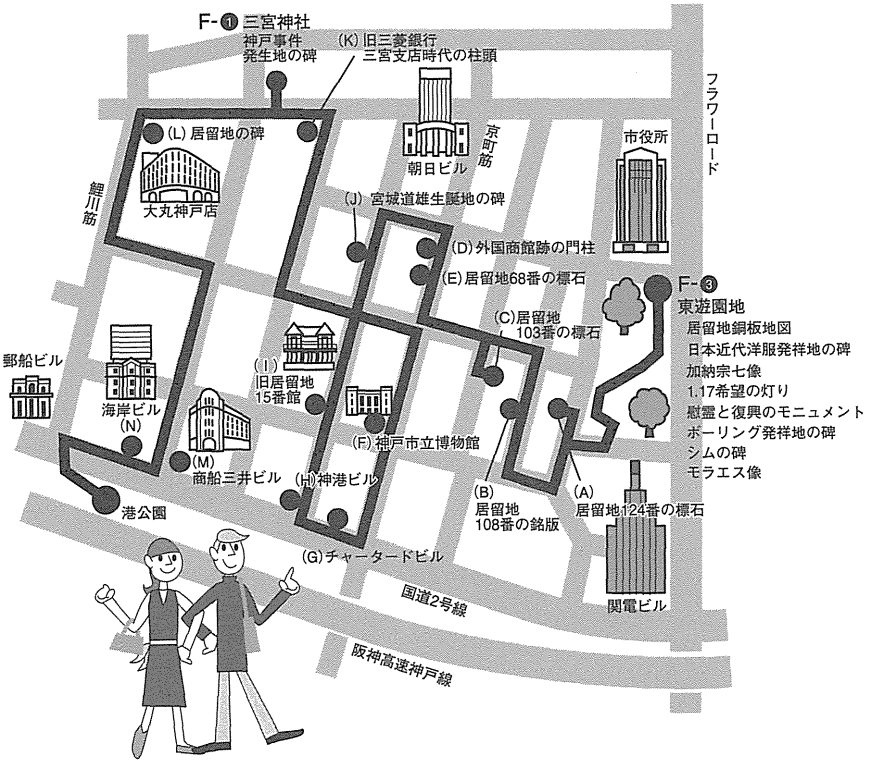
大正初期の鈴木商店本店(資料提供：太陽鉱工株式会社)

現在、郵便貯金兵庫センターのある場所は、かつての鈴木商店の本店があった場所である。鈴木商店は1874(明治7)年頃、初代鈴木岩治郎が洋糖引取商の看板を掲げ創業。女店主鈴木よねの時代に入り、番頭金子直吉(かねこなおきち)の天才的経営手腕で、日本を代表する商事会社に躍進した。金子は日清戦争後の台湾開発や第一次大戦の大戦景気をバネに、従来の砂糖販売から肥料・茶・樟脳・外米・生糸・木材などに業務を拡大し、三井・三菱と肩を並べるほどの大財閥に成長し、大正財閥の花形に踊り出たのである。こうして大正時代に黄金期を迎えていた鈴木商店も、1918(大正7)年の米騒動で、鈴木商店が米を買い占めたとの噂が広がり、暴徒によって焼き払われるという事件が起こっている。大正時代、一時は三井・三菱をしのぐ勢いをみせた鈴木商店も1927(昭和2)年の金融恐慌によってあっけなく倒産してしまうのであった。この時、鈴木商店は台湾銀行から多額の不良貸付を受けており、そのため台湾銀行は危機に陥っていた。その不良債権をかかえた台湾銀行を救済するため、時の若槻礼次郎内閣は緊急勅令を発布しようとしたが枢密院の反対にあい成功しなかった。そこで台湾銀行は鈴木商店をみはなし、鈴木商店は同年4月倒産したのである。鈴木商店は滅んだが、彼らの残した事業と人材はその後のわが国の工業化に偉大なる功績を残している。

モデルコース

エキゾチック神戸のみなもと・旧外国人居留地を訪ねて

神戸港の歴史は、古くは大輪田ノ泊にまでさかのぼりますが、神戸といえば何と言ってもエキゾチック。神戸港が世界に向って開かれて以来、近代神戸を見守ってきた旧外国人居留地。そんな、エキゾチック神戸のみなもと・旧外国人居留地を歩いてみましょう。



東遊園地（居留地銅板地図・日本近代洋服発祥地の碑・加納宗七像・1.17希望の灯り・慰霊と復興のモニュメント・ボーリング発祥地の碑・シムの碑・モラエス像など）➡居留地124番の標石➡居留地108番の銘板➡居留地103の標石➡居留地68番の標石➡外国商館の門柱➡宮城道雄生誕地の碑➡旧居留地15番館➡神港ビル➡チャータードビル➡神戸市立博物館➡旧三菱銀行三宮支店時代の柱頭➡三宮神社（神戸事件発生地の碑など）➡居留地の碑（大丸前）➡商船三井ビル➡海岸ビル➡港公園

所要時間 約140分 ※(A)～(N)は史跡編 F-❹の史跡となります。
※所要時間は1km10分、各史跡滞在5分で計算しています。
※個人差により所要時間は変動いたします。

史跡と町名

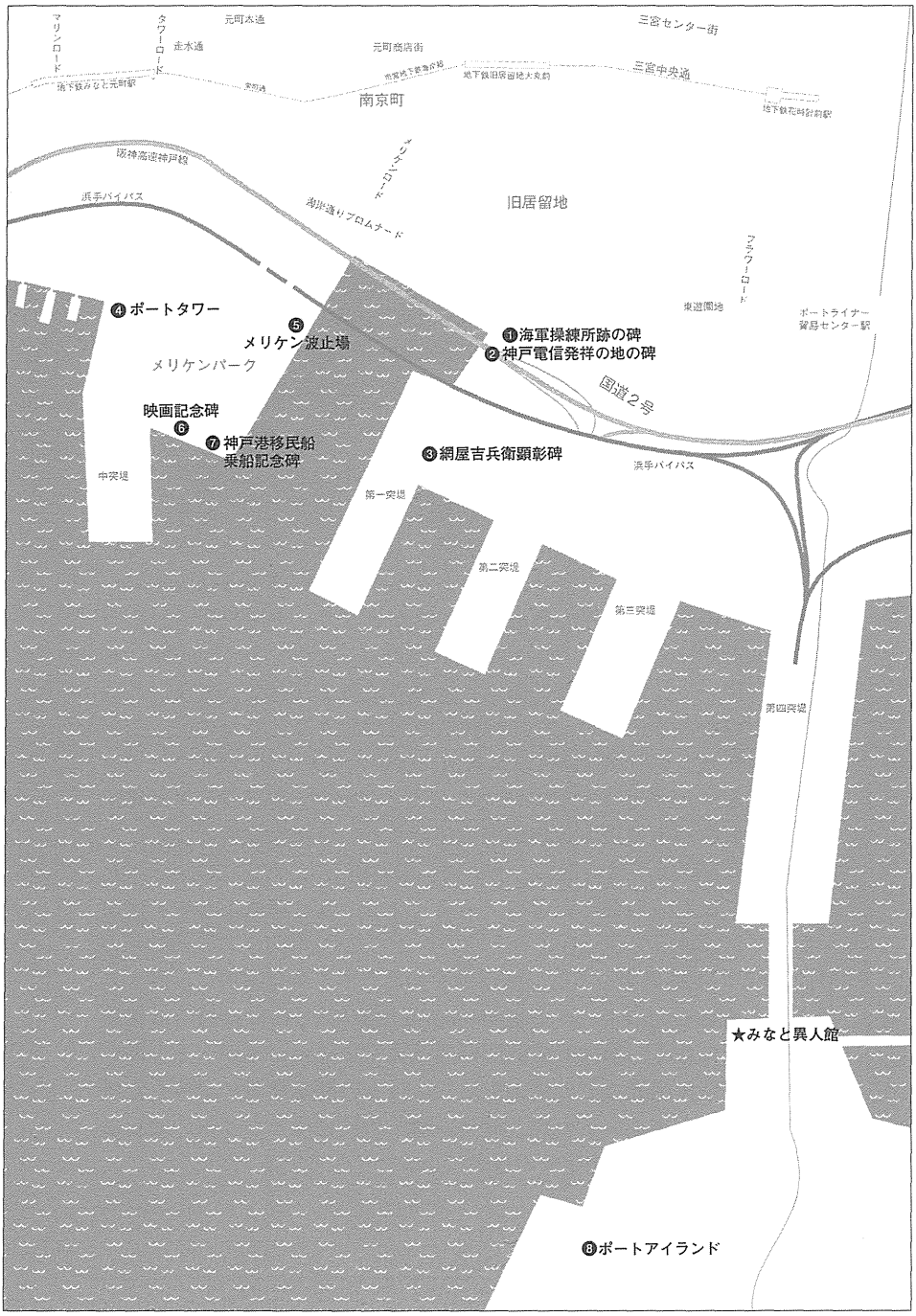
神戸港・ベイエリア周辺

KOBEKOU・BAYAREA

1. 海軍操練所跡の碑
2. 神戸電信発祥の地の碑
3. 網屋吉兵衛顕彰碑
4. ポートタワー
5. メリケン波止場
6. 映画記念碑
7. 神戸港移民船乗船記念碑
8. ポートアイランド

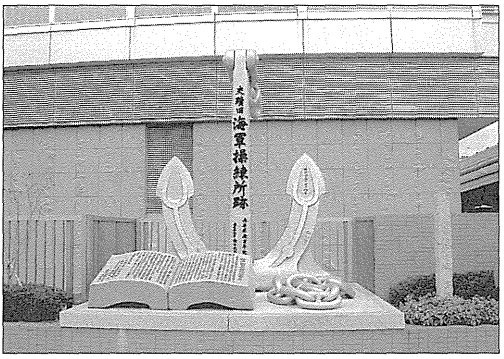
1867(慶応3)年、
世界に向けて開港した神戸港をはじめ、
1981(昭和56)年に完成した
人工島ポートアイランドは、
神戸を代表するエリアです。

エリアマップⒼ


マリンロード
タワーロード
元町本通
走水通
元町商店街
三宮センター街
三宮中央通
地下鉄みなと元町駅
地下鉄旧居留地大丸前
地下鉄花時計前駅
南京町
阪神高速神戸線
浜手バイパス
湊川通りプロムナード
旧居留地
アネックロード
東道園地
ポートライナー
貿易センター駅
❹ポートタワー
❺
メリケン波止場
❶海軍操練所跡の碑
❷神戸電信発祥の地の碑
メリケンパーク
国道2号
映画記念碑
❻
❼神戸港移民船
乗船記念碑
❸網屋吉兵衛顕彰碑
浜手バイパス
中突堤
第一突堤
第二突堤
第三突堤
第四突堤
★みなと異人館
Ⓑポートアイランド

❶ 海軍操練所跡の碑

新港町



京町筋を南に下がり、阪神高速の高架の下あたりに1968(昭和43)年10月に建てられた「史蹟旧海軍操練所跡」の文字(金井元彦元兵庫県知事筆)の入った錨型の記念碑が建っている。このあたりから東にかけての一帯に、勝海舟(かつかいしゅう)が開いた海軍操練所があった。江戸幕府の鎖国体制が崩壊し、外国船来航に伴い摂海防備の声が高まり、その視察のため将軍徳川家茂(いえもち)が1863(文久3)年4月23日に小野浜に上陸した。この 時、勝がこれに従い、彼はこの地に海軍操練所の建設を進言し、家茂はこれを許したのである。勝がここに操練所を建設しようとしたのは、二ツ茶屋村の網屋吉兵衛(あみやきちべえ)が神戸村安永新田に築いた船たで場(現在のドッグに相当する)の設備がすでにあったからだ。同24日、勝は神戸村海軍所造船所御取建御用並摂海防禦御用に任命され、海軍操練所の建設にあたった。海軍操練所は海軍営、海軍局、海軍所ともいい、海軍兵学校、海軍機関学校を兼ね備えたものである。なお、勝は鷹取山から石炭を採掘して、操練所で利用しようとしていた。その翌年1864(元治1)年の5月29日から生徒募集を布告して活動を始めたが、勝は幕府に反対する者まで入所させたので、その翌年1865(元治2)年3月には操練所は閉鎖されることになる。操練所の開所期間は非常に短かったが、その間に坂本龍馬、陸奥宗光などの偉人を出し、日本の海軍建設に貢献した割合は高いといえよう。その後、海軍操練所の建物はイギリスの領事館となったり、移築して小学校の校舎になったりしている。

❷ 神戸電信発祥の地の碑

新港町

海軍操練所跡の記念碑のすぐ横に「神戸電信発祥の地」の碑が建っている。1870(明治3)年10月、神戸電信局が開局され、神戸・大阪間に電信が通じたことを記念するものである。なお最初、神戸電信局はこの碑が建てられてある付近にあった。

豆知識 神戸港は古代から国際港だった！

日本を代表する国際港・神戸と横浜。商都大阪に近い神戸と首都東京に近い横浜、この二つの港が江戸の幕末に開港された経緯はよく似ているし、その後の街の発展の経緯もどこか似たところがある。両者に共通するイメージは「異国情緒あふれるエキゾチックでハイカラな街」であろう。そして、なにかにつけ、この二つの港町は様々な比較の対象となる。人口や予算規模では圧倒的に横浜が優位に立ち、港湾関係も阪神・淡路大震災以後は横浜が圧倒している。今のところ統計面で神戸が横浜に勝てそうなものはほとんどないと言ってよい。しかし、港に関しては、唯一神戸が横浜に誇れる点がある。それは、神戸は幕末開港以前にも国際港としての歴史を持っているが、横浜にはそれがないということだ。

そもそも、江戸の幕末、日米修好通商条約のなかで、開港地として神奈川・兵庫を含む四港の名前が挙がっていた。つまり、もともとは「横浜」「神戸」ではなく東海道の宿場である「神奈川」、国内重要港湾である「兵庫」の二つを開港することになっていたのだ。しかしこの二つの場所についてはここを開港すれば日本人と外国人との衝突も懸念されると言うことで、結局、神奈川はその横にある村の「横浜」を、兵庫は隣の関村「神戸」を開港地として、世界に港が開かれていったのである。

こうして、同じような経過をたどって開港し、近代的な都市に発展していった神戸と横浜だが、前述の通り、神戸の方は幕末に開港される以前から国際港としての歴史を有していたのだ。神戸の港が歴史の上で登場するのは奈良時代の頃で、そのころは神戸市灘区の「敏馬の浦」が港として機能を持っていた。万葉集にも歌われたこの港には遣唐使船などが泊まったという。奈良時代の後半には、摂播五泊ノ制にともないもう少し西の「大輪田ノ泊」が港として登場し、敏馬からこちらへ港の機能が移された。

この大輪田ノ泊に目を付け、対中国貿易の拠点として本格的な国際港としての地位を築き上げたのが平清盛である。彼は、平家の荘園・福原荘の南にあるこの港に早くから関心を寄せ、平氏政権を樹立させると承安年間(1171〜1174)に大輪田ノ泊を修築し、日宋貿易の拠点とするのであった。続く鎌倉幕府も大輪田ノ泊を拠点に日宋貿易を進めるが、元寇で中国との関係が一時途絶えてしまう。室町幕府になると三代将軍足利義満が中国との間で日明貿易を開始し、兵庫津(室町以降の大輪田ノ泊の名称)が再び対中国貿易の拠点として利用されるようになる。

その後、応仁の乱で兵庫津は焼失して、外国船の入港は途絶えてしまう。結局、江戸幕府は鎖国政策をとったため、兵庫津は国際港として地位を長崎に譲るものの、国内の重要な港として発展することになった。

このように、神戸港は幕末の開港以前から、その前身・兵庫津(大輪田ノ泊)が対中国貿易の拠点として利用されてきており、古代から国際港だったことが伺えよう。

神戸港・ベイ周辺

❸ 網屋吉兵衛顕彰碑

新港町

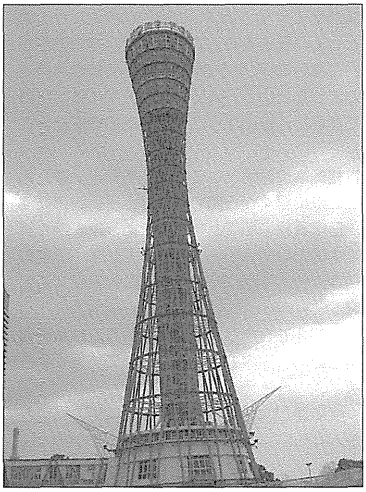
新港第一突堤の付け根のあたりに、網屋吉兵衛の顕彰碑がある。網屋吉兵衛(1785～1869)は二ツ茶屋村に生まれ、1855(安政2)年に神戸村安永新田の地(新港第一突堤付近)に船たで場を築いた事で知られている。船たで場とは現在のドッグに相当するもので、船底についた貝殻や船虫などを焼くための施設であった。後に、この船たで場の地は勝海舟の進言で幕府の海軍操練所となった。

●「新港町」の由来
新しい港ということから付けられたという。

神戸港・ベイ周辺

❹ ポートタワー

波止場町



神戸港中突堤にひときわ輝く赤色の鼓型をしたタワーが建っている。高さ108メートルのポートタワーである。神戸開港90周年を記念して、神戸港 振興協会が建て、1963(昭和38)年4月にオープンした。夜ともなれば、このポートタワーと隣の神戸海洋博物館(カラー頁 P132参照)に灯りがともり、メリケンパークのすばらしいイルミネーションが観る人の心を酔わせてくれる。

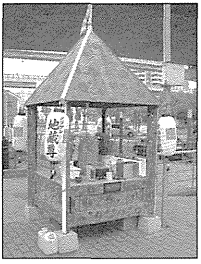
⑤ メリケン波止場

●波止場町の由来

メリケン波止場

中突堤の東隣、鯉川の河口に明治政府は1868(明治元)年波止場を作り第三波止場とした(後に第二波止場となる)。いつの頃からかこの波止場をメリケン波止場と呼ぶようになったが、これは、この波止場ができる前の慶応三年(1867)11月に、波止場のすぐ北側の区画にアメリカ領事館が開設されたことがその理由だと考えられる。当時、「アメリカ」のことを英語の発音から「メリケン」と聞き取り、アメリカを指す言葉として用いられたのである。そして、この波止場も、アメリカ領事館の前にある波止場ということで「メリケン波止場」と呼ぶようになり、正式名称である第二波止場(もとは第三波止場)の名が消えてしまった。ただ、第二次大戦中は、敵国の名称をさけたのか「万国波止場」と改称されたが、戦後、もとの「メリケン波止場」へと復帰している。そのメリケン波止場大部分が埋め立てられ、1987(昭和62)年にメリケンパークがオープンし、神戸海洋博物館が開館した。今でも、メリケンパークの東側の岸壁をメリケン波止場と呼びかつての名残をとどめている。メリケン波止場の北側にあるメリケン地蔵は、はしけから転落して亡くなった子供や、港湾事故の犠牲者を弔うために1975(昭和50)年頃に作られ、このあたりから引き上げられた一石五輪塔とともに祀られている。阪神・淡路大震災で、メリケン波止場はその岸壁が崩れ落ちたり、メリケンパークが液状化現象で泥まみれになるなど大きな被害がでた。この震災の傷跡を後世にそのまま残そうと、1997(平成9)年7月、「神戸港震災メモリアルパーク」が開設された。ここには被災して半分海中へ崩れ落ちた岸壁を60メートル、当時のままで保存し、地震の激しさと被害の生々しさを伝えようとしている。

なお、波止場町はメリケン波止場があることから名付けられた。

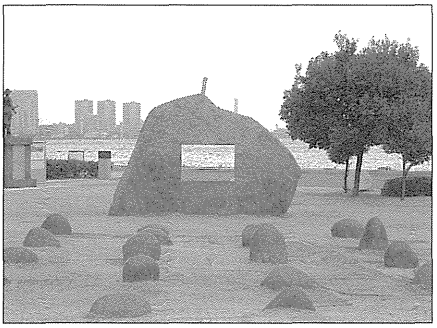

メリケン地蔵

神戸港震災メモリアルパーク

神戸港・ベイ周辺

⑥ 映画記念碑

波止場町メリケンパーク内



メリケンパーク内、神戸海洋博物館の前に、高さ約3㍍、横幅約4㍍の大きな石の中央をくりぬき、スクリーンにみたて、その前に客席風に40個の玉石を配置した記念碑が建てられている。これが1987(昭和62)年に映画記念碑を建てる会によって建てられた映画記念碑(メリケンシアター)である。なお、40の玉石には映画評論家の淀川長治氏が選んだ外国・日本の有名映画スターの名が一人づつ刻まれている。日本ではじめて映画が上映されたのは(当時は活動写真と呼んでいた)、1896(明治29)年11月25日から5日間、花隈の神港倶楽部で行なわれたキネトスコープによる興業が最初であった。いわば、神戸が日本での映画上映の発祥の地といっても過言ではないのである。

神戸港・ベイ周辺

⑦ 神戸港移民船乗船記念碑

波止場町メリケンパーク内

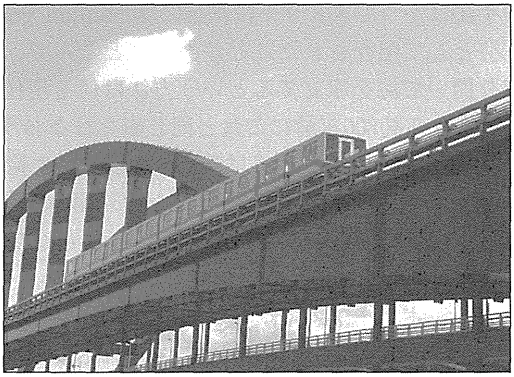
2001(平成13)年4月28日に建立された海外移住者の功績を讃えるための記念碑。93年前のこの日、日本初の移民船が神戸から出航した。記念碑は、海を見つめ、船に乗り込もうとしている三人親子の移住家族をモデルにした銅像で、台座に「希望の船出」の文字が刻まれ、また、台座の脇には神戸港を出港する当時の笠戸丸の姿が史実に基づき再現されている(史跡編 P150参照)。

豆知識 初めて走った無人電車ー新交通システム・ポートライナー

コンピュータ制御で電車の運行全てが自動化され「無人運転」で走る電車を新交通システムと呼ぶが、この新交通システムの先駆けが、三宮とポートアイランドを結ぶ「ポートライナー」である。今ではこれ以外にもいくつかこのシステムを導入した電車が存在するが、日本で最初の無人運転を行った電車はこの「ポートライナー」に他ならない。

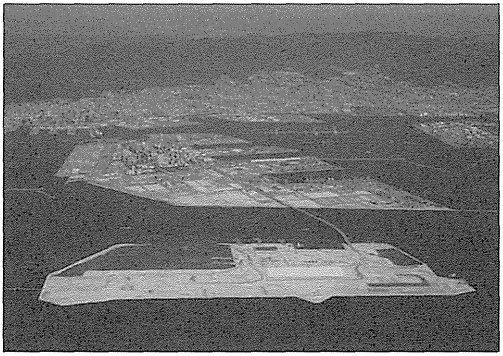
神戸市最初の人工島・ポートアイランドへの交通手段として開発が進められてきたポートライナーだが、実は、日本最初の無人運転という栄光の座を手に入れるのには、紆余曲折があった。というのも、大阪市もほぼ同じ時期に、大阪南港へのアクセスとして新交通システムの開発に着手していたからだ。大阪は、「ニュートラム」という愛称をすでに決め、着々と開業準備に向け進んでいたのだが、神戸はポートアイランド完成を記念したポートピア81という地方博覧会を計画していたため、それに照準をあて、新交通システムの開業時期を設定した。大阪市も「日本初」という名声を手に入れるべく神戸市と開業時期をめぐってデッドヒートが繰り広げられたのだが、最終的には神戸が先に開業することになった。

こうして、1981(昭和56)年2月5日、新交通システム「ポートライナー」は開業することになったのである。ただ、開業からしばらくは、混乱が生じてはいけないと乗務員を乗せていたが、これも運転するわけではないので「添乗員」と呼んでいた。現在では、無人運転に対する違和感は全くないといってよく、これに乗る乗客も運転士がいないのがあたりまえといった感じであろう。



⑧ポートアイランド

●「港島町・港島中町・港島南町」の由来



ポートアイランドは神戸港に浮かぶ新たな海上都市である。この神戸初の人工島は、外国貨物の増大と港湾輸送方式の変化、そして都市機能充実のための新都市空間を創るために建設がなされた。昭和30年代に原口忠次郎元神戸市長が構想を打ち出し、宮崎辰雄元神戸市長のもとでその構想も現実のものとなったのである。工事は1966(昭和41)年に着工され、1981(昭和56)年に竣工するまで実に15年の歳月を要したビックプロジェクトであった。ポートアイランド埋立ての土砂は須磨高倉から運ばれたもので、8000万㎥(霞ケ関ビル155杯分)にも及んだ。なお、須磨高倉の土砂を採り切り開いた所は今、須磨ニュータウンとなり、多くの住宅が建ち並んでいる。このポートアイランドに限らず、山を切り開きその土砂で海を埋立てるという、このユニークな神戸市の手法はかつてアメリカの雑誌に"Mountain goes to sea"(「山、海へ行く」)として紹介されたことがある。ところで、このような神戸の山を切り開いて海を埋立てるという方法は何も現代に始まったわけではない。今から約800年前にこれと同じ事を行なおうとした人物がいた。それが平清盛 である。清盛は兵庫津の前身、大輪田ノ泊を承安年間(1171～4年)に 改築し、その時塩槌山を切り開いて港に築島(経ケ島)を築こうとしたのである。成功さえしなかったものの、今から800年前に今と同じような事をやろうとしていたのには驚嘆させられてしまう。

さて、ポートアイランドは総工費5300億円を要し、周囲14㎞、面積436ヘクタール(甲子園球場の120倍)の島として1981(昭和56)年に完成したが、そ

れより前1972(昭和47)年に旧生田区に編入されている。港島と三宮を完成と同じ年に営業を開始した新交通システム・ポートライナーが結んでいる。ポートアイランドの完成した1981(昭和56)年にはポートアイランドの完成を祝いポートピア'81が開催され、多くの人々が会場に足を運び、新たなる海上都市の門出を祝った。このポートピア博はその後各地で行なわれる地方博の先駆けとなったのである。

阪神・淡路大震災前は、11のコンテナバースと15のライナーバースを有し、神戸港のコンテナ貨物の約35%を取り扱っていた。現在では、コンテナ船の大型化に伴いコンテナバースの利用転換が必要となり、5つのコンテナバースが再開発エリアとして新たな都市型ウオーターフロントに再生されようとしている。そして、中央部分には多くの高層住宅が建設され、今では人口約1万4千人を有する海上都市となっている。

また、1986(昭和61)年から、ポートアイランドの沖合を埋め立てるというポートアイランド二期工事(総面積390㌶)が行なわれている(2005年までを予定)。ポートアイランド二期では、成長産業・集客産業の立地を目指し、医療産業都市構想、神戸国際マルチメディア文化都市(キメック)構想、神戸国際ビジネスセンター、上海・長江交易港区などのプロジェクトが進められようとしている。

さらに、ポートアイランド(二期)の沖合には、2006(平成18)年2月16日開港予定の神戸空港が建設中で、完成すれば三宮とポートライナーの延伸線で結ばれることになっている。

なお、「港島」という地名は、ポートアイランドの直訳で、先に英語で島名をつけ、あとからその直訳を町名にしたものである。

◆みなと異人館(港島町2丁目)

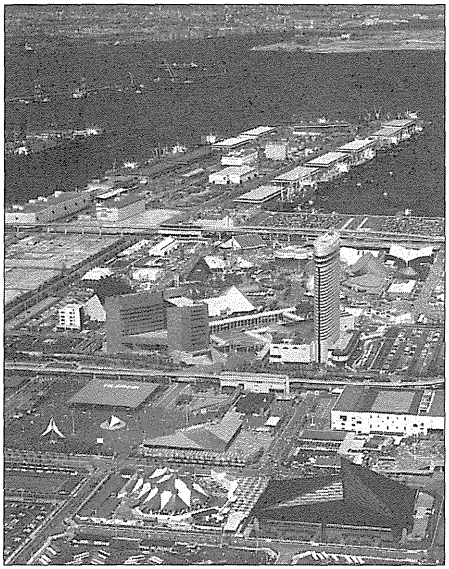
北公園内にある「みなと異人館」(カラー頁 P129参照)は、もと北野町4丁目にあったものを、この場所に移築・保存したものである。北野町時代には日本郵船生田船員寮として使用されており、西棟と東棟の二つの建物からなっていた。この建物は、そのうちの西棟にあたり、大正時代に建てられたものと推測される。木造二階建で、寄棟造り、下見板張りオイルペンキ塗りの建物で、現在は一階に喫茶室が設けられ、二階が展示室となっている。なお、もう一方の東棟の方は、1976(昭和51)年に、四国の高松市にある民家博物館四国村へ移築された。こちらの方はみなと異人館より古く、明治末にドイツ人が設計したと言われている。

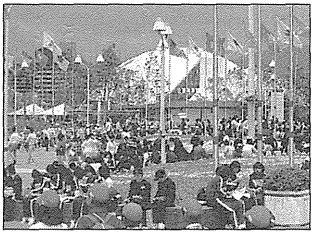
みなと異人館

豆知識 ポートピア '81

1981(昭和56)年、ポートアイランドの完成を記念し、広く国内外の人々に紹介するため、「神戸ポートアイランド博覧会」が開催された。参加は31カ国等、展示館は32館となり、国際条約によらない博覧会としては前例のない規模と内容であった。それまでの博覧会は、既存の施設を利用したり、また、新たに造成した場合は跡地を公園等として利用するのが一般的であった。しかし、神戸ポートアイランド博覧会は、ポートアイランドという新しい海上都市づくりの過程に組み込まれ、ポートアイランドのまちづくりの促進剤となるように位置づけられていた。そのため、既存の施設を会場内に取り込んで博覧会施設として利用し、新たに設置した展示館などの施設も、一部恒久施設として転用するなど、将来のまちづくりに対応できるように計画された。

このことは、この博覧会が、国際博条約による各種の制約を受けない「地方博」であるために実現され、地方博の大きなメリットとして、その後、多く開催された地方博の先駆けとなったのである。





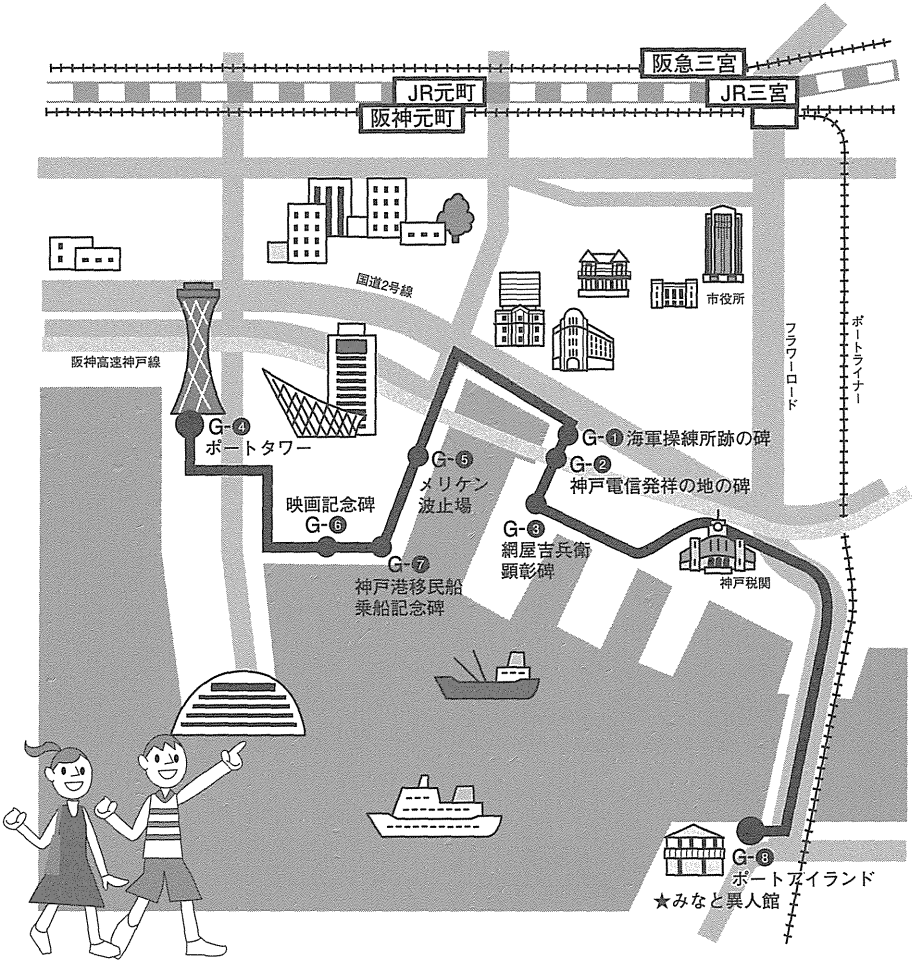
■神戸ポートアイランド博覧会の概要

【愛　称】――― ポートピア '81
【メインテーマ】―― 新しい"海の文化都市"
【期　間】――― 昭和56年3月20日～昭和56年9月15日の180日間
【会　場】――― 中央区港島中町一帯
【展示館】――― 32館(国内27館、外国館5館)
【入場者】――― 1610万2752人

モデルコース

神戸港・ベイエリア周辺の史跡を訪ねて

ベイエリア周辺には、江戸幕末に世界へと開かれた神戸港にまつわる近代の史跡が多く残されています。これらのポイントをめぐって、神戸の近代史の一端をかいま見ることにしましょう。



ポートタワー➡映画記念碑➡神戸港移民船乗船記念碑➡メリケン波止場➡海軍操練所跡の碑➡神戸電信発祥の地の碑➡網屋吉兵衛顕彰碑➡ポートアイランド

所要時間 約120分 ※所要時間は1km10分、各史跡滞在5分で計算しています。
※個人差により所要時間は変動いたします。

史跡と町名

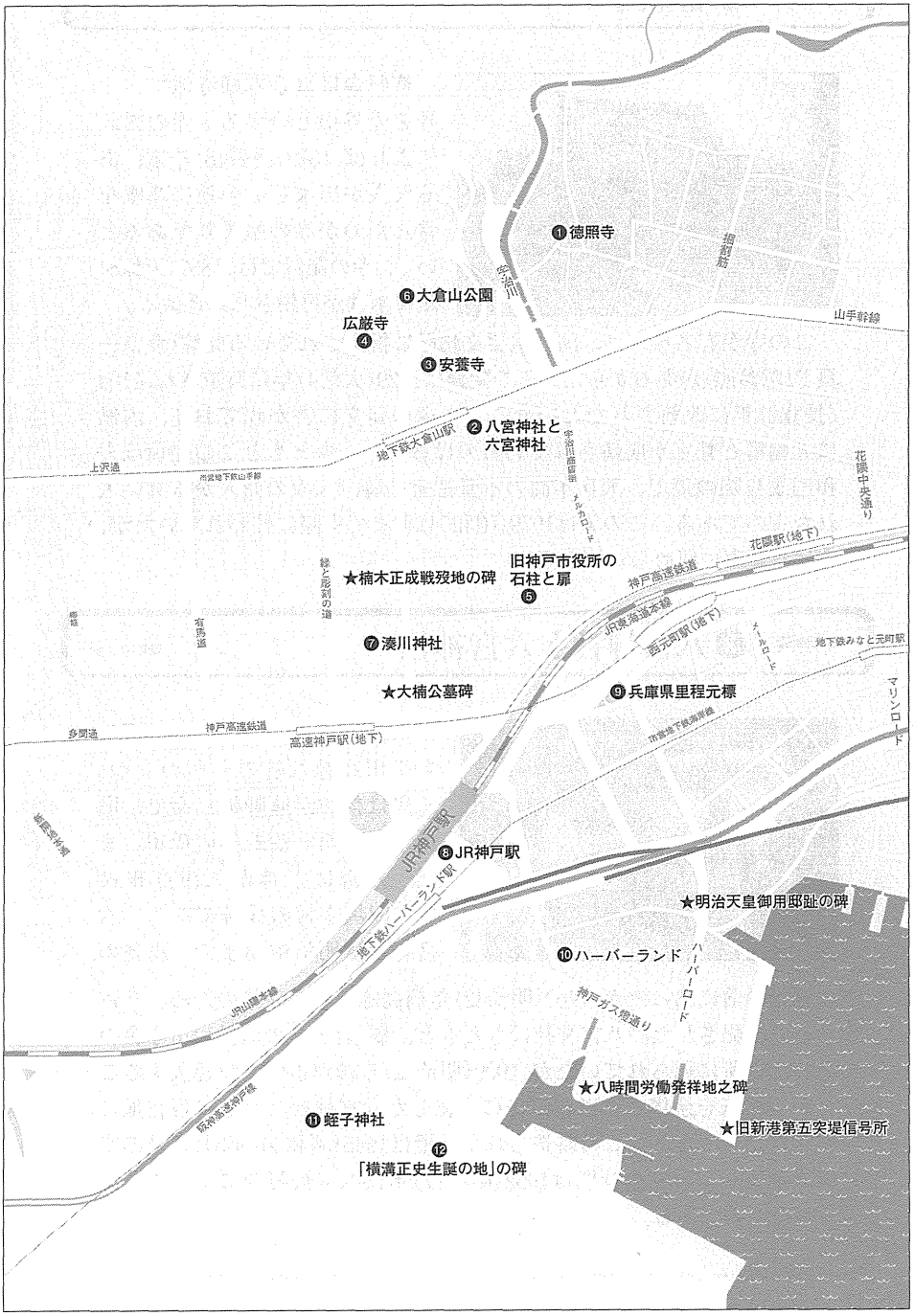
神戸駅・大倉山周辺

KOBEEKI・OUKURAYAMA

1. 徳照寺
2. 八宮神社と六宮神社
3. 安養寺
4. 広厳寺
5. 旧神戸市役所の石柱と扉
6. 大倉山公園
7. 湊川神社
8. JR神戸駅
9. 兵庫県里程元標
10. ハーバーランド
11. 蛭子神社
12. 「横溝正史生誕の地」の碑

東海道本線の終点で、
山陽本線の起点でもある神戸駅は、
東京や下関からの長距離列車で
賑わった結節点。明治以来の歴史や
文化にふれることが出来ます。

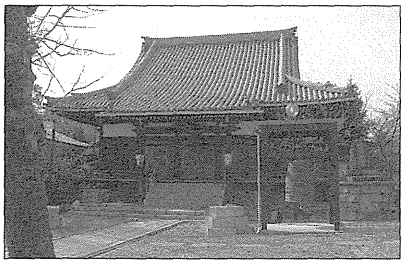
エリアマップⒽ


❶徳照寺
堀切筋
宇治川
❻大倉山公園
広厳寺
❹
山手幹線
❸安養寺
❷八宮神社と
六宮神社
地下鉄大倉山駅
宇治川商店街
上沢通
市営地下鉄山手線
メルカロード
花隈中央通り
花隈駅(地下)
旧神戸市役所の
石柱と扉
❺
★楠木正成戦歿地の碑
神戸高速鉄道
縁と彫刻の道
JR東海道本線
有馬道
❼湊川神社
元町駅(地下)
メーカロード
地下鉄みなと元町駅
★大楠公墓碑
❾兵庫県里程元標
マリンロード
多聞通
神戸高速鉄道
高速神戸駅(地下)
市営地下鉄海岸線
JR神戸駅
❽JR神戸駅
地下鉄ハーバーランド駅
★明治天皇御用邸趾の碑
❿ハーバーランド
ハーバーロード
神戸ガス燈通り
JR山陽本線
阪神高速神戸線
★八時間労働発祥地之碑
⓫蛭子神社
★旧新港第五突堤信号所
⓬
「横溝正史生誕の地」の碑

神戸駅周辺

❶ 徳照寺（とくしょうじ）

中山手通8丁目



徳照寺は真宗本願寺派で、山号を光谷山と号する。寺の縁起によれば、1613(慶長18)年頃、ある浪人が出家しこの地に草庵を営んだのが寺の始まりであるという。寺の記録では、1837(天保8)年に本堂が再建されたとある。

この寺が有名なのは、国の重要文化財に指定されている梵鐘(カラー頁P123参照)があるからだ。この梵鐘は1129(大治4)年に鋳造され、1164(長寛2)年に改鋳されたということが表の銘文に書かれており、内側に五輪塔と梵字が陽鋳されているのは珍しい。もともとこの梵鐘は大和国成身院の鐘で、天保年間の本堂造営の時、大坂の商人から買い入れたものである。この鐘は1979(昭和54)年まで実際に使われていたが、今は収蔵庫に収められている。

神戸駅周辺

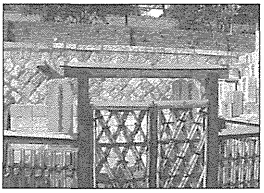
❷ 八宮（はちのみや）神社と六宮神社

楠町3丁目

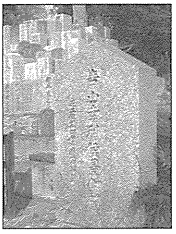
八宮神社と六宮神社はいずれも生田裔神（えいしん）八社のうちの一つ。八宮は祭神が熊野樟日命（くまのくすひのみこと）で、旧坂本村と旧宇治野村の氏神。また、六宮は祭神が天津彦根命（あまつひこねのみこと）で、旧坂本村の氏神である。六宮神社は明治中期まで、現在の広厳寺（こうごんじ）の前にあったが、1909(明治42)年楠高等小学校新築のため、八宮神社に合祀された。八宮神社はもともと、橘通1丁目の旧神戸市庁舎のあった場所に祀られていたが、1909(明治42)年神戸市庁舎を建設することから移転を余儀なくされ、先に合祀した六宮神社とともに現在地に移されたのである。この時造られた社殿は1945(昭和20)年3月17日の空襲で焼失し、現在の社殿は1952(昭和27)年に八宮復興会によって再建されたものである。

③ 安養寺

安養寺は尼崎藩主青山家の菩提寺である。大倉山の麓のこの寺のある場所は旧坂本村にあたり、坂本村は幕末まで尼崎藩領であった。この寺は初め、尼崎の大物にあり、10世紀の天暦年間に源信の妹、安養尼が開いたと伝えられている。江戸時代に入り、尼崎藩主青山幸利が1684(貞享1)年に69歳で逝去した時、遺言で遺体を藩領の坂本村に葬るよう言い残した。そこで、遺体を村の山中に葬り、安養寺をこの地に移して、大悲山と号し、青山家の菩提寺としたのである。1692(元禄５)年の坂本村庄屋の届書に「摂州八部郡坂本村浄土宗尼ケ崎如来院末寺大悲山成覚院安養寺」という文字があるが、1892(明治25)年には同じ浄土宗でも知恩院の末寺となった。なお、藩主青山幸利は領内に善政を敷き、領民からは敬愛された殿様であったという。境内には青山家の墓所があり、墓所の向かって右の墓石が青山幸利(成覚院)、左が嫡孫の青山幸督(泰源院)のものである。そして、その前に平沼騏一郎書の幸利をたたえる「青山幸利侯景仰碑」が建てられている。

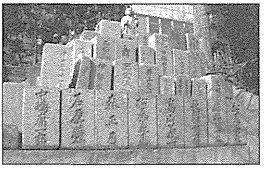


青山家墓所



青山幸利侯景仰碑

また、境内には1877(明治10)年の西南戦争で明治政府軍に敗れ、囚人として兵庫監獄に収監され獄死した8名(うち一人は病院で病死)の福岡出身の青年の墓が並んでいる。



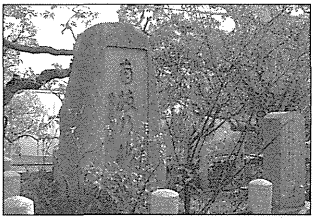
西南戦争で敗れ、獄死した青年の墓

④ 広厳寺（楠寺）

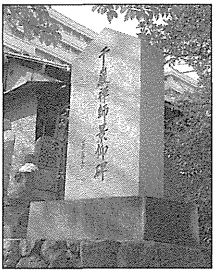
楠町8丁目

広厳寺は別名、楠寺とも言う。後醍醐天皇の勅願で1329（元徳1）年に開山し、開祖は元僧俊明極和尚、本尊は薬師如来である。臨済宗南禅寺の末寺になり、正式には医王山広厳宝勝禅寺と言う。創建当時は七堂伽藍が完備され、四丁にわたる寺域をほこっていたという。1336（建武3）年、楠木正成が湊川の戦いを戦う前、この寺で禅問答をし大いに悟るところあって、戦いにのぞんだといわれている。一方、この寺は湊川の戦いの翌年、赤松範資が建立したのだ主張する説もある。

その後しばらく寺は荒廃するが、江戸時代延宝年間（1673～1680年）に、大和から千厳宗般がこの寺にきて再興することになる。この千厳は熱烈な楠木正成（大楠公）のファンで、現在の湊川神社にある大楠公の墓碑が建てられたのは、この千厳の努力によるところが大きい。すなわち、水戸藩主徳川光圀が大楠公の墓碑を建立する意志があることを聞き付けると、彼は早速江戸小石川の水戸藩上屋敷におもむき光圀に大楠公墓碑の建立の実行を促しているのである。その時千厳は70歳を越す老齢の身で、江戸と摂津の間を何度とな



南枝の梅



千厳禅師景仰碑

神戸駅周辺

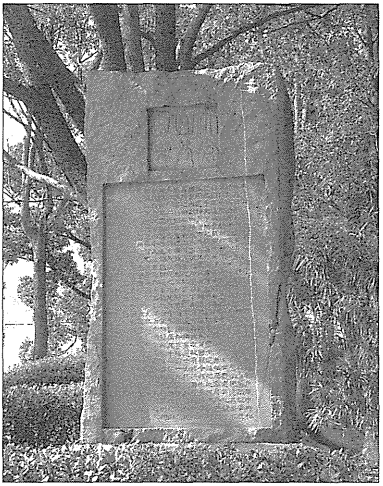
❺ 旧神戸市役所の石柱と扉

橘通2丁目、神戸地方検察庁地階

1957(昭和32)年に加納町の現在地に移るまで、神戸市役所は今の神戸地方検察庁の位置にあった。旧神戸市役所の建物は1909(明治42)年に建てられたネオ・フランス・ルネサンス式の重厚な趣のあるものであった。市役所移転後は1967(昭和42)年から神戸地検の庁舎として使用されていたが、1987(昭和62)年に老朽化のため解体され新しい庁舎ビルになった。現在、新庁舎になった神戸地検の地階に、旧神戸市役所の庁舎時代に市会議場に取り付けられていた石柱と扉が、記念として置かれている。

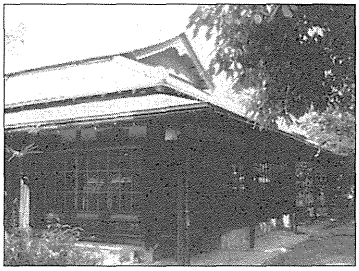
く往復している。また、彼は備前岡山藩主の池田綱政が大楠公の子息正行の子孫であることを知り、江戸と岡山に綱政に会いに行き、墓碑建立の協力を要請している。その甲斐あって大楠公の墓碑は1692(元禄5)年に、徳川光圀の命によって完成したのである。なお、こうした千巖の功績をたたえ、今寺の境内には近衛文麿筆の「千巖禅師景仰碑」が建てられている。また、大楠公墓碑建立の際、墓碑を建てる場所に老梅があり、これをこの寺に移植したといわれ、それが境内にある「南枝の梅」である。なお、現在の梅は三代目で、水戸の常磐(ときわ)神社から贈られたもの(九代水戸藩主徳川斉昭(なりあき)寵愛の梅を接木したもの)である。

⑥ 大倉山公園


大倉山公園碑

市立中央図書館のある一帯は大倉山と呼ばれている。この大倉山の旧名を広厳寺山といい、これは山の南麓に広厳寺があったからで、その後この寺の東に安養寺が出来てからはこちらの寺の名を取り安養寺山というようになった。大倉山と言われるようになったのは明治に入ってからである。明治に入り官有地となったこの場所を、大倉喜八郎が買い取り別荘を建てた。この別荘は「春畝館」と呼ばれ、その名は初代兵庫県知事の伊藤博文の雅号からとっている(この建物は、1973〈昭和48〉年から神戸市立大倉山老人いこいの家として使用されていたが、阪神・淡路大震災で全壊してしまった)。その後、大倉喜八郎は、1909(明治42)年にハルビンで韓国青年の安重根に暗殺された伊藤の功績顕彰の場にしてほしいとの思いで、1910(明治43)年に神戸市に寄付し、翌年公園として公開した時から、「大倉山」と呼ばれるようになったのである。1911(明治44)年、大倉山の山頂に伊藤博文の銅像を建造したが、太平洋戦争中に供出され、台石だけが残された。その台石の部分を利用して、1973(昭和48)年からはふるさとの森が作られた。なお、このふるさとの森の一角に、神戸鹿児島県人連合会が1999(平成11)年5月20日に建てた、阪神・淡路大震災の「震災慰霊碑」がある。

公園内には、1911(明治44)年10月建立の「大倉山公園碑」(威仁親王刻)、1912(大正元)年10月建立の教育勅語下賜三十周年記念「克忠克学」の碑(水島銕也書)がある。また、神戸文化ホール横の広場には、孫文の胸像や画家・橋本関雪の生家を示す碑などがある。


旧春畝館

⑦湊川神社

多聞通3丁目

●「多聞通・樋通・楠町」の由来

この神社は湊川神社というよりむしろ、「楠公さん」という名で呼ばれ親しまれている。「楠公さん」とは南北朝動乱期の1336(建武3)年、湊川の戦いで戦死した楠木正成のことで、そのほか一族17人の霊を祀る神社であるが、創建は新しく、明治に入ってからである。この地は後醍醐天皇方の楠木正成が足利尊氏軍と戦った湊川の戦いの中心地であり、正成らが今はこれまでと自刃した場所でもあった。なお現在、本殿の西側奥に「史蹟　楠木正成戦歿地」の碑が建てられている。また、江戸時代に水戸藩主徳川光圀が楠木正成(大楠公)の墓碑「嗚呼忠臣楠子之墓」を建立した地でもある。光圀の建てた大楠公墓碑には、幕末になると勤皇の志士たちが立ち寄り、尊皇の決意を新たにし、それ以後一般にも崇拝されるようになったという。

1864(元治1)年、鹿児島藩主後見役の島津久光が、また1867(慶応3)年には尾州藩主徳川慶勝が、大楠公の社を湊川のほとりに建てたいと進言した。王政復古の大号令で江戸幕府が滅亡し、明治維新政府となり、このあたりは兵庫鎮台をへて、兵庫裁判所の管轄下に入ることになった。その時、のちに初代兵庫県知事となる伊藤博文らが裁判所総督の東久世通禧に対し、楠公墓碑の地に神号を賜わるよう計ってほしいと働きかけたのであった。そうした努力が実り、明治天皇の命で、1872(明治5)年に別格官幣社として湊川神社が創建されることになったのである。社殿の造営にあたっては、水戸家の徳川慶篤が工事を水戸家で請け負いたいとの申し出もあったが、結局は一般の寄進によることとな

った。社号については「楠神社」「大楠霊神社」という説もあったが、結局「湊川神社」で落ち着いたのである。1934(昭和9)年に社殿の大改築が行なわれたが、1945(昭和20)年の空襲で焼失してしまった。現在の本殿と拝殿は1953(昭和28)年に建てられたもので、当時としては神社建築にコンクリートを取り入れるという画期的なものであった。

なお、神社の所在地「多聞通」や周辺の「橘通」「楠町」はいずれも楠木正成にちなんで付けられた地名である。多聞は楠木正成の幼名・多聞丸から、また、橘は楠木氏が橘姓を称していたことから付けられたものだった。

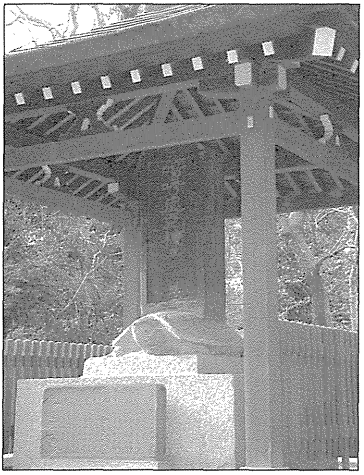
◆「楠木正成戦歿地」の碑(湊川神社境内)

湊川神社の本殿西側奥にある碑。1336(建武3)年5月25日南北朝動乱期の中心的戦いである、湊川の戦いがこの付近一帯で戦われた。後醍醐天皇方の楠木正成軍はわずか700の軍勢で六時間も奮戦したが、結局足利軍に大敗し、正成は弟の楠木正季らとともに湊川北の民家にこもり自刃した。そして、正成、正季ら28人が自害したその場所がこの碑のある付近だと伝えられてきた。楠木正成・正季兄弟は刺し違えて果てるのだったが、その間際、正季が兄正成に「七生まで、ただ同じ人間に生まれて、朝敵をほろぼしたい」と言った『太平記』のくだりは有名で、「七度生まれて君が代を　まもるといいし楠公のいしぶみ高き湊川　流れて世々の人ぞ知る」と鉄道唱歌64番の歌詞にもなっている。

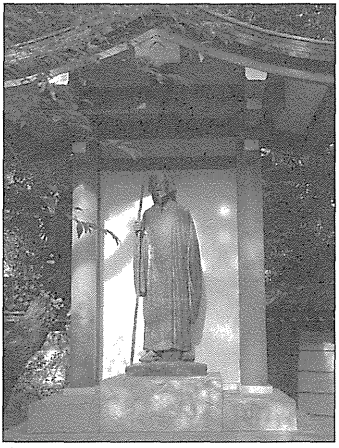
「楠木正成戦歿地」の碑

◆大楠公墓碑(湊川神社境内)

湊川の戦いで自刃した楠木正成の塚と言われた小さな塚が、もともとはこのあたりの田畑の中にあった。江戸時代に入り、自領内に大楠公の塚があることを知った尼崎藩主青山幸利は、そこに梅と松を植え、五輪塔を建立し、大楠公の墓標にしたのであった。その後、この墓標を管理していた、楠木正成の熱烈なファンである広厳寺の千巖はそれ以上の立派な墓を建てられないものかと思案していた。そうしたところ、水戸藩主徳川光圀(水戸黄門として知られている)に大楠公の建碑の意志のあることを知り、千巖は江戸の水戸藩邸に出向き藩士の鵜飼金平に書を呈し、光圀に対し建碑の請願を行なうのであった。もともと光圀は朱子学を重んじ、自ら編纂した『大日本史』で南朝正統理論をとり後醍醐天皇を正統の天皇と認め、それに殉じた楠木正成を大いに評価していた。そうしたこともあって、光圀は千巖の請願をこころよく了解し、大楠公建碑の着手にかかったのである。1692(元禄5)年、光圀は家臣の佐々宗淳(介三郎)を兵庫湊川に派遣し、建碑工事の指揮にあたらせた。なお、この時工事にあたった石工に住吉村(現東灘区)の榷三郎の名が見られる。同年墓碑は完成し、碑の表には「嗚呼忠臣楠子之墓」の八文字が刻まれた。この字は光圀自らが謹書したもので、中国の「嗚呼有吾延陵季子之墓」にならったものである。そして、碑の裏には光圀の師・朱舜水が撰んだ大楠公賛美の文を刻んで蟠いる。また、この墓石は亀の胴体から龍の首が出ているものの上にのせられているが、この形態を「首亀趺」と呼び、朱子学を志した者の墓の型式である。現在、国の史跡に指定されている。なお、墓碑の横に平櫛田中作の徳川光圀の銅像が建てられているが、これは1955(昭和30)年に建てられたもので、水戸家に残る資料をもとに身長(五尺四寸〈163.3㌢〉)から持ち物まで実寸で造られている。ちなみに、光圀はこの湊川の地には一度も訪れたことがない。



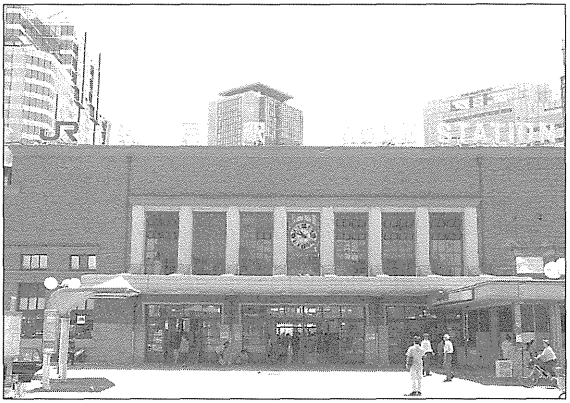
大楠公墓碑



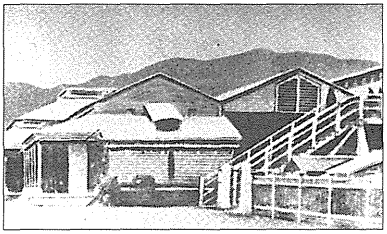
徳川光圀像

⑧ JR神戸駅

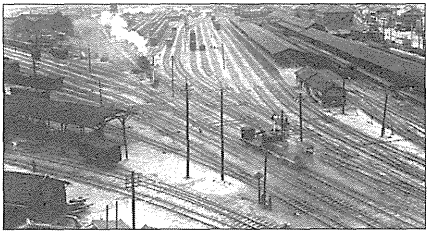
相生町3丁目



明治新政府は富国強兵・殖産興業政策の一環として1870(明治3)年に鉄道の開設を決定した。1872(明治5)年の新橋・横浜間に次いで、1874(明治7)年5月11日、神戸・大阪間に日本で二番目の鉄道が開通し、営業をはじめたのである。開業当時は神戸・三ノ宮・西ノ宮・大阪の4駅で、同年6月に住吉・神崎の2駅が開業し、神戸・大阪間に合計6駅が誕生した。神戸・大阪間を66分で結び、運賃も40銭した。つい10年ほど前までは武士が刀を差し歩いていた時代であったわけで、それをわずか66分で神戸・大阪間を結んだということは驚異的な文明の進展であったといえよう(ちなみに、現在では神戸・大阪間を鉄道で行くと30分弱である)。運賃の40銭は、当時米一升が4銭の時代であったことからすると非常に高い値段であったことがうかがえる。



明治7年の初代神戸駅舎
(『区誌生田いまむかし』P72より)



広大な2代目神戸駅構図
(『区誌生田いまむかし』P73より)

開業当時の神戸駅は、隣の三ノ宮駅が小ステーションと言われたのに対し、大ステーションと呼ばれていた。神戸・大阪間に鉄道が開通したと同時に、初代神戸駅も開業、現在の駅の位置から少し東南寄りに、煉瓦造りと木造を組み合わせ、窓にはビードロを配したイギリス人設計による平屋建の豪華な駅舎として竣工した。その時の主要職員はイギリス人であったといわれ、日本人の駅長も英国製ラシャ地に金帯、飾りボタン付けのマンデルを着ていたという。

神戸以西の鉄道延長、山陽鉄道との連絡から神戸駅は駅の拡大にとりかかり、1889(明治22)年3月7日に2階建煉瓦造りの堂々とした二代目神戸駅が完成したのである。現在の神戸駅ともとの湊川貨物駅(現ハーバーランド)をあわせた広大な駅の構内であった。その年の7月には東海道線が全通し、新橋・神戸間を鉄道が走ることになった。そして、1906(明治39)年山陽鉄道が国有化され、ここに神戸駅は東海道線の終点、山陽線の起点という、鉄道主要幹線の接続駅としての道を歩むことになるのである。当時、新橋発門司行きという列車でなければ神戸行きと相場が決まっているくらい、神戸駅が全盛の時代であった。現在、神戸駅の6番線脇にある東海道本線の終点、山陽本線の起点を示す「0キロポスト」が当時の栄華をしのばせてくれている。また、旧国鉄の大阪鉄道管理局ももとは神戸鉄道局と言い、この神戸に置かれており、当時政府は大阪より国際港のある神戸を重要視していたことがうかがわれる。今でこそ「阪神」間というが、当時はそれも「神阪」と言われていたという。

鉄道の発達に伴い、1日上下190本の列車が神戸の市内を横切るようになり、踏切問題が生じた。そこで鉄道を高架化することに着手し、神戸駅も高架駅にしようということになったのである。そして、1934(昭和9)年12月5日に現在の三代目神戸駅が完成した。貨物部門が新設の湊川駅に移されたため、構内は二代目に比べ狭くなったものの、この駅は国鉄最初の高架駅として、大阪駅や名古屋駅などその後の高架駅の先駆けをなしたのである。高架になった駅舎はざん新なもの

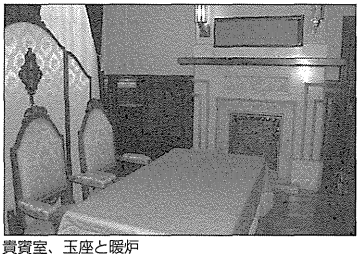
0キロポスト

で、駅を支える威風堂々とした円柱も乗降客の流動性を考慮し機能的に配列されている。大時計、円柱の上部にある彫刻、事務室の唐草模様など、駅舎の装飾も玄関口にふさわしい華麗さを放っていた。

戦後、市の中心が東へと移るにつれ、この神戸駅の栄華も過去のものとなろうとしていた。神戸駅始発の優等列車は徐々に減り、戦前は三ノ宮駅より多かった乗降客数も戦後は逆転し、また特急・急行といった優等列車の停車も三ノ宮駅に奪われて行き、数えるほどしか優等列車も停車しなくなった。そうした中、旧湊川駅の跡地を利用してできた未来都市・ハーバーランドが完成し、乗降客も順調に増加し、今では約十万人の乗降客数を誇るまでになり、東海道本線と山陽本線の分岐点・神戸駅の過去の栄光がふたたびよみがえろうとしているのである。

JR 神戸駅コンコース

豆知識 神戸駅には三度しか使われていない豪華な部屋がある！


貴賓室、玉座と暖炉

高架駅の先駆けとなった3代目の神戸駅には、ある用途のためとしては三度しか使われなかった貴重な部屋が存在する。それが貴賓室で、そのある用途とは、天皇陛下をはじめとする皇族の方々がこの駅を利用されたときに休憩されるためのものである。この貴賓室は間取りも広く高い天上からぶら下るシャンデリアや大理石の暖炉、そして玉座は豪華そのものだ。しかし、これだけ贅沢な作りのこの部屋も貴賓室としてはこれまで三度しか使われていないのである。つまり、戦後すぐの兵庫行幸の際の1947(昭和22)年6月11日に昭和天皇が利用され、また、1954(昭和29)年4月5日の御召列車運転にあたり昭和天皇皇后両陛下がご利用、そして、1968(昭和43)年8月10日、今上天皇皇后両陛下が皇太子時代に神戸駅から御乗車の際に利用されたという三度だけなのだ。

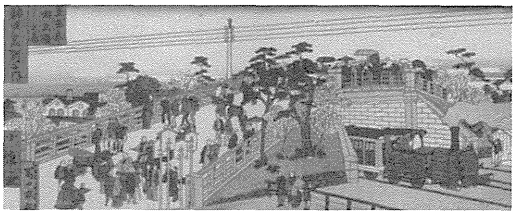
その後、貴賓室は一時期、駅長室として利用されてきたが、阪神大震災後の駅構内の大改装に伴い部屋そのものの取り壊しが計画されようとした。貴賓室そのものを持つ駅が全国的にもまれで、部屋ごと移築して鉄道関係の博物館に保存するという案もでたが、結局そのままで保存することとなり、今では、構内飲食店の奥に、玉座とともにその勇姿を拝することができる。

貴賓室、シャンデリア

⑨兵庫県里程元標

相生町１丁目

兵庫県里程元標


「相生橋 蒸気車」長谷川小信画（神戸市立博物館蔵）

元町商店街を出たきらら広場にある高さ約3メートルの石柱が「兵庫県里程元標」である。大阪府、兵庫県、鳥取県、岡山県界や明石標柱までの里程が刻まれている。1910（明治43）年に相生橋の西詰めに建てられたものである。相生橋は明治のはじめ、神戸・大阪間に鉄道が走ったときに、神戸駅のすぐ東、元町通から多聞通へ行く道は鉄道で分断されることになった。そこで、その鉄道をまたぐ木造の橋をつくることになり、その橋を相生橋と呼んだ。「川がないのに橋がある」とうたわれ、橋の上から走る陸蒸気（汽車）を眺めることが出来る、神戸の名所となった。1931（昭和6）年、鉄道が高架となり、この橋もなくなり、その脇にあった里程元標も湊川神社前に移され、2004（平成16）年3月にこの場所に移設されたのである。

●「相生町（あいおいちょう）」の由来

相生とは一般に、同時に生まれ同時に育つとか、一つの根元から二本の枝が出るという意味があるという。高砂の相生の松のようにめでたいことに使われる言葉として知られている。ここの相生町がどこからつけられたのかははっきりとしないが、一説にはめでたい言葉として用いられる高砂の相生の松をとったとも、また、西国街道から有馬へ行く道がここから分かれていたので相生とついたとも言われる。

●「中町通（なかまちどおり）」の由来

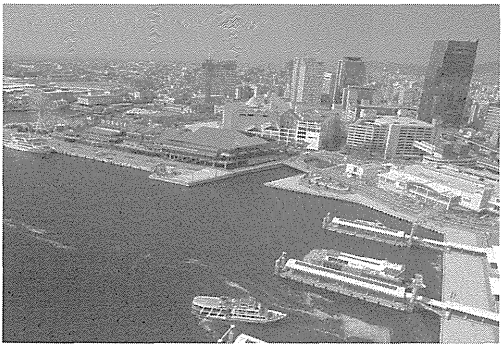
兵庫の町と神戸の町の中間で仲町というようになったとか、多聞通と西国街道の間にあるので仲町と呼ぶようになったいわれている。いつの頃からか、仲町が中町となった。

●「古湊通（こみなとどおり）」の由来

一説には、昔はこのあたりは入江で古い港があったことから付けられたといわれているが定かではない。

⑩ ハーバーランド

●「東川崎町」の由来



ハーバーランド

ハーバーランドは1985(昭和60)年に着工され、1992(平成4)年に完成した未来都市である。旧国鉄湊川貨物駅の跡地を利用し、面積約23ヘクタールの新たな街で、神戸市がインナーシティー再生、産業の高度化やソフト化など産業構造の変化に対応する担い手として、また、市民生活の多様化・個性化に対応した新しい形の商業・文化施設等の整備、ウォーターフロントの再生めざして建設をはじめたものである。情報文化施設(高度情報センターなど)・商業業務施設(百貨店、ホテルなど)・福祉教育施設(小学校、盲学校、総合教育センター、こべっこランド)・業務施設・住宅施設に分かれ、就業人口約11,000人、居住人口約1500人となっている。

ところで、ハーバーランド一帯は「東川崎町」と呼ばれている。川崎とは河口の海に突き出た所を指し、このあたりは旧湊川の川崎の東側であったから「東川崎」と名付けられた。後年(1886年)、この地にたまたま川崎正蔵が川崎造船所(現・川崎重工)を造ったため、人名の川崎と元からの地名の川崎が偶然にも一致することになったのである。

◆明治天皇御用邸趾の碑　　●弁天町の由来

宇治川の河口付近を弁天町というが、これはかつてこのあたりに弁財天(市杵島姫命)をまつる厳島神社があったことから名付けられたものである(厳島神社の項参照)。宇治川をはさんで弁天町の西側には幕末に長州藩の御用達を勤めた専崎弥五平(屋号を鉄屋)の屋敷があった。この屋敷は西南戦争の時、明治政府の運輸事務所となり、その後、1880(明治13)年から1885(明治18)年までは行在所として使われ、1886(明治19)年からは明治天皇の御用邸として用いられるようになったのである。明治天皇をはじめ、皇太子(後の大正天皇)など多くの皇族が利用された。現在、ハーバーランド・ダイヤパーキングの前に、三菱倉庫株式会社が1924(大正13)年9月に建てた、「史蹟　明治天皇御用邸趾」の碑がある。

明治天皇御用邸趾」の碑

◆旧新港第五突堤信号所

この信号所は1921(大正10)年に建設されたもので、完成当初は新港第四突堤にあった。神戸港に入港する船舶に対する信号所として設置されたもので、高さが46.3㍍ある。1937(昭和12)年には新港第五突堤に移設され、1990(平成2)年までその役目を果たしてきた。役目を終えた二年後の1992(平成4)年に保存のため、ハーバーランドの現在地に移された。

旧新港第五突堤信号所

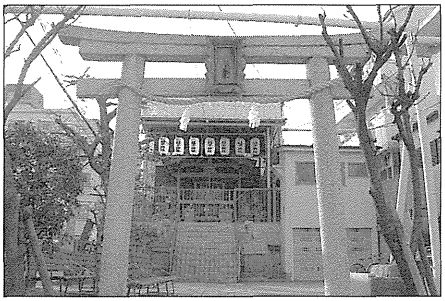
◆八時間労働発祥地之碑

日本での八時間労働制は1919(大正8)年に、川崎造船所(現川崎重工業神戸工場)で採用されたのが初めてである。当時の川崎造船所の社長は松方コレクションで知られる松方幸次郎で、彼はヨーロッパ外遊の経験を生かした先進的な経営者として名高く、当時十時間労働が当たり前だった日本で、八時間労働が世界の趨勢と判断して、それに踏み切ったのである。この松方の試みは、結果として八時間労働制を日本の基幹産業に浸透させるきっかけをつくったと評価されている。こうした、わが国初の八時間労働制発祥地を記念して、造船所に近いハーバーランドに、1993(平成5)年10月、彫刻家井上武吉制作の「八時間労働発祥地之碑」が兵庫労働基準連合会によって建てられた。

八時間労働発祥地之碑

⑪ 蛭子神社（えびす）

東川崎町6丁目



祭神は蛭子大神で、東川崎地区の氏神。1002(長保4)年の創建と言い伝えられている。この神社の氏子達による「恵比須（えびす）太鼓」は福井県の東尋坊太鼓の流れをくみ、1970(昭和45)年の夏祭りから始められた。

豆知識 中央区には車両を持たない鉄道会社が存在する！

通常、鉄道会社は線路とその上を走る車両を所有しているのが一般的であろう。しかし、中央区には線路は有しているものの、車両は一両も持っていないという奇妙な鉄道会社が存在する。その名も「神戸高速鉄道」で、1958(昭和33)年にこの鉄道会社は設立された。

この鉄道会社が設立されるまで、神戸にはターミナルを持つ私鉄が四社あった。東から入ってくる、元町駅を始発とする阪神本線、三宮駅を始発とする阪急神戸線と、西からは兵庫駅を始発とする山陽電車、また、北からは湊川駅を始発とする神戸電鉄である。そして、この四つの鉄道を一カ所に集約してそれぞれを結べば鉄道の利便性は大いに高まるということは誰しも考えつくことであろう。

実は、このような計画、戦前からあったようだが、戦争で自然消滅してしまった。昭和30年代に入って、計画が再燃し、前記の会社が設立するに至ったのである。ただ、この四社、阪神、阪急、山陽は標準軌という1435ミリゲージの同じ線路の幅だが、神鉄だけは狭軌(1067ミリ)といって線路幅が狭い。したがって、四社全てが相互乗入れをするということは不可能である。そこで、阪神と阪急は地下で鉄道を西に延ばし、山陽も地下で東へと延伸、これら三社線が当時の国鉄神戸駅付近で合流するという東西線を建設し、ここに神鉄も合流する計画を当初は持ったものの神鉄の合流は地理的に困難で、一つ西の新開地でこの東西線と合流、南北線とすることに落ち着いた。

そこで、前述の年に、神戸市を含むこれら鉄道四社などを巻き込む第三セクターとして「神戸高速鉄道」が発足した。会社が設立され、建設の体制が整ったものの、工事はなかなか進まず、起工式は1962(昭和37)年3月までずれこんだ。結局、1968(昭和43)年4月7日、神戸高速鉄道が開通、以前からライバルとして激しい火花を散らして営業合戦を繰り返してきた阪神と阪急の車両が高速神戸駅の構内で仲良く並んで停車するという光景がみられるようになったのである。

さて、こうして開業した「神戸高速鉄道」、線路7·6キロメートルと「西元町」「花隈」「高速神戸」「新開地」「大開」「高速長田」の六駅と駅員はいるが、車両と乗務員は持たない一風変わった鉄道会社なのである。車両や乗務員はなくとも法律上は立派な鉄道会社なのだ。「鉄道事業法」という法律があり、その二条に鉄道事業についての定義が規定されている。それによれば、鉄道事業には「第一種鉄道事業」(線路も車両も保有する鉄道会社)、「第二種鉄道事業」(車両はあるが線路は他社のものを利用する鉄道会社)、「第三種鉄道事業」(線路を保有し、それを他社に利用させる鉄道会社)の三種があると定義されており、神戸高速鉄道はこのうち第三種鉄道事業にあたる鉄道会社だからなのである。

神戸駅周辺

⑫「横溝正史生誕の地」の碑

東川崎町4丁目

日本を代表する探偵小説作家・横溝正史(1902～1981)は、1902(明治35)年5月25日に東川崎町3丁目で生まれ、1926(大正15)年に上京するまでこの東川崎町で暮らしていた。東川崎小学校(現・湊小学校)から神戸二中(現・県立兵庫高校)、大阪薬学専門学校(現・大阪薬科大学)へとすすみ、卒業後は東川崎7丁目にあった家業の薬局を継いでいた。

江戸川乱歩の招きに応じて上京した横溝は、「新青年」「探偵小説」といった雑誌の編集長をつとめた。戦後の1946(昭和21)年に創刊された「宝石」創刊号から「本陣殺人事件」を連載し、この推理小説で彼の分身とも言える名探偵・金田一耕助を世に送り出したのであった。以後、「獄門島」「犬神家の一族」「八つ墓村」など数多くの金田一シリーズを執筆していった。とりわけ、昭和40年代後半から50年代前半にかけ、一連の横溝作品が文庫化され、また、「犬神家の一族」が映画化されたのをかわきりに、文庫本、映画、テレビと三つの媒体を通して世に横溝正史ブームが巻き起こった。

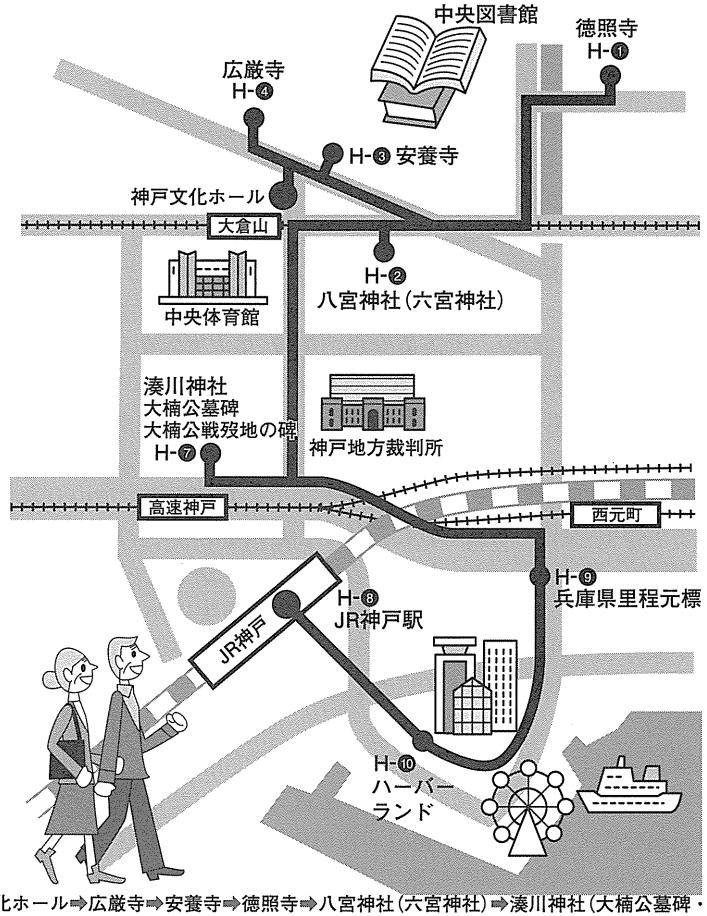
横溝は神戸に対する愛着が深かったようで、彼の作品の中にはしばしば神戸が登場することがその例証と言えよう。なかでも、「悪魔が来たりて笛を吹く」では重要人物の別荘が神戸の須磨に設定されていることから、金田一耕助が神戸に来て活動する場面が描かれている。

生誕100年が過ぎ、横溝正史先生生誕地碑建設委員会が2004(平成16)年11月23日、生誕地付近に陳舜臣氏筆による「横溝正史生誕の地」の碑を建設した。

モデルコース

太平記の舞台・湊川、過去から未来を訪ねて

楠木正成が戦死した湊川の戦い。ここには「太平記」にまつわる史跡が多く残されています。こうした歴史の足跡を訪ねながら、新しい街ハーバーランドまで歴史散歩を楽しんでみましょう。

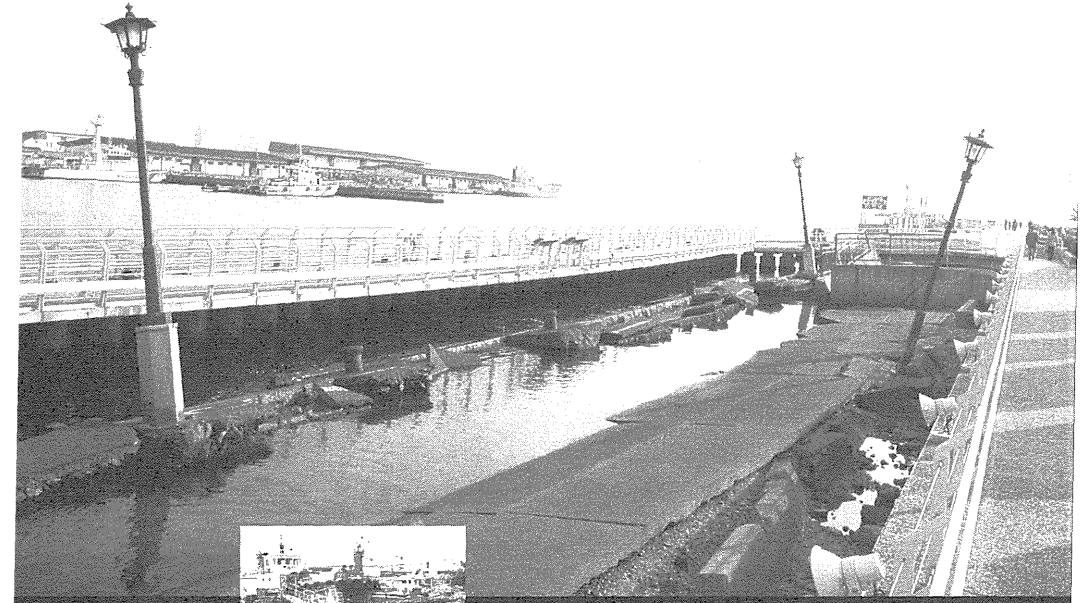


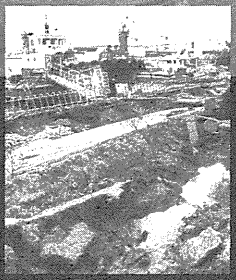
神戸文化ホール➡広厳寺➡安養寺➡徳照寺➡八宮神社(六宮神社)➡湊川神社(大楠公墓碑・大楠公戦歿地の碑)➡兵庫県里程元標➡ハーバーランド➡ JR神戸駅

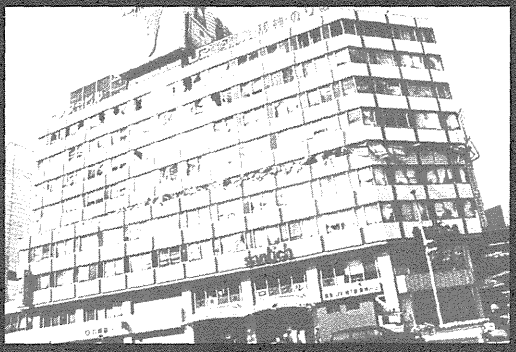
所要時間 約120分 ※所要時間は1km10分、各史跡滞在5分で計算しています。
※個人差により所要時間は変動いたします。

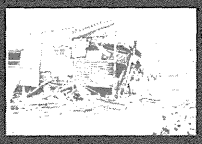
阪神・淡路大震災

震災関連データ







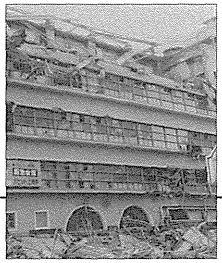


1995.1.17

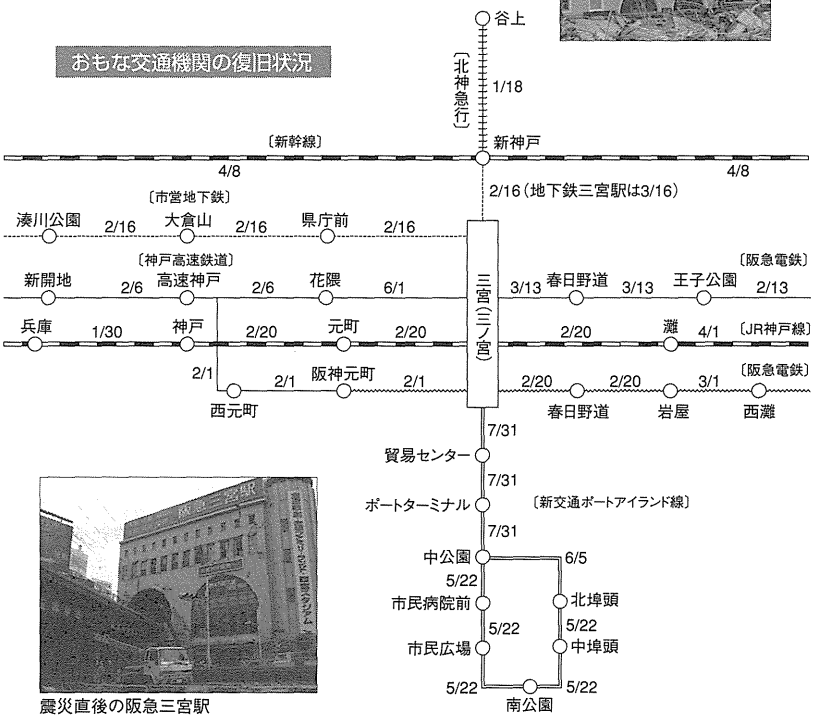
平成7年　兵庫県南部地震の概要

平成7年1月17日未明に阪神・淡路地域を襲った
「兵庫県南部地震」は、日本で初めての近代的な大都市における
直下型地震であり、大きな破壊力をもって、未曾有の被害をもたらした。

発生日時――平成7年1月17日午前5時46分
震　　源――淡路島（北緯34.36°　東経135.02°）
震源の深さ――約16km
規　　模――マグニチュード　7.3
震　　度――震度6（一部地域で震度7）
特　　徴――横揺れと縦揺れが同時に発生



おもな交通機関の復旧状況



震災直後の阪急三宮駅

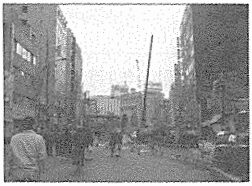
中央区及び神戸市の被害状況

事項		中央区	全市	備考
犠牲者	死亡者	244	4,571	平成12年1月11日現在(単位:人)
	行方不明	-	2	
	負傷者	-	14,678	
避難	避難者数	39,090	236,899	ピーク時(平成12年1月11日現在)(単位:人)
	避難所数	90	599	ピーク時(平成12年1月11日現在)(単位:箇所)
建物の被害	全壊	6,344	67,421	平成7年12月22日現在(単位:棟)
	半壊	6,641	55,145	
	全焼	65	6,965	平成8年2月1日現在(単位:棟)
	半焼	17	80	

＊全壊/住家の主要構造部(壁・柱・梁・屋根・階段)の損害額が、その住家の時価の50%以上に達した程度のもの
＊半壊/住家の主要構造部(壁・柱・梁・屋根・階段)の損害額が、その住家の時価の20%以上50%未満に達した程度のもの

ライフラインの応急復旧日

	応急復旧完了日
電気	平成7年1月23日
ガス	平成7年4月11日
水道	平成7年4月17日



神戸市企画調整局
『阪神・淡路大震災 被害状況及び復興への取り組み状況』より

中央区の人口推移

	昭和55年10月1日 国勢調査	平成7年1月1日 推計人口	平成7年10月1日 国勢調査	平成13年10月1日 推計人口	平成14年10月1日 推計人口	平成16年11月1日 推計人口
中央区	115,329	111,195	103,711	109,771	111,436	114,736
全市	1,367,390	1,520,365	1,423,792	1,503,384	1,510,468	1,520,581

神戸市企画調整局調べ、神戸市統計報告より

阪神・淡路大震災　慰霊と復興のモニュメント

東遊園地の南にあるこのモニュメントは、震災の記憶と復興の歩みを後世に伝えようと、約4700件(約1億5千万円)の寄付をもとに造られた。

モニュメントの地下にある「慰霊と瞑想の空間」には震災で亡くなられた4743人(平成17年3月現在)の名前が刻まれている。今日もまた、犠牲となられた方の銘板を前に、その遺族や知人が、この地下の荘厳な空間の中で故人のことを思い出し、そのぬくもりを感じているという光景を見ることが出来る。

1・17希望の灯り 2000(平成12)年1月17日に生まれた「希望の灯り」。

1995年1月17日午前5時46分
阪神淡路大震災
震災が奪ったもの
命　仕事　団欒　街並み　思い出
…たった一秒先が予知出来ない人間の限界…
震災が残してくれたもの
やさしさ　思いやり　絆　仲間
この灯りは
奪われた
すべてのいのちと
生き残った
わたしたちの思いを
むすびつなぐ

台座に刻まれたこの碑文は、
震災で犠牲になられた方々と
生き残った我々への厚い
メッセージである。

神戸港震災メモリアルパーク

メリケン波止場の一部を被災したままの状態で保存するとともに、神戸港の被災状況やその復興の様子を紹介し、阪神大震災の教訓と港の重要性、さらに国内外の多くの人々が一体となって港の復旧・復興に努めた様子を後生に伝えるために作られた。平成９年7月竣工。パーク内では、神戸港の復旧の様子を写真パネルで、また被災時の様子を映像で紹介している。

【所】中央区波止場町2-2
【交】JR元町駅から徒歩10分
【時】入園自由
【休】無休
【¥】無料
【☎】078-391-6751（社団法人 神戸港振興協会）

人と防災未来センター

HAT神戸に位置する「人と防災未来センター」は、阪神大震災の経験と教訓を後世に伝え、また国内外の災害被害の軽減や研究をするための施設であり、平成14年4月にオープンした「防災未来館」、平成15年4月にオープンした「ひと未来館」からなっている。防災未来館では、地震発生時の様子を伝える映像や、市民の協力によって収集された震災関連の資料が展示されており、ひと未来館では、いのちの尊さ、生きることのすばらしさについて学ぶことをテーマに、やすらぎの部屋やふれあいステージなどが整備されている。

【所】中央区脇浜海岸通1-5-2
【交】JR灘駅から徒歩12分
【時】9時30分～17時30分（入館は～16時30分）、7～9月は9時30分～18時
（入館は～17時）金・土曜日は9時30分～19時（入館は～18時）
【休】月曜日（祝日の場合は翌日休）
【¥】各館▶大人500円／大・高校生400円／小・中学生250円
共通▶大人800円／大・高校生640円／小・中学生400円
【☎】078-262-5050

イラストで まちを元気に！

アーティスト／涌嶋克己さん

力強さとどこかユーモアを感じさせる温かいタッチの墨絵に、「友だちがいてよかった」のメッセージ。震災後、壊れた建物を覆うフェンスに大書されたイラストに元気づけられた人は多いのではないでしょうか。その作者が、アーティストのWAKKUN(わっくん)こと涌嶋克己さんです。

WAKKUNは神戸生まれの神戸育ち。震災時は長田高校に避難。瓦礫の片づけや屋根のブルーシート張りなど、復旧活動を続ける中で出合ったのが、全国から寄せられた温かい支援の数々でした。「一人じゃない、みんな見ててくれるんや」。目には見えなくても、人と人とのつながりを感じたWAKKUNは、被災者のために絵で何かができないかと考えました。まずは2月、幅広い友だちの輪を通じ、元町商店街で道行く人にコーヒーを振る舞い、紙芝居やライブコンサートを催しました。交通網が遮断され、どこへ行くにも歩くしかなかったあの時。一服のコーヒー、心のこもった歌は、ひと時辛い日常を忘れさせ、人々を励ましました。続いて、傷ついた街角でライブペインティングを展開。被災者にメッセージ・イラストをプレゼント、フェンスにも元気づけるイラストを描きました。ドラマ「ロングバケーション」で木村拓哉が着用、一躍有名になり、震災復興のシンボルとして注目を集めた「ガッツ君」Tシャツの製造・販売を通じて、被災地の障害者支援に取り組んだのもこのころから。「がんばる心はつぶれへん」とのWAKKUNからのメッセージはしっかり被災者の心に届き、「元気づけられた」「立ち直れた」などたくさんの感謝の言葉が寄せられました。5月、震災にもっと関心をもってもらおうと東京で開催した個展は、多くの友人が駆けつけ一大イベントに。「あらゆる場所に素敵なつながりがある」と再認識した一幕でした。

現在も元町にアトリエを構え、人々の心に響くメッセージを描き続けるWAKKUN。「人は存在するだけで素晴らしい。やりたいことを一生懸命やればそこに感動が生まれる。自分の価値観をもって生きることが大切」と語る姿が、震災を乗り越え力強く歩みを進める神戸市民に大きな力を与えてくれます。

しあわせ運べるように

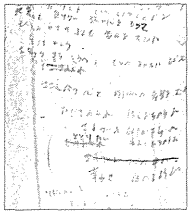
作者／臼井 真さん

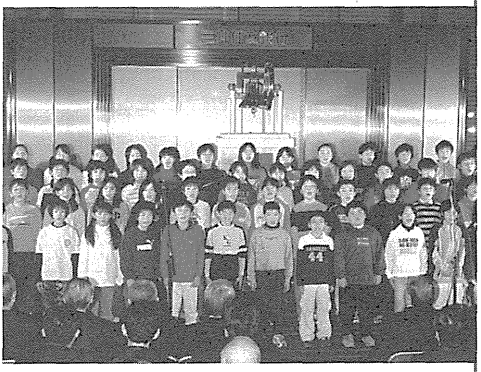
阪神・淡路大震災の被災者を慰め、力づけようと始まった光の回廊「神戸ルミナリエ」。その点灯式で歌われる「しあわせ運べるように」は、いまや“復興のうた”としてすっかり定着。さまざまな人々によって歌い継がれています。

「しあわせ運べるように」の作詞・作曲者は、小学校で音楽を教える臼井真さん。震災で自宅が全壊し、親戚宅に避難しながら、当時の勤務先だった吾妻小学校に通い、避難者の世話を続けていました。いつ果てるとも知れない作業の日々。精神的にも肉体的にも疲れ切っていました。そんなある日、何気なく眺めていたテレビに映し出されたのは、三宮のビル解体の風景。震災後初めて目にする様変わりした三宮。「思い出深い神戸の街が消えてしまった」。衝撃は胸に迫り、矢も楯もたまらず紙と鉛筆を手に、詩を綴り、音階をカタカナで記していました。震災から2週間ほど後のことでした。

2月中旬には、変則的ながら音楽の授業が再開。臼井さんは「みんなの気持ちを歌にしたので歌ってください」と初披露。やがて、朝会や被災者との集いなどで児童が歌うようになりました。歌は校内外で大きな反響を呼び、口コミで被災地に広がっていきました。

「しあわせ運べるように」が全国的に知られるようになったのは、平成8年1月17日の神戸市追悼式で、臼井さんの同窓生・室屋尚子さんが顧問を務める中央区港島小学校コーラス部が歌ったのがきっかけ。前年のコンクールで日本一に輝いた同コーラス部に、追悼式での合唱依頼が寄せられたとき、臼井さんから楽譜を託されていた室屋さんは、慰霊の場でこの歌を披露することにしたのです。その模様はテレビ中継され、全国から問い合わせが寄せられるようになりました。


震災後、臼井さんが走り書きした歌詞。「しあわせ運べるように」誕生の瞬間。



1.
地震にも負けない 強い心をもって
亡くなった方々のぶんも
毎日を大切に生きてゆこう
傷ついた神戸を 元の姿にもどそう
支え合う心と明日への 希望を胸に
響きわたれぼくたちの歌
生まれ変わる神戸のまちに
届けたいわたしたちの歌
しあわせ運べるように

2.
地震にも負けない 強い絆をつくり
亡くなった方々のぶんも
毎日を大切に生きてゆこう
傷ついた神戸を 元の姿にもどそう
やさしい春の光のような 未来を夢み
響きわたれぼくたちの歌
生まれ変わる神戸のまちに
届けたいわたしたちの歌
しあわせ運べるように

長田区の御蔵小学校、灘区の六甲小学校、兵庫区の明親小学校と転勤のたび、子供たちに歌誕生のいきさつを話し、歌い継いできた臼井さん。分かりやすい歌詞に明るいメロディ、傷ついた心を優しく癒すこの歌は、震災の記憶がない子供たちの心にも熱く響きました。歌を通して思いが伝わる喜びと感動も知ることができた子供たち。「しあわせ運べるように」は、人と人との心をつなぎながら、これからも歌い継がれていきます。

索引 index ◆斜字体…町名の由来 ◆ゴシック体…資料編の項目見出し

あ

嗚呼忠臣楠子之墓 26・197・199
アーバンリゾートフェア神戸'93 45
相生小学校 38
相生町の由来 *203*
相生橋 203
青山幸利 26・193
青山幸利候景仰碑 193
青山幸成 26
青山幸督 193
明石人 6
明石町の由来 *170*
赤松則村(円心) 21・99・160
赤松範資 22・194
明智光秀 25
旭通の由来 *80*
旭の鳥居 **70**
足利尊氏 16・21・22
足利直義 22
足利義満 22
吾妻通の由来 *79*
尼崎県 34
尼崎藩 27・33
阿弥陀寺 **20・76**
網屋吉兵衛 30・180・182
網屋吉兵衛顕彰碑 **182**
荒木(摂津守)村重 17・24・99・144
在原業平 95
在原行平 95
R.W.ランバス 162
安徳天皇 18
安養寺 **193・196**

い

E.H.ハンター 162
医王山広厳宝勝禅寺 194
錨山と市章山 **159**
生田 23
生田裔神八社 107・146・166・192
生田川 13・37・90・91・93・101
生田区 41
生田郷 13
生田神社 **14・15・110**
生田神社震災復興記念碑 111
生田町の由来 *91*
活田長峡 14・110
生田首 12・110
生田の森 15・19
生田の森の戦い 16
生田宮 23・34
池田信輝、輝政 17・25・145
池永孟 66
砂山 **7・14・88**
砂山と徳光院 92
石田三成 25
異人館 33・104・115
伊勢物語 94
磯上通の由来 *83*
磯辺通の由来 *83*
市ヶ原 101
一ノ谷の戦い 16・19・111
一宮神社 **107**
一里塚 29
厳島神社 **143**
1.17希望の灯り **169・212**
一遍 21
伊藤博文 34・170・196
伊藤町の由来 *170*
今川義元 24
慰霊と復興のモニュメント 169
インフォメーションこうべ 43

う

ヴィーナスブリッジ 131・155
宇治川南遺跡 6
宇治野 23
宇治郷 13
菟原処女悲恋伝説 93
運上所 31
雲中歴史資料館 70

え

映画記念碑 **184**
A.C.シム **162**
A.C.シムの記念碑 169
叡尊 21
会下山 6
江戸幕府 26
江戸町の由来 *170*
蛭子神社 **206**
恵比須太鼓 206
えびらの梅 111
F.D.モロゾフ 162

お

王政復古の大号令 32
応仁の乱 23

大倉山 196
大倉山公園 196
大倉山公園碑 196
大輪田泊 18・186
桶狭間の戦い 24
織田信長 17・24・25・99・144
処女塚伝説 75
小野柄通の由来 82
小野中道商店街跡 79
小野八幡神社 20・83
小野浜 30
小野浜新田 27
小野浜町の由来 82
小野浜墓地 162

か

海外新聞 147
海岸通の由来 170
海岸ビル 173
海軍営の碑 155
海軍操練所 30・31
海軍操練所跡の碑 180
外国人居留地 31・166
外国商館跡の門柱 171
外国人墓地 162
外国人墓地の見える丘 162
賀川記念館 82
賀川豊彦生誕100年記念の碑 82
籠池通の由来 63
笠戸丸 38・150
風見鶏の館 104・128
春日神社 66
春日野墓地 66・162
春日野道商店街・小野中道商店街跡 79
仮設住宅 48
片桐且元 26
勝海舟 30・155・180
桂太郎 38
カトリック神戸中央教会 108・157
金山画伯旧宅之地の碑 146
金子直吉 39・176
加納宗七 37・90
加納宗七像 168
加納町 37・90
加納町の由来 90
カペル 168
鎌倉幕府 20・21
上筒井通の由来 66
神若通の由来 91
亀の石 160
賀茂季鷹 82
河合浩蔵 149・173
川崎正蔵 36・92・204
川崎造船所 36・92・204
河原太郎・次郎兄弟 20・83・166
河原霊社 83・166
観艦式 159
歓喜寺 63
歓喜寺木造十一面観音立像 63・121
関西国際空港 46
神田孝平 34
関帝廟 156
関東大震災 39
神戸(かんべ) 23・111
神戸郷 13

き

木曽義仲 19
北長狭通の由来 112
北野 23
北野工房のまち 48・109
北野三本松 106
北野村 107
北野町 33・104・115
北野町の由来 107
北野天満神社 107
北本町通の由来 79
北向地蔵 112
貴賓室 202
旧生田川 13・90・112・168
旧生田川址の碑 90
旧外国人居留地 170
旧神戸居留地15番館 128・172
旧神戸居留地下水道公開施設 128・172
旧神戸市役所の石柱と扉 195
旧神戸ユニオン教会 89
旧小寺家既舎 125・149
旧西国街道の道標 81
旧新港第五突堤信号所 205
旧ハッサム邸 125・149
旧三菱銀行三宮支店時代の柱頭 172
京町の由来 170
居留地 108・142・162・168・170
居留地の碑 173

居留地103番の標石 171
居留地108番の銘板 171
居留地124番の標石 171
居留地68番の標石 171
金星観測記念碑 155
金融恐慌 40

く

空襲 41
クスノキ 149
楠・荒田町遺跡 19
楠町の由来 *197*
楠寺 194
楠木正成 16・22・26・75・194・197
楠木正成戦歿地の碑 198
楠木正季 198
区制 40
国香通の由来 *91*
口分田 14
熊野神社 157
雲井遺跡 7・8
雲井通の由来 *80*
熊内 23
熊内遺跡 7・9
熊内小学校 38
熊内町の由来 *68*
熊内橋通の由来 *68*
熊内八幡神社 67・68
グリーン 89
グリーンコウベ作戦 152
郡界の碑 112
郡区町村編制法 34

け

KR&AC 169
K-CAT 46
慶長の大地震 25
芸能塚 146
競馬場 113
元寇 21
元弘の変 21

こ

子敦盛の萩 111
小泉藩 27
小泉八雲旧居跡の碑 148
弘安の役 21
合区問題協議会 44
広厳寺 194
広厳寺山 196
香字庵 68・70
更新世 6
公地公民制 14
神戸 200
神戸移民資料室 151
神戸栄光教会 141
神戸駅 36・42
神戸駅周辺 42
神戸回教寺院 109
神戸開港 31
神戸外国人居留地の碑 170
神戸海洋博物館 45・133
神戸華僑歴史博物館 135
神戸区 34・40・41
神戸空港 49・187
神戸クロニクル 148
神戸港 42
神戸港移民船乗船記碑 184
神戸港駅 84
神戸港地方の由来 *161*
神戸港震災メモリアルパーク 48・183・213
神戸高速鉄道 43・206
神戸高等商業学校 65
神戸購買組合 82
神戸市 35
神戸市行政区再編成審議会 43
神戸事件 32
神戸事件発生地の碑 166
神戸市合同慰霊祭 47
神戸市制百年 45
神戸市中央区 44
神戸市文書館 66
神戸市立青少年科学館 133
神戸市立博物館 44・66・171・133
神戸震災復興記念公園 84
神戸製鋼所 36
神戸築港 38
神戸町 34
神戸電気鉄道(街電) 36
神戸電信発祥の地の碑 181
神戸マリンルート 46
神戸ムスリムモスク 109
神戸ユニオン教会 89
神戸らんぷミュージアム 135
神戸ルミナリエ 47

弘法大使修法之地の碑 161
弘法大師の梵字石 160
黄金塚の碑 153
古河県 33・34
古河藩 27
国際博条約 189
御幸通の由来 *82*
後醍醐天皇 16・21・22
小寺謙吉 38・149
琴ノ緒町の由来 *88*
小林製鋼所 36
古墳 9
古墳碑 153
五本松堰堤 98
古湊通の由来 *203*
米騒動 39
従是河原兄弟塚の碑 83・166

さ

西園寺公望 38
西国街道 28・81
最大震度7 46
栄町通の由来 *174*
坂口通の由来 *63*
坂本 23
佐々宗淳 26・199
差方塚 10
さんちかタウン 42
三ノ宮駅 36・42・200
三宮神社 32・166
三宮町の由来 *166*
三本松古墳 10・106
山陽鉄道 36
山陽道 15・28

し

JR神戸駅 200
J.W.ランバス 141
市営地下鉄 44
修法ヶ原 161
式内社 15・110
持国天 92
市章山 159
史跡神戸事件発生地 32
市町村制 35
東雲通の由来 *80*
清水誠 155
下山手カトリック教会 108・157
下山手通の由来 *109*
18番 169
重要伝統的建造物群保存地域 115
朱舜水 199
春畝館 196
松蔭女子学院発祥の地の碑 106
城ヶ口 23
城ヶ口村 160
小ステーション 200
商船三井ビル 173
正中の変 21
縄文式土器 6
縄文時代 6
条里制 14
ジョセフ・ヒコ居宅跡 147
市立図書館 42
白い異人館 105
新幹線新神戸駅 43
神港倶楽部 143・184
神港町の由来 *182*
新交通システム・ポートライナー 185・187
神港ビル 172
新神戸ロープウェイ(神戸夢風船) 45
新神戸ロープウェー(神戸夢風船)と布引ハーブ園 98
神仙寺通の由来 *62*
新撰姓氏録 12
「新・中央区歴史物語」 48
信長公記 145

す

水車 91
水車小屋 27
水稲耕作 9
杉飾り 110
鈴木商店 37・40
鈴木商店跡 176
鈴木よね 176
須磨一ノ谷 19
諏訪神社と諏訪山公園 154
諏訪山 152・154
諏訪山温泉 154
諏訪山子どもの園 154
諏訪山断層 98
諏訪山町の由来 *154*
諏訪山動物園 154
諏訪山遊園の碑 154

せ
西安門 75
西南戦争 193
関ヶ原の戦い 25
摂津国 17
摂津国菟原郡 13
摂津国大計帳 15
0キロポスト 201
千巌 199
千巌禅師景仰碑 195
千巌宗般 194
専崎弥五平 205
善照寺 152
善助茶屋 161
先土器時代 6
善福寺 158
泉隆寺 64

そ
窓雨 69
増長天 92
湊東区 40・41
蒼氓 150
相楽園 39・149・152
孫文の胸像 196

た
第一次世界大戦 39
太閤検地 25
大ステーション 200
大政奉還 32
大戦景気 39
大争議 39・82
大楠公墓碑 26・199
第二次世界大戦 40
大日通の由来 66
太平記 22
太平洋戦争 40
大宝律令 12
平清盛 16・18・95・186
平知盛軍 20
大龍寺 15・160
大龍寺木造菩薩立像 124・160
高浜新田 27
財部彪海軍中将 143
滝善三郎 32・166
滝寺 23
滝山城 23
滝山城趾 99
竹中大工道具館 135
多々部城 22・160
橘通の由来 197
W.R.ランバス 141
WHO神戸センター 78
多宝塔 92
多聞通の由来 197
壇ノ浦の戦い 20

ち
地下鉄海岸線・夢かもめ 49
チャータードビル 172
中央区誕生十周年記念式典 45
中央区歴史物語 45
中央消防署 48
長安門 75
澄覚法親王 80
重源 21

つ
筒井 23
筒井村 35
筒井町の由来 66
筒井八幡神社 66
筒の井 66

て
天誅組の変 68

と
トアロード 167
東海道本線 36
東郷井 143
東郷平八郎元帥 143
堂ノ川八幡 75
道標 161
東部公設市場 39
童蒙教訓舎 70
徳川家茂 30・180
徳川家康 25
徳川道 31
徳川光圀 26・194・197・199
徳川慶喜 32
徳照寺 192
徳照寺梵鐘 123・192
都市景観形成地域・伝統的建造物群保存地域 115
都市景観条例 115
戸田氏鉄 26
徳光院 8
徳光院多宝塔 122

徳光院多宝塔　持国天像 122
徳光院多宝塔　増長天像 122
刀弥七太夫 88・110
富松右衛門 76
豊臣秀吉 25
豊臣秀頼 26

な

中 23
中尾 23
中尾大神宮神社 65
中尾町の由来 65
中島通の由来 63
中西重之 68
中西為子 68
中町通の由来 203
中宮 23
中宮古墳と黄金塚 153
中村八幡神社 80
中山手カトリック教会 108・157
中山手通の由来 109
浪花町の由来 170
鳴滝幸恭 35
南京町 33・75・174
南宮宇佐八幡神社 75
楠公さん 197
南枝の梅 195
南蛮美術館 42・66・171

に

西関門跡 175
西町の由来 170
日米修好通商条約 29
日米和親条約 29
日明貿易 22
新田義貞 16・21・22・68
新田義貞鎧掛けの松 68
二宮神社 88
二宮町の由来 88
日本基督教団神戸栄光教会 141
日本基督教団神戸教会 142
日本近代洋服発祥地の碑 168
日本三大神滝 101

ぬ

布敷郷 13
布敷首 12
布敷首之霊地 12・74
布引 101
布引断層 98
布引断層と布引貯水池 98
布引町の由来 94
布引貯水池 98
布引の歌碑 96
布引の滝 15・21・94
布引ハーブ園 45・131
ぬのびき花街道 90
布引丸山遺跡 8・92

の

野崎通の由来 63

は

ハート 170
ハーバーランド 45・84・202・204
廃藩置県 34
間人(はしうど) 174
走水 23・174
走水神社 174
橋本関雪 196
旗塚通の由来 91
八時間労働発祥地之碑 205
八宮神社と六宮神社 192
八幡通の由来 83
HAT神戸 48・78・215
馬頭観音菩薩像 62
花熊(隈) 23・144
ハナクマ 144
花熊合戦 16・25
花熊城 25
花隈城跡(趾) 144
花隈城天守閣跡の碑 145
花熊城の戦い 145
花隈町の由来 144
花時計 131
花と緑のまち推進センター 152
浜街道 28
浜田彦蔵 147
浜辺通の由来 83
播磨町の由来 170
播磨国 17
春の海 172
阪神・淡路大震災(兵庫県南部地震) 46・169
阪神・淡路大震災・慰霊と復興のモニュメント 169・212
阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 78
阪神・淡路大震災の記憶 169
阪神急行電鉄(阪急) 36

阪神大水害 40
阪神電気鉄道 36
版籍奉還 34
ハンター坂 105
ハンター邸 105
ハンター塀 105
班田収受法 14

ひ
ビードロの家 32
東川崎町の由来 *204*
東久世通 32・166
東町の由来 *170*
東門街 113
東山 67
東遊園地 **131・168**
日暮通の由来 *80*
悲秋碑 68
左 住吉道 右 瀧 68
左 瀧道 是より三丁の道標 70
左 再山道 161
人と防災未来センター **215**
ひと未来館 215
兵庫開港 30・31
兵庫県 33・34
兵庫県公館(旧兵庫県庁舎) **133・140**
兵庫県立美術館 78・133
兵庫県里程元標 **203**
兵庫裁判所 34
兵庫三箇荘 20
兵庫城 25・145
兵庫鎮台 34
兵庫津 27

ふ
フェスピック神戸大会 45
葺合区 40
葺合村 35
葺合町の由来 *93*
葺屋荘 20
福徳寺 **145**
福原京遷都 18
福原荘 18・20
再度山 15・160
再度筋町の由来 *160*
二ツ茶屋村 23・27・29
船たで場 180
船成金 39
船屋形 **125・149**
船たで場 30
ブラジル移民 38・150
ブラジル移民発祥之地の碑 151
ブラジル移民発祥之地の碑と旧神戸移住センター **150**
ぶらじる丸 150
文永の役 21

へ
平家都落ち 19
平治物語 95
ペチュニア 45
ペリー 29
弁天町 143・205
弁天町の由来 *205*

ほ
貿易センタービル 43
防災未来館 215
法入 76
法然 20・76
法然松 76
ポートアイランド **43・44・185・186**
ポートアイランド二期 46・49・187
ポートタワー **42・182**
ポートピア'81 44・185・187・189
ポートピア博覧会 189
ポートライナー 44
細川氏 23
ポツダム宣言 42
ボーリング発祥の地の碑 168
本街道 28
本願寺神戸別院 158
本能寺の変 25

ま
毎日登山発祥の地の碑 **161**
Mountain goes to sea(山、海へ行く) 186
前町の由来 *170*
真砂通の由来 *79*
増鏡 21
松風 77
松方幸次郎 205
松平(桜井)忠喬 26
松平忠告 27
松永貞徳 160
松永久秀 23・24・99
松林飯山 68
松本奎堂 68

摩耶山合戦 21
満州事変 40

み
水島鎮也先生終焉之地の碑 65
みなと異人館 128・187
湊川 37
湊川駅 84・200
湊川神社 26・197
湊川神社宝物殿 135
湊川の戦い 16・22・26・197・199
港島町の由来 186
港島中町の由来 186
港島南町の由来 186
みなとの祭 40
南本町通の由来 79
源範頼 19
源義経 19
源頼朝 19
宮城道雄生誕地の碑 172
宮本通の由来 66
御幸石 88
妙光院の馬頭観音 62
三好三人衆 24・99
三好長慶 23・24・99

む
無碍光山 152
ムニクウ 108
村上華丘先生宅址の碑 146
室町時代 22
室町幕府 22

め
明治維新開港当時関門跡 175
明治新政府 32
明治天皇御用邸趾の碑 205
明和六年の上知令 26
メリケン地蔵 183
メリケンパーク 45・183
メリケン波止場 183・215

も
萌黄の館 105・128
モダン寺 158
元町高架通の由来 174
元町通の由来 174
モラエス像 168

や
八雲通の由来 80
屋島の戦い 20
八部郡 13
山越えの鉦 77
大和政権 12
大和物語 93
大和物語 生田川之段 処女塚伝承之地 93
山本通 115
山本通の由来 107
弥生式土器 8
ヤンセン 155

ゆ
UCCコーヒー博物館 135
ユニオン・チャーチ 89
ユニバーシアード神戸大会 45

よ
「横溝正史生誕の地」の碑 207
四宮神社 146

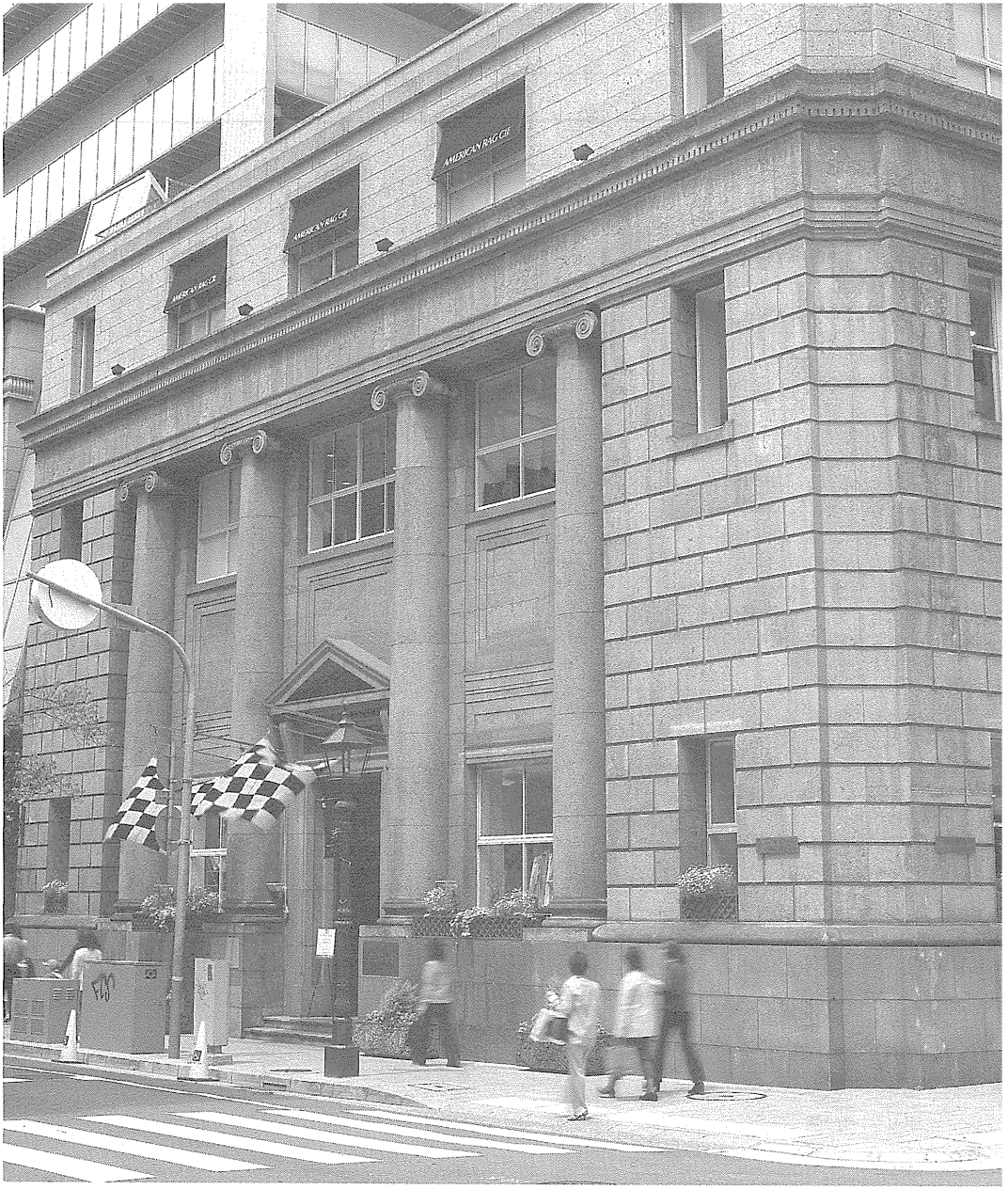
ら
ラインの館 105・128
ラムネ 169

り
律令体制 12
滝勝寺 67

れ
蓮如上人腰掛石 64

ろ
六宮神社 192

わ
若菜寺 64
若菜通の由来 91
若菜の里 15・64
脇浜 23・29
脇浜乙女塚 10
脇浜乙女塚の碑 75
脇浜海岸通の由来 78
脇浜町の由来 78
脇ノ浜の一里塚 81
輪田荘 20
和名抄 13
和里塚 74
割塚稲荷 74
割塚古墳 10
割塚古墳の跡 74
割塚通の由来 74
割塚の碑 12



kobe central area

参考文献

- 葺合区役所『葺合ものがたり』(同区役所・昭和52年)
- 太田敞三『葺合懐古三千年史』(葺合懐古三千年史刊行会・昭和30年)
- 中央区役所『葺合区のあゆみ』(同区役所・昭和57年)
- 生田区振興連絡協議会『区誌生田いまむかし』(同会・昭和50年)
- 中央区役所『生田区のあゆみ』(同区役所・昭和57年)
- 神戸市教育委員会『神戸の民俗芸能、灘・葺合・生田編』(同委員会・昭和50年)
- 道谷卓『中央区歴史物語』(中央区役所・平成2年)
- 道谷卓『わたしたちの中央区』(同区役所・平成4年)
- 田辺眞人『絵物語　中央区の民話　上』(中央区役所・平成5年)
- 田辺眞人『絵物語　中央区の民話　下』(中央区役所・平成6年)
- 道谷卓『新・中央区歴史物語』(中央区役所・平成8年)
- 落合重信『増訂神戸の歴史通史編』(後藤書店、平成元年)
- 神戸市『新修神戸市史歴史編Ⅰ』(同市・平成元年)
- 神戸市『新修神戸市史歴史編Ⅲ』(同市・平成4年)
- 神戸市『新修神戸市史歴史編Ⅳ』(同市・平成6年)
- 神戸市教育委員会『神戸の史跡』(神戸新聞出版センター・昭和56年)
- 田辺眞人『神戸の伝説』(のじぎく文庫・昭和51年)
- 神戸市教育委員会・神戸市健康教育公社『神戸の文化財』(神戸新聞出版センター・昭和57年)
- 田中眞吾『神戸の地理』(神戸新聞出版センター・昭和59年)
- 田中眞吾『六甲山の地理』(神戸新聞総合出版センター・昭和63年)
- 『兵庫県大百科事典上・下』(神戸新聞出版センター・昭和58年)
- 神戸新聞社『兵庫の街道いまむかし』(神戸新聞出版センター・昭和61年)
- 角川書店『兵庫県地名大辞典』(同書店、昭和63年)
- 神戸史学会『新・神戸の町名』(神戸新聞総合出版センター・平成8年)
- 兵庫県歴史学会『兵庫県の歴史散歩上』(山川出版社・平成2年)
- 震災モニュメントマップ作成委員会・毎日新聞震災取材班『阪神・淡路大震災　希望の灯りともして』(六甲出版・平成13年)
- 岡田徯志『摂陽郡談』(元禄14年)
- 並河誠所『摂津志』(享保19年)
- 秋里籬島『摂津名所図会』(寛政8年)
- 秦石田『播州名所巡覧図絵』(享和3年)
- 仲彦三郎『西摂大観』(明輝社・明治44年)
- 武庫郡教育会『武庫郡誌』(同会・大正10年)
- 兵庫県神職会『兵庫県神社誌上巻』(同会・昭和12年)
- 雑喉謙『神戸の鉄道』(コーベブックス・昭和56年)
- 国鉄神戸駅『神戸駅100年の歩み』(同駅・昭和49年)
- 国鉄三ノ宮駅『三ノ宮駅100年の歩み』(同駅・昭和49年)
- 神戸市教育委員会『神戸市文化財調査報告書』
- 神戸市広報課『市民のグラフこうべ』
- 兵庫県教育委員会『兵庫県の中世城郭・荘園遺跡』(同委員会・昭和57年)

著者あとがき

はやいもので、あの日からもう10年が経ってしまった。あの日とはもちろん、1995(平成7)年1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災である。震災で壊滅的被害を受けた神戸の街も、この10年でみちがえるように生まれ変わったように思える。

今年、2005(平成17)年は、震災から10年という年であると同時に、中央区が誕生して25年という区の節目の年でもある。中央区は1980(昭和55)年12月1日に旧葺合区と旧生田区が合併して誕生した区だが、それからもう四半世紀が経過しようとしている。

これまで私は、中央区誕生10周年の記念誌として『中央区歴史物語』を、また、震災1年目にその改訂版としての『新・中央区歴史物語』を執筆してきた。今回、震災10年・中央区誕生25年という二つの節目の年に、これら2冊の改訂版として新たな著書を世に送り出すことにしたのである。新著は、『新・中央区歴史物語』の記述をベースに置いているものの、史跡等の記述が旧著では震災1年目の震災の記録史的意味合いも持たせていたので、本書では震災後10年の今の史跡の現状を紹介している。また、今回は幅広い年齢層を想定して、旧著と大きく装幀やレイアウトを変え、見やすい・読みやすい・分かりやすいをコンセプトに、ビジュアルに訴えかけることでこれまでの地域史の書籍とは全く異なる斬新なイメージの造りにしてみた。そして、本のタイトルも、中央区はもとより神戸市の中央部

分の歴史がわかる本ということで、『神戸歴史トリップ 新・中央区歴史物語(改訂版)』と改めた。ただ、その際、学問的水準は下げないとうことは徹底したつもりである。

言うまでもなく歴史は我々人間の営みの連鎖であり、時の経過によって明らかにされた事実と評価がその中に含まれている。我々が、歴史を学ぶのは単に過去を解明するためだけではない。解明された過去を踏み台にして、未来にどう役立てるのかが重要なのである。水害、戦災、震災と大きな災害に見まわれ、その都度、その時代に生きてきた人々によって生まれ変わってきた中央区。震災後、震災前から中央区に居住されている方々に加え、区内でも多くの住居が新設されたり新たな街もできたことではじめて中央区に住まわれることになった方々も少なくない。本書が中央区の過去を見つめ、中央区の現実を把握し、それによって未来の中央区を考えようというそうした方々のお役に立てれば幸いである。

なお、本書を執筆するにあたっては、区のまちづくり推進課をはじめ、ご協力をいただいた多くの方々に深甚なる謝意を表する次第である。誤謬や不十分な点があるかと思うが、それらは読者の方々にご教示をいただき、次なる改訂の際に生かせればと思う。

最後に、生まれ育った神戸の街の中心部・中央区がよりすばらしい未来を築いて行くことを心から願って。

平成17年3月1日

中央区誕生25周年、阪神・淡路大震災から10年目という節目の年に

道谷　卓

著者紹介

道谷　卓(みちたに・たかし)

昭和39年、神戸市東灘区生まれ。

関西大学法学部法律学科卒業、関西大学大学院法学研究科博士課程後期課程単位取得。

現在、奈良産業大学法学部助教授(刑事訴訟法・刑事政策専攻、平成17年4月より姫路獨協大学法学部助教授へ転出)のかたわら、神戸深江生活文化史料館研究員として郷土史の研究・普及活動を行っている。法務省保護司、法務省加古川学園篤志面接委員、東灘区区民まちづくり会議委員などをつとめる。

郷土史関係の主な著作に、『日本史の中の東灘』(神戸市民文化振興財団)、『中央区歴史物語』(神戸市中央区役所)、『新・中央区歴史物語』(神戸市中央区役所)、『うはらの歴史再発見～ちょっと昔の東灘～』(東灘区役所)、『わたしたちの中央区』(監修、神戸市中央区役所)、『新・神戸の町名』(分担執筆、神戸新聞総合出版センター)、『本庄村史－神戸市東灘区深江・青木・西青木のあゆみ－』(分担執筆、本庄村史編纂委員会)などがある。

神戸歴史トリップ 新・中央区歴史物語(改訂版)©

平成17年3月31日　初版発行
頒価　1000円(本体価格952円)

著　　者――道谷　卓
制　　作――中央区役所まちづくり推進課
発　　行――中央区役所
神戸市中央区雲井通5-1-1(078)232-4411
企画・編集――株式会社ケーオーツー

許可なく転載・複製を禁ずる。

神戸市広報印刷物登録　平成16年度第282号(広報印刷物規格 A-1類)

ISBN4-9902493-0-5

C0021 ¥952E

9784990249304

1920021009525

神戸市中央区役所

定価：本体952円＋税